

京都府遺跡調査報告集

第143冊

1. 中山城跡第5・6次
2. 丹波綾部道路関係遺跡
井脇城跡
3. 長岡京跡右京第994次(7ANGKT-4地区)・井ノ内遺跡
4. 八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡
下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群
5. 棕ノ木遺跡第8次

2011

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 調査地上空から由良川河口を望む(南から)



(2) 調査地上空から由良川上流を望む(北西から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、本年度で創立30年を迎えました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成21年度に京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した椋ノ木遺跡、平成21・22年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した中山城跡、八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡(下馬遺跡、片山遺跡、鞍岡山古墳群)、平成21・22年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した丹波綾部道路関係遺跡(井脇城跡)、平成22年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された国土交通省近畿地方整備局と京都府建設交通部、京都府流域下水道事務所をはじめ、京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京丹波町教育委員会・精華町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

中山城跡第5・6次

平成21・22年度丹波綾部道路関係遺跡 井脇城跡

長岡京跡右京第994次(7ANGKT-4地区)・井ノ内遺跡

平成21・22年度八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡 下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群

棕ノ木遺跡第8次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	中山城跡第5・6次	舞鶴市中山地内	平成21年11月17日～12月22日、平成22年4月6日～10月8日	京都府建設交通部	伊野近富
2.	丹波綾部道路関係遺跡 井脇城跡	船井郡京丹波町井脇瀧谷	平成21年10月22日～平成22年2月25日、平成22年5月6日～7月6日	国土交通省近畿地方整備局	黒坪一樹
3.	長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡	長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸	平成22年4月26日～8月27日	京都府建設交通部	竹井治雄
4.	八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡 下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群	相楽郡精華町下粕小字下馬・片山・砂川	平成21年7月21日～平成22年2月23日、平成22年5月25日～8月12日(前半期)	京都府建設交通部	竹原一彦
5.	棕ノ木遺跡第8次	相楽郡精華町下粕小字棕ノ木ほか	平成21年11月26日～平成22年3月4日	京都府流域下水道事務所	村田和弘

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土地標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 中山城跡第5・6次発掘調査報告	1
2. 平成21・22年度丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告	55
3. 長岡京跡右京第994次(7ANGKT-4地区)・井ノ内遺跡発掘調査報告	63
4. 平成21・22年度八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡発掘調査報告	71
5. 椋ノ木遺跡第8次発掘調査報告	115

挿図目次

1. 中山城跡第5・6次

第1図 中山城跡周辺城館跡分布図	2
第2図 中山城跡全体図	3
第3図 第1～4次調査トレンチ配置図	4
第4図 墓SX07平・断面図	6
第5図 第4次調査出土遺物実測図	7
第6図 第5次調査範囲図	8
第7図 第1-1トレンチ平・断面図	9
第8図 第1-2トレンチ平・断面図	10
第9図 第2トレンチ断面図	11
第10図 第3トレンチ平・断面図	12
第11図 第4トレンチ断面図	12
第12図 第5～7トレンチ断面図	13
第13図 第5次調査遺物出土地点図	14
第14図 第8トレンチ断面図	14
第15図 第5次調査出土遺物実測図	15
第16図 第6次調査範囲図	16
第17図 郭1-1、郭1-1南南北断面図	17
第18図 郭1-1、郭1-1南、郭1-5東西断面図	18
第19図 郭1-1～郭1-3平面図	19
第20図 掘立柱建物跡1実測図	20
第21図 掘立柱建物跡2実測図	21
第22図 掘立柱建物跡3実測図	22

第23図	掘立柱建物跡4実測図	-----	23
第24図	郭1-1南実測図	-----	24
第25図	郭1-1南下層断ち割り断面図	-----	25
第26図	掘立柱建物跡5実測図	-----	25
第27図	郭1-4実測図	-----	26
第28図	郭1-4断面図	-----	27
第29図	掘立柱建物跡6実測図	-----	27
第30図	郭1-5平面図	-----	28
第31図	郭1-1周辺断ち割り平面図	-----	29
第32図	断ち割り断面図	-----	30
第33図	中山城跡変遷概念図	-----	31
第34図	第6次調査出土遺物実測図(1)	-----	33
第35図	第6次調査出土遺物実測図(2)	-----	36
第36図	第6次調査遺物出土地点図	-----	38
第37図	舞鶴市大俣城主郭・帯曲輪平面図	-----	41
第38図	1569年当時の丹後の城跡	-----	42
第39図	郭1-1南東西断面図(南部)	-----	44
第40図	郭1-1～郭1-3断面図(北部)	-----	45
第41図	第4～6次調査地南北断面図	-----	46
第42図	中山城跡縄張り図(1)	-----	48
第43図	中山城跡縄張り図(2)	-----	48

2. 丹波綾部道路関係遺跡

第1図	調査地位置図及び周辺山城分布図	-----	55
第2図	井脇城跡中心施設及び調査地区配置図	-----	56
第3図	A・C地区地形図(掘削前)	-----	58
第4図	A地区地形図(掘削後)	-----	59
第5図	A地区置き石	-----	59
第6図	A地区出土遺物実測図	-----	59
第7図	A地区曲輪・土塁断面図	-----	60
第8図	B地区平面図	-----	61
第9図	C地区地形図(掘削後)	-----	62

3. 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡

第1図	調査地位置図	-----	63
-----	--------	-------	----

第2図	1・2トレンチ土層図	64
第3図	1トレンチ検出遺構平面図	64
第4図	1トレンチ竪穴式住居跡S H01～03平面図	65
第5図	1トレンチ大溝S D04平面図	65
第6図	2・3トレンチ検出遺構平面図	66
第7図	2トレンチ掘立柱建物跡S B03・15実測図	67
第8図	出土遺物実測図	68
第9図	1トレンチ周辺遺構配置図	70

4. 八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡

第1図	周辺遺跡分布図	73
第2図	下馬遺跡・片山遺跡調査トレンチ配置図	74
第3図	下馬遺跡A1地区北東壁断面図	76
第4図	下馬遺跡A1地区遺構平面図	77
第5図	下馬遺跡A1地区炉跡S X121、井戸S E129実測図	77
第6図	下馬遺跡A1地区瓦溜まりS X120、土坑S X12実測図	78
第7図	下馬遺跡A2・3地区遺構平面図	80
第8図	下馬遺跡A2・3地区掘立柱建物跡S B58、橋脚S X57実測図	81
第9図	下馬遺跡B1地区南壁土層図	82
第10図	下馬遺跡B1地区遺構平面図	83
第11図	下馬遺跡D1地区遺構平面図	84
第12図	下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡S B55・134・135・137実測図	85
第13図	下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡S B136・137、柵列S A18・24・85実測図	86
第14図	下馬遺跡D1地区柵列S A30・44・46実測図	87
第15図	下馬遺跡D1地区土坑S K23・34、柱穴P44・92・97・107実測図	89
第16図	下馬遺跡D1地区土坑S K36・49実測図	89
第17図	下馬遺跡D2地区遺構平面図	91
第18図	下馬遺跡D2地区井戸S E32・54実測図	92
第19図	下馬遺跡A1地区出土遺物実測図	93
第20図	下馬遺跡A3・B1地区出土遺物実測図	94
第21図	下馬遺跡D1地区出土遺物実測図	95
第22図	下馬遺跡B1・D2地区出土遺物実測図	96
第23図	片山遺跡トレンチ実測図	99
第24図	鞍岡山古墳群A地点位置図	100
第25図	鞍岡山古墳群A地点トレンチ配置図	101

第26図	下馬遺跡D 3・4地区遺構平面図	102
第27図	下馬遺跡D 3・4地区柵列S A340、井戸S E303・312・328、溝S D339実測図	103
第28図	下馬遺跡D 3・4地区出土遺物実測図	105
第29図	片山遺跡A 1・2地区遺構平面図	107
第30図	片山遺跡A 1・2地区掘立柱建物跡S B01・02、土坑S K20実測図	108
第31図	片山遺跡A 1・2地区掘立柱建物跡S B03・04実測図	109
第32図	片山遺跡A 2地区土坑S X202実測図	110
第33図	片山遺跡A 1・2地区出土遺物実測図	111
第34図	下馬遺跡・片山遺跡遺構分布図	113

5. 棕ノ木遺跡第8次

第1図	調査地周辺遺跡分布図	116
第2図	棕ノ木遺跡調査区配置図	118
第3図	A・Bトレンチ土層断面図	119
第4図	Aトレンチ第1遺構面平面図	120
第5図	Aトレンチ第1遺構面土坑S X01平・断面図	121
第6図	Aトレンチ第2・3遺構面平面図	122
第7図	Aトレンチ第2遺構面ピットP90平・断面図	123
第8図	Bトレンチ第1・2遺構面平面図	124
第9図	出土遺物実測図(1)	126
第10図	出土遺物実測図(2)	127

付 表 目 次

1. 中山城跡第5・6次

付表	中山城跡関係年表	53
----	----------	----

図 版 目 次

1. 中山城跡第5・6次

図版第1	(1)第5次調査地上空から水間を望む(南西から)
	(2)調査地全景(西から)
図版第2	(1)第1-1トレンチ全景(東から)

- (2) 第1-1トレンチから建部山を望む(北西から)
- (3) 第1-1トレンチ土層断面(南西から)
- 図版第3 (1) 第1-2トレンチ全景(北から)
- (2) 第1-1・1-2トレンチ全景(北西から)
- (3) 第1-1トレンチと切岸2(西から)
- 図版第4 (1) 第2トレンチ上部全景(南西から)
- (2) 第2トレンチ下部土層断面(南西から)
- (3) 第3トレンチ全景(東から)
- 図版第5 (1) 第3トレンチ土層断面(北東から)
- (2) 第4・8トレンチ調査前(北から)
- (3) 第5トレンチ上部土層断面(南西から)
- 図版第6 (1) 第6-1トレンチ全景(西から)
- (2) 第7トレンチ土師器皿出土状況(東から)
- (3) 第8トレンチ全景(北から)
- 図版第7 (1) 第6次調査地上空から由良川上流を望む(北西から)
- (2) 調査地全景上空(上が東)
- 図版第8 (1) 郭1-1調査前全景(南から)
- (2) 郭1-1調査地全景(北から)
- 図版第9 (1) 郭1-1掘立柱建物跡1全景(北から)
- (2) 郭1-1掘立柱建物跡2全景(北から)
- (3) 郭1-1掘立柱建物跡3全景(北西から)
- 図版第10 (1) 郭1-1掘立柱建物跡4全景(南西から)
- (2) 郭1-1調査状況(北から)
- (3) 郭1-1柵1(東から)
- 図版第11 (1) 郭1-1掘立柱建物跡1柱穴(北東から)
- (2) 郭1-1掘立柱建物跡2柱穴(西から)
- (3) 郭1-1・1-2土層断面(西から)
- 図版第12 (1) 郭1-2南部柱穴全景(南から)
- (2) 郭1-2南部柱穴全景(北から)
- 図版第13 (1) 切岸1、郭1-2全景(北から)
- (2) 切岸1、郭1-2北部全景(北から)
- (3) 切岸1と郭1-1との断ち割り(南から)
- 図版第14 (1) 切岸1と郭1-2との断ち割り(南から)
- (2) 郭1-2棧敷状建物跡の礎石(南から)
- (3) 郭1-2棧敷状建物跡の礎石(南から)

- 図版第15 (1) 郭1-1 南の東部(北から)
(2) 郭1-1 南の西部(西から)
- 図版第16 (1) 郭1-1 南柵2(西から)
(2) 郭1-1 南下層(北から)
(3) 郭1-1 南下層柱穴(北から)
- 図版第17 (1) 郭1-1 南鞆(こはぜ)出土状況(北西から)
(2) 郭1-5 全景(西から)
(3) 堀切下部、神社階段部分(南東から)
- 図版第18 (1) 堀切、郭1-1 北斜面(北から)
(2) 堀切、郭1-1 北斜面(東から)
- 図版第19 (1) 郭1-1 北斜面の戦国時代の道(北西から)
(2) 戦国時代の道(北西から)
(3) 郭1-1 北斜面の土層断面(西から)
- 図版第20 (1) 郭1-3 全景(北から)
(2) 郭1-3 掘立柱建物跡5(東から)
- 図版第21 (1) 郭1-3 掘立柱建物跡5 北部柱穴(南西から)
(2) 郭1-3 掘立柱建物跡5 南部柱穴(東から)
(3) 郭1-3 掘立柱建物跡5 南部柱穴(東から)
- 図版第22 (1) 切岸2 掘削状況(南から)
(2) 切岸2 南部(南西から)
- 図版第23 (1) 郭1-4 北部(東から)
(2) 郭1-4 北部(南から)
- 図版第24 (1) 郭1-4 南部(南から)
(2) 郭1-4 下層遺物出土状況(北から)
(3) 郭1-4 下層柄頭出土状況(西から)
- 図版第25 (1) 郭1-4 中央部全景(西から)
(2) 郭1-4 掘立柱建物跡6(北から)
- 図版第26 (1) 第5次出土遺物
(2) 第5次出土遺物(裏面)
- 図版第27 (1) 第6次出土遺物1
(2) 第6次出土遺物1(裏面)
- 図版第28 (1) 第6次出土遺物2
(2) 第6次出土遺物2(裏面)
- 図版第29 (1) 第6次出土遺物3
(2) 第6次出土遺物3(裏面)

- 図版第30 (1)第6次出土遺物4
(2)第6次出土遺物5

2. 丹波綾部道路関係遺跡

- 図版第1 (1)井脇城跡全景(南東から)
(2)井脇城跡全景(北から)
- 図版第2 (1)井脇城跡全景(北東から)
(2)A地区全景掘削前(北東から)
- 図版第3 (1)B地区掘削状況(南西から)
(2)B地区南西半掘削状況(北東から)
(3)B地区北東半岩盤(南から)
- 図版第4 (1)C地区掘削前状況(南西から)
(2)C地区掘削状況(南西から)
(3)C地区掘削面(南西から)
- 図版第5 (1)A地区曲輪掘削前(北から)
(2)A地区曲輪掘削状況(北から)
(3)A地区曲輪掘削完了状況(北から)
- 図版第6 (1)A・C地区全景(北東から)
(2)A地区曲輪頂部(北東から)
- 図版第7 (1)A・C地区全景(西から)
(2)A・C地区全景A地区掘削完了後(北から)
- 図版第8 A地区曲輪全景掘削完了後(北から)
- 図版第9 A地区曲輪全景掘削完了後(西から)
- 図版第10 (1)A地区曲輪全景掘削完了後(東から)
(2)A地区曲輪全景掘削完了後(上が西)
- 図版第11 (1)A地区曲輪西側(西から)
(2)A地区土塁内瓦質土器出土状況(東から)
(3)A地区西側斜面及び土塁断面(南から)
- 図版第12 (1)A地区土塁中央部断ち割り断面(南から)
(2)A地区土塁中央部断ち割り断面(南東から)
- 図版第13 (1)A地区土塁北側断面礫石混入状況(東から)
(2)A地区土塁掘削除去後(東から)
(3)A地区土塁掘削除去後(南から)
- 図版第14 (1)A地区曲輪北側断面(東から)
(2)A地区曲輪南側断面(東から)

- (3) A地区曲輪南側斜面断ち割り(南から)
- 図版第15 (1) A地区曲輪北東斜面掘削状況(北東から)
(2) A地区曲輪北東斜面掘削状況(北東から)
(3) A地区曲輪北東隅置石検出状況(北から)

- 図版第16 (1) 瓦質土器片(右端は土塁内出土)
(2) 瓦質土器片裏面
(3) 煙管、肥前系磁器椀片

3. 長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡

- 図版第1 (1) 2・3トレンチ調査前全景(南から)
(2) 1トレンチ竪穴式住居跡S H01・02検出状況(南東から)
(3) 1トレンチ竪穴式住居跡S H02遺物出土状況(上が東)
- 図版第2 (1) 1トレンチ溝S D04全景(南東から)
(2) 1トレンチ北壁内溝S D04土層堆積状況(南西から)
(3) 2トレンチ南半部全景(北から)
- 図版第3 (1) 2トレンチ掘立柱建物跡S B01全景(北から)
(2) 2トレンチ掘立柱建物跡S B01-P6検出状況(東から)
(3) 2トレンチ掘立柱建物跡S B01-P2内土層堆積状況(南東から)
- 図版第4 (1) 2トレンチ北半部全景(南から)
(2) 2トレンチ掘立柱建物跡S B03全景(南から)
(3) 2トレンチ北半部柱穴群検出状況(南から)
- 図版第5 (1) 3トレンチ全景(西から)
(2) 3トレンチ溝S D07検出状況(南西から)
(3) 3トレンチ柱穴検出状況(南から)

- 図版第6 出土遺物

4. 八幡木津線道路整備促進事業関連遺跡

- 図版第1 (1) 下馬遺跡調査地遠景(南から)
(2) 下馬遺跡調査地遠景(東から)
- 図版第2 (1) 下馬遺跡調査地遠景(西から)
(2) 下馬遺跡調査地全景(上が北)
- 図版第3 (1) 下馬遺跡・片山遺跡遠景(南東から)
(2) A1地区全景(西から)
(3) A1地区西部全景(南から)
- 図版第4 (1) A1地区河川跡S R125縄文土器出土状況(東から)

- (2) A 1 地区東部全景(西から)
- (3) A 1 地区瓦溜り S X120全景(南から)
- 図版第5 (1) A 1 地区炉跡 S X121炭層検出状況(東から)
- (2) A 1 地区炉跡 S X121全景(東から)
- (3) A 1 地区井戸 S E129全景(南から)
- 図版第6 (1) A 1 地区全景(右が北)
- (2) A 2・3 地区全景(上が北)
- 図版第7 (1) A 2 地区全景(南西から)
- (2) A 2 地区掘立柱建物跡 S B58全景(西から)
- (3) A 3 地区全景(北東から)
- 図版第8 (1) A 3 地区河川跡 S R16全景(西から)
- (2) A 3 地区北壁内河川跡 S R16堆積土層(南西から)
- (3) A 3 地区河川跡 S R16底面平瓶出土状況(南から)
- 図版第9 (1) B 1 地区全景(右が北)
- (2) D 1・2 地区全景(上が北)
- 図版第10 (1) D 1・2 地区全景(南から)
- (2) D 1・2 地区全景(北から)
- 図版第11 (1) B 1 地区全景(北西から)
- (2) B 1 地区掘立柱建物跡 S B132・133全景(北から)
- (3) D 1 地区遺構検出状況(東から)
- 図版第12 (1) D 1 地区掘立柱建物跡 S B134、柵列 S A03・57、土坑 S K23全景(東から)
- (2) D 1 地区掘立柱建物跡 S B135、柵列 S A30、土坑 S K36全景(東から)
- (3) D 1 地区溝状遺構 S X02全景(東から)
- 図版第13 (1) D 1 地区溝状遺構 S X02(東から)
- (2) D 1 地区溝状遺構 S X02第1区と第2区間の水口(東から)
- (3) D 1 地区溝状遺構 S X02第2区中央畔土層断面(東から)
- 図版第14 (1) D 1 地区土坑 S K23全景(南から)
- (2) D 1 地区柱穴 P 44・97根石検出状況(南西から)
- (3) D 1 地区柱穴 P 107根石検出状況(南東から)
- 図版第15 (1) D 2 地区全景(西から)
- (2) D 2 地区溝状遺構 S X02第4・5区全景(北から)
- (3) D 2 地区地区掘立柱建物跡 S B55全景(南から)
- 図版第16 (1) D 2 地区井戸 S E54井戸枿材検出状況(西から)
- (2) D 2 地区井戸 S E54井戸枿(北西から)
- (3) D 2 地区井戸 S E32全景(南東から)

- 図版第17 (1) 第3トレンチ全景(西から)
 (2) 第4トレンチ全景(東から)
 (3) 第5トレンチ全景(東から)
- 図版第18 (1) 第6トレンチ全景(南から)
 (2) 第22トレンチ全景(南から)
 (3) 第23トレンチ全景(東から)
- 図版第19 (1) 第24トレンチ全景(東から)
 (2) 第25トレンチ全景(東から)
 (3) 第26トレンチ全景(東から)
- 図版第20 (1) 片山遺跡A1地区全景(東から)
 (2) A1地区全景(右が北)
- 図版第21 (1) 片山遺跡A1地区全景(北から)
 (2) A1地区掘立柱建物跡S B01・02検出状況(東から)
 (3) A1地区土坑S K20全景(南から)
- 図版第22 (1) A地点調査前(南から)
 (2) A地点トレンチ調査状況(南西から)
 (3) A地点最高所トレンチ地山検出状況(南東から)
- 図版第23 (1) D3地区全景(南東から)
 (2) D3地区井戸S E312検出状況(北から)
 (3) D4地区上層遺構面全景(北から)
- 図版第24 (1) D4地区柵列S A340全景(南から)
 (2) D4地区柵列S A340全景(西から)
 (3) D4地区下層遺構面全景(北から)
- 図版第25 (1) D4地区下層遺構面全景(西から)
 (2) D4地区井戸S E328全景(南西から)
 (3) D4地区溝S D339全景(北東から)
- 図版第26 (1) A2地区全景(南から)
 (2) A2地区全景(北から)
 (3) A2地区掘立柱建物跡群検出状況(北から)
- 図版第27 (1) A2地区掘立柱建物跡S B04全景(南から)
 (2) A2地区土坑S X202全景(南から)
 (3) A2地区土坑S X202土師器皿群出土状況(東から)
- 図版第28 出土遺物1
- 図版第29 出土遺物2
- 図版第30 出土遺物3

5. 棕ノ木遺跡第8次

- 図版第1 (1)調査地遠景(北から)
(2)調査地遠景(西から)
- 図版第2 (1)Aトレンチ遠景(北から)
(2)Bトレンチ全景(左が北)
- 図版第3 (1)Aトレンチ調査前(北西から)
(2)Aトレンチ重機掘削
(3)Aトレンチ作業風景(南東から)
- 図版第4 (1)Aトレンチ第1遺構面(北から)
(2)Aトレンチ第1遺構面(東から)
(3)Aトレンチ第1遺構面土坑S X01周辺(北から)
- 図版第5 (1)Aトレンチ第1遺構面土坑S X01内焼土坑a・b検出状況(西から)
(2)Aトレンチ第1遺構面土坑S X01内焼土坑a・b完掘状況(西から)
(3)Aトレンチ第1遺構面土坑S K02(東から)
- 図版第6 (1)Aトレンチ第1遺構面土坑S K04(東から)
(2)Aトレンチ第1遺構面ピットP101遺物出土状況(西から)
(3)Aトレンチ第2遺構面(北から)
- 図版第7 (1)Aトレンチ第2遺構面(東から)
(2)Aトレンチ第2遺構面ピットP90検出状況(西から)
(3)Aトレンチ第2遺構面ピットP90遺物出土状況(西から)
- 図版第8 (1)Aトレンチ第3遺構面(北から)
(2)Aトレンチ第3遺構面(東から)
(3)Aトレンチ東壁土層断面(西から)
- 図版第9 (1)Bトレンチ調査前(北西から)
(2)Bトレンチ重機掘削(南東から)
(3)Bトレンチ第1遺構面(北から)
- 図版第10 (1)Bトレンチ西壁土層断面(北東から)
(2)Bトレンチ第2遺構面(北から)
(3)Bトレンチ埋め戻し終了(北から)
- 図版第11 (1)Aトレンチ土坑S X01出土遺物
(2)Aトレンチ鍛冶関連遺物
- 図版第12 (1)Aトレンチ溝S D03出土遺物
(2)AトレンチピットP90出土遺物

1. 中山城跡第5・6次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般府道西神崎上東線の拡幅に伴う西神崎上東線地方道路交付金業務委託に係わる調査として、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

中山城跡は、舞鶴市中山ほかに所在する。由良川東岸に面した細長い丘陵上に築かれた戦国時代の山城として知られていた。中山城の主郭は北側にあり、そこから南へ7か所の郭(平坦面)で城は構成されている。中山城は北から4番目から7番目の郭を、過去4回調査しており、戦国時代の城に伴う土塁3条と郭(平坦面)1か所および安土桃山時代から江戸時代にかけての火葬墓や土壙墓が9基確認されている。また、土塁や空堀も確認されている。

ここで報告するのは、第5次と第6次の調査成果である。第5次調査の調査範囲は、主郭から南へ3番目の郭の西斜面および、その下である。調査の結果、自然地形を人工的に改変していること、戦国時代の遺物が出土し戦国時代の山城の一部であることが判明した。第6次調査では、この成果を受けて、遺構が確認された郭1-1から1-5の5か所、さらに、人工的に加工された斜面である^{きりぎし}切岸を調査した。

現地調査に当たっては、京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会、京都府建設交通部、京都府中丹東土木事務所の関係機関ならびに地元自治会の協力を得た。ここに記して感謝の意に代えます。なお、本報告は伊野が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課主幹第3係長事務取扱 石井清司

同 次席総括調査員 伊野近富

調査場所 舞鶴市中山地内

現地調査期間 第5次 平成21年11月17日～12月22日

第6次 平成22年4月6日～10月8日

調査面積 第5次 320㎡

第6次 1,800㎡

2. 位置と環境

舞鶴市中山城跡は、丹後半島の東の付け根からやや東側の海岸近くに位置している。そこには、京都北部最大の河川である由良川が日本海に注いでおり、中山城は河口から5.5km上流の東岸に所在する。現在、由良川にかかる八雲橋があり、その東詰め^{ひがしづめ}の山頂にある。

城が所在する山は、標高約60mで、由良川に沿った南北に細長い独立丘陵状をなしているが、



第1図 中山城跡周辺城館跡分布図(国土地理院 1/50,000 舞鶴)

- | | | | | |
|---------|----------|-------------|---------|--------|
| 1.中山城跡 | 2.建部山城跡 | 3.田辺城跡 | 4.愛宕山城跡 | 5.福井城跡 |
| 6.福井支城跡 | 7.高野由里城跡 | 8.引土(茶白山)城跡 | | |

南端の打越峠を介して、低い丘陵は南東方向へと続き、建部山に接続している。建部山は西舞鶴地域を見下ろすことができる標高315mの山である。南北朝期から戦国時代にかけて城が築造されていたということである。中山城の位置は東は若狭に通じ、西は宮津に通じ、南は京都に続く交通の要所である。

丹後の戦国時代について概観すると、この地の守護は一色氏であった。記録に残る丹後一色氏は、初代が満範(1368～1409)である。建部山城を城としているが、実態は不明である。丹後の守護は一色氏から山名氏や武田氏などに代わっているが、1500年代における名目上の守護は一色氏であった。この頃に若狭から武田氏が攻め入っており、一時期支配されたようである。

舞鶴市域での城館の発掘調査は、8遺跡で実施されている。由良川流域では大俣城跡が調査されており、16世紀の状況が判明している。中山城に関する同時代の文献はない。周辺に関する史料からは、永正17(1520)年に白井清胤が若狭の武田元信から、水間村の支配を命じられている。水間村は中山村の隣村である。天文7(1538)年に水間で戦いがあり、白井清胤が武田元信から、



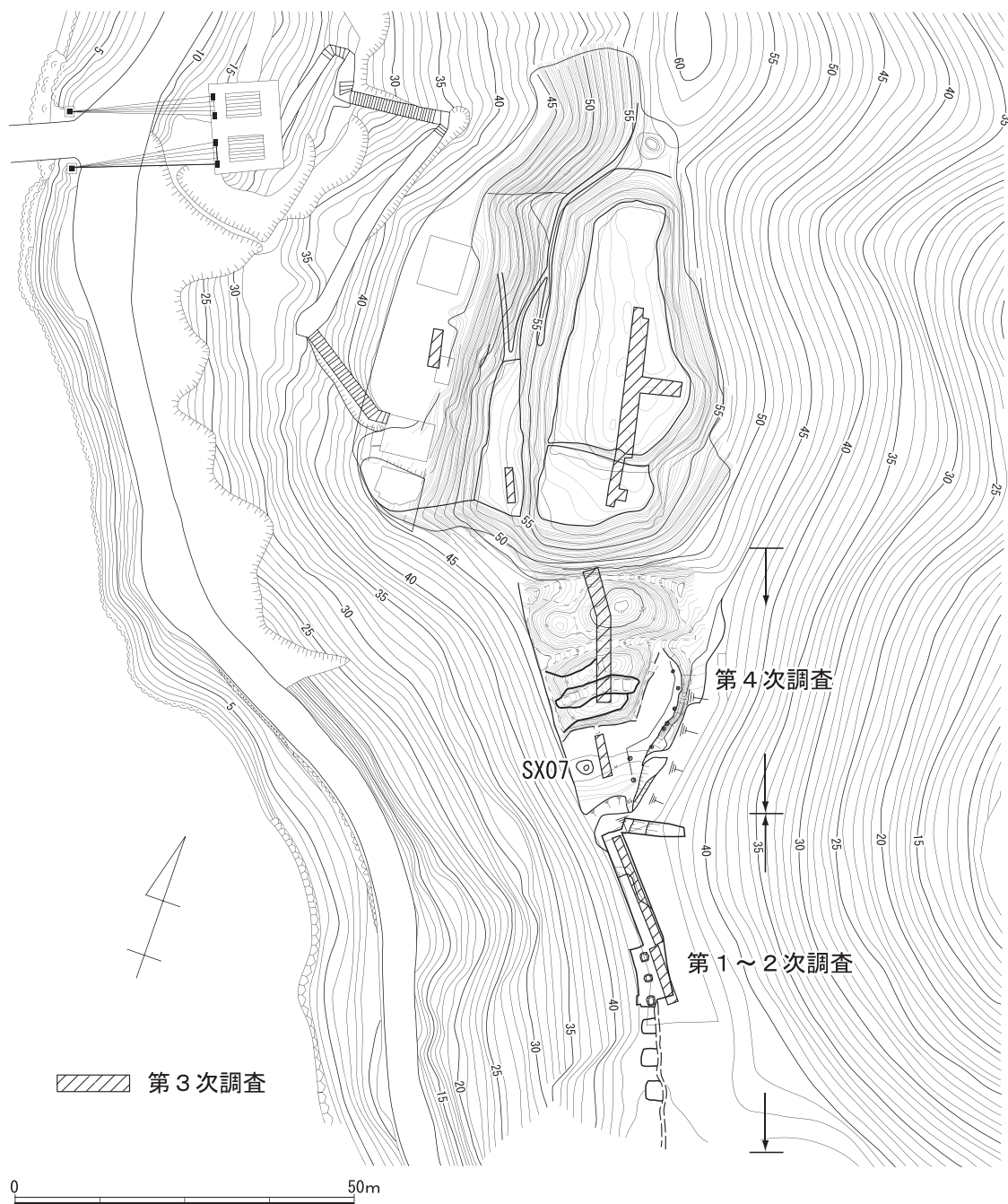
第2図 中山城跡全体図

軍功を誉められている。このように由良川河口の東岸は、16世紀前葉には若狭武田氏の支配下であった可能性がある。しかし、今回報告するように、出土した土師器皿は16世紀前半でも終わりの時期のものであり、また、もっとも地域色が認められる土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない。ただし、今回の調査地での結果であり、もっとも水間村に近い主郭周辺は未調

査であり、今後検証が必要である。

江戸時代に書かれた『一色軍記』をはじめ、いくつかの文書を総合的に検討すると、一色氏が城主であった1579年、織田信長の指示で丹後に攻め入った細川藤孝・忠興、および明智光秀の連合軍によって、まず、建部山城が破られ、一色義道は中山城に逃げ込んだものの、中山城は落城したようである。その後は、細川氏の部下であった沼田清延が城主であったようで、1600年あるいは1602年に主君の細川氏が九州の小倉に移ったときに、沼田氏は主君と同行した。後述するが、城の出土遺物が1600年初頭の唐津焼きを最後に以後の時期のものが出土しないことと合致する。

中山城跡に関する研究としては『日本城郭体系^(注2)』がもっとも古く、ついで、村田修三氏による



第3図 第1～4次調査トレンチ配置図

見解が八雲公民館発行の『八雲のれきし』^(注3)に載っている。それによれば、「これらの郭は同時期に全部が完成したのではなく、必要に応じ、順次築造されたものであろう。山城としては中級程度の規模」であるとしている。最近では『舞鶴の山城』^(注4)で詳細に紹介されている。

上記の研究成果をまとめると以下のとおりである。中山城跡は南北300m、東西100mの丘陵高所(標高約60m)の範囲に7か所の郭を設け、その西側の1段下がったか所にも腰曲輪(郭)を配置した、中規模程度の山城である。建部山城(標高約315m)を主城と考えれば、中山城は北側の守りの最前線に位置した支城であるといえる。一色氏が南北朝期から丹後に勢力を伸ばした際に、この建部山城を築城したとされているが、その当否はともかく、室町時代の段階に逃げ城として築城され、この2つの城が有機的に結びつき、戦国時代に徐々に城の体裁を整えていったというのが、実情であろう。

なお、『舞鶴の山城』の見解は、中山城は南北に延びた尾根を10本の堀切で遮断し、14か所以上の曲輪数を有する大規模な遺構を残し、舞鶴市内では5か所を大規模城館として評価しているが、その1つであるという。これらの大規模城館の城主は、守護、守護代や国人クラスあるいは在地領主連合の盟主であったと推定している。ただし、城の構造としては曲輪の構成に連続性がなく、縄張りにまとまりがないのが特徴であるとしている。

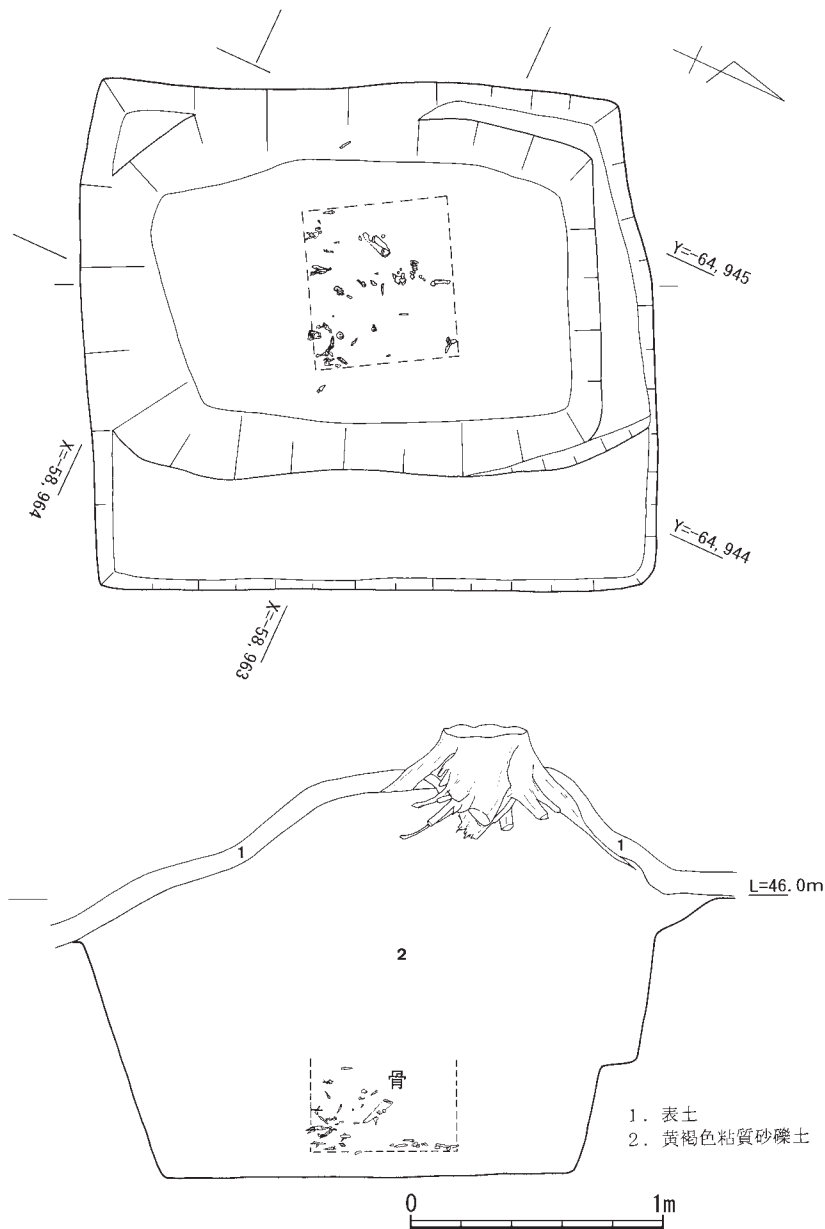
今回調査した地点には中山(城山)八幡神社があった。いつ建造されたのかは不明であるが、『八雲のれきし』によれば、『丹哥府史』天保12(1841)年に城山八幡と記載され、地元でも以前は城山八幡と呼んでいた。『加佐郡寺社町在旧記』享保16(1731)年には中山の氏神については触れられていない。現在の祭神は誉田和気命と天御中主命である。山城の築城によって八幡神が守護神として祀られ、廃城後、氏神となったのではないかと考えている。山城の急坂を一直線に登る石段があった。明治末期頃まではこの数十段の石段を村人が太鼓やぐらを担いで一気に引き上げたという。中の段には土俵があったが、八雲橋の架設によって今はなくなっている。

3. 過去の調査

中山城の発掘調査は今回の報告が5・6次調査のものである。昭和57年度が第1次調査で、昭和58年度が第2次調査である。この2度の調査は、中山城の南端でおこなわれた。城としての設備は堀切が1条認められ、この堀切を境に、やせ尾根の南側で安土桃山時代ころの火葬墓15基、その北側で土壙墓が13基確認されている。出土遺物は寛永通寶のほか、修験道の修行者などが使う錫杖などが土壙墓の中に埋納されていた。火葬墓については地元の伝承では、1579年の一色氏と明智・細川連合軍との戦いで、死亡した武将の墓とされている。

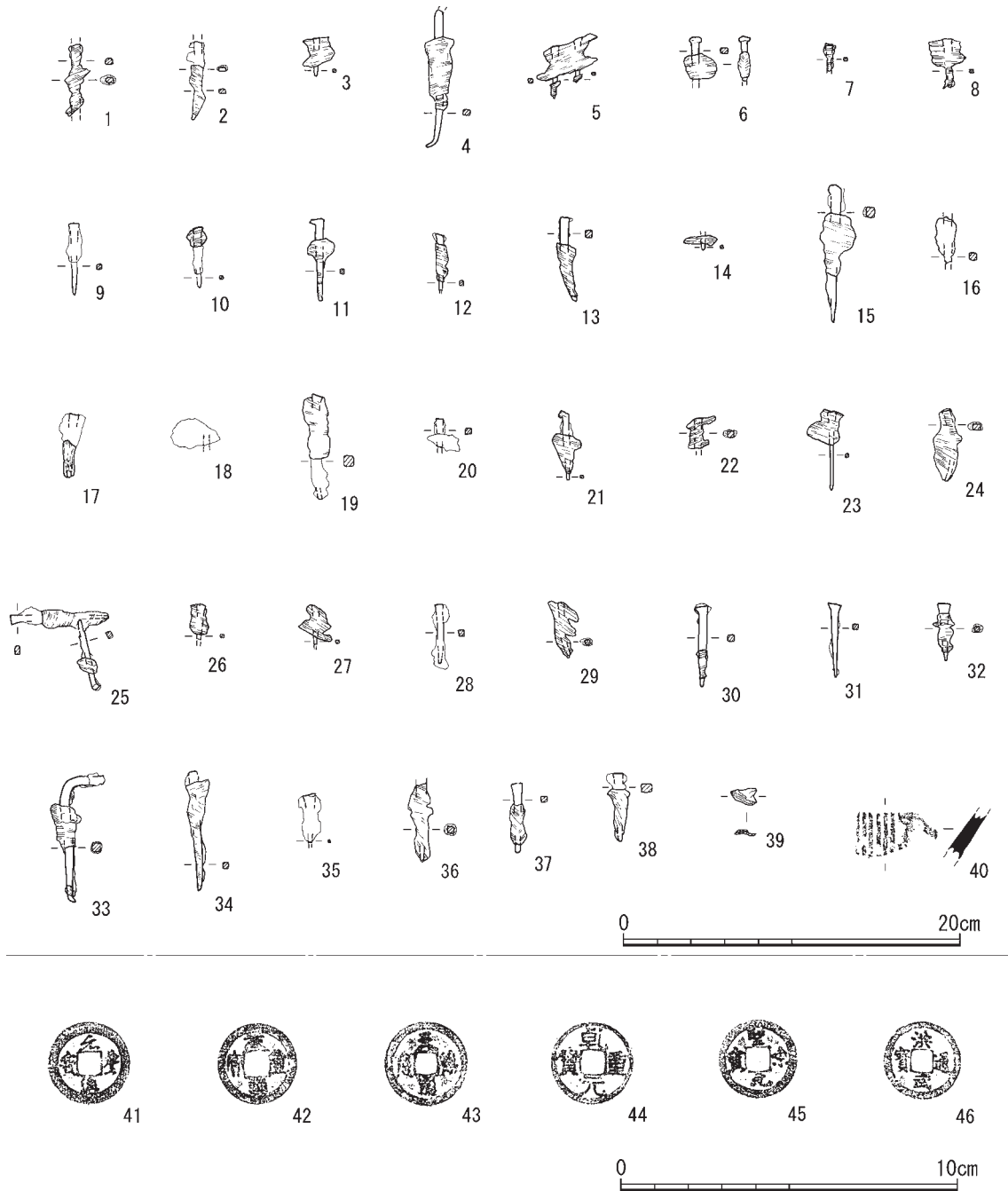
第3次調査は平成18年度に行われた。この調査では城の南部に6か所のトレンチを設定した。調査の結果、南端で3本の土塁を確認した。最高所の平坦面では堀跡らしき痕跡を確認し、一段低い中山八幡神社のある平坦面では建物跡と思われる柱穴を確認した。また、焼土も確認した。

第4次調査は平成19年度に行われた。この調査では第3次調査で確認した土塁部分を調査し、その結果、3本の土塁と、1か所の平坦面を確認した。第1・2次調査の続きの平坦面では、江



第4図 墓S X 07平・断面図

戸時代の土壙墓を確認し、出土遺物は寛永通寶のほか、修験道の修行者などが使う錫杖などが発掘された。墓は合計13基確認された。『八雲の歴史』によれば、祥雲寺の歴代住職の墓ではないかと推定している。この平坦面の北側は3mほどの段差があり、三日月状の平坦面があった。この西端に直径約2m、高さ0.6mの土饅頭があった。調査したところ東西2m、南北2.3mの長方形の土坑(墓S X 07)があった。深さは1mであった。土坑の中央の下部には38点の鉄釘が認められた。この一部を図示した。釘の中央に木質が残っており、その年輪方向から木製の箱に使用されたと推定する。また、小破片ではあるが、骨片があった。歯の破片もあった。それ以外に瓦質すり鉢の小破片が1点と銭貨6点があった。銭貨の種類は「元豊通寶」(初鑄年1078年以下同じ)3枚、「乾元重寶」(758年)、「聖宋元寶」(1101年)、「洪武通寶」(1368年)で、すべて中国銭であ



第5図 第4次調査出土遺物実測図

る。鉄釘は第4図に復原したように、0.6mの方形に集中しており、その状況から方形の箱に遺体を埋納していた可能性が高い。瓦質すり鉢は戦国時代のもので、もっとも新しい「洪武通寶」でも15世紀であり、この墓は戦国時代のものである可能性が高い。しかも、調査成果によれば一度造り替えられた城の南端に存在することから、城の最終段階である1579年から1600年ごろまでに築造された可能性が高い。



第6図 第5次調査範囲図

4. 第5次調査

1) はじめに

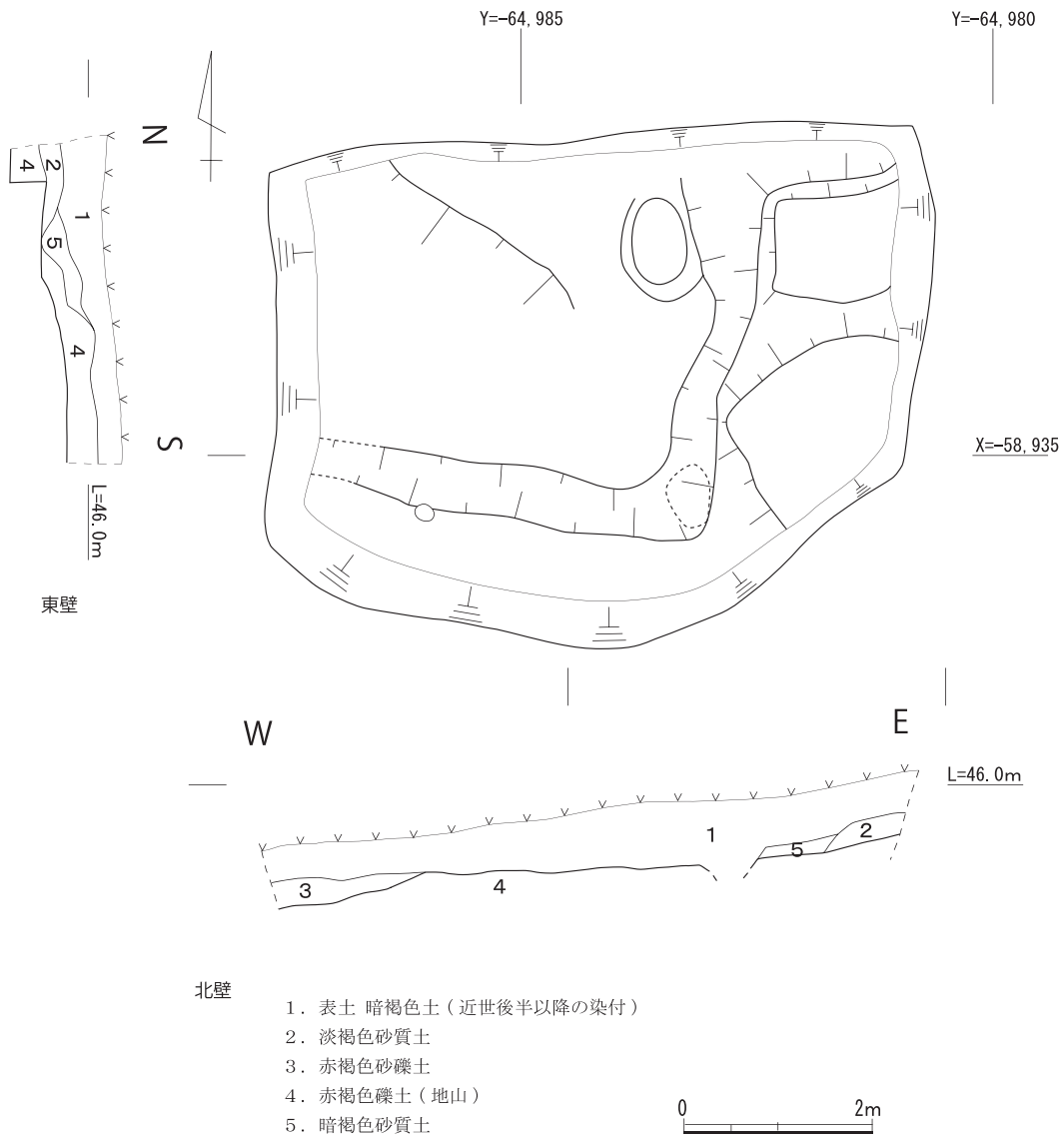
中山城の主郭は北端にあり、そこから南へ3つ目の郭が郭1-1である。その西側の1段下がったところが郭1-2、さらに西側の1段下がったところが郭1-3で、ここに中山(城山)八幡神社がある。調査は郭1-1の西斜面(切岸1)と郭1-2およびその西斜面(切岸2)、さらに郭1-3の範囲に8か所のトレンチを設けて実施した。調査前は木々が茂る林であった。樹木伐採後、人力により掘削を開始した。

土層は単純で、表土直下に淡褐色砂質土があり、その下に赤褐色砂礫土があり、その下に地山である赤褐色礫土がある。地山の表面は風化していた。

2) 各トレンチの調査

第1トレンチ 郭1-3の南端に設定したトレンチで、2か所に分かれる。東側を第1-1トレンチ、西側を第1-2トレンチと呼称する。

第1-1トレンチは地形に即して設定したので、平面は台形である。北辺7m、南辺4m、西辺4m、東辺3.6mである。東側はすぐ赤褐色礫土の地山が露出した。もともとの地形は東側が高く、西側に傾斜するものであり、また、南側に大きく傾斜する地形でもあった。このように、基本的には南西方向に傾斜する地形であったのだが、平坦面を拡張するため、東側を削り、西側へ盛土したのである。南端は地山を少し掘り残して、土塁状にしていた。西端は深さ0.7mで、

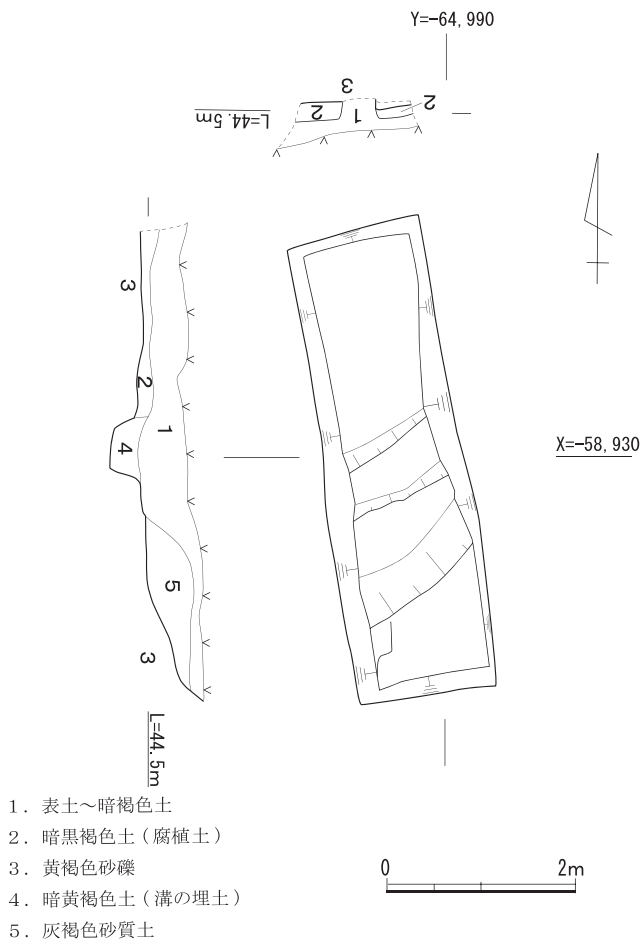


第7図 第1-1トレンチ平・断面図

下面から16世紀の土師器皿が出土した。表土および暗褐色土には江戸時代後期以降の遺物を含んでいることから、(城山)八幡神社を建設するとき盛土したと推定する。戦国時代の地面は3層(赤褐色砂礫土)の上面と、その下面の地山上面の2面が認められる。地山上面で16世紀の土師器皿が出土した。

第1-2トレンチの平面は長方形である。東西1.5m、南北4.8mである。上層は暗褐色土で、下層は赤褐色砂礫土である。地山(赤褐色礫土)は南側が高く残されていた。この南に虎口が想定されるが、大木があり、掘削できなかった。

第2トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面(切岸2)に設定した。トレンチの平面は長方形で、東西7m、南北1mである。調査の都合上、中位のところでトレンチを分けた。トレンチ上半部の上層は暗褐色土で、下層は地山で黄褐色砂礫土である。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。トレンチ下半部の表土は黄褐色砂礫土(地山)の2次堆積層で、下層は地山



第8図 第1-2トレンチ平・断面図

防御施設(切岸2)を形成していた。ここから土師器皿が出土した。

第6トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面に設定した。斜面を上がる山道があったので、トレンチはこれを境に上下2か所に分け、上側を第6-1、下側を第6-2トレンチと呼称する。

第6-1トレンチの平面は長方形である。東西2.6m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は黄褐色砂礫土層である。土師器皿や中国製染付けが出土した。

第6-2トレンチの平面は長方形である。東西3.4m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は地山で黄褐色土層である。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。土師器皿や中国製染付けが出土した。

第7トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面に設定した。平面は長方形である。東西10m、南北1mである。上層は明褐色砂礫土層で、下層は赤褐色砂礫土層である。標高51.9mの地点がやや緩斜面となっており、幅4m、奥行き2mの広場を造っていた。このほかは地山を45度に削り、防御施設(切岸2)を形成していた。ここでは、中国製染付けや戦国時代の土師器が出土した。

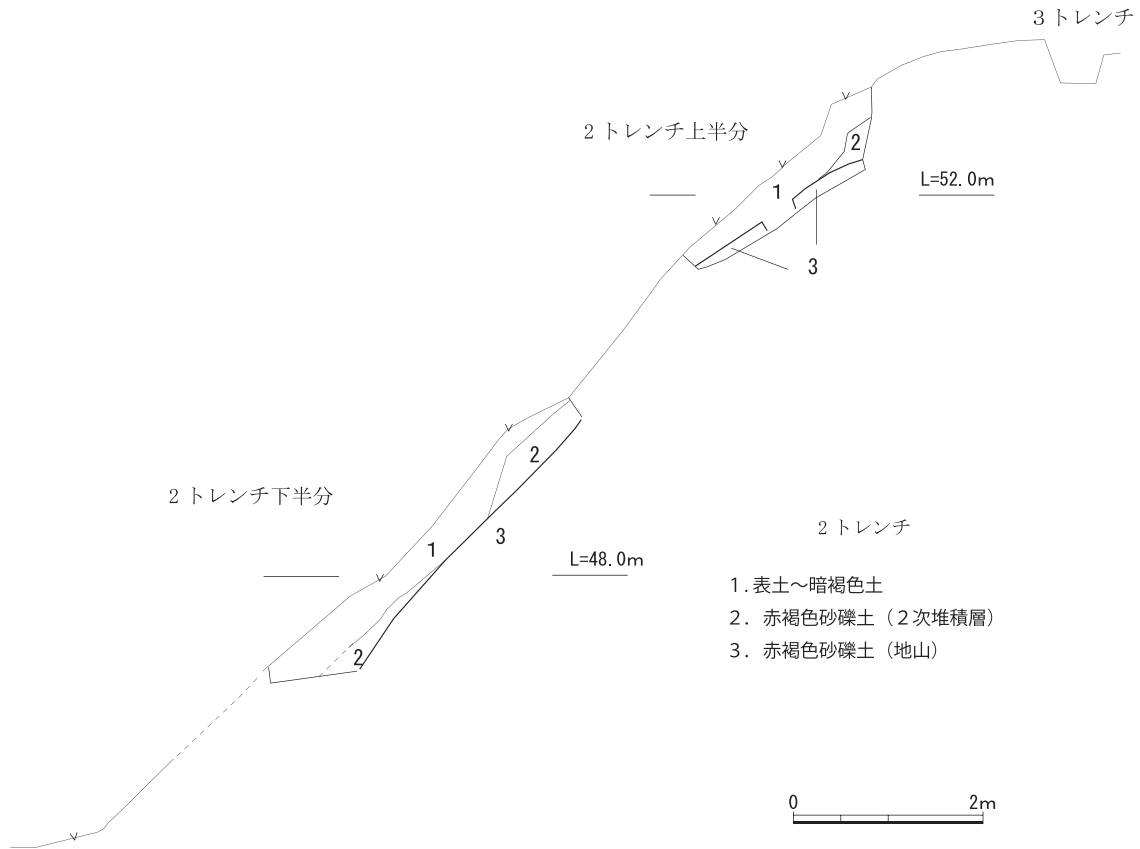
第8トレンチ 郭1-1と郭1-2との間の斜面(切岸1)に設定した。第4トレンチと接している。平面はほぼ長方形であるが北側のほうが狭い。北辺5m、南辺6m、西辺22m、東辺21m

である。ここからは銭貨が1枚出土した。

第3トレンチ 郭1-2の南端に設定した。第3次調査の第5トレンチが中央部で重複している。地形に即して設定したので、平面は台形である。北辺4m、南辺5.2m、西辺4.6m、東辺6.4mである。上層は暗褐色土層で、下層は暗黄褐色砂礫土層である。遺物はなかった。

第4トレンチ 郭1-1と郭1-2との間の斜面(切岸1)に設定した。平面はほぼ長方形であるが南側のほうが狭い。北辺6m、南辺2.4m、西辺22m、東辺22mである。地山を45度に削り、防御施設(切岸)を形成していた。上層は暗褐色土層で、下層は暗赤褐色砂礫土層である。

第5トレンチ 郭1-2と郭1-3との間の斜面(切岸2)に設定した。平面は長方形である。東西5.6m、南北1mである。上層は暗褐色土層で、下層は淡黄褐色砂礫土層である。地山を45度に削り、



第9図 第2トレンチ断面図

である。上層は暗褐色土層で、下層は赤褐色砂礫土層である。現状では斜面の途中に幅1～2mの平坦面を造っており、帯曲輪状となっていたが、途中で止まっており、あまり機能的とはいえない。ここでは、中国製染付けや古墳時代の須恵器が出土した。

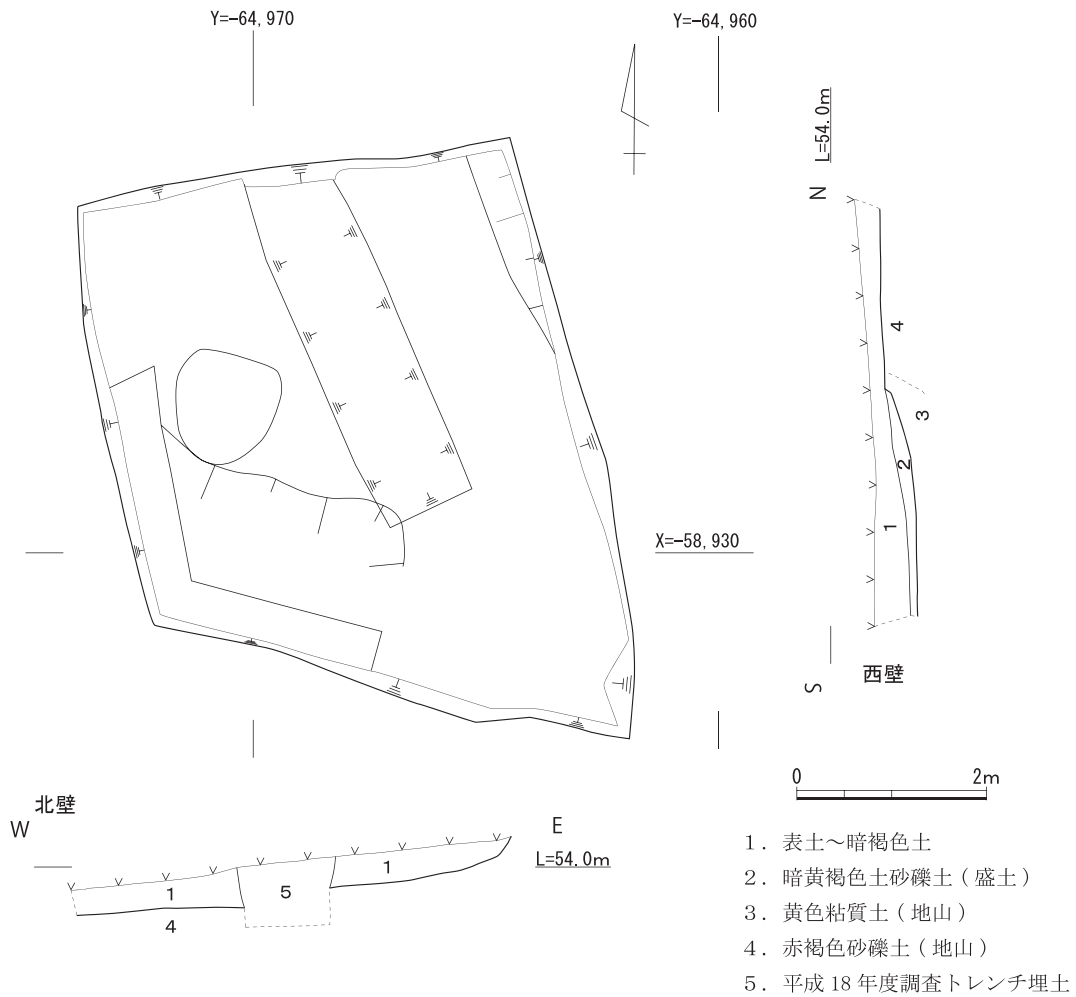
3) 出土遺物

1・2は須恵器杯蓋である。天井部を一部欠損している。1は口径14.0cm、現存の器高3.6cmである。2は口径14.0cm、現存の器高3.3cmである。いずれも口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリである。色調は灰褐色で、胎土には微量の白色砂を含む。これらは第8トレンチから出土した。

3・4は須恵器杯身である。下半部を欠損している。3は口縁端部を欠損している。推定口径13.4cm、器高3.6cmである。4は口径12.7cm、器高3.6cmである。いずれも口縁部は回転ナデ、体部下半部は回転ヘラケズリである。色調は灰褐色で、胎土には微量の白色砂を含む。受け部はやや退化しており6世紀中葉のものである。これらは第8トレンチから出土した。

5・6は中国製染付けである。下半部を欠損している。5は口径12.0cm、現存の器高3.2cmである。ややくすんだ白色の釉にコバルトで濃い青色の花模様を描いている。5の断面には漆が付着しており、使用時に破損したものを接着し修復している。これらは第6-1トレンチから出土した。7は中国製白磁杯である。下半部を欠損している。釉はややくすんだ白色である。第6-2トレンチから出土した。5～7は16世紀のものである。

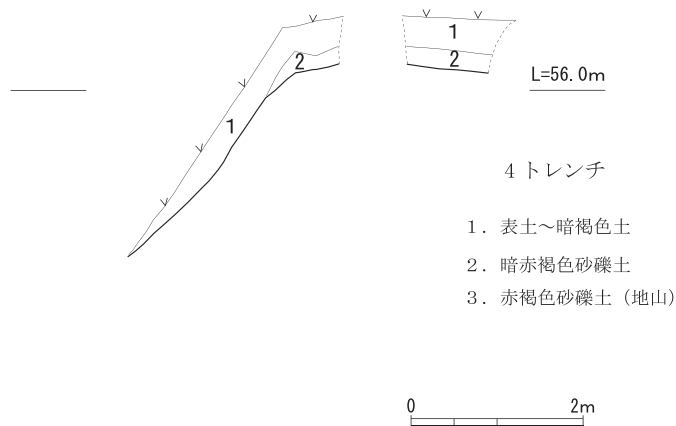
8は鉄製品である。両端を欠損している。断面は上が平坦で、下が尖っており、おそらく刀子



第10図 第3トレンチ平・断面図

の一部である。現存長2.1cmである。第5トレンチから出土した。

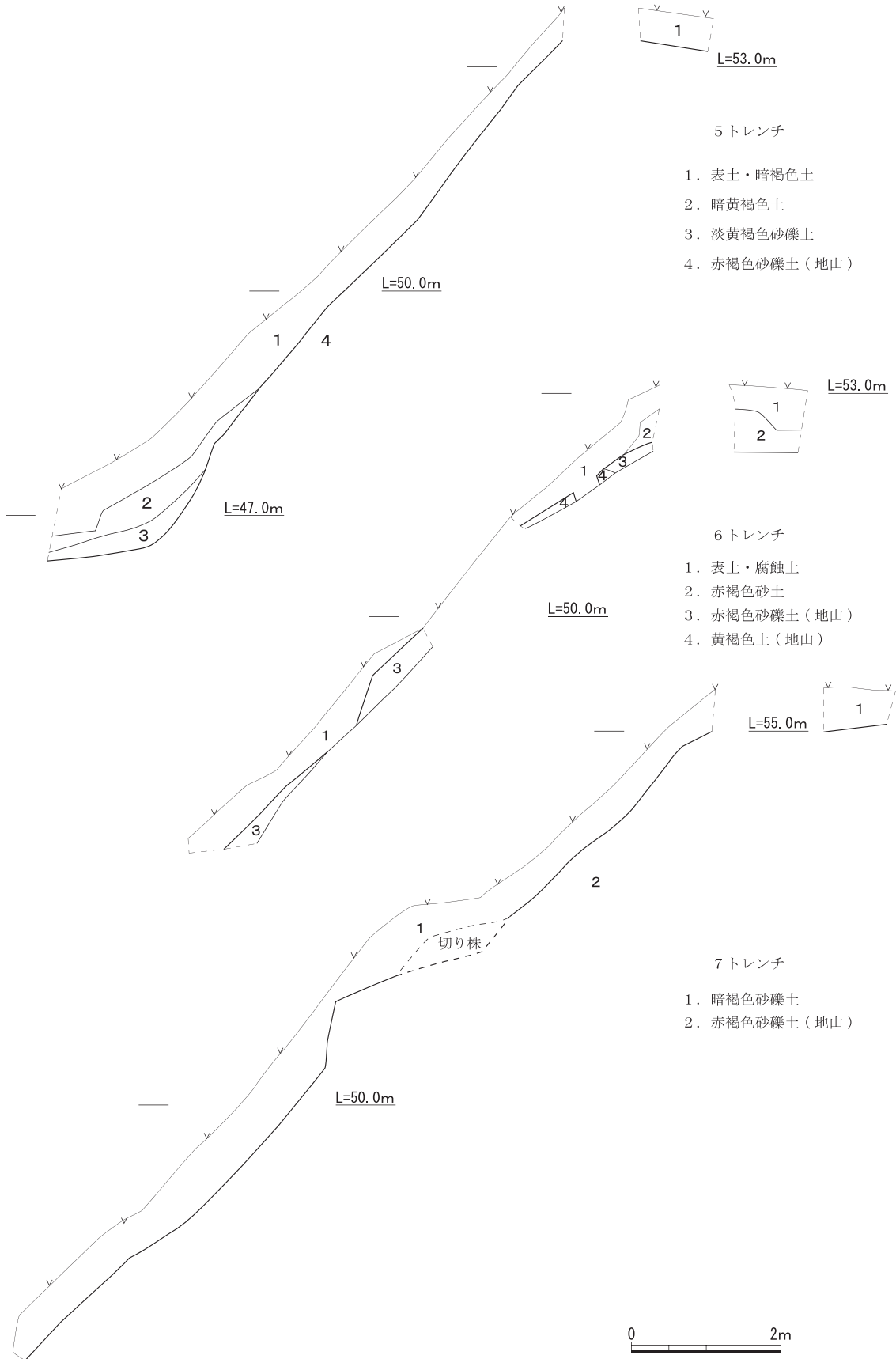
9は土師器皿である。口径7.4cm、器高1.7cmである。てづくね成形であるので、体部にはユビ押さえの痕がある。胎土は密で、1mm程度の白色砂を含む。焼成は軟、色調は淡褐色である。内面には油焔痕がある。第8トレンチから出土した。



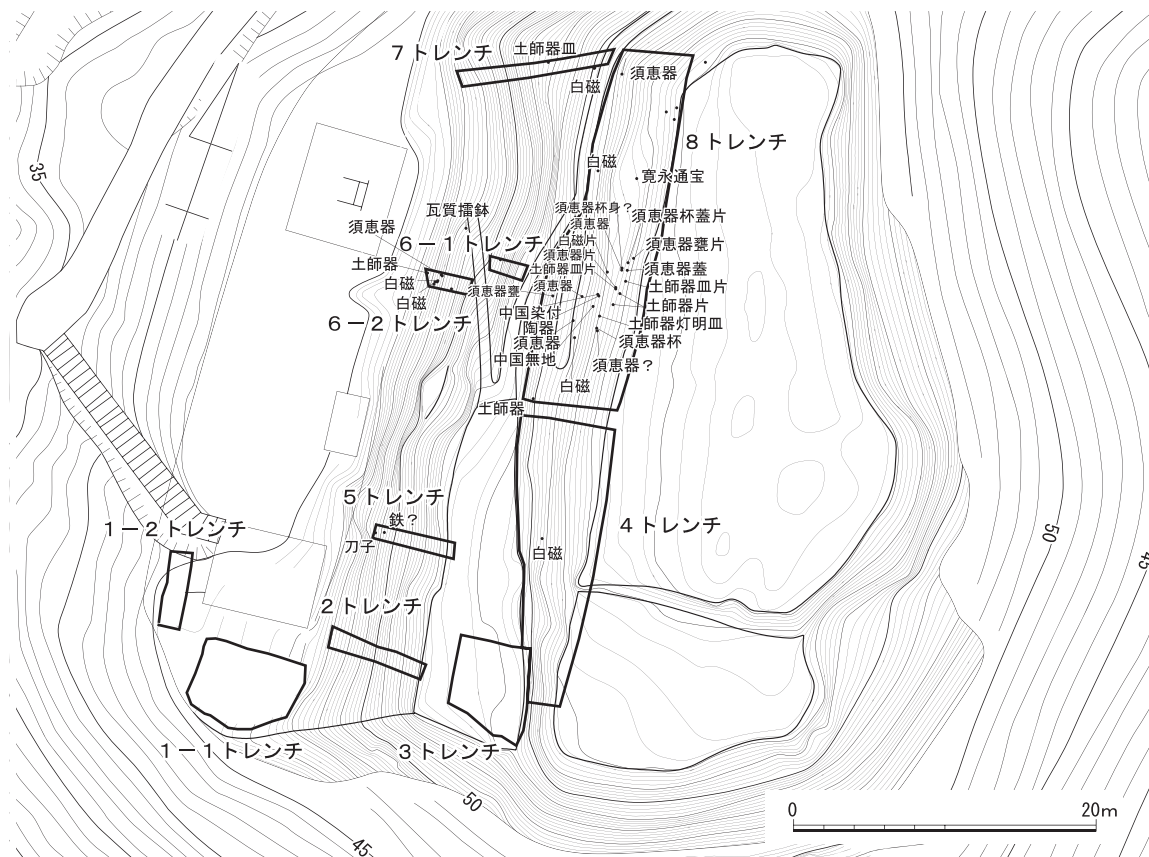
第11図 第4トレンチ断面図

10は土師器皿である。底部を欠損している。てづくね成形である。口縁部はヨコナデである。口径14.0cm、現存の器高2.5cmである。胎土は密で、焼成は軟、色調は淡褐色である。第7トレンチから出土した。平安京左京内膳町編年のS D168タイプで16世紀中葉のものである。

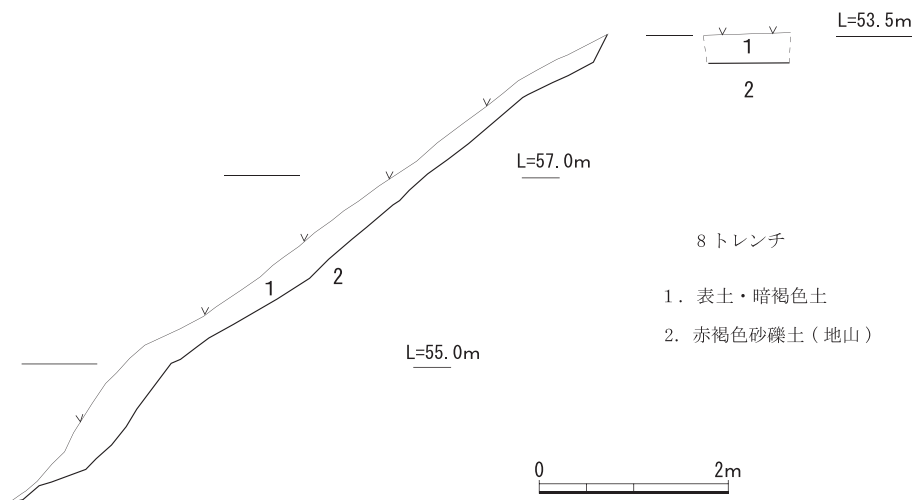
11は土師質の素地に柿色の釉薬をつけた灯明皿である。口径10.6cm、器高



第12図 第5～7トレンチ断面図



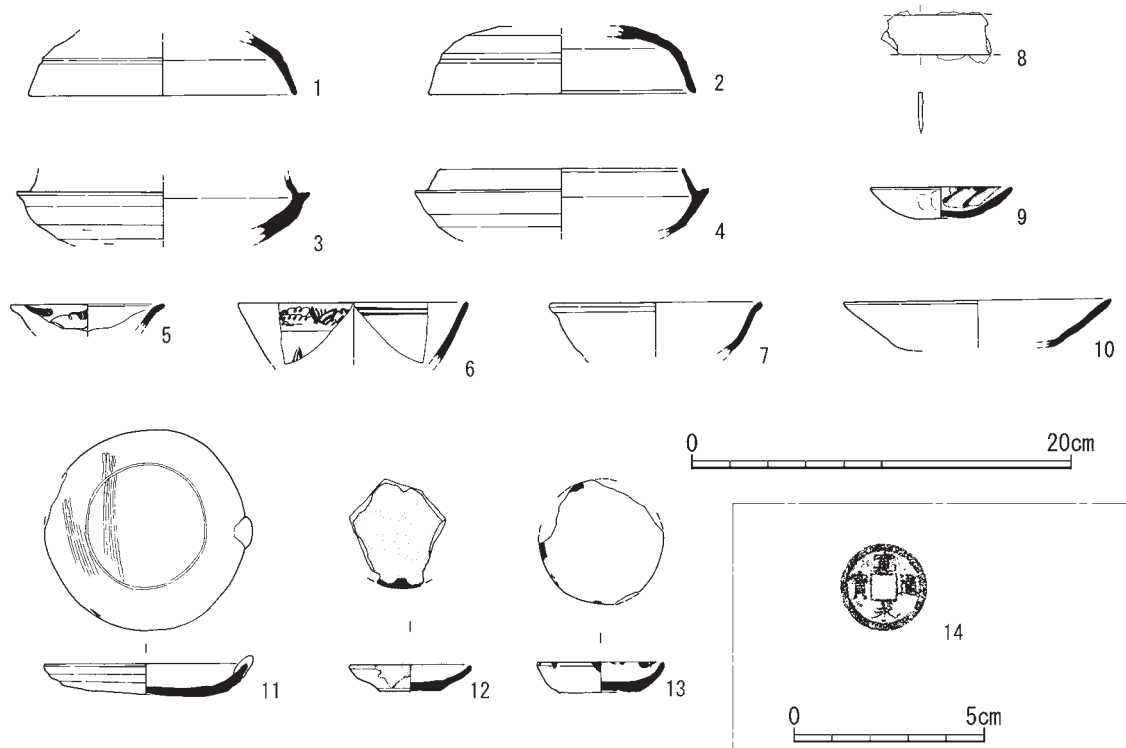
第13図 第5次調査遺物出土地点図



第14図 第8トレンチ断面図

1.8cmである。完形品である。口縁部の一部に小さな半円形の突起をつけている。灯明心を安定させるものである。内面にはハケ目が施されている。見込みの端には沈線が施されており、18世紀のものである。

12・13は灯明皿である。12は口径6.6cm、器高1.6cmで、13は口径6.4cm、器高1.4cmである。底部は糸きりで18世紀のものである。11・12は第6-2トレンチから出土した。13は第4トレン



第15図 第5次調査出土遺物実測図

チから出土した。

14は銭貨である。「寛永通寶」である。直径2.3cmである。第1-2トレンチから出土した。15は中国製染付椀である。花文を施す。16は中国製染付椀である。碁笥底タイプである。17は陶器すり鉢である。内面に櫛描きのすり目を施す。色調は橙褐色で、焼きしまっている。なお、小破片なので図示できなかったが、第1-1トレンチの下層から16世紀の土師器皿が出土した。

4) 小結

調査の結果、戦国時代の陶磁器が出土したことや、人工的に斜面を45度に削り、防御施設(切岸)を構築していたことから、山城であることが確認できた。また、古墳時代の須恵器が出土したことから、最高所にかつて古墳があった可能性が出てきた。

5. 第6次調査

1) はじめに

今回の発掘調査は、南北に長い城の南半部の広い曲輪周辺で行った。城の中心(主郭)はこの地点の2つ北側の尾根の頂点と考えられる。調査地の最高地点・標高60m付近には、南北40m、東西17mの細長い平坦面からなる郭1-1がある。その南は1mほど下がっており、郭1-1南と名づけた。実際の使用方法は郭1-1と一体のものであろう。これらの西側斜面には階段状に3つの郭(郭1-2、郭1-3、郭1-4)を造り、防御を固めていた。郭1-2は幅が狭く、帯曲輪として使用されたと考えられる。郭1-4は狭い郭であるので腰曲輪として使用されたい。郭1-1の東側の1段下がったところにも郭1-5を造っていた。これも狭い郭であるので腰曲

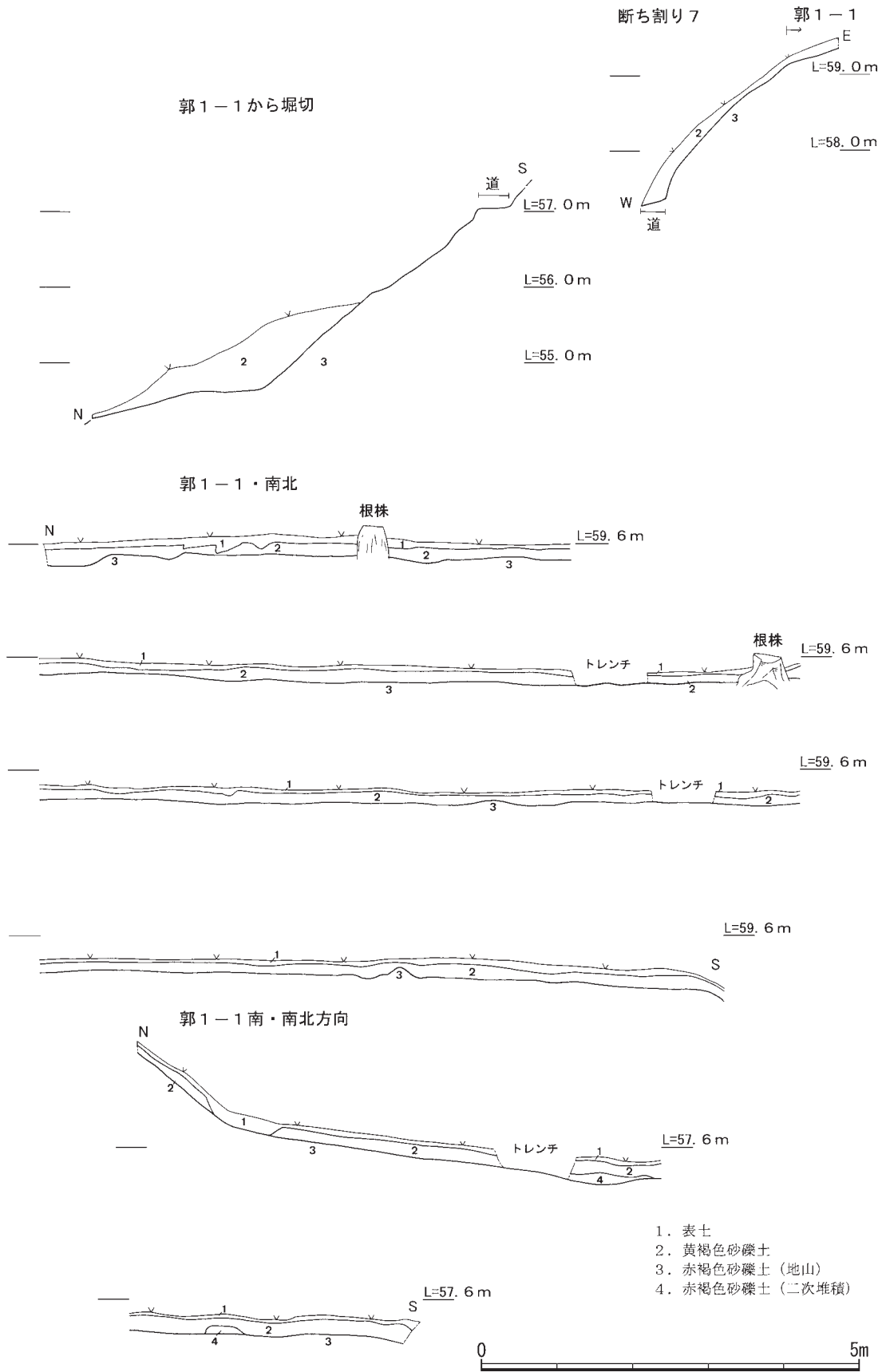


第16図 第6次調査範囲図

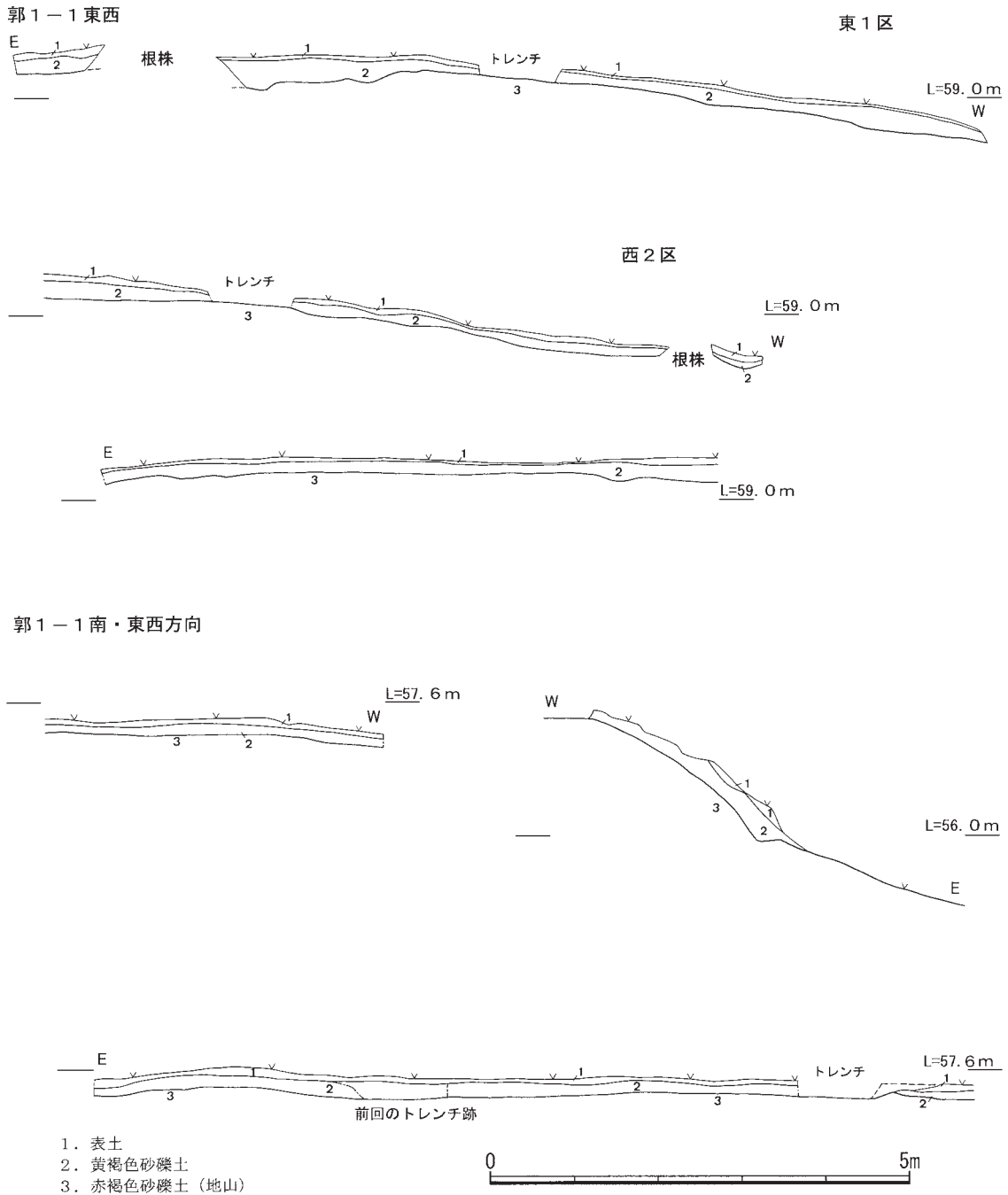
輪として使用されたい。郭と郭との間は人工的な斜面である切岸が造られていた。

2) 検出遺構

郭 1-1 南側が広い台形である。北辺は10.5m、南辺は19.5m、長さ36.9mである。東端については調査範囲から外れており、遺構の有無は確認できなかった。平坦面を調査した結果10cm程度掘削すると地山が確認できた。包含層は黄褐色砂礫土層で、地山は同色か、赤褐色砂礫土層であった。北端には柵 1 が作られていた。柱穴は直径15～25cm、深さ5～30cmである。東端は確認できなかったが、さらに東側にまで作られていたと推測する。西端は南に折れている。郭 1-1 の西端は少し窪んでおり、ここに北から進入できる道があった。詳細は後述する。



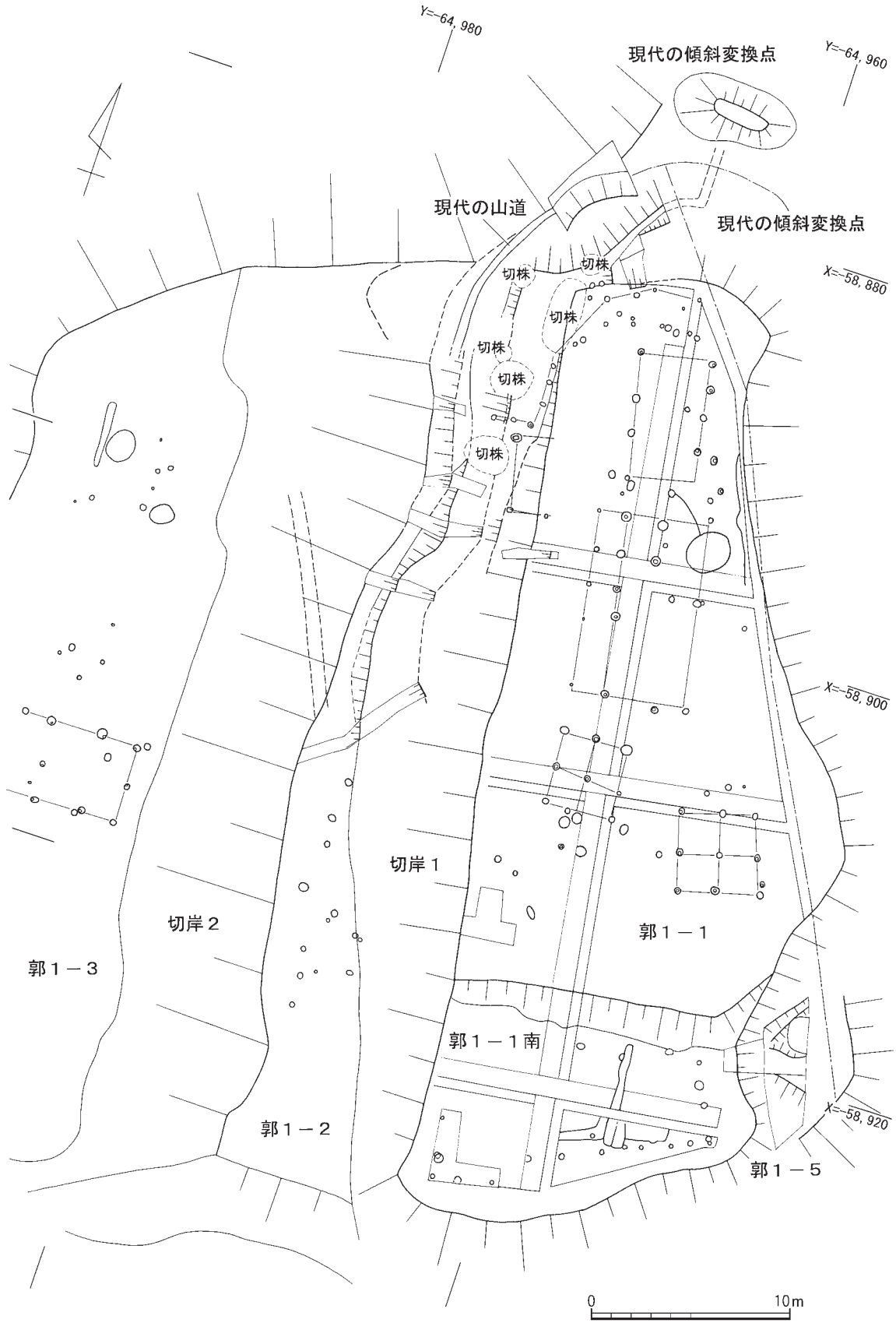
第17図 郭1-1、郭1-1南南北断面図



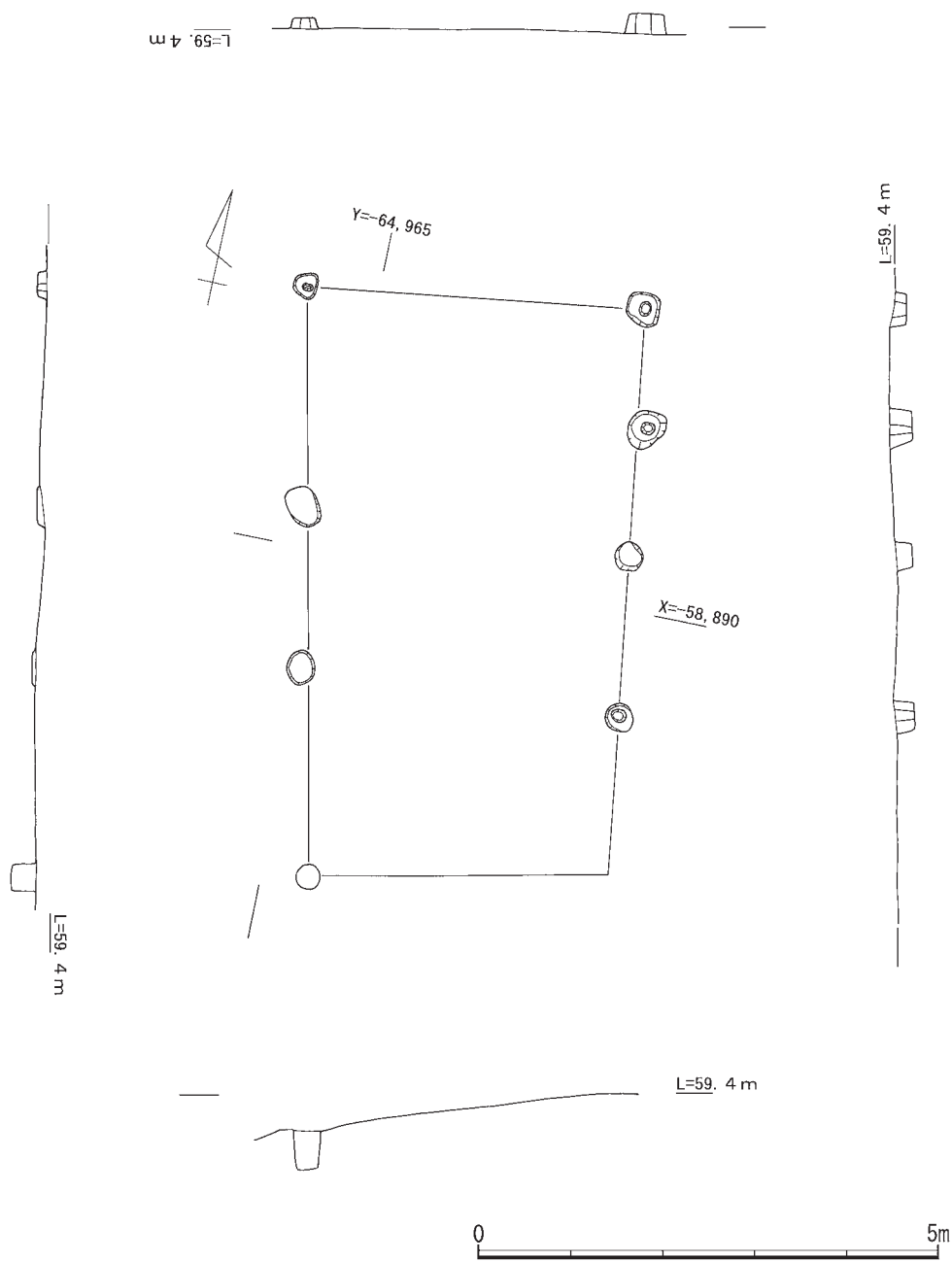
第18図 郭1-1、郭1-1南、郭1-5東西断面図

その南で掘立柱建物跡4棟を確認した。掘立柱建物跡1と掘立柱建物跡2は南北に並んでおり、掘立柱建物跡3と掘立柱建物跡4はこれらの建物の南にあり、東西に並んで検出した。

掘立柱建物跡1 削平が激しく柱穴が残っていないか所が多いが、おそらく東西2間、南北4間と推定する。本来あるべき11か所の柱穴のうち、8か所が確認された。柱掘形の平面は円形で、直径0.3～0.4mである。復原した平面形はやや歪な長方形である。北辺が3.68m、南辺が3.26m、西辺6.4m、東辺6.06mである。西辺の柱間寸法は北から2.4m、1.72m、2.28m(1間不明)である。埋土は黄褐色砂質土で、深さは2～10cm程度である。出土遺物はなかった。



第19図 郭1-1～郭1-3平面図

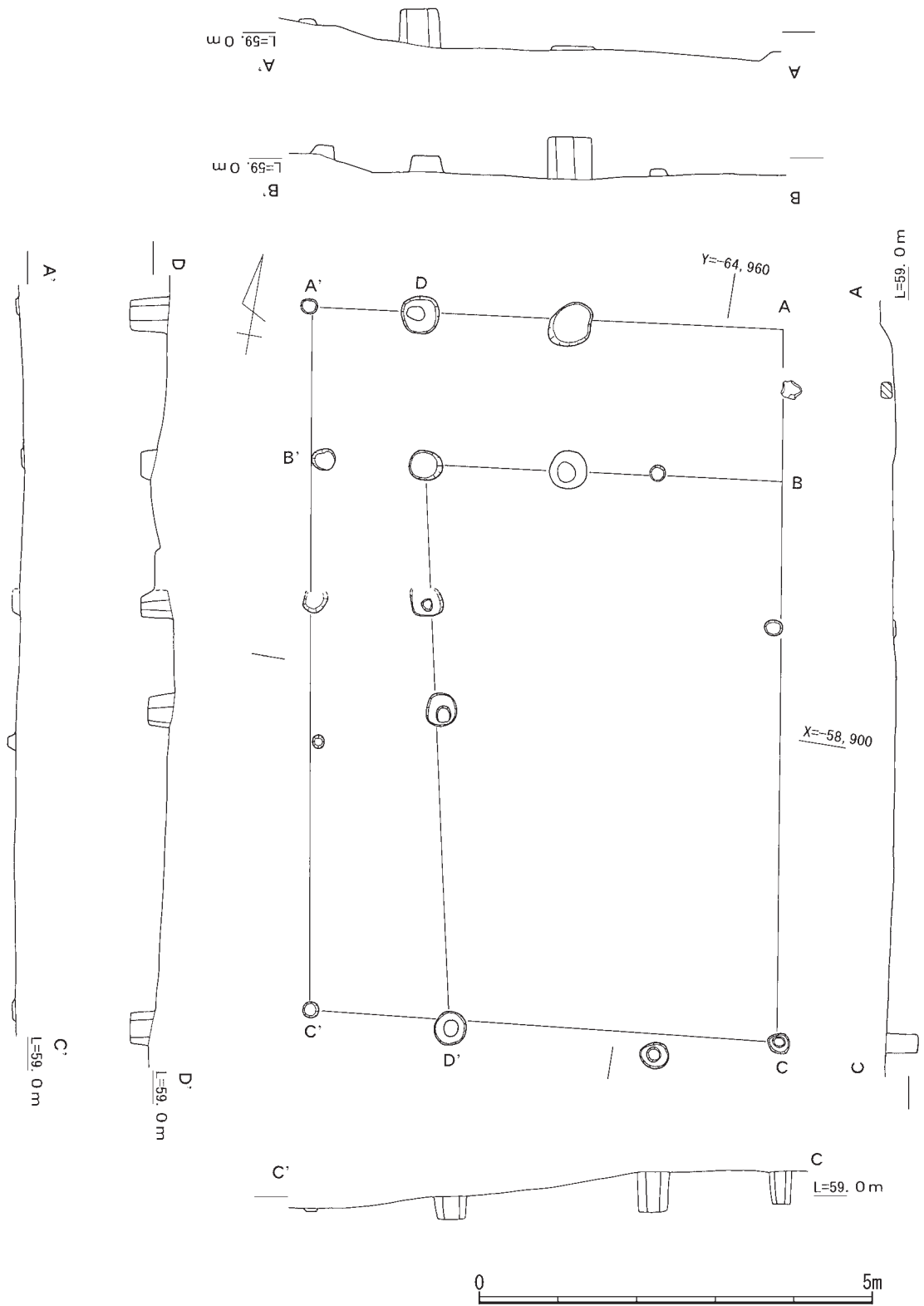


第20図 掘立柱建物跡1 実測図

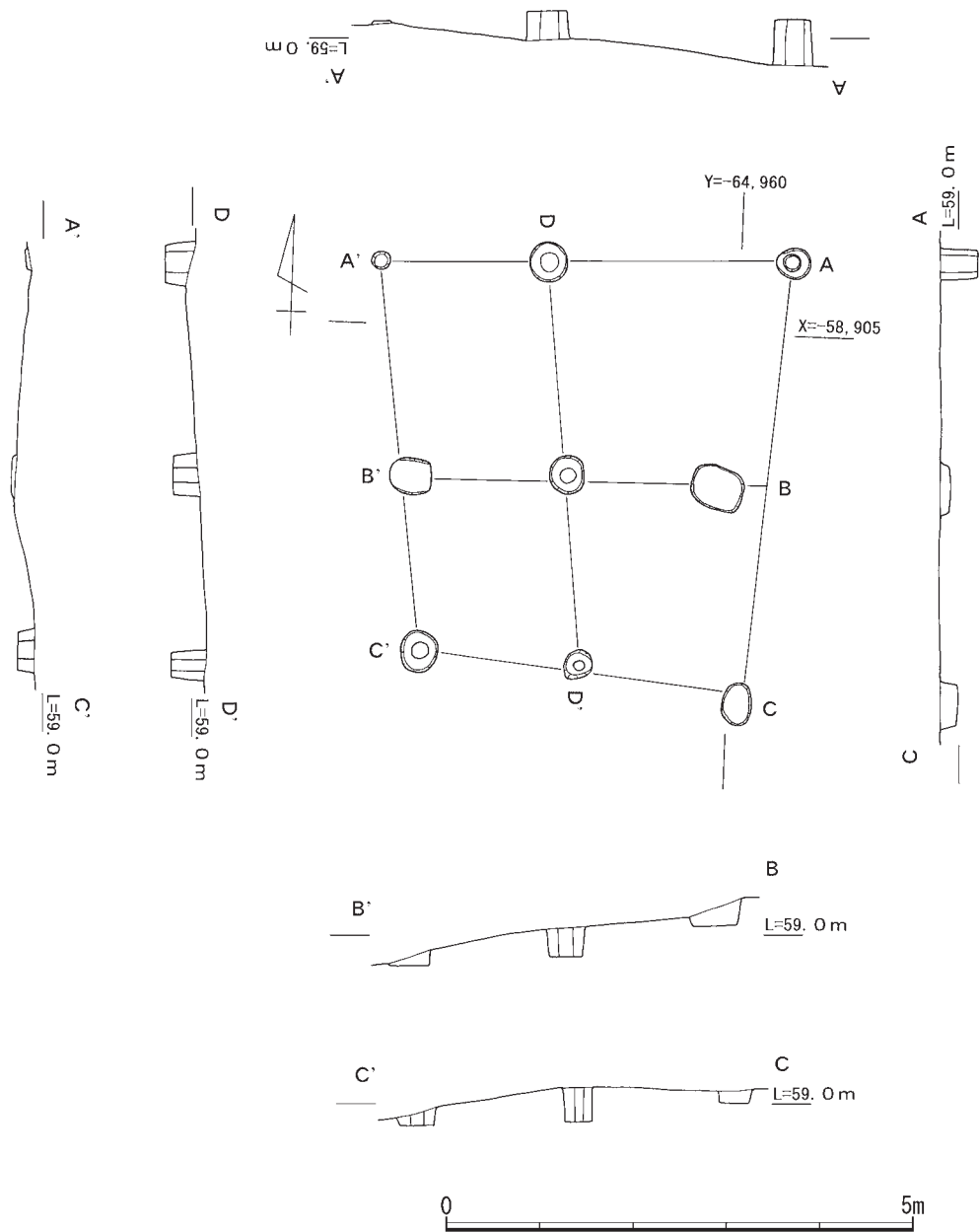
掘立柱建物跡2 東西2間、南北5間で、西廂と北廂をもつ。平面は円形で、身屋の柱の直径0.2m、廂の柱は0.15mである。北辺が6.08m、南辺が6.0m、西辺8.16m、東辺8.96mである。西辺の柱間寸法は北から1.92m、1.76m、1.68m、3.36mである。埋土は黄褐色砂礫土で、深さは10～30cm程度である。出土遺物はなかった。

掘立柱建物跡3 東西2間、南北2間の総柱建物跡である。柱穴の平面は円形で、直径0.3～0.4mである。北辺が4.56m、南辺が3.52m、西辺4.24m、東辺4.64mである。西辺の柱間寸法は北から2.4m、1.8mである。歪な建物である。出土遺物はなかった。

掘立柱建物跡4 東西2間、南北2間の総柱建物跡である。柱穴の平面は円形で、直径0.2～



第21図 掘立柱建物跡2実測図

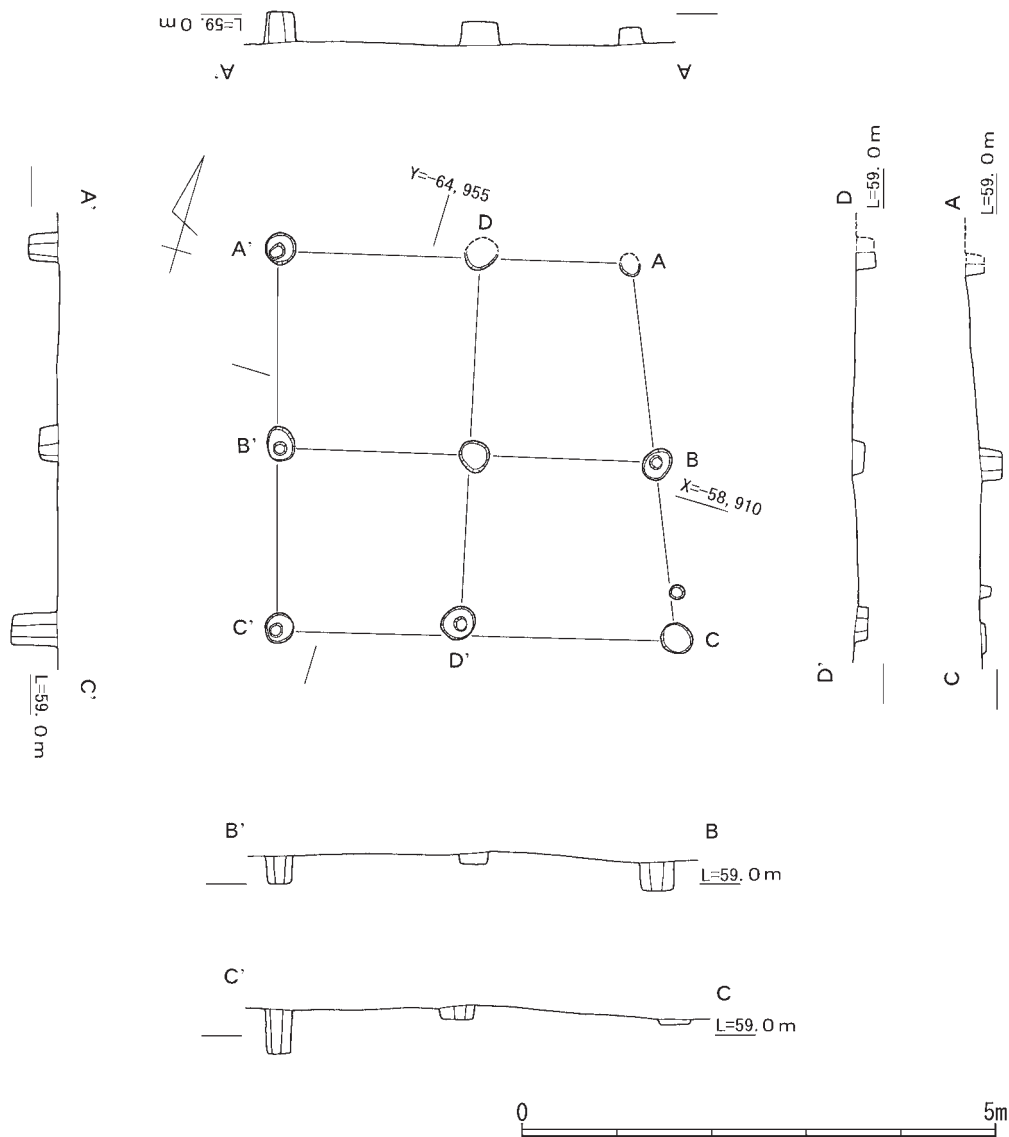


第22図 掘立柱建物跡3実測図

0.3mである。北辺が3.36m、南辺が4.24m、西辺4.0m、東辺4.0mである。西辺の柱間寸法は北から2.08m、1.92mである。歪な建物である。出土遺物はなかった。

堀切 郭1-1の北側には隣の郭へ続くやせ尾根がある。そこに向けて切岸があり、さらに堀切も認められた。地表からの観察で確認できる幅は上端で8.2mである。さらに北側には、掘り残した土塁状の高まり、堀切があり、北から3番目の郭へと続く。

さて、土塁状の高まりは地山を掘り残したものだが、堀切も土塁中央に向かうか所は幅1~2mだけ地山を掘り残していた。いわゆる土橋を形成していたようである。これは、地表観察の結果から判断した。そこから、斜めに道(幅0.5m)が造られ、郭1-1の北西部へ上がるようになっていた。

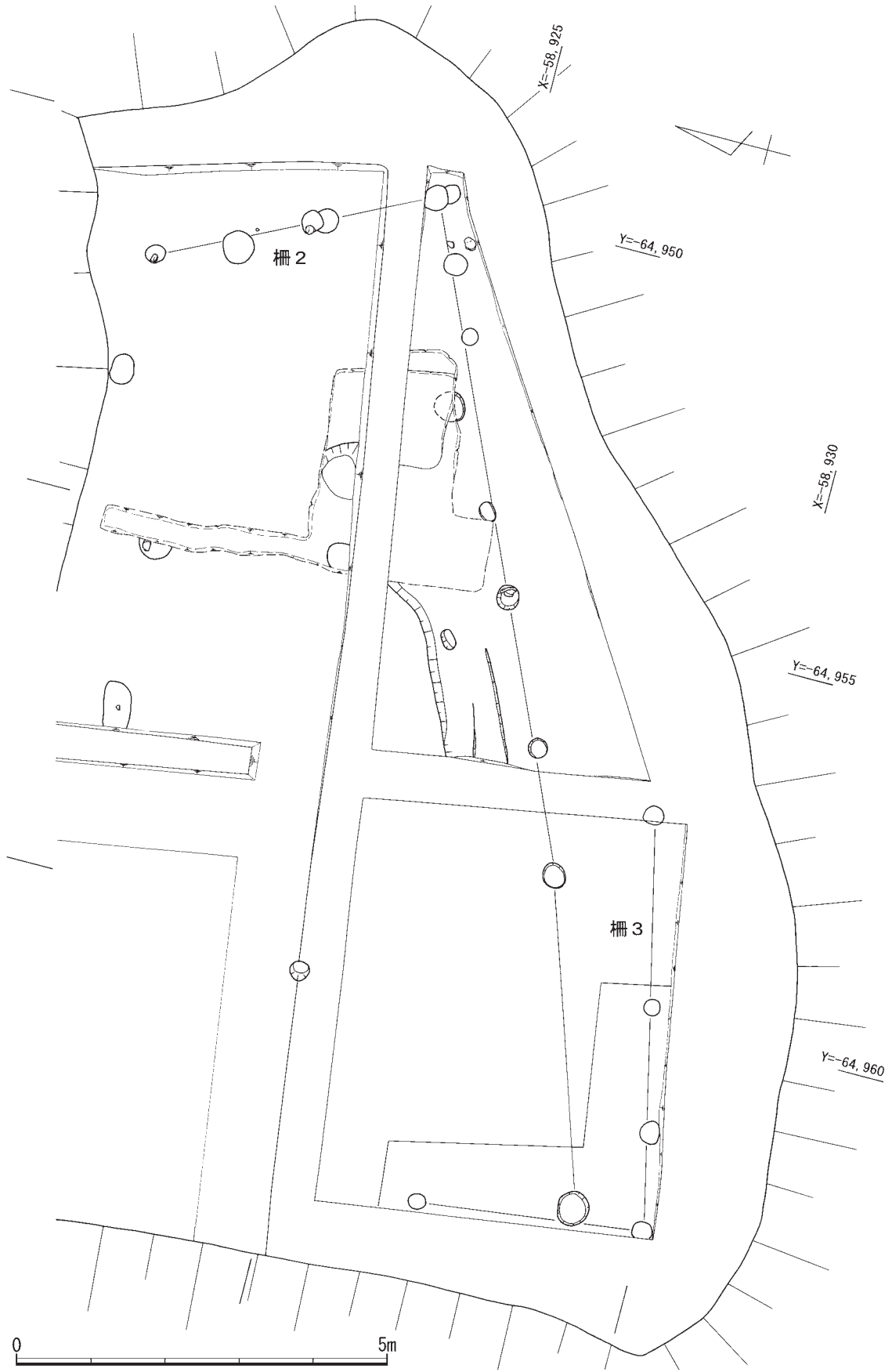


第23図 掘立柱建物跡4実測図

また、堀切は尾根に直交する形で造られていたが、西側は丘陵腹部に沿うように北西から南東方向に山を削って、人工的な切岸を築造していた。出土遺物はなかった。

柵1 郭1-1の北西隅で確認された「L」字状に屈折する。柱穴の掘形は直径は0.2～0.3m、深さは0.2～0.5mである。埋め土は黄褐色砂礫土である。郭の北辺に沿って10か所の柱穴をもつ。長さは5.8mである。その中央部は北側の郭に続く地点となる。西端で郭1-1から切岸1へ南側に屈折する。柱穴は6か所で、長さは6.6mである。南端ではさらに西側に屈折し、郭1-2の平坦面に設置されている。柱穴は4か所で、長さは2.2mである。郭1-2の下層は人工的な斜面である切岸1であることから、この施設は城が造り替えられた後の施設と判断される。

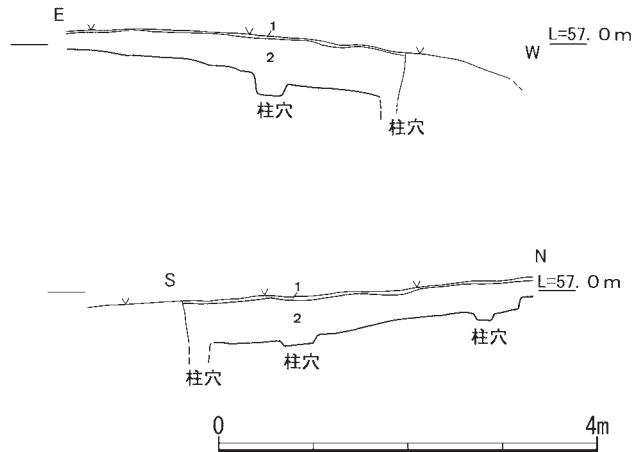
栈敷状建物跡 柵1の南側にある。郭1-1で1か所の柱穴を確認した。郭1-2・切岸1では礎石2か所を確認した。これらがつながって1つの建物を構成していたと考えられる。郭1-



第24図 郭1-1南実測図

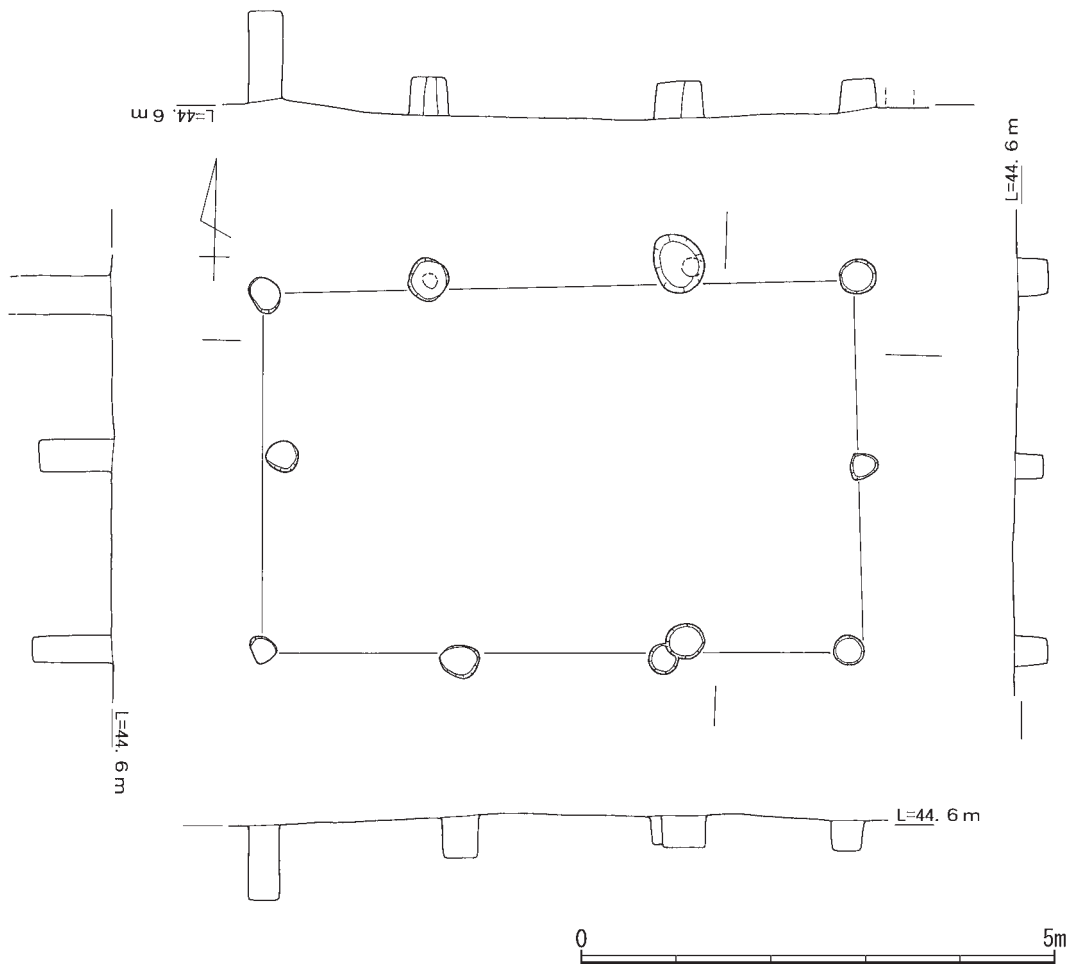
2の礎石の内、北側のものは、五輪塔の地輪を転用したものである。1辺25cmの方形で、厚さは23cmである。材質は花崗岩である。それを裏返しにして使用していた。1面には梵字が刻まれており、「(ア)」と書かれていた。意味は北を表す。南側の礎石は川原石である。長さ35cm、幅20cm、厚さ5cmである。2石の距離は3.6mであった。南側の礎石と組み合う柱穴は、直径は

郭1-1南・南西部断ち割り

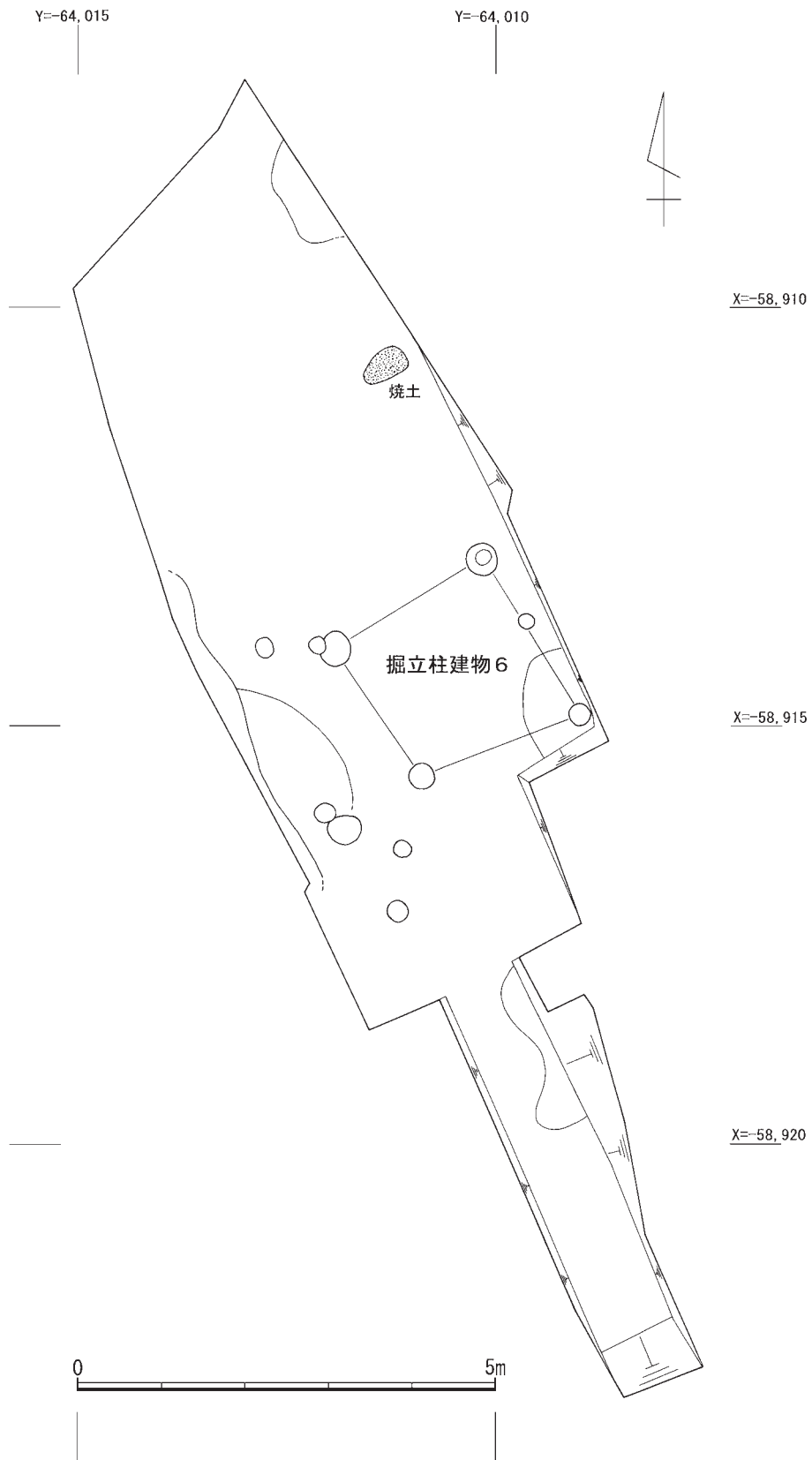


第25図 郭1-1南下層断ち割り断面図

20cm、深さは12cmである。その距離は1.7mである。北側の礎石に伴う柱穴は木株によって攪乱され、確認できなかったが、これらを一体のものと考えれば、郭1-1から由良川に向かって西に張り出した棧敷あるいは舞台のような施設が想定できる。柱を据えるため礎石は小さく、高低



第26図 掘立柱建物跡5実測図



第27図 郭1-4実測図

差のある郭の高所部分は掘立柱建物用の柱穴であるが、これも小規模なものである。これらのことから、簡便な施設であったと推測する。また、礎石と掘立柱建物用柱穴を併用したことは、山頂でもあり、強風で倒壊しないようにしたためではないだろうか。こういった点から、この施設は城が造り替えられた後の施設と判断される。

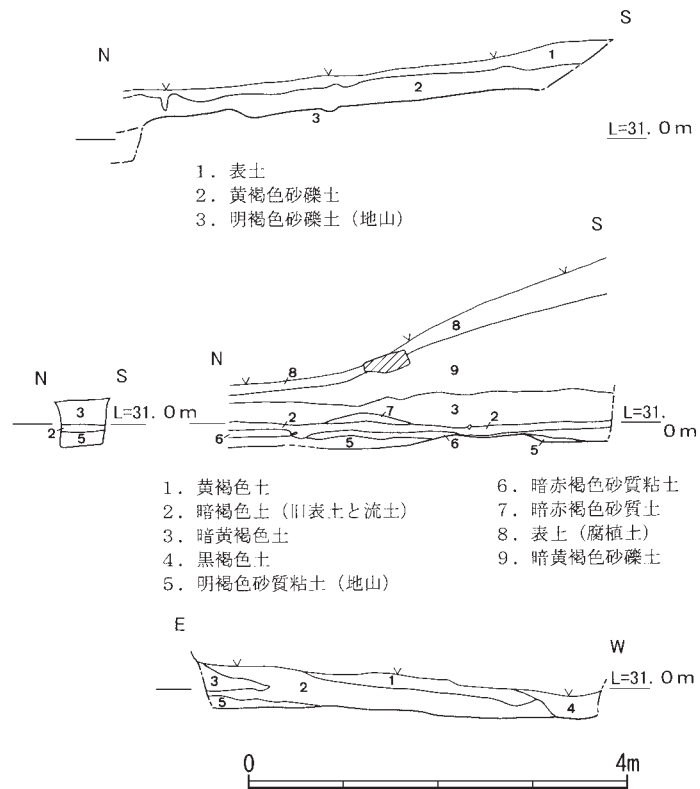
この部分とは反対の丘陵南端では郭1-1南を造成していた。

郭1-1南 平面形は、北辺16.8m、南辺18.6m、西辺9.6m、東辺5.7mの台形である。標高は57.5mである。南と東には逆「L」字状に屈折する柵2が作られていた。下層を調査したところさらに南側に柵3が検出された。また、丘陵南西部の平面形は本来は丸いものであったが、自然地形に40cmほど盛り土され、方形に整えられている。

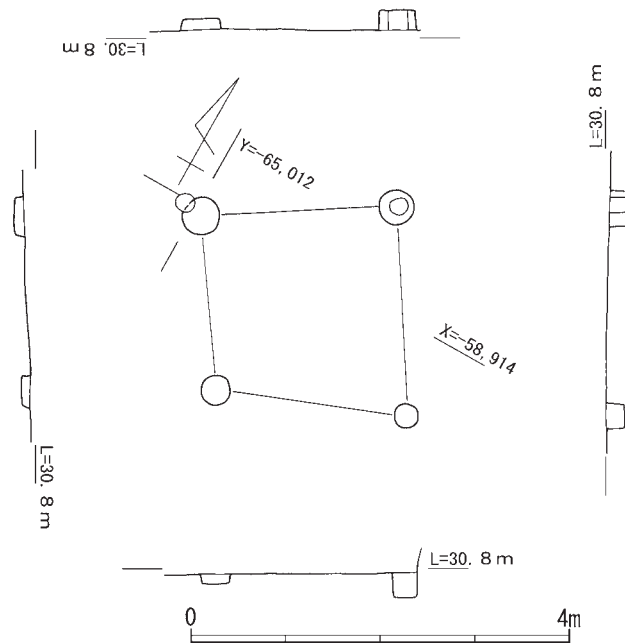
柵2 南辺8か所、東辺4か所の柱穴をもつ。柱掘形の直径は20～40cm、深さは20～60cmである。表土下の黄褐色砂礫土から掘り込まれている。

柵3 南西のみ確認できた。西辺2か所、南辺4か所の柱をもつ。柱掘形の直径は20～30cm、深さは20～30cm以上である。黄褐色砂礫土の下から掘り込まれていた。

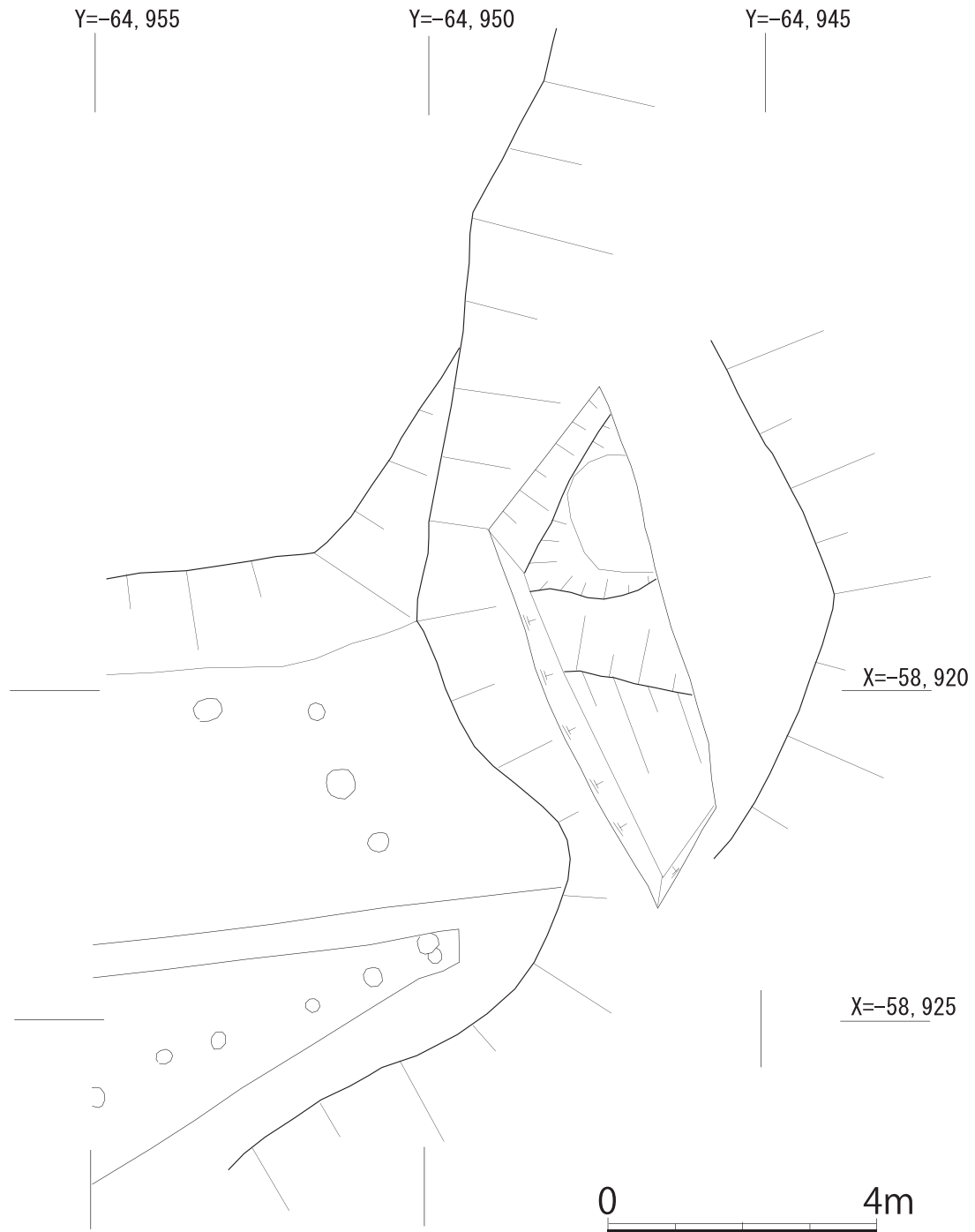
郭1-2 郭1-2は郭1-1の西側に造成した平坦面である。郭1-2の平面形は、南北47.6m、東西7.3～5.4mの北に狭まる台形である。標高53.2～55.5mの地点にある。北側が高く、



第28図 郭1-4断面図



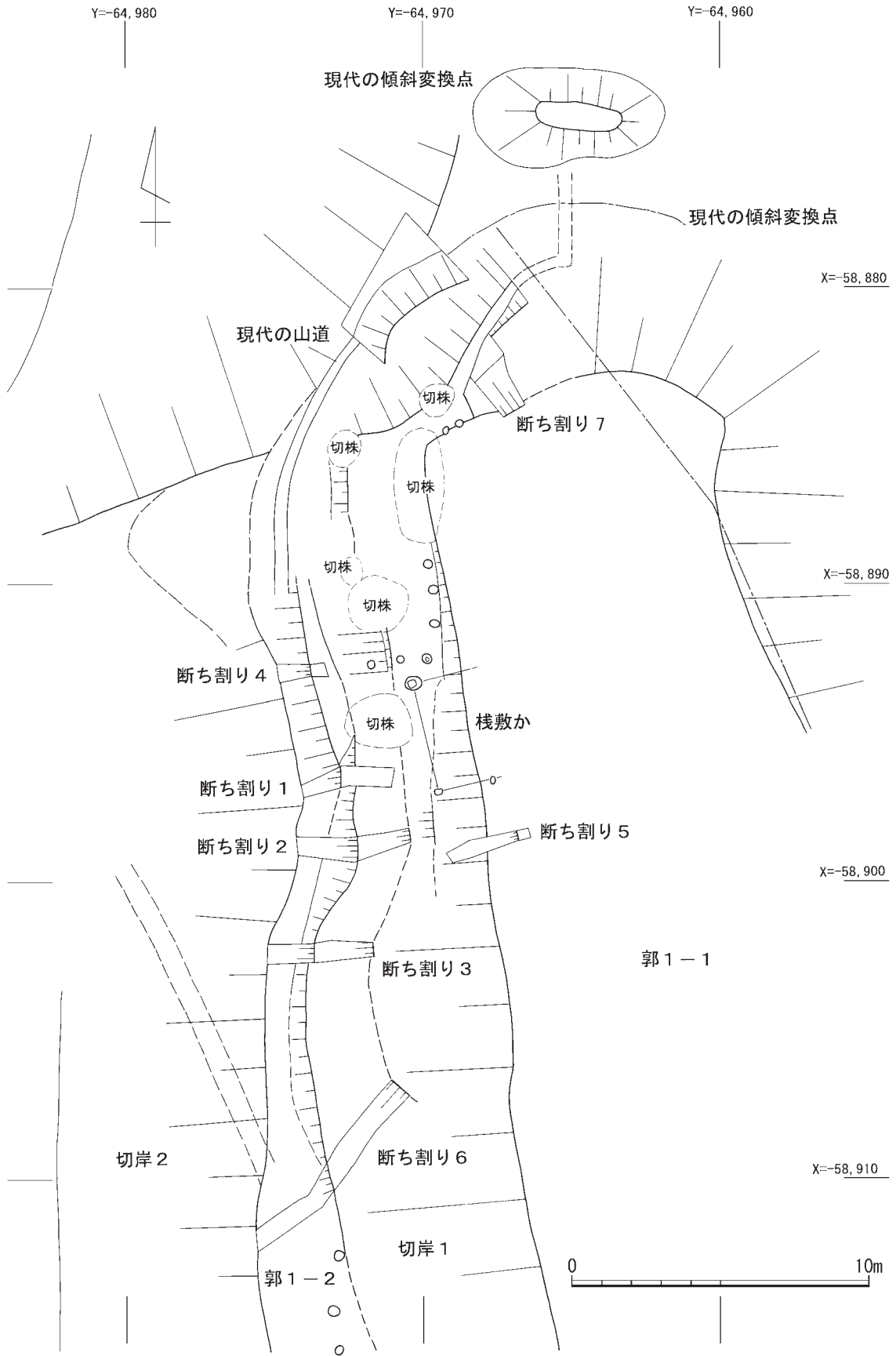
第29図 掘立柱建物跡6実測図



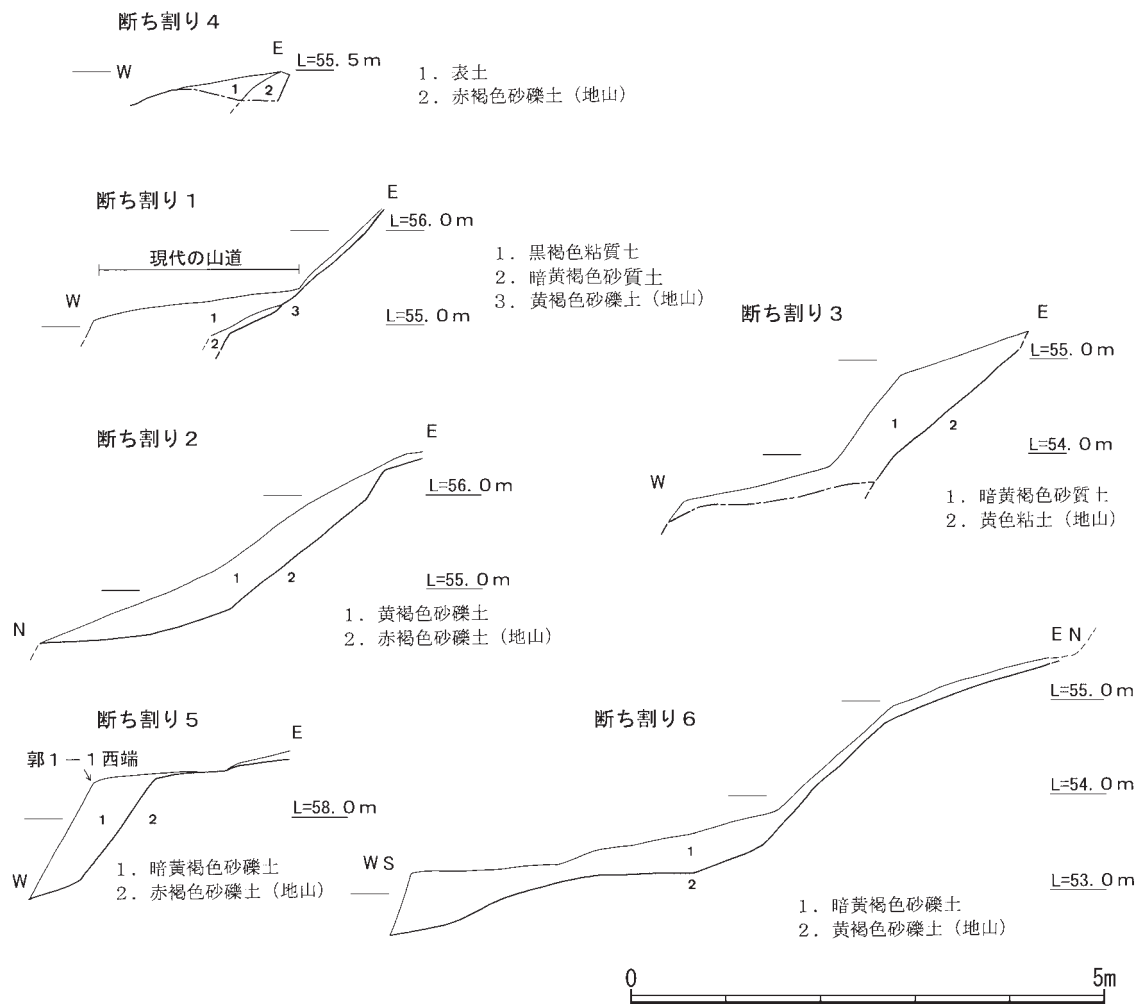
第30図 郭1-5平面図

南側が低い。調査前は台形であったが、調査の結果北部は、切岸1となっていた段階があり、その後、土が盛られ、細い平坦地が造られ、そこに先述の積敷状施設の礎石が置かれた。なお、盛り土の中に多数の古墳時代の須恵器片が包含されていたので、おそらく郭1-1北部に古墳があり、それを削平した結果であろう。南部では数か所のピットが検出されたが、建物や柵列としてまとまったものはなかった。おそらく、兵士がたむろする帯曲輪として使用されたと推定する。

郭1-3 郭1-3の平面形は、南北45m、東西6～10mの北に狭くなる台形である。標高



第31図 郭1-1周辺断ち割り平面図



第32図 断ち割り断面図

44～45mの地点にある。調査前には北端に中山八幡神社の社殿があった。また、南端には物置小屋があった。下層を調査した結果、郭の中央部で掘立柱建物跡5を検出した。

掘立柱建物跡5 東西3間、南北2間である。平面は円形で、柱穴の直径0.2～0.4mである。北辺が6.24m、南辺が6.32m、西辺3.8m、東辺3.94mである。西辺の柱間寸法は北から1.7m、2.1mである。北辺の柱間寸法は西から1.8m、2.72m、1.72mである。埋め土には焼土を含み、暗褐色土である。郭の中央部にあり、また、東西棟であることから郭の幅を狭めている。

郭1-4 もっとも西側にある郭である。南北1.4m、東西2～5mの両側に狭まる台形をなしている。標高は30.8mと低い。丘陵の斜面を削り、下に土を置いて平坦面を造っている。郭の中央部に東西1間、南北1間の掘立柱建物6が建てられていた。上層は暗褐色土層(旧表土と流土)で、下層は暗褐色砂質粘土層である。トレンチは地形に沿って北側が幅4mと広く、南側は幅0.6mと狭い。

掘立柱建物跡6 東西1間、南北1間の掘立柱建物跡である。柱掘形の平面は円形で、直径0.2～0.4mである。北辺2.16m、西辺2.0m、南辺2.0m、東辺2.32mで、やや歪な建物である。埋め土は暗褐色砂質土で、深さは0.6～0.7mであり、非常に深い。したがって、高い建物が想定で

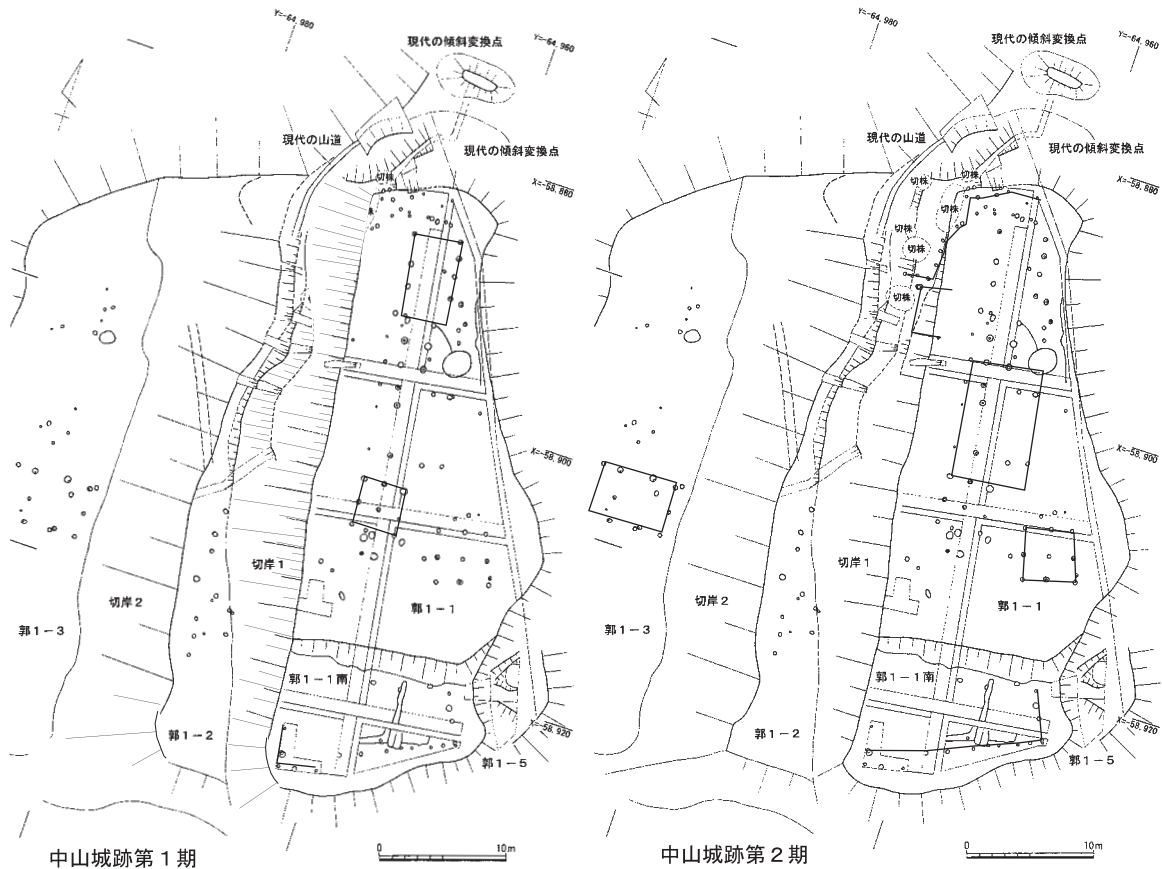
き、この場所から由良川が一望できることから、見張りのための建物が想定できる。

郭1-5 郭1-1南の斜面下にある。標高55.2mで、郭1-1南より2.2m低い位置に自然地形の斜面を削り、平坦面を造成していた。南北7.2m、東西4.6mの方形である。一部は調査地外であるので、トレンチは東西12m、南北6.5mの範囲に設定した。掘削した結果、すぐ地山となった。南側は自然の傾斜面であった。北側は三角形に削られており、下側から上がる道として使用されていたかもしれない。ただし、郭1-1北側斜面で確認されたような幅0.5mの直線的な道ではなく、自然の地形の凹凸を利用した簡便なものである。

城の造成 以上の調査結果を検討すると、城は1度造り替えられたことがわかる。古い時期を第1期、新しい時期を第2期とする。

第1期 郭1-1の北部は建物1があり、南側に建物3があった。これは、埋め土が砂質土で共通していることによる。建物1をこの時期とした根拠は、柱穴の深さがほとんどないほど削平されていることがあげられる。つまり、かつて、数十cm高かった地形を削ったことでこのような状況になったと考えるのである。切岸1や郭1-2などで須恵器が出土したことは、建物1近辺に古墳が存在していたことを示している。それを、第2期に削ったと推定する。郭1-2の北部は平坦面はなく切岸であった。また、郭1-1南と郭1-3の南西部は自然地形のままであった。なお、郭1-1南の南西部には柵3を設置している。

第2期 郭1-1の北部は建物2と建物4があった。これは、埋め土が砂礫土で共通している



第33図 中山城跡変遷概念図

ことによる。北部を削り、平坦面を造り、その丘陵端から西側には棧敷あるいは舞台を張り出していた。この施設の礎石を据えるため郭1-2・切岸1の北部を盛り土し、平坦面を造っていた。柵1と道はこの段階の施設である。郭1-1南と郭1-3の南西部に盛り土をして、隅を方形に張り出した。織豊期城郭にみられるやりかたである。郭1-1南の南端と東端には柵2が作られていた。

3) 出土遺物

遺物は整理箱7箱分が出土した。土師器皿、陶器甕、瓦器鉢、中国製白磁・青磁、鉄製品、銅製品、碁石など多種にわたる。小破片ではあるが400点以上が出土した。中世の山城としてはその出土数は多い。遺物のほとんどは表土掘削時に出土したもので、遺構に伴うものはほとんどない。

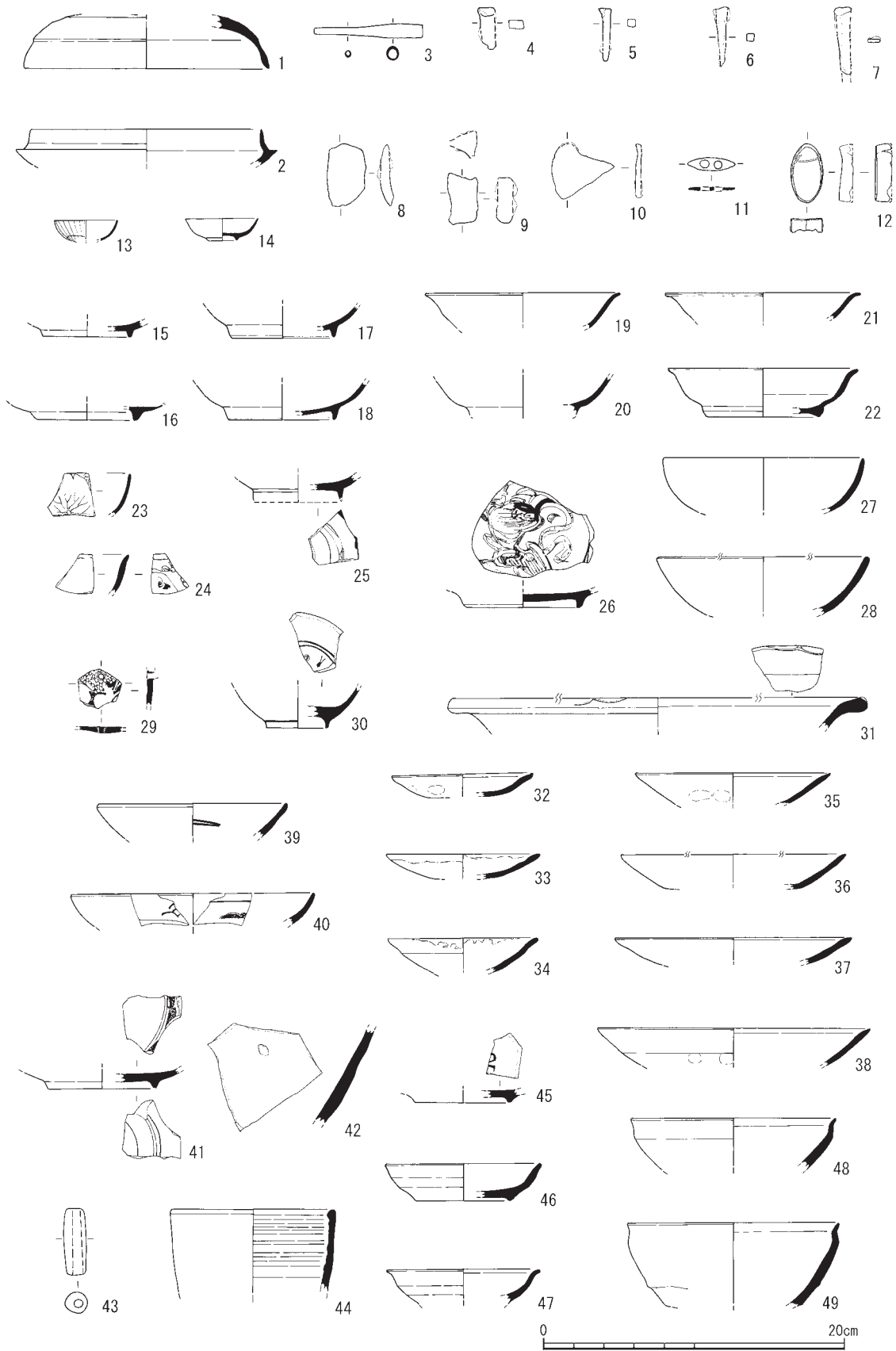
遺物の出土状況を見ると、郭1-1ではほとんど出土せず、西側の斜面である切岸1の北部で集中的に出土した。種類は土師器皿、丹波焼甕・すり鉢、越前焼鉢、美濃・瀬戸天目茶碗、中国製染付け・白磁皿などである。郭1-1南では、土師器皿や中国製染付け・青磁碗などのほか、甲冑の部品である^{こはぜ}靴が出土した。もっとも多く出土したのは郭1-4である。土師器皿と、瓦質すり鉢、丹波焼甕、中国製の白磁皿・碗、染付け皿・碗、刀の柄頭や、鉄釘などがある。出土遺物の年代観より、戦国時代の後半(16世紀前半)に城は造られ、16世紀後葉に平坦地を広げて造り替えたようである。もっとも新しい遺物は1600年前後の唐津焼や土師器皿である。

1・2は須恵器である。いずれも切岸1の北部から出土した。1は須恵器杯蓋である。天井部は欠損している。口径16.2cm、現存器高3.6cmである。外面は回転ナデである。胎土は良で、焼成はやや軟である。色調は灰色である。2は須恵器杯身である。口縁部は回転ナデである。口径15.2cm、現存器高2.4cmである。受け部は退化してやや低くなっているため6世紀中葉のものである。

3は銅製のキセルである。吸い口の直径0.5cm、長さ7.2cmである。郭1-1の北西部の表土から出土した。江戸時代である。

4～7は鉄釘である。いずれも錆びており、下半部は欠損している。長さは2.8～4.5cm、幅は0.6～1.4cmである。4は郭1-1の北西部、5は郭1-1西部中央、6は郭1-1西南部から出土した。8～10は鉄製品である。用途は不明である。8は郭1-4から出土した。9は郭1-1南西北部から出土した。10は郭1-1南東部から出土した。

11は銅製の^{こはぜ}靴である。平面形はレンズ状である。2か所に円形の穴を開けている。長さ3.2cm、中央部の幅0.8cm、両端は尖っている。厚さ0.3cm、厚さは平板である。紐を通す円形の穴は直径0.8cmである。甲冑の胴巻きと肩当などをつなぐ際に使用するものである。郭1-1南の西北部から出土した。12は銅製の刀の柄頭である。平面は楕円形で、断面は刀の柄にかぶせるため、「コ」の字となっている。長さ4.5cm、幅1.4cm、両端は細くなっているが丸まる。厚さは0.3cm、かぶせるため両端の厚さは0.9cmである。郭1-4のトレンチ東辺の中央部の地山直上の暗褐色土層から出土した。



第34図 第6次調査出土遺物実測図(1)

13は白磁小杯である。内外面とも白色に施釉されている。外面は花形である。型押し成形で、内面は平滑である。口径4.1cm、器高1.4cmである。郭1-4の表土層から出土した。14は白磁小杯である。内外面とも白色に施釉されている。高台を施す。口径4.9cm、器高1.5cmである。郭1-3から出土した。15は中国製白磁皿である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径5.8cm、現存の器高は1.2cmである。郭1-1東部中央から出土した。16は中国製白磁皿である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。全面施釉しているが、畳み付けのみ露胎である。高台径3.3cm、現存の器高は1.1cmである。郭1-4の茶褐色土層から出土した。17は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.8cm、現存の器高は2.2cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。18は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.9cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。19は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.8cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4から出土した。20は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。口縁部は欠損している。削りだし高台である。高台径6.8cm、現存の器高は2.7cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。18と同一個体である可能性がある。21は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.8cm、現存の器高は1.8cmである。郭1-4の暗褐色土層から出土した。19とともに端反りのものは16世紀前葉から中葉である。22は中国製白磁皿である。釉調は灰色がかかる白色である。底部は一部欠損している。口縁端部は端反りである。口径12.5cm、現存の器高は3.3cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。23は中国製染付け椀である。口縁部のみ出土した。外面は灰色で、貫入がはいる。内面は樹木のような絵がコバルトで描かれている。郭1-3から出土した。24は中国製染付け椀である。口縁部のみ出土した。外面はコバルトで花文が描かれている。内面は口縁部に近いところに1条の線がコバルトで描かれている。郭1-3から出土した。25は中国製染付け椀である。底部のみ出土した。全面施釉されている。底部外面には1条の線がコバルトで描かれている。釉調は青色がかかる白色である。底径は6.0cmである。郭1-1南の西南部で出土した。26は中国製染付け椀である。底部のみ出土した。内面の見込みにはコバルトで文様が描かれている。削りだし高台である。底径は4.1cmである。現存の器高は1.2cmである。郭1-1北西部に近い切岸1から出土した。27は中国製龍泉窯青磁椀である。口縁部から体部まで遺存していた。全面施釉しているが、無紋である。釉調は緑灰色である。素地は淡褐色である。口径13.2cm、現存の器高は3.7cmである。郭1-1西北部の黄褐色砂質土層から出土した。28は中国製龍泉窯青磁椀である。口縁部から体部まで遺存していた。全面施釉しているが、無紋である。釉調は緑灰色である。素地は淡褐色である。口径13.8cm、現存の器高は3.9cmである。郭1-4から出土した。29は中国製染付け水滴である。外面はヘラにより立体的に仕上げている。そこに施釉しており、内面は露胎である。外側から内側に向けて円孔が空けられている。破片であるが現存の縦2.7cm、横2.9cm、厚さ0.5cmである。30は中国製染付け椀である。

内外面とも施釉しており、内面の見込みにはコバルトで文様を描いている。底部は大きく抉っており、いわゆる碁笥底である。小野分類のE群である。底径は4.1cm、現存の器高は2.8cmである。郭1-4の黄褐色砂質土層から出土した。31は中国製龍泉窯青磁盤である。口縁部が遺存している。内外面とも施釉している。口縁部はヘラにより花形に刻んでいる。釉調は緑灰色で、素地は灰色である。口径は21cmである。

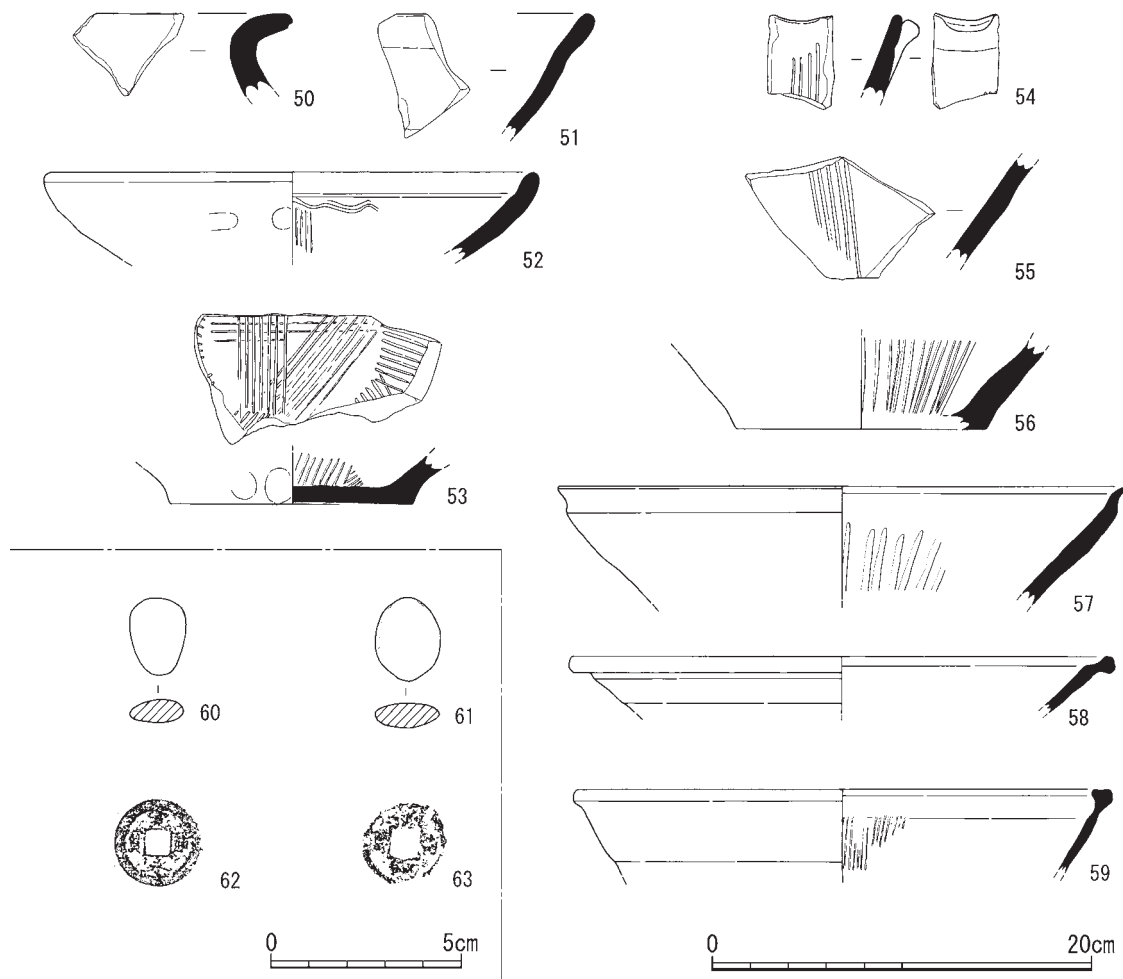
32は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径9.4cm、現存の器高は1.5cmである。口縁部にはヨコナデを施し、体部外面はユビ押さえを施す。口縁端部はやや外反している。色調は淡褐色で、焼成は良好、胎土には半透明の3mm程度の砂を含んでいる。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。平安京左京内膳町跡のSD164タイプに類似しており、16世紀中葉のものである。33・34は土師器皿である。底部が一部欠損している。33は口径10.2cm、現存の器高は1.7cmである。口縁部に油煤痕があり、灯明皿として使用されたものである。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。34は口径10cm、現存の器高は2.3cm、口縁部に油煤付着。35は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径13.0cm、現存の器高は2.0cmである。口縁部はやや外反気味であり、平安京左京内膳町跡のSD164タイプよりやや新しい傾向であるので、16世紀第3四半期と推定する。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。36は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径は不明であるが、中型の皿である。現存の器高は2.4cmである。口縁部は直線的だが、やや内反り気味であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプよりやや新しい傾向である。16世紀第4四半期と推定する郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。37は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径15.8cm、現存の器高は1.8cmである。口縁部は直線的であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプである。切岸2から出土した。38は土師器皿である。底部が一部欠損している。口径18.2cm、現存の器高は2.5cmである。口縁部は直線的であり、平安京左京内膳町跡のSD170タイプの典型例である。口縁部がやや外反したこの形式は1568年の織田信長京都上洛以降の型式と判断しており、1590年ごろまで盛行したと考えている。切岸2から出土した。

39は中国製染付け椀である。内面にコバルトで絵が描かれている。口径12.5cm、現存の器高は2.3cmである。郭1-1の西部中央から出土した。40は絵唐津皿である。体部内外面に焼成前に絵を描いている。口径16.1cm、現存の器高は2.1cmである。切岸1から出土した。41は40と同一の高台部分である。底径7.2cm、現存の器高は1.4cmである。切岸1から出土した。

42は唐津鉢である。内外面とも施釉されている。釉色は緑灰色を基調に、黒い斑点が入る。体部片のみ遺存していた。破片の大きさは縦7.2cm、横7.0cmである。郭1-4から出土した。

43は土錘である。黒色である。体部は円筒形である。長さ4.5cm、胴部の径1.5cm、穴の直径は0.6cmである。郭1-4から出土した。

44は唐津香炉である。円筒形で、口縁端部は内側にやや肥厚している。体部内面にはロクロ目が遺存していて、露胎である。外面は茶褐色の釉が掛かっている。底部は欠損している。口径10.8cm、現存の器高は5.6cmである。郭1-1南の西南部の表土から出土した。



第35図 第6次調査出土遺物実測図(2)

45は美濃・瀬戸皿である。底部のみ遺存している。内面には印花文を施している。全面に釉が施されている。底径6.3cm、現存の器高は0.9cmである。郭1-3から出土した。46は美濃・瀬戸皿である。全面に釉が施されている。釉調は淡黄緑色で、素地は灰色である。口径10.2cm、現存の器高は2.5cmである。郭1-4から出土した。47は美濃・瀬戸皿である。底部が欠損している。全面に釉が施されている。釉調は黄緑色で、素地は灰色である。口径10.0cm、現存の器高は2.4cmである。郭1-4の黄褐色土層から出土した。48は美濃・瀬戸の天目茶碗である。底部は欠損している。口縁部は直立して端部が外反するものである。全面に釉が施されている。釉調は茶褐色で、素地は灰色である。口径13.6cm、現存の器高は3.5cmである。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。49は美濃・瀬戸の天目茶碗である。底部は欠損している。口縁部は直立して端部が外反するものである。全面に釉が施されている。釉調は茶褐色で、素地は灰色である。口径14.0cm、現存の器高は5.6cmである。郭1-4から出土した。48・49は口縁部の形状から16世紀末から17世紀初頭のものである。50は丹波壺である。「く」の字状の口縁部のみ遺存している。

51は瓦質すり鉢である。内外面とも黒色で、断面は灰色である。郭1-4から出土した。52は

瓦質すり鉢である。内外面とも黒色で、断面は灰色である。口縁部内面には1条の沈線が施されている。そのすぐ下に横方向に波状の沈線を施し、縦方向に4条以上の櫛状の沈線を施す。越前すり鉢の影響を受けた在地製品と考えられる。郭1-4から出土した。53は瓦質すり鉢である。底部のみ遺存している。見込みには7条の櫛状の沈線が、体部にも密に櫛状の沈線が施されている。外面は黒色で内面は灰色である。切岸1から出土した。

54は陶器すり鉢の口縁部である。片口のみ遺存している。色調は茶褐色である。内面には4条の櫛状沈線が施されている。55は土師器すり鉢である。体部のみ遺存している。内面には5条の櫛状沈線が施されている。色調は淡褐色である。郭1-1北西部横の切岸1の黄褐色砂質土層から出土した。56は丹波すり鉢である。底部のみ遺存している。色調は茶褐色である。内面にはヘラにより多数の沈線が施されている。郭1-4から出土した。57は信楽あるいは丹波すり鉢である。口縁部のみ遺存している。口径29.6cm、現存の器高は6.2cmである。色調は明褐色である。口縁部は尖り気味である。端部は強くナデており、さらに細くなっている。内面にはヘラにより多数の沈線が施されている。郭1-4から出土した。

58は唐津鉢である。口縁部は丸く肥厚して、やや外開きである。色調は茶褐色である。口径28.4cm、現存の器高は3.0cmである。郭1-1の西部中央から出土した。59は58と同様の口縁部であるが、やや内側に肥厚している。色調は緑灰色である。口径28.2cm、現存の器高は4.5cmである。郭1-1南の西南部から出土した。

60・61は碁石と思われる黒色の石である。やや歪な楕円形で、碁石とは断定できないが、当地では採取できない石であることから判断した。60は長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmである。

62・63は銭貨である。表面は錆びついており、不鮮明だが「寛永通寶」である。

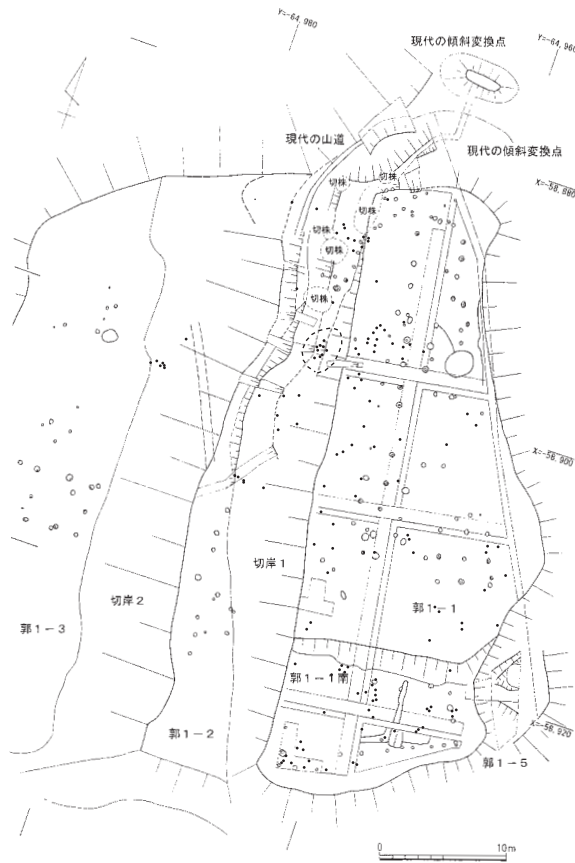
4) 小結

以上、紹介した遺物の内容をまとめてみる。ほとんどは16世紀の戦国時代と16世紀末から17世紀初めの織豊期から江戸時代初期のものである。それ以外は、古墳時代後期と江戸時代後期である。古墳時代後期の須恵器は40点出土した。江戸時代後期の陶磁器は8点出土した。その内、「寛永通寶」は2点である。これは、中山八幡神社に伴うものと推定する。文献では18世紀後半以降神社の存在が確認できるが、出土遺物もこれを裏付ける。16世紀末から17世紀初めの織豊期から江戸時代初期の唐津は12点である。ほとんどは唐津焼皿・鉢であるが、陶器甕なども少量ある。

6. 調査成果から見た中山城跡

1) 出土遺物の傾向

切岸1北部から郭1-2北部、切岸2北部に連続するか所で出土したのは、古墳時代後期の須恵器類である。それ以外は土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿などである。16世紀のものが主体である。土師器皿は京都系のものである。地元特有のものがないのは、この城の主が京都と密接につながっていたことを示している。一色氏は室町幕府の三管領四職のうち、四職家の1つであった。三管領は斯波、畠山、細川で、四職は赤松、一色、京極、山名である。京



第36図 第6次調査遺物出土地点図

郭1-3は最近まで中山八幡神社があった場所で、江戸時代後期以降の陶磁器や、「寛永通寶」が出土した(第5次調査第1-1トレンチ)。郭1-4では土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿、刀の柄頭が出土した。柄頭は下層から出土した。下層は16世紀中葉から後葉である。この他、上層から唐津鉢が出土した。16世紀末から17世紀初頭のものである。

2)一色氏段階と細川氏段階の丹後

文献史学の成果によって一色氏段階と細川氏段階の丹後について簡単にまとめた。今谷明氏は『金屋比丘尼城跡』報告の中で、丹後一色氏関係の文献史料を検討した^(注5)。その結果、14世紀から16世紀前葉までの一色氏史料は確認できるものの、16世紀後半の第1次史料はなく、不明とした。今谷氏の検討のポイントを列挙した「第4章 室町・戦国期の丹後守護と土豪」を以下に紹介する。永正6(1519)年2月に将軍が一色義清に年始祝儀返礼の内書を遣わしたのを最後に一色氏の史料・記録は杳として途絶し、大永から永禄までの50年が欠史の時代に入ることを指摘した。そして、『細川家記』によれば、天正7年7月に明智光秀・細川藤孝らが弓木城に一色義有を攻めて講和せしめたことが見えるが、同書は軍記類を編纂して作られた二次史料で、登場人物に明らかな誤謬が多いと断定した。そして、この一色義有なる人物も、永正初年にすでに登場するなど、如何にも作為の跡が見え、当時の確実な史料には出ない、いわば架空の人名と判断した。さらに、細川忠興が宮津城に一色義有を誘殺したとなす、かの著名な伝承は、一次史料による限り全く裏付けることができず、一色氏滅亡周辺の諸事実の検証は今後の課題として後日を期したい、と結んでいる。

都系の土師器皿が出土するのは、とりもなおさず、室町幕府の重臣であったためと考えられる。土師器皿は武士の対面の場で使用するものであり、京都とつながりがある杯(土師器皿・かわらけ)を使用して、主君と主従、あるいは同盟関係の強化をするための、重要な道具であったのである。

郭1-1南では土師器皿、瓦質鉢、陶器甕、中国製染付け・白磁皿、また龍泉窯青磁碗が出土した。これは、蓮弁文が細弁のタイプで、15世紀末から16世紀前半のものである。この他、唐津香炉が出土し、16世紀末から17世紀初頭のものである。さらに、甲冑の部品である^{こはぜ}靴が出土した。したがって、この場所は中山城第1期と第2期の2時期のもので出土した。

郭1-3は最近まで中山八幡神社があった場所で、江戸時代後期以降の陶磁器や、「寛永

前述のとおり、今谷明氏の厳密な史料の検討では、16世紀後半の一色氏については不明とされたが、別の史料を基にこの時期の一色氏を考察した成果がある。それは、京都府立丹後郷土資料館による「明智・細川と両丹地方」(1979年)と「細川幽斎と丹後」(1992年)という展覧会図録で展開されている。以下に紹介する。天正7年10月、明智光秀は、近江安土城におもむき、信長に丹波、丹後の平定を復命した。天正8年、信長は、丹波を光秀に、丹後を藤孝に宛がい、藤孝は8月2日、丹後に入国して、八幡山城にまず入城したといわれている。そしてすぐ、信長の許可を得て宮津城築城に取り掛かった。また、田辺城築城を行ったようであるが、翌年の暮れごろまでには完成し、続いて城下町の建設も行われたようである。信長は藤孝に対して、光秀と相談し、政道を油断なく努めよと指令した(八月十三日付黒印状)。天正9年、信長は光秀と藤孝とに丹後の検地をさせる。3月5日、藤孝は丹後国中をすべて調査し、知行人から指出を呈出させた。9月、一色の知行分と矢野藤一の知行分について光秀と藤孝とに処置を命じた。二万石知行の一色は、藤孝の女婿一色義有、四千五百石知行の矢野藤一は、義有の家老矢野藤一郎である(「細川家記」)。

天正10(1582)年6月2日、信長が本能寺で明智光秀に討たれるの報に接した藤孝と忠興父子は剃髪し信長に対する弔意を表し、光秀より与力の請を受けるが同心せず、藤孝は幽斎玄旨と号して隠居し家督を忠興に譲って田辺城に移った。この時、忠興が妻玉(光秀女)を味土野山中(京丹後市弥栄町)に蟄居させた。7月20日、幽斎は、本能寺で故信長追善連歌会を催した。この間、忠興と丹後弓木の一色義有との争いがあり、9月8日、忠興は義有を宮津城に誘殺し、弓木城を落城させた。これには、諸説がある。さて、本能寺の事変後、秀吉政権下で、忠興は小牧長久手の戦いや九州平定、関東平定に出陣活躍し、幽斎が実質的に領国経営にあたっていたようである。

展示図録の解説なので、断定的に書かれているが、諸説はあるものの弓木の一色義有の存在を肯定している。さて、ここで、年表を元に再整理してみよう。ここで使用する記事は安永年間(1772～8)に細川幽斎・忠興・忠利・光尚四代の事績を集成した、ふじろうかげきよ めんこうしゅうろく小野武次郎景湛の綿考輯録。一名細川家記であるが、これは後人の編纂した藩史としての限界は否めず、また、史料批判の十分でない文献が混じり、慎重に利用する必要がある(小川剛生「細川幽斎——人と時代」『細川幽斎——戦塵の中の学芸』2010)。そこで、文学研究者により詳細な年譜が編まれた。これは、公家日記や古文書などの一次史料に基づくものであり、その検討された年表(稲葉継陽・徳岡涼編「細川幽斎年譜」『細川幽斎——戦塵の中の学芸』と、丹後郷土資料館が作成した年表によって記述したい。

天正6(1578)年3月頃から信長の命で明智光秀とともに丹波・丹後攻略に入る(細川家記・細川家文書)。光秀とは天正2年に信長から長男忠興と光秀女(玉、後のガラシャ)との縁組を命じられており(細川家記)、子を通して深い関係であった。天正7(1579)年10月24日、光秀、丹波・丹後を平定したことを、安土に赴き信長に報告する(信長公記)。すなわち、第一次史料では、建部山城攻防戦や中山城で一色義道が主従と切腹することは確認できない。

ただし、一色氏との関係をたどることができる。天正9年5月に息女伊也を一色五郎(義有とも)

に嫁がしている(細川家記)。9月、一色の知行分と矢野藤一の知行分について光秀と藤孝とに処置を命じた。天正10年6月2日本能寺の変が勃発したが、豊臣秀吉との山崎の合戦によって光秀は敗死する。7月11日、秀吉は誓書を与えて忠興に丹後国一円に支配を安堵した(細川家記)。9月8日、幽斎父子は一色五郎主従を宮津城下に招き、そこで刺殺している(細川家記)。

このように、細川氏が丹後入国まで勢力を有していた一色氏は、天正9年10月までには勢力を減じられていたが、それでも、一色氏の力は無視できるほどではなく、一色五郎と姻戚関係をもつ。しかし、信長から秀吉へ政権が交代する混乱期に乗じて、反勢力を一掃したのである。地元勢力を一掃するのは戦国武将の常道であったのである。

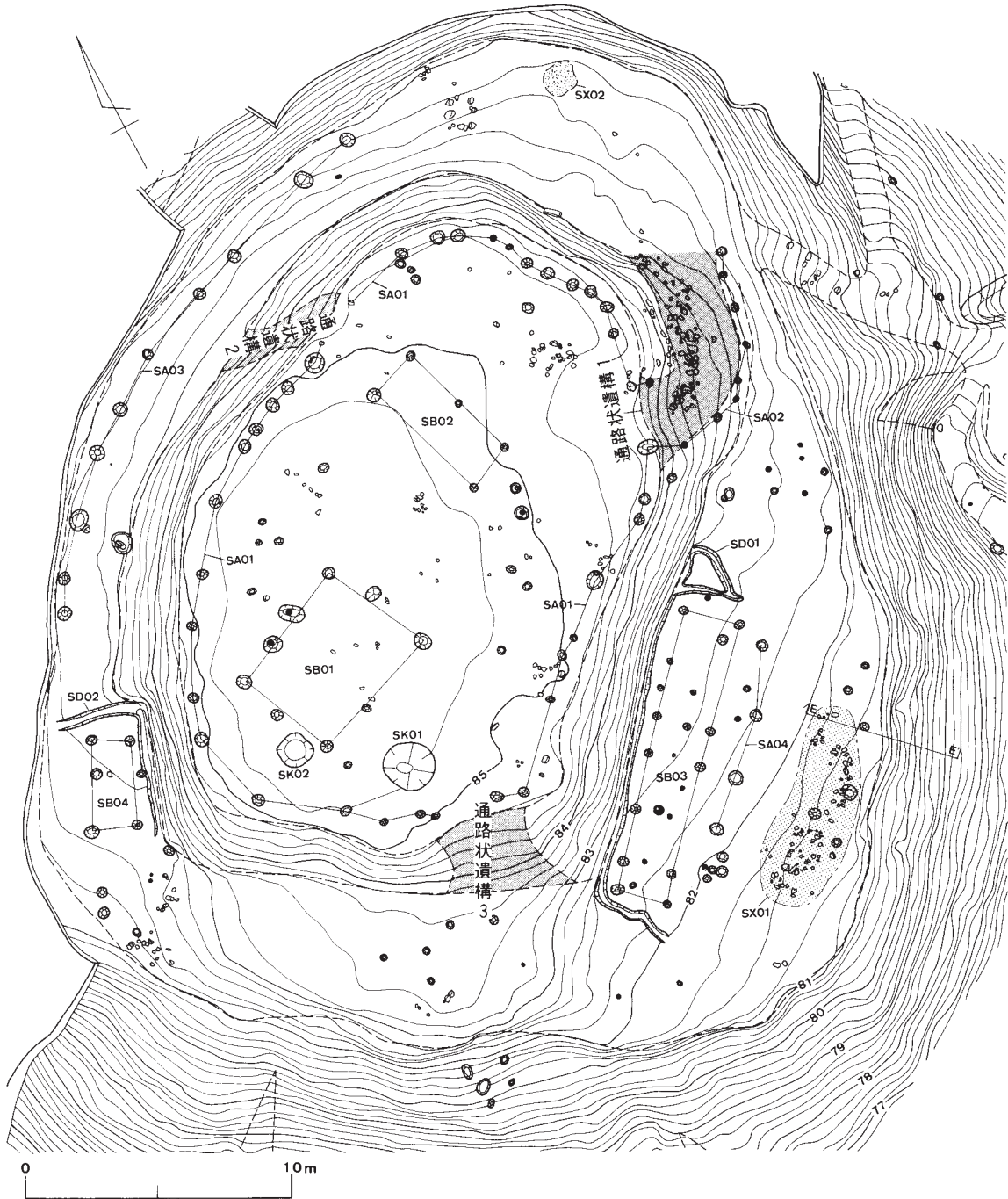
3)舞鶴市内の城館との比較

舞鶴市内の中世の城館でもっとも注目される調査は、舞鶴市大俣の大俣城跡^(注6)である。1995年に発掘調査がされた。由良川左岸にあり、中山城からは上流16kmの地点に位置する。標高85m、比高差65mを測る、由良川に張り出したような独立丘陵上に30m範囲に主郭を構築していた。発掘調査の結果、16世紀前半に築造され、後半に廃絶したと考えられている。中国製白磁皿135点をはじめ、瓦器鉢、土師器皿など多種の遺物があり、晴れの儀式や生活に密着したものなどが出土している。城主については、近世の地誌類では浮島左近が比定されている。左近が活躍したのは明応年間(1492～1501)といわれ、「郷土史岡田上」では、1506年に逸見駿河守らの若狭勢が加佐郡に侵入した際、ここで防ぐため一色氏方の浮島氏が築造したのではないかと推定されている。これより更に上流に福知山市大江町南有路の引地城跡がある。由良川右岸にあり、川が屈曲した地点にほど近い標高20m、比高差10mの丘陵上にある。1995年の発掘調査の結果、中国製青磁稜花皿や土師器皿、鉄刀などが出土し、15世紀後半から16世紀にかけて使用されたい。城の外周は横堀と帯状曲輪で囲まれており、『舞鶴の山城』では、鉄砲の普及や兵士の職業化に伴い、永禄年間(1558～1570)に流行したもので、加佐郡では引地城跡だけであると紹介している。綾部市梅迫町の「渡辺家文書」には、丹波国何鹿郡物部城主上原氏が、隣村の丹後国有路郷を將軍足利義昭から安堵されたことを、織田信長が追認したもので、永禄11(1568)年頃とされている。引地城跡の使用された時期に合い、関連が注目される。

4)戦国時代の文芸

さて、戦国時代の武将たちの中には、戦いの合間に文芸に楽しみを求めていた者もいた。京都や奈良などにその道の達人がいて、場合によっては彼等を招くこともあった。

永禄11年に織田信長が京都に入り、政権を担うこととなった。その時期に連歌師として有名であった里村紹巴は永禄10年に富士山に行き、歌日記を残している。そして、丹後の天橋立行きも念願しており、永禄12(1569)年5月に京都を出発し、若狭と丹後とを旅行している。その歌日記が『天橋立紀行』である。これは単なる歌日記ではなく当時の緊迫した情勢と、各地の城を訪れていることから、城館の存在を知ることができる一級資料である。また、後年になるが細川幽斎や明智光秀との歌会も頻繁に行っており、とくに明智光秀が本能寺の変を起こす数日前におこなった歌会では光秀の歌に謀叛を起こす予兆が見えたので、これを諷める歌を残しており、単なる



第37図 舞鶴市大俣城主郭・帯曲輪平面図(注6文献より引用)

文芸者ではない側面も持っていた。以下に箇条書きでその行程を紹介する。^(注7)

里村紹巴『天橋立紀行』永禄12(1569)年

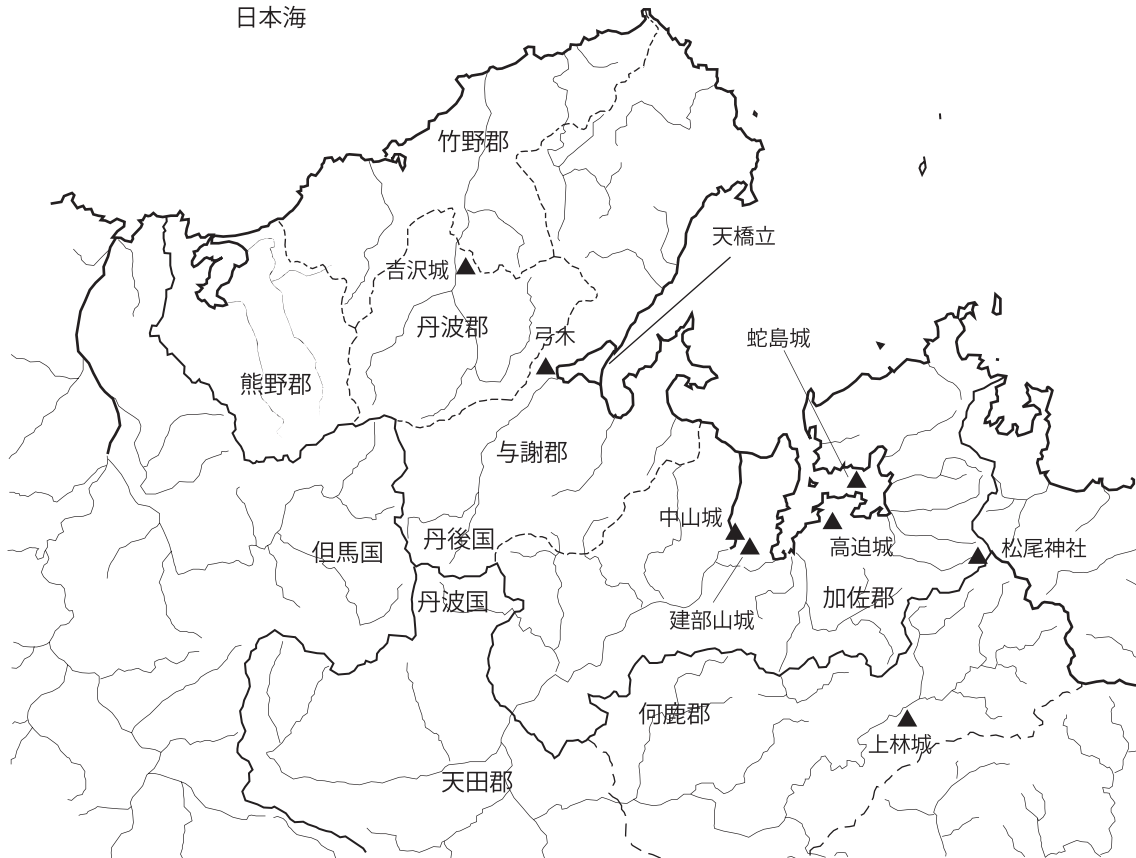
5月24日 京都を出発し若狭へ向かう。

6月5日 ^{おぼま}小浜に入り浄土寺に宿す。

7日 浄土寺隠居等と連歌をおこなう。

10日 源氏物語を講釈する。

11・13・14日 各所で連歌をおこなう。



第38図 1569年当時の丹後の城跡

- 15日 小浜より舟で和田へ向かう。
- 19日 松尾を経て志楽より舟で蛇島^{じゃしま}に上陸する。
- 23日 千歳浦よりくんだ(宮津市栗田)を経て文殊堂に入る。
- 24日 天橋立、府中等を見物し、忌木(岩滝町弓木)より、嶺山(現峰山)に到り連歌をおこなう。
- 26日頃 伊勢物語を講釈する。
- 28日 嶺山にて連歌をおこなう。
- 29日 三方三浦介が興行連歌をおこなう。
- 晦日 小西山東坊にて連歌をおこなう。
- 7月1日 堀江作州宅にて宴を催す。
- 2日 大悲寺正寿院で興行連歌を催す。
- 4日 帰洛を志成相寺に宿す。
- 7日 文殊堂前より舟にて蛇島へ。
- 8日 安久の城より岸谷峠を経て上林加州館に入り宿す。
- 11日 帰洛する。

以上のように各所で連歌を催しているが、当時の丹後地域は一色氏の勢力範囲であったので、一色氏の武将たちが文芸に興味があったことが知られる。しかし、これは、単に文芸にとどまっ

てはおらず、一色氏が各武将との連携を強めるためにおこなったと考えられる。おそらく、対面の場も設定されたと考えられ、京都系の土師器皿はその際に使用されたのであろう。この紀行の中で緊迫した情勢を窺える記事がある。実は永禄9(1565)年、毛利元就が尼子晴久を攻め、富田城を落城させたのであるが、東福寺の僧であった尼子勝久は還俗し、富田城奪還のため、永禄11年6月に島根半島^{ちくみ}千酌に上陸したのである。尼子勝久は丹後の水軍に協力を求めており、舞鶴市の東部にある蛇島渡航の際には、そこが敵味方の境である危険な場所なので、危惧したことが述べられている。詳細を述べると、「松尾山を拝みて、志楽の地中というところから、出航しようとしたが、前日和田よりの案内が不届きで、迎えの舟が来ない。敵味方の境目なのに、迎えが来ないと待ちわびていたところ、あやしい釣り船を得て、同行していた心前などを残して、渡航し蛇島に上陸した」のである。

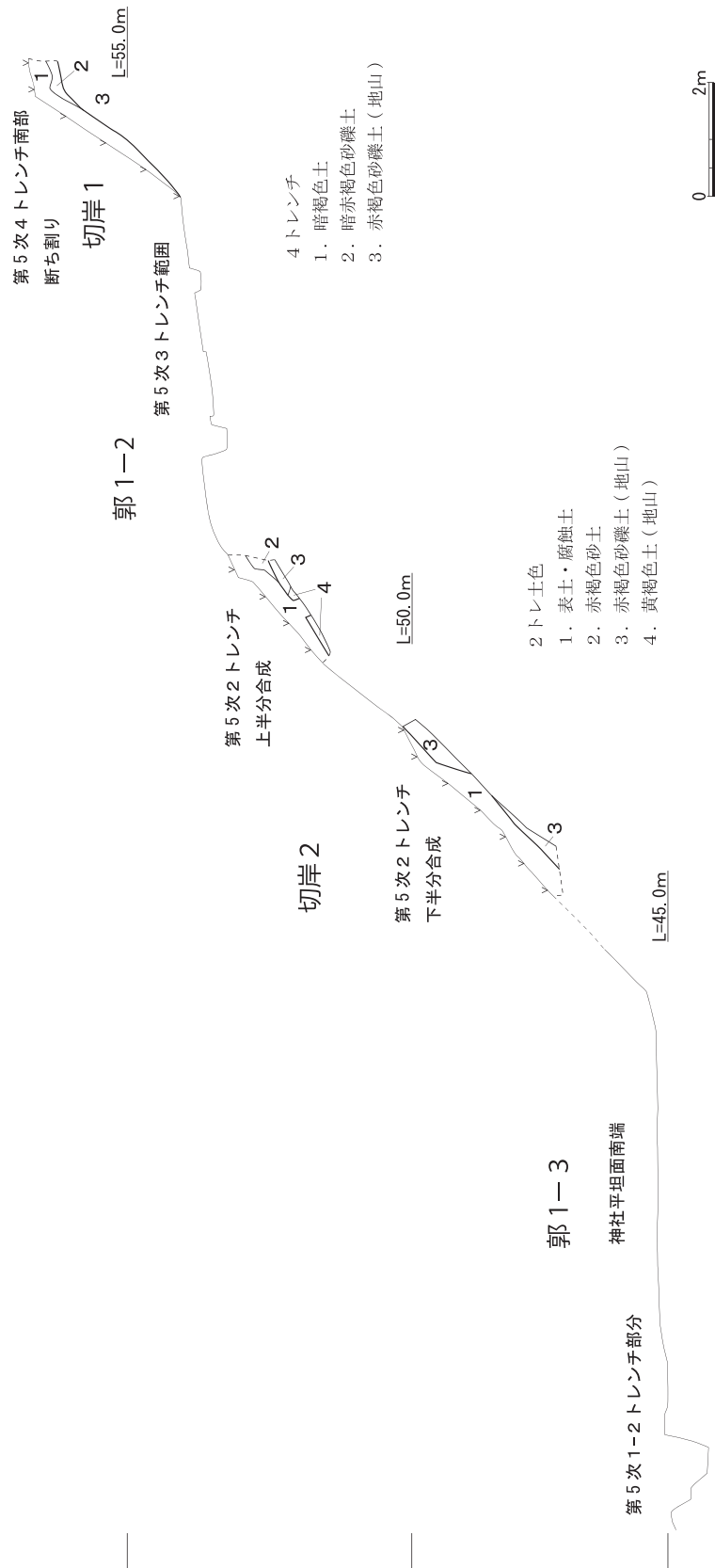
これは予定外のことなのかもしれないが、一色氏と対立する若狭の勢力にも会っていることから、この情報は京都へ戻った際、政権の中枢に報告されたのかもしれない。1例をあげると(天正元(1573)年6月5日に勝竜寺城(現京都府長岡京市)において藤孝、紹巴が連歌興行を催しており、このような会を通して情報が伝えられたのかもしれない。

なお、里村紹巴は細川藤孝(幽斎)と天橋立で連歌会を催している。天正9(1581)年4月12日に光秀、紹巴、宗及らと丹後で遊び天橋立において連歌興行を行っているのである(宗及茶湯日記)。また、忠興が居城した宮津と、幽斎が居城した田辺において盛んに能の会を催している。その具体的な内容は天正11(1583)年から慶長4(1599)年までに計50回、433番に及ぶ能番組を集成した『丹後細川能番組』(永青文庫蔵)によって知られる(大谷節子「細川幽斎と能」『細川幽斎一戦塵の中の学芸』)。

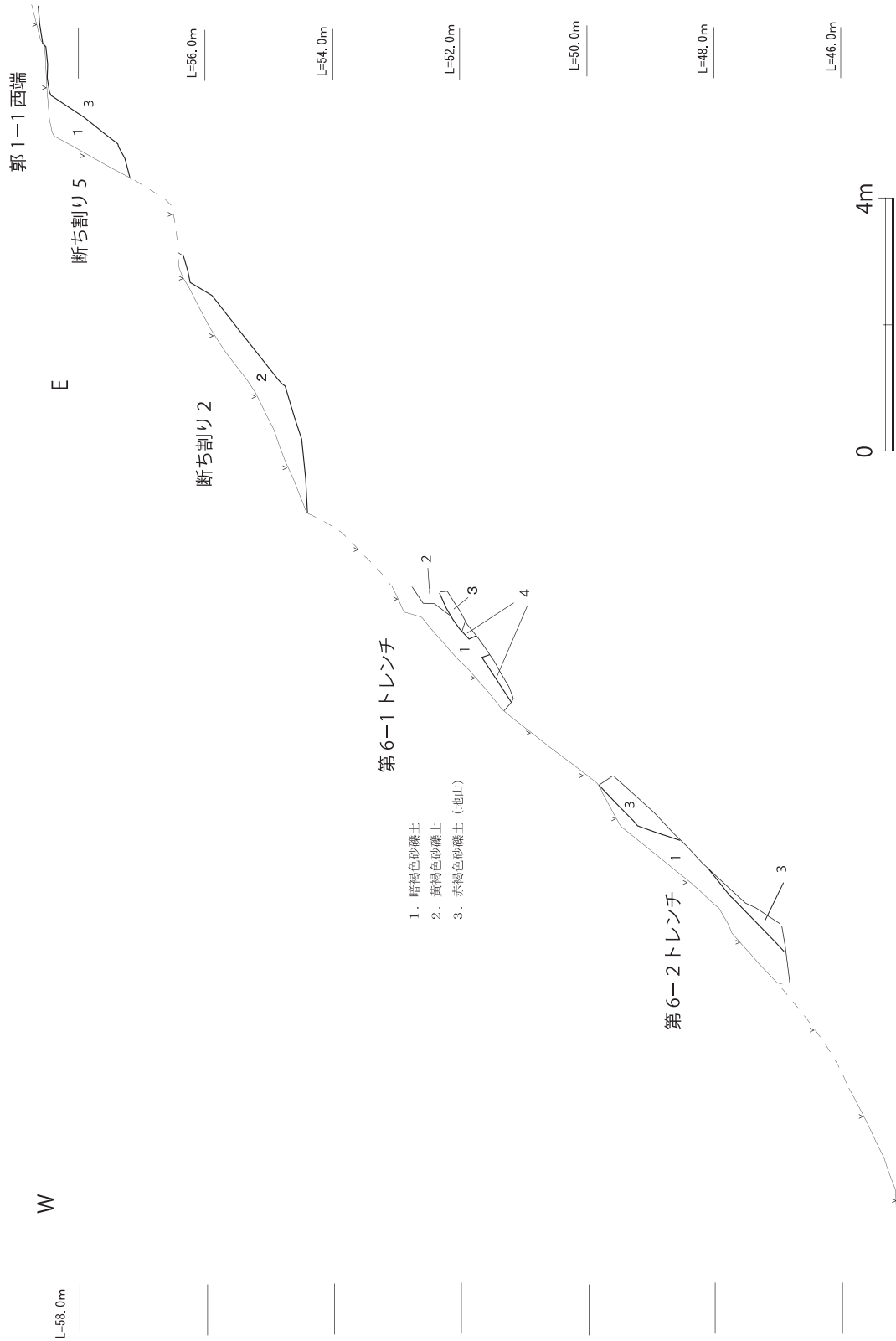
5)中山城の構造

中山城は連郭式の山城である。村田修三氏の評価によれば一時期に造られたものではなく、順次築造されたものとされている。堀と郭とで守る構造に統一性がないことに注目しているのだろう。また、由良川河口に近いところに設置された城であるので、日本海方面から内陸部に攻め込まれないような判断があったのではないとも言われた。さらに、千田嘉博氏は点々と築造された郭と郭との間に、必要以上の堀切を設けており、この城の守備は一人ではなく、あるいは当番制のように幾人かの武将によって守られていたのではないか、と言われた。

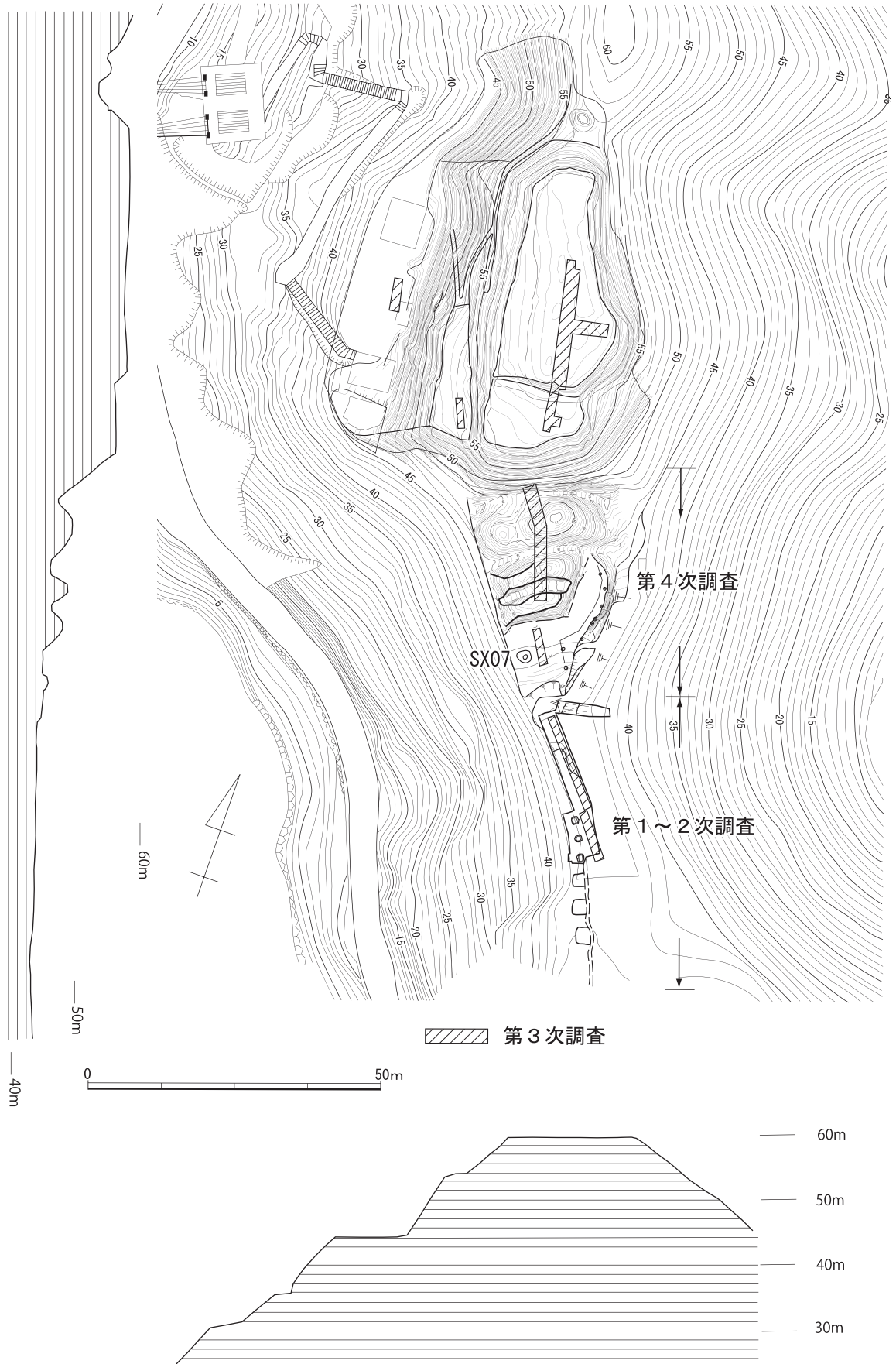
さて、中山城跡の断面図を作成した。これによれば、東西方向は東側は急斜面で平坦面を造っていないのに対して、西側は郭1-1地点から3か所に段々の平坦面を造成しており、居住を視野に置いた構造と考えられる。しかし、発掘調査の成果によれば、頂上ではなく一段低い郭1-3が風を防げる恰好の場所にもかかわらず、建物が1棟のみであり、生活空間とは想定できない。台所施設が見られないからである。南北の断面に注目してみよう。郭1-1を中心として南北に土塁を築いている。北側は切岸1から堀切を経て、小さな土塁がある。これは、ピンポールで地面を挿したところ、硬い地面であったので、地山を掘り残して築いたものである。それに対して南側は急斜面の切岸1の下に2重の土塁と堀切を設けている。そして、1か所の郭(平坦面)を設



第39図 郭1-1南東西断面図(南部)



第40図 郭1-1～郭1-3断面図(北部)



第41図 第4～6次調査地南北断面図

けて、そこに、墓SX07を設置している。さらに南には小さな切岸を設け、それより南側は狭い平坦地が続き、そこは江戸時代の墓地となっていた。

6) 丹後の水軍

丹後は日本海に面しており、地理的理由から水軍がいたことがわかっている。ここでは、いくつかの文献史料から、丹後の水軍の実態を明らかにしたい。

水軍に関する史料で古い部類に入るものは、大永7(1527)年に「丹後の海賊が、西小浜(福井県小浜市)に侵入した」という記事である。「羽賀寺年中行事」(中島利雄「第3章 室町時代の郷土」『舞鶴市史』)の文を意識すれば、「この年(大永7年)、丹後の海賊等が蜂起して若州(若狭)の浦々に押し寄せ、資財を奪ったり、放火したりしたのである。そこで、当国(若狭)の諸勢力が加佐郡に出陣したのであるが、この時、越前よりの援軍が、三方郡(若狭)にあつて乱暴を働いたという」のである。また、「天文九(1540)年、七月十四日、越前の船およそ五百艘が丹後(国)加佐郡へ来襲し、十七日に漕いで帰着したのである。これは、丹州(丹後)の海賊がたびたび越前へ来て、浦々を残(攻カ)したので、報復として丹州の浦を攻撃すべく来たというのである。しかし、武威なく帰還したので、世上を欺く行為であった」という。

このように、たびたび丹後の海賊(水軍)は、若狭や越前を来襲していたことが知られる。この2つの記事の間に水間と由良の合戦がある。水間は中山の隣村である。「白井家文書」によれば、永正17(1520)年、白井石見守(清胤)が紹壯(武田元信)に水間村を治めることを命じられている。その18年後、天文7(1538)年には「去月(7月カ)十五日、丹州由良浜において合戦(があり)、被官人等忠節神妙」であったので、白井民部丞が(武田)宗勝から感謝されている。また、「去月(7月カ)十五日、丹州加佐郡水間村合戦(にて)、被官人(は)突鑓(槍の1種)、兵具をいろいろと分捕」ったことを、白井民部丞が武田宗勝から褒められている。ここに記された宗勝とは武田元光のことである。実はこの水間の合戦は単に武田氏と一色氏との戦いであったとは言い切れないのである。武田氏の重臣である栗屋元隆が元光の家督相続に反対して乱を起こしたのである。栗屋元隆は加佐郡田辺に陣を張っていたが、「親俊日記」によれば、名田庄に入り、7月28日条には「名田庄没落」とあり、丹波へ走ったという。すなわち、水間の合戦とは、武田宗勝方と反対勢力との戦いであり、その反対勢力に一色氏が加担していたのかもしれない。

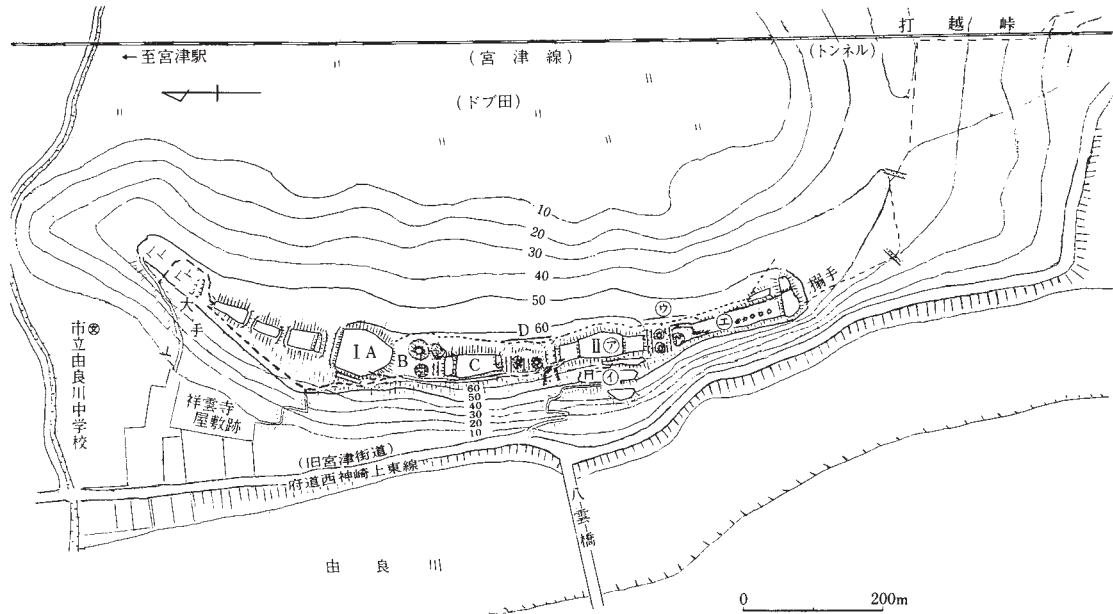
さて、水軍の記事は尼子氏による富田城奪還時に認められる。「立原・福屋両家伝」(「阿波国古文書」)によれば「永祿12(1569)年の春、立原雲州が牢人へ内通し、(尼子)勝久を丹後へ招聘し、丹後・但馬の浦人所々の牢人相催し、雲州へ渡海す」とあり、丹後・但馬の水軍が出雲へ出撃したことが知られる。「日御碕神社文書」によれば、この時の軍勢は「両但国賊船数百艘」とある。両但とは但馬、丹後の意味であろう。これ以降尼子方はたびたび出雲・伯耆の海岸を攻撃しており、毛利方は弱って將軍足利義昭から海賊停止令を出してもらうよう織田信長にとりなしを頼んでいる(元龜2(1571)年4月11日条「小早川家文書」)。

なお、「史料綜覧」の天正3(1575)年9月28日条に「吉川元春ノ兵、尼子勝久の属城丹後由良ヲ攻メ、是日、之ヲ陥ル」と出ているが、中島利雄氏は伯耆由良の誤りではないかとの見解を述

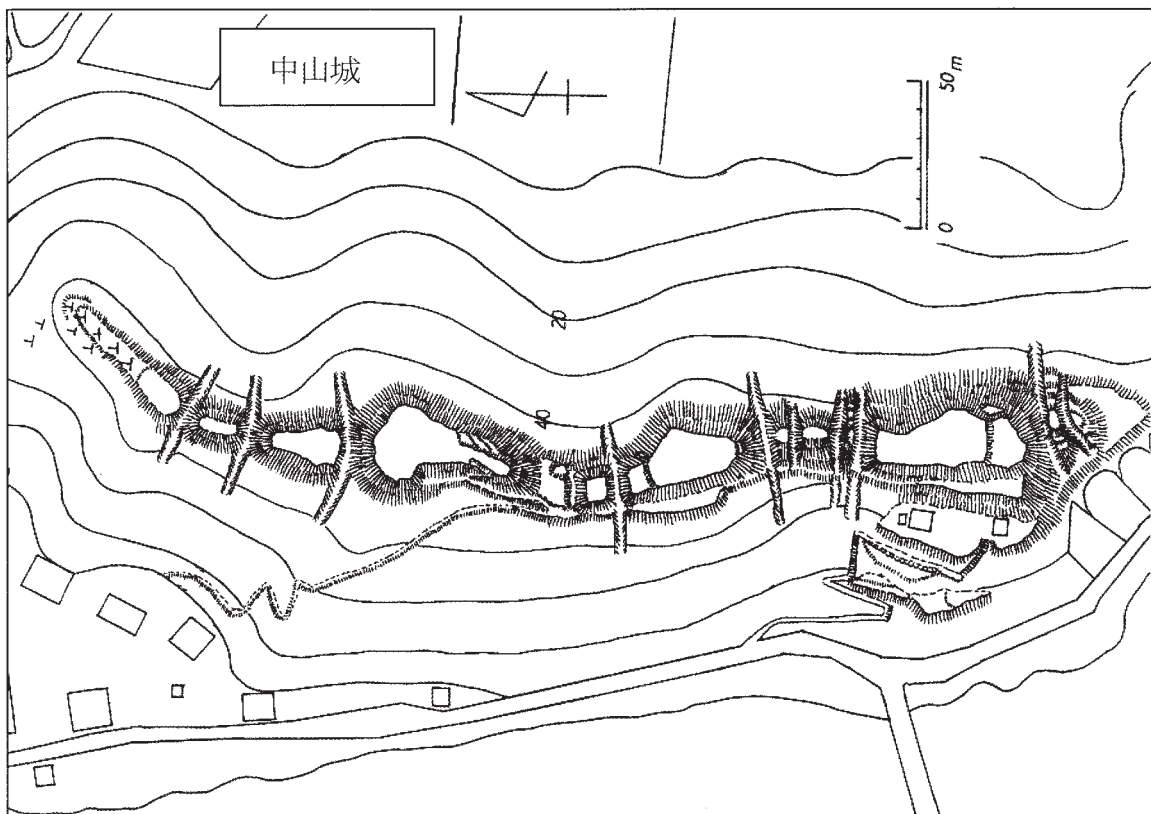
べている。今後、検討すべき記事である。

7) 中山城跡の研究小史

中山城跡の研究の嚆矢は、昭和55年に刊行された『日本城郭体系』である。岡野允氏の文責で書かれた内容は、当時の城郭研究の考えを示している。この本に紹介された丹後地域の城郭は14か所に過ぎず、その1つに中山城跡が選ばれていることは、いかにこの城が重要であったかがわ



第42図 中山城跡縄張り図(1) (岡野允作図『図説 中世城郭事典』より引用)



第43図 中山城跡縄張り図(2) (『舞鶴の山城』より引用)

かる。近年発刊された『舞鶴の山城』では300か所が報告されている。

1. 規模は、300×30mとしている。
2. 位置の特徴は、建部山城の北西約1kmのところにある、由良川に沿って細長く南北に横たわる丘陵に中山城はあった、としている。
3. 城主については、沼田幸兵衛とする説が知られているが、これは『一色軍記』の影響とみられ、幸兵衛の謀叛について他に傍証がなく、『一色軍記』そのものが潤色や虚構が多いのと同様に、信憑性に欠けると思われる。その点について、独自の史料や地元の口碑にもとづく文書(『嶽文書』『竹原文書』『加佐郡寺社町在旧記』『河内守様高付覚書』など)は、いずれも一色左京大夫を城主とする説を採っている。また、地勢上からみても、建部山城と中山城は本支城の関係か居城と諸城の関係にあったとみるのが自然で、当城には建部山城一色氏の陣代が在城したものと思われる。
4. 石高については、『嶽文書』には「一色左京大夫義直、所領三千五百石」と注記されているが、これは、加佐郡の直轄領を近世初頭の村高で表示したものであるとしている。
5. 一色義道について、天正3(1575)年、織田信長の越前攻めには、一色義道も矢野・大嶋・桜井氏などの加佐衆を率いて多数の水軍で参戦しており、義道は喜多の入り江や神崎湊に舟師を擁していたものと推考される。
6. 細川氏段階の城主について、細川幽齋(藤孝)の義兄で若狭出身の沼田勘解由左衛門清延が当城主であったが、小兵衛の代に主君忠興と共に出陣中に有名な田辺籠城があり、留守居の者たちは城を焼き払って幽齋が立て籠もる田辺城に入ったといわれる。その後、ほどなく慶長5(1600)年に関ヶ原の合戦があり、その功で細川氏は九州小倉三十九万石の領主となって転封され、沼田氏も行をともにしたので、当城は廃城になった、としている。
7. 城の構造について、当城は典型的な連郭式で、東側の下方はドブ田で、西側の崖下には由良川が流れて惣堀の役割を果たしていた。大手は北側の現在の市立由良川中学校の東隣にあり、搦め手は南側の打越の方で、いずれも城山の麓を走る由良経由の宮津街道に通じていた。

つぎに村田修三編の『図説 中世城郭事典』(昭和62年刊行)では、

1. 城主は地元文書である『嶽文書』ほかを引いて、一色左京大夫とし、一色氏の居城である建部山が南東1kmにあることから、直轄城と考えている。『一色軍記』を引き、天正7(1570)年、細川藤孝に攻められ、建部落ちした一色義道は、いったんは中山城に逃れたものの、城主沼田幸兵衛の謀叛にあい、城外で自刃したというのが、『細川家記』など異説がある。その後、細川忠興国主のとき、家臣沼田清延を城主に据えたが、慶長5(1600)年秋、九州に移封となり、廃城となった、と説明している。
2. 城の構造については、縄張りは南北2つのグループに分かれるとした。北側の仮称Ⅰ-Aは主郭にあたる。今回の調査地は仮称Ⅱグループの地点に当たるので、この部分の記述を紹介する。ⅡグループA地点(今回調査の郭1-1に相当)は、両側の袖小郭と西側下、Ⅱグル

ーパイ地点(郭1-3に相当)城山八幡神社の腰曲輪に擁立された格好で、南方の主座にあたる。八幡参道は脇^{からめて}搦手となり、旧宮津街道を扼し、また、城の用水にも利便したかと推定している。Ⅱグループウ地点(第4次調査地)はⅡグループア地点より7m崖下であり、3箇の円墳形隆起が鼎立し、前後に空堀を施して搦手の虎口を形成している。これに続くⅡグループエ地点(第1・2・4次調査地)曲輪の先端部は1m余り盛り上がり、幅広い土塁形となっている。それよりさきは急坂な搦手道で東方に屈曲する大きな鞍部を経て、打越峠から建部山城の搦手につながっていると評価している。

城の構造については、縄張りは南北2つのグループに分かれるとした。北側の仮称Ⅰ-Aは主郭にあたり、南北両側よりは約7mは高い。北方大手面は三条に亘って、堀切られて長方形郭が連立するが、眼下の大手坂に対し横矢の櫓門城戸も想定される。Bは三方土壁形の場所柄武者溜りとも見なされる。C南側の掻き上げ土塁とそれに隣接するところのDには、高さ4mで、天場3.4mの円墳形突起が2個縦列して変形土塁をなしている。前後を三条の堀切が走る。ここは、丘陵の腰部にあたる地峡でくびれ、東側も豎堀様で、一応南北の切所となる。万一両者どちらが危急に瀕しても応急な措置が取れる構えと見られる。Ⅱグループのア(今回の呼称では郭1-1)両側(南北の意味か)の袖小郭と西側下のイ(同郭1-3)城山八幡神社の腰曲輪に擁立された格好で、南方の主座にあたる。八幡参道は脇搦手となり、旧宮津街道を扼し、また城の用水にも利便したかと考えられる。

つぎにアより約7m崖下のウ(第4次調査地)は、三個の円墳形隆起が鼎立し、前後に空堀を施して搦手の虎口を形成している。これに続くエ(第1・2次調査地)曲輪の先端部は約1m余り盛り上がり幅広い土塁形となっている。それよりさきは急坂な搦手道で東方に屈曲する大きな鞍部を経て打越峠から建部城の搦手に繋がった。

この文によって、調査前の中山城の状況がわかる。

さらに『八雲のれきし』では、中山城は標高60mの山頂を中心に、約600mにわたる尾根筋に10か所あまりの郭が、ほぼ一直線状に並ぶ連郭式の山城である。中心をなす一の丸、二の丸、三の丸をはじめ、諸郭の東側は急坂の上、周囲は腰を没する深い田で守られていた。

反対側の西側は、山頂から由良川までの急勾配の自然の要害で、北側の尾根はゆるやかであるが、深い空堀が2か所あり、敵の攻撃に備えている。また、水間川を北側の山すそに引き巡らして堀としていた。

城主については、①一色左京太夫説と②沼田幸兵衛説③貫幸兵衛説とがあり、根拠となる文書として、①は『嶽文書』『竹原文書』『丹後旧語集』『加佐郡寺社町在旧記』などを引いている。②は『一色軍記』『丹後旧事記』『田辺旧記』『丹哥府誌』などを引いている。③は『細川家記』を引いている。結論としては、地元文書をひいた①一色左京太夫説を採っている。

最後に『舞鶴の山城』では、特に立地に注目して紹介している。城館は打越峠から北に延びる尾根上にあるが、この打越峠の下を北近畿タンゴ鉄道宮津線が通っており、またかつての宮津街道も中山を通っており、今も昔も西舞鶴一由良・神崎間の交通の要所となっている。周囲は西に

は由良川が流れ、北・東は湿地帯であったと考えられる。由良川の河川交通を管理する城館として注目される。

中山城は、南北に延びた尾根を十本の堀切で遮断し、14か所以上もの曲輪数を有する大規模な遺構である。しかし、曲輪の構成に連続性がなく、縄張りにまとまりがないのが特徴であるとしている。(今回の調査地である)南の曲輪からは由良川の西斜面にそって四段の曲輪があることから、城主の河川交通への関与を示唆し、また、中央部の曲輪は北麓の集落へ道がつながっていることから、集落との関係も考えられると指摘した。

城主についてさまざまな説を紹介した。まず、『一色軍記』や一部の近世地誌類にある沼田幸兵衛である。しかし、この説には傍証がなく、『一色軍記』も信頼性に欠けるとした。また、細川家の記録である『綿考輯録』は、中山城主を一色氏方の貫幸兵衛とし、「山中(中山)」で激戦があり一色義道が戦死したことは記しているが、裏切り云々には触れていない。一方、『嶽文書』や他の地誌類は城主を一色左京太夫としている、と淡々と記載している。これとは別に16世紀前半の状況については『白井家文書』には水間村で戦いがあったことを記載している。中山村と称したのは天正年間以後であるので、水間の戦いでも中山城が使われたことは想像に難くない。『綿考輯録』によると、細川藤孝は一色氏滅亡後の中山城に家臣の沼田延元を配置していたが、田辺籠城後に際して自焼させたという。平成20年の京都府による発掘でも、焼土が確認されたことを指摘している。

7. まとめ

発掘調査の結果、第1期は16世紀第2四半期に相当することが判明した。郭1-1に2棟(建物1・4)の建物を建てていたが、北部には古墳の高まりがあったと考えられる。郭1-1南には柵を築いていた。この平坦面の南西部は自然地形のままで、張り出してはいなかった。郭1-3も同じで、自然地形のままであった。郭1-4は、掘立柱建物6があった。おそらく、見張り台として機能していたと考えられる。

第2期は16世紀第4四半期に城が一度造り替えられ、郭を広げている。郭1-1にあらたに2棟(建物2・3)の建物を建てていたが、北部にあった古墳の高まりは削られ、平坦にされた。この西側にある郭1-2部分は第1期には切岸1の人工的な斜面であったが、盛り土され平坦面が造成された。ここに、郭1-1から張り出させた棧敷あるいは舞台状の施設が建設された。

郭1-4には建物はなく、ただ平坦面のみであった。

中山城に関する同時代の文献はない。周辺に関する史料は、永正17(1520)年に白井清胤が若狭の武田元信から、水間村の支配を命じられているが、水間村は中山村の隣村である。天文7(1538)年に水間で戦いがあり、白井清胤が武田元信から、軍功を誉められている。このように16世紀前半には若狭武田氏の支配下であった可能性があるが、出土した土師器皿は16世紀前半でも終わりの時期であり、また、もっとも地域色が出る土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない。ただし、今回の調査地での結果であり、水間村に近い主郭部分がまず造られた可能性は高い。

江戸時代に書かれた『一色軍記』をはじめ、いくつかの文書を総合的に検討すると、一色氏が城主であった1579年、織田信長の指示で丹後に攻め入った細川藤孝・忠興、および明智光秀の連合軍によって、まず、建部山城が破られ、一色義道は中山城に逃げ込んだものの、中山城は落城したようである。その後は、細川氏の部下であった沼田勘解由左衛門清延が城主であったようである。『八雲のれきし』に記載された沼田氏の系図によれば、沼田氏は若狭の出身で、小浜から来たようである。清延の妹である麿香が藤孝の妻であったとある。別の文献によれば永禄6(1563)年嫡男忠興が京都一条戻り橋の館で誕生したが、母は沼田光兼女麿香(『細川家記』)とあるので、細川段階には、腹心の部下を中山城に配置したことがわかる。1600年の関ヶ原の戦い直前に、田辺城籠城が始まるが、中山城にいた者たちが、城を焼いて田辺城に合流したという。郭1-3の建物5の掘形には焼け土が入っていたが、この焼け土が1579年の戦いの時か、1600年の自焼の時なのかは出土遺物がなく判断がつかない。1602年に主君の細川氏が九州の小倉に移ったときに、沼田小兵衛は一緒に行ったようで、城の出土遺物が1600年初頭の唐津焼を最後に出土しないことと合致する。

沼田氏が入城した直後である天正9(1581)年には、信長の命により鳥取を攻めていた豊臣秀吉に援軍を出した。日本海に近いという戦略上の重要拠点であるこの地周辺には、神崎はじめに水軍が控えていた。細川氏の腹心の部下である沼田氏が入り、その時、城は改造された。由良川方面に突き出した舞台、あるいは棧敷のような施設の存在は、この周辺で天目茶碗や土師器皿が出土したことと考え合わせれば、宴が催された可能性がある。細川氏は能や、連歌会をしばしば催しており、あるいは、風光明媚なこの地で宴が催されたのかもしれない。山椒大夫伝説の舞台であったことや、建部山攻防戦の舞台であった山を見上げるこの地は、連歌の恰好の題材を提供したのかもしれない。

注1 辻本和美・竹原一彦「中山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

竹原一彦「中山城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

竹井治雄「中山城跡第3次・中山近世墓発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

戸原和人「中山城跡第4次・中山近世墓発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第128冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注2 『日本城郭体系』11 京都・滋賀・福井 新人物往来社 1980

注3 『八雲のれきし』八雲公民館 1996

注4 『舞鶴の山城』舞鶴山城研究会 2009

注5 今谷明「室町・戦国期の丹後守護と土豪」(『金屋比丘尼城遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会)

1980

注6 大岩洋一ほか「大俣城跡」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注7 井上金次郎「第4章 中世の郷土文化」(『舞鶴市史』通史編(上) 舞鶴市役所) 1993

参考文献

「明智・細川と両丹地方」京都府立丹後郷土資料館 常設展資料5 1979年

「細川幽斎と丹後」京都府立丹後郷土資料館 特別陳列図録 1992年

『細川幽斎一戦塵の中の学芸』笠間書院 2010

村田修三編『図説 中世城郭事典』新人物往来社 1987

『舞鶴市史』『宮津市史』全般的なことを参照した。

付表 中山城跡関係年表

西暦	和暦	月日	出来事	出典
1520	永正 17		白井清胤が主君の武田元信から水間村の支配を命じられている	白井家文書
1527	大永 7		丹後の海賊、西津小浜(福井県小浜市)に侵入。	羽賀寺年中行事
1538	天文 7		水間の戦い、白井清胤が武田宗勝から軍功を賞される。	白井家文書
1540	天文 9	7.14	京都府地誌によれば中山村と称したのは天正年間以後越前船およそ500艘加佐郡へ来る。これは、たびたび、丹後の海賊が越前へ来て荒らすための報復。	羽賀寺年中行事
1569	永禄 12	春	立原雲州が尼子勝久を丹後に招聘した。	立原・福屋両家伝
		6月	里村紹巴、若狭から丹後に入り蛇島(じゃしま)に渡る。2日間滞在。大志万但馬守らと連歌会を催す。その後、天橋立に向かう。再び、蛇島に戻り、一色式部少輔に会った後、帰洛。	天橋立紀行
		6.23	尼子氏出雲に入国。	立原・福屋両家伝
1575	天正 3	5.20	信長の武将羽柴秀吉、越前立石浦の篠河兵庫に舟役を徴するに依り□(丹後)及び若狭の舟手に命じ、同浦に舟を繋留することを禁止。	立石浦共有文書
		6.17	信長、明智光秀を遣して、□(丹波)、□(丹後)を平定しようとし、川勝継氏、小島左馬助に対して、忠節を誓わせる。	記録御用所本古文書
		9.28	吉川元春の兵、尼子勝久の属城□(丹後由良)を攻め、是日、之を陥落させる。	細川家文書・吉川家文書
		10月	信長、但馬山名氏の要請により、惟任光秀を派遣して、荻野直正を同国竹田に攻め込ませる。	細川家文書、兼見卿記
1579	天正 7	5.5	信長、羽柴秀吉の要請により、諸将を、□(丹波)に派遣し、惟任光秀を援けて、□(同国水上城)波多野宗長、宗貞父子を攻撃させる。	小島文書、丹波志、久下文書ほか
		7月	惟任光秀、長岡藤孝と共に波多野氏の余党を□(丹波峰山城)に攻めて、これを陥落させる。又、一色義有を□(丹後弓木城)に攻め、これと講和する。	細川家記、松井文書、有吉家代々覚書
		10.4	惟任光秀、信長を安土城に謁し、□(丹波)、□(丹後)の平定を復命する。	原本信長記

西暦	和暦	月日	出来事	出典
1580	天正8	4.24	信長、羽柴秀吉の小早川隆景を備中高山に包囲しようとするのを聞き、長岡藤孝、一色満信に応援を内命する。	細川家文書・吉川家文書
1581	天正9	3.28	羽柴秀吉、近江長浜商人の商売船に折紙を与え、若狭、□（丹後）の海賊の違乱に備えさせる。	南部文書
		4.12	長岡藤孝父子、惟任光秀、紹巴等を□（丹後宮津）に饗応する。	津田宗及茶湯日記
		9.4	信長、□（丹後）一色満信、矢野藤一郎の知行分を割いて、長岡藤孝、惟任光秀に分け与える。	細川家文書、兼見卿記
1582	天正10	6.2	本能寺の変。	
		6.9	惟任光秀は長岡藤孝、同忠興父子を誘うが、藤孝等は応じず、羽柴秀吉に応じる。	細川家文書、細川家記、細川忠興軍功記、太閤記
		7.2	□（丹後田辺）の長岡藤孝、本能寺に故信長追善連歌会を催す。	秀吉事記、太閤記、細川家記ほか
		7.11	秀吉が忠興に丹後一円支配を安堵する。	細川家文書
		9.8	長岡忠興、□（丹後弓木）の一色義有を、同国□（宮津城）に誘殺す、尋で、□（弓木城）を取る。	細川家記、細川忠興軍功記、松井家譜、細川忠興記
1584	天正12	8.25	丹後田辺において連歌。	連歌総目録
1592	文禄元	4月	一之斎（沼田弥七郎統兼）より、父宗禅（上野介光兼、幽斎の岳父）三十三回忌の懐旧連歌の発句を乞われる。	詠草「永青文庫」
1597	慶長2	1.23	田辺城で能楽。細川幽斎は女郎花の太鼓をたたく。	古来番付「永青文庫」
1600	慶長5	7.17	石田三成により忠興夫人玉（ガラシャ）自殺させられる。	時慶卿記
		7.18	丹後田辺城に籠城を開始。	細川家記・時慶卿記
		9.15	関ヶ原の戦い。	
		9.18	田辺城を下城し、翌日、丹波亀山城に入る。	細川家記
		12.26	忠興戦功を認められ、豊前・豊後国39万石を拝領し、入国。豊前小倉城を本拠と定める。	細川家記
1601	慶長6	閏11.29	幽斎がはじめて豊前に下向。	舜旧記

2.平成21・22年度丹波綾部道路関係遺跡

発掘調査報告

(井脇城跡)

1. はじめに

この報告は国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が計画・建設する丹波綾部道路埋蔵文化財調査に伴う井脇城跡の発掘調査報告である。

井脇城跡は、京都府のほぼ中央部、船井郡京丹波町にある中世山城で、標高およそ300mを測る最高所に井脇城の中心施設がある。そこには複数の曲輪や尾根部を断ち切る堀切などが設けられている。地元では瀧谷の城などともいわれているが、これまで個人研究で縄張り図の作成などはなされてきたが、発掘調査は初めてである。

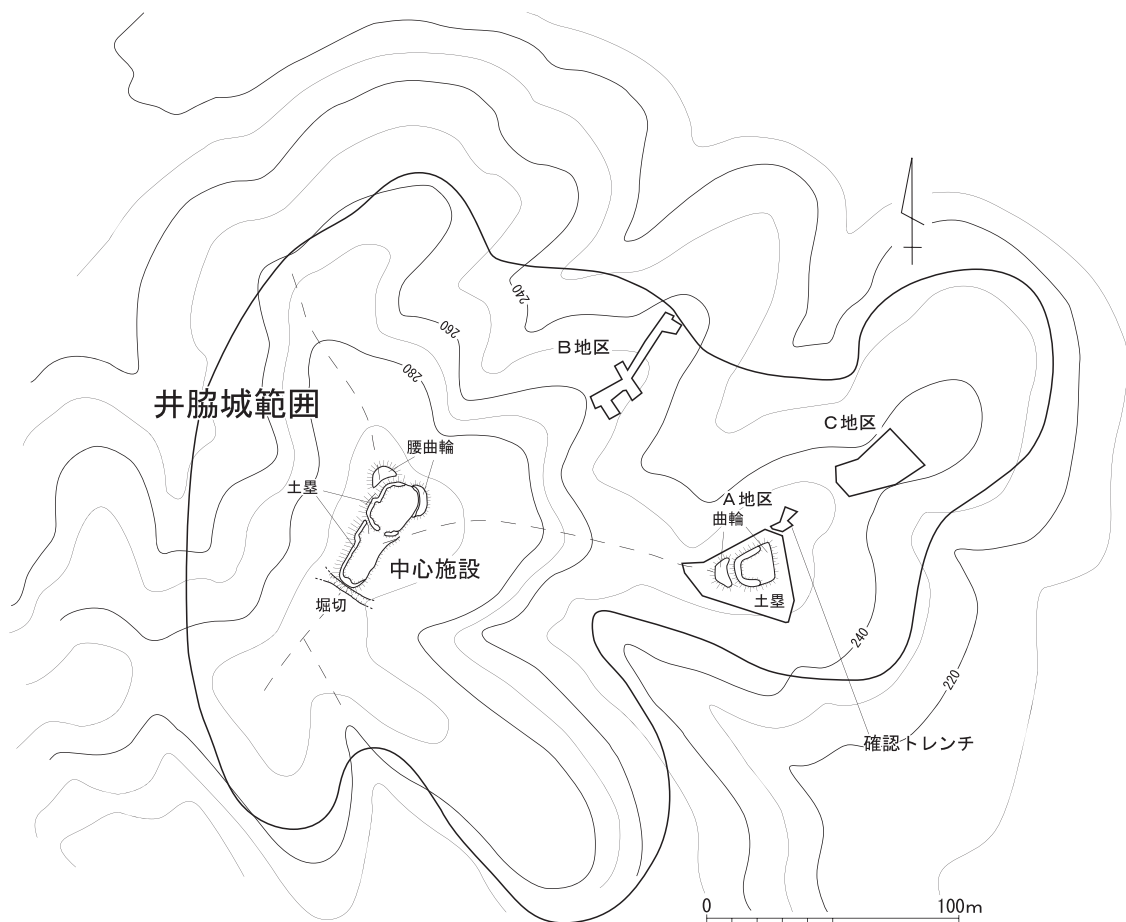


第1図 調査地位置図及び周辺山城分布図(国土地理院 1/50,000 綾部)

今回の調査地であるA・B・Cの3地区は、中心施設より30～50mほど下がった地点で、中心施設の北東および東側にあつて、山城の防御・攻撃といった機能の中で重要な役割を担っていたと考えられる。特にA地区は、周囲から独立するかのようにはほぼ方形に成形された曲輪をなしており、その平坦部の三辺には人工的な土盛り(土塁)が構築されていた。

現地調査は、平成21年度の調査としてA地区およびB地区の調査を、平成22年度の調査としてC地区の調査を実施した。調査掘削面積はA地区1,200㎡、B地区200㎡、C地区500㎡の合計1,900㎡である。本報告は黒坪が執筆した。

現地調査責任者	調査第2課長 肥後弘幸
調査担当者	調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛 同 総括調査員 田代 弘 同 専門調査員 黒坪一樹
調査場所	船井郡京丹波町井脇瀧谷
現地調査期間	平成21年10月22日～平成22年2月25日(A・B地区) 平成22年5月6日～7月6日(C地区)
調査面積	1,900㎡



第2図 井脇城跡中心施設及び調査地区配置図

2. 井脇城跡の中心施設について

井脇城跡の中心施設は、標高約300mの最高所にあり、丹波綾部道路の路線範囲からは外れている。井脇城跡の施設を現状の中で押さえておくことは、今後の井脇城跡および周辺の山城跡を研究していく上で必要である。そこで、目視と巻尺により計測し、縄張図を作成した(第2図)。この図を元に中心施設の内容を若干スケッチしておきたい。

山頂付近は大きく2段に成形された曲輪が北東-南西に並んでいる。北側の曲輪がひときわ高所に位置する。この曲輪の北側および北東側には、三日月形となった腰曲輪が確認できる。

中心施設の曲輪2面を合わせた広さは東西50m、南北16mのおよそ800㎡を測る。そしてそこには東辺を除く北・西・南の3辺に土塁が築かれている。方形曲輪の南西側には、幅2m、長さ12mほどの堀切がみられ、防御をさらに堅くしている。北西・南東側は急峻な斜面となっており、そうした地形がそのまま防御の機能を果たしたのであろう。山頂周辺には、これ以外に顕著な施設は見受けられない。堀切より西側の尾根をさらに辿っても自然地形が続くばかりである。

今回調査地は、中心施設から北東に張り出す尾根上(B地区)と、大きく段を成した上で東側に延びる尾根筋上(A地区・C地区)に位置する。

3. 調査成果

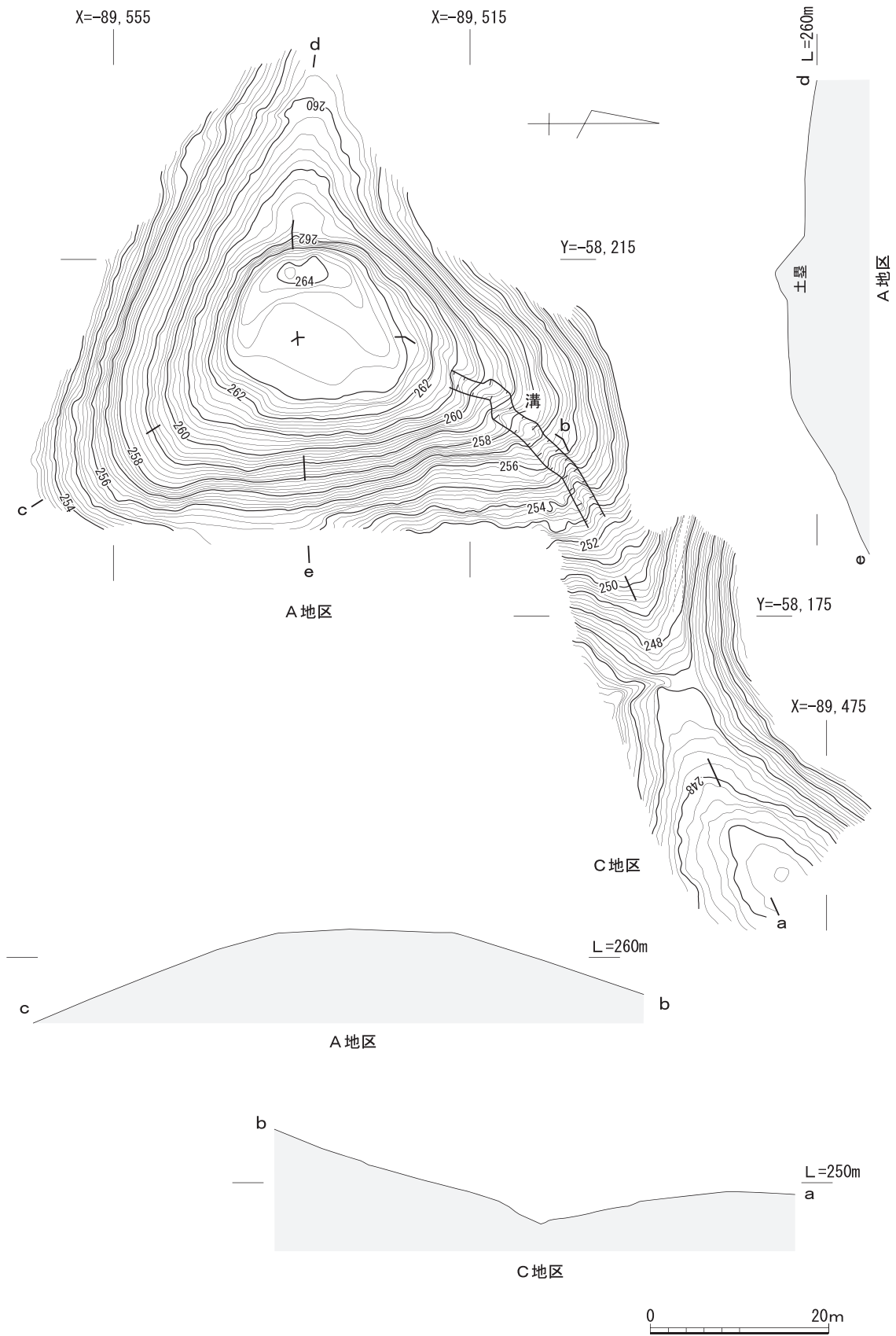
1) A地区

A地区は、中心施設から東~南東方向に延びる尾根部を大きく改変し、斜面上位の土砂を削って北西側に盛り付け、周囲から独立した曲輪を造成している。標高は264.2mを測る(第3図)。この頂部平坦面からの見晴らしは非常に良好で、東側谷部を広く見通せる。曲輪の頂上は、東西18m×南北21mのほぼ方形をなし、およそ380㎡以上の広い平坦地を確保している。この平坦面の南・西・北辺の3辺を囲うように土塁が設けられている。調査前の土塁は、下幅5m、上幅2.4m、高さ0.5~0.8mで、北辺9m、西辺11m、南辺10mで、総長30mを測る。平坦部を中心に、曲輪の斜面を含めて、1,200㎡の範囲を調査した。

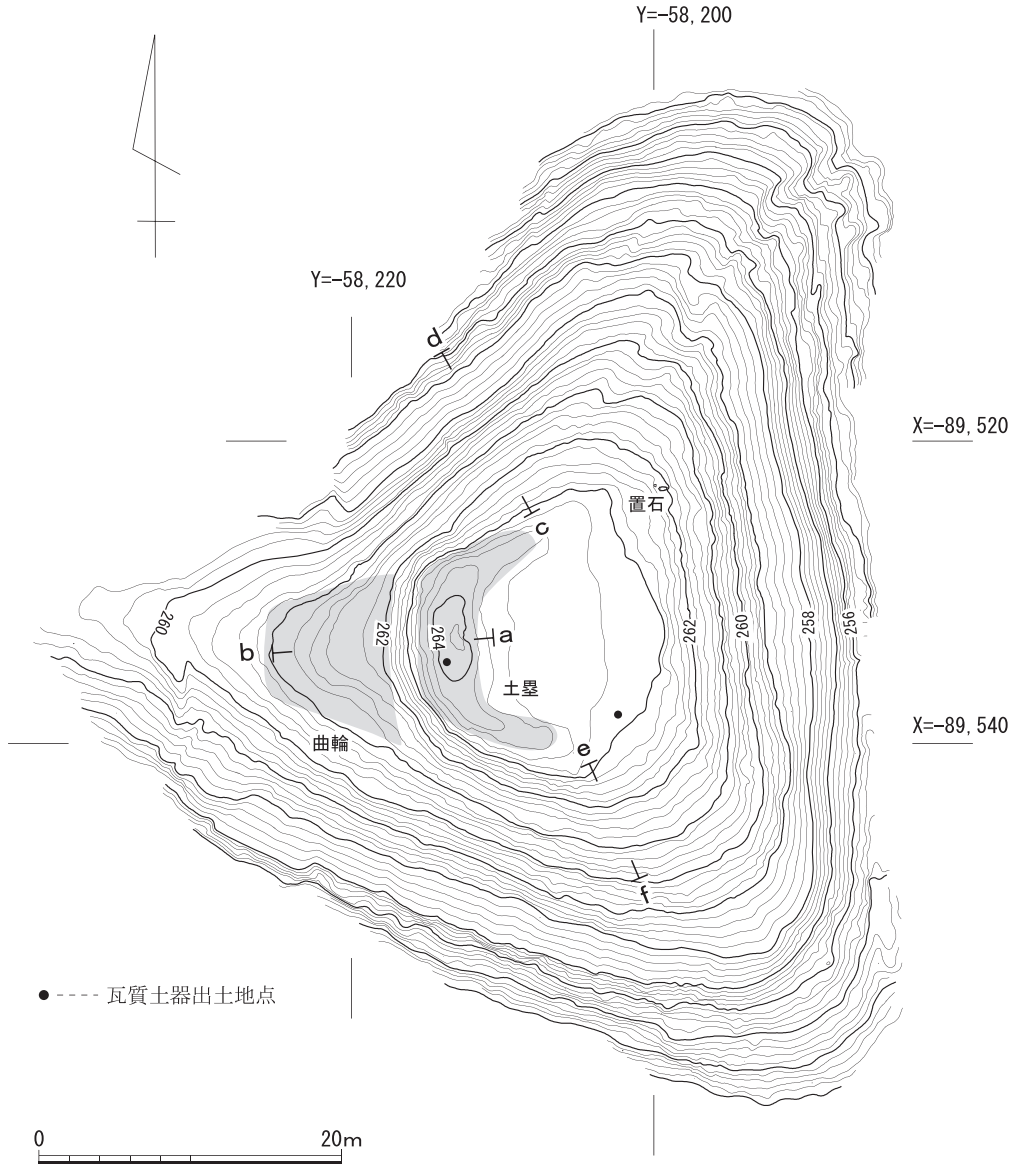
曲輪の施設としては土塁以外はなく、黒色腐植土(表土)が約15cmの厚さで堆積し、それを掘削すると硬い岩盤(地山)面となった。平坦部では、柱穴などの遺構は検出できなかった。唯一、曲輪平坦部の北東部には置石がなされていた(第5図)。石の大きさ長さ60cm、幅42cm、厚さ16cmである。石の上面は平坦になっている。加工はなく、泥岩質の自然石である。曲輪の虎口を構成する門を支えた礎石の可能性はある。

土塁は、南・北辺の端部は築造された時よりもかなり風化・流失していたが、西辺中間部での最大高は約80cmを測る。その断面の土層観察から、20~25cmの厚さで土を内側から外側に向けて斜めに積み上げ、さらに補強するように外側から土をブロック状に盛り上げているのが確認された(第7図上・図版第12)。この土塁は最終的に、すべて除去した。その結果、土塁が築かれていた範囲の西側と北側は、多量の礫混じりの土で造成されていることがわかった(図版第13)。

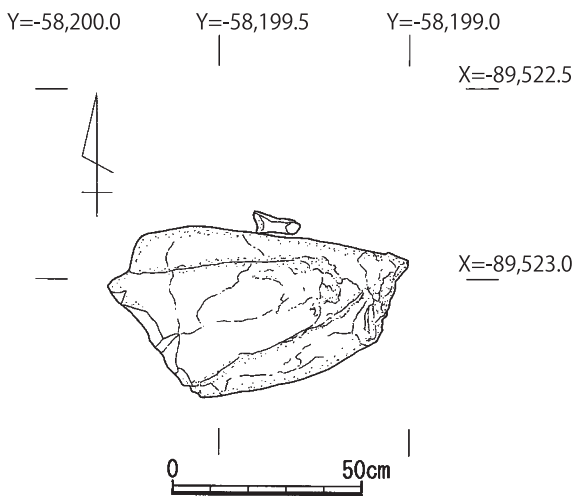
また、斜面部の掘削については、土層の確認のために断ち割りを行った部分以外では、曲輪を



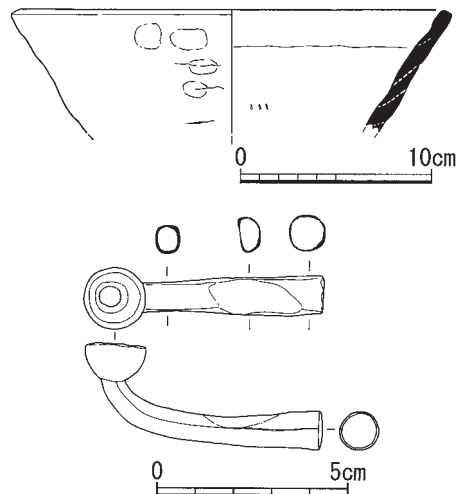
第3図 A・C地区地形図(掘削前)



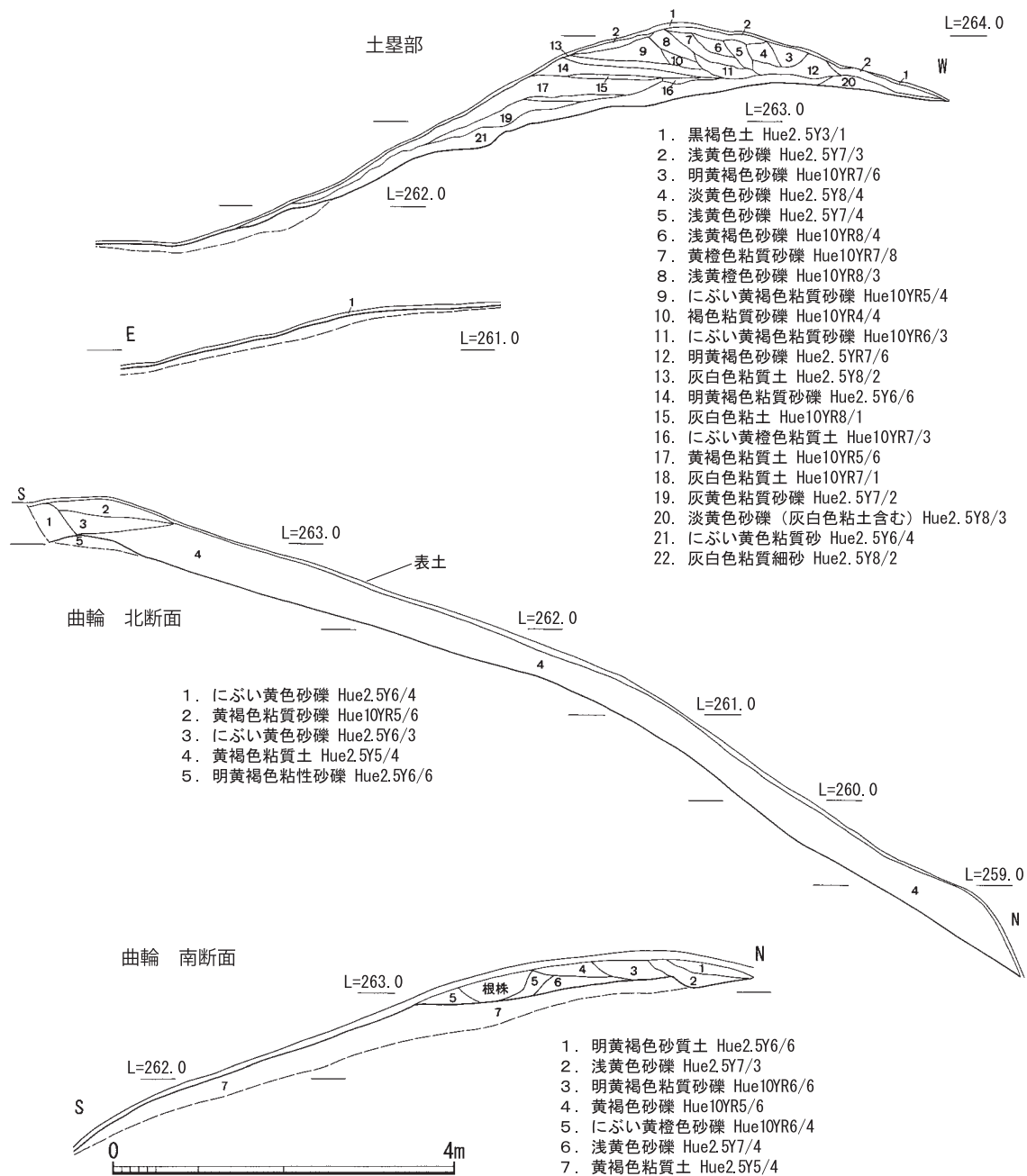
第4図 A地区地形図(掘削後)



第5図 A地区置き石



第6図 A地区出土遺物実測図

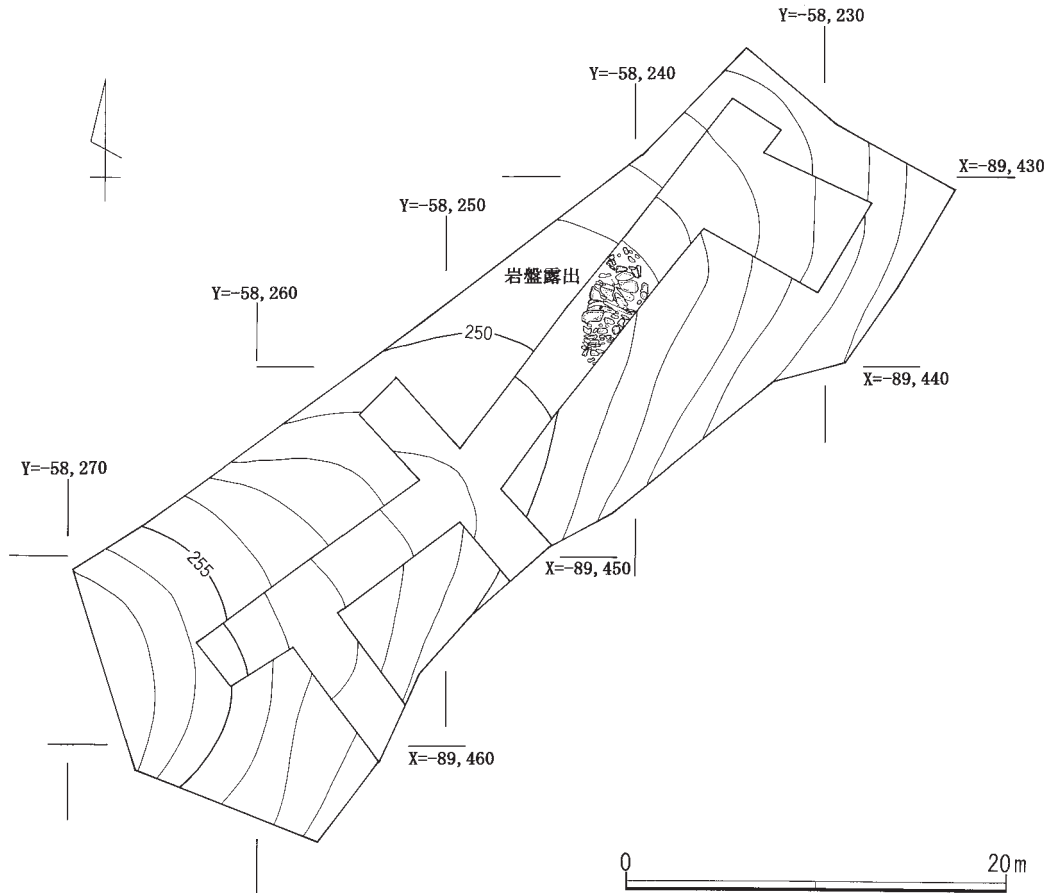


第7図 A地区曲輪・土塁断面図

造成した盛土をそのまま残し、山城として成形された当時の状態までを掘削した(第4図)。

なお、東側のC地区との間の斜面には、コンターに直交する方向で、地割れのような溝が長さ24m、幅1.3～2m、深さ20cmにわたって認められた。山城に関する遺構であるかを確認するためのトレンチを入れたが、新しい時期(近現代)の道であると判断した(図版第15)。

出土遺物には、頂部南東部から瓦質土器の破片1点と、土塁掘削中に同質の瓦質土器の破片1点がある。土塁築造中の盛土内に混入したものである。瓦質土器は、復元径23.2cm、体部厚7mmを測り、内面に播り溝をもつ播鉢であろう(第6図上、図版第16)。瓦質の播鉢については大系的な編年はなされていないが、およそ戦国時代にあたる16世紀前半とみられる。^(注)その他の出土



第8図 B地区平面図

遺物を欠くことから、この曲輪の築造年代の下限を16世紀前半としておきたい。

さらに、煙管の雁首1点、肥前系磁器碗破片1点が出土した(第6図下、図版第16)。これらは表土中からのもので、江戸時代後期のものといえる。煙管の雁首は、長さ6cmを測る。肥前系陶磁器は18世紀で網目文の染付け碗である。中世山城に直接関係する遺物ではない。

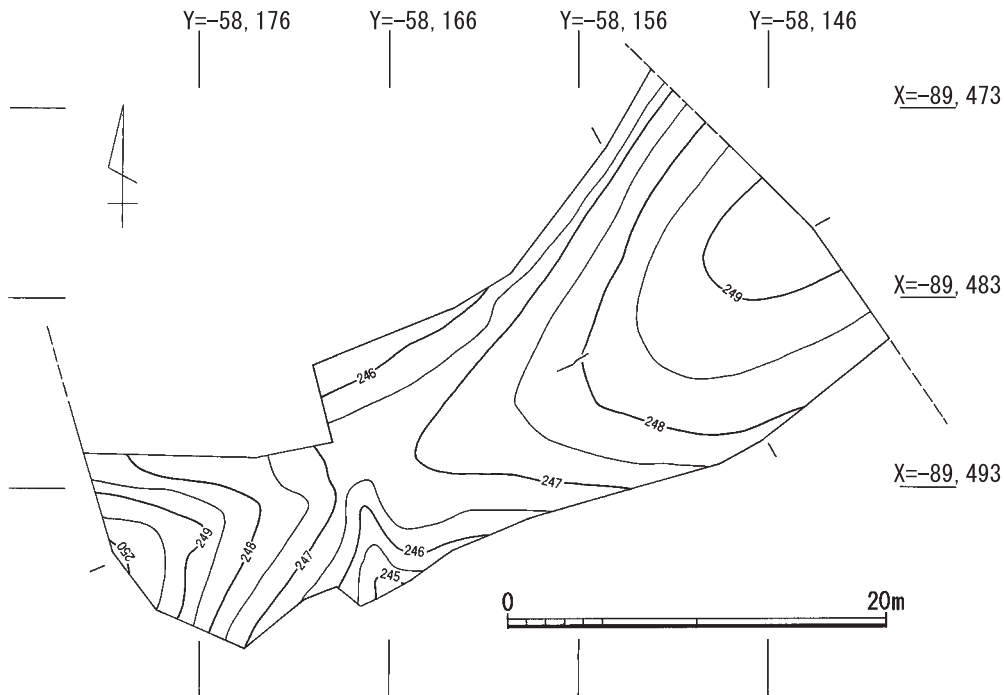
2) B地区

井脇城跡の中心施設から北東方向に下降して延びる尾根筋にある。200㎡のトレンチを設定した。トレンチ内の土層は、表土である黒色腐植土(第1層)および褐色粘質土(第2層)が薄く堆積し、それより下層は地山・岩盤となっていた。幅広くなっている部分や、粘板岩または泥岩の露出しているか所も確認したが、明確な遺構も検出されず、1点の遺物も出土しなかった。岩の露出か所は、岩脈がトレンチを斜めに横切り、幅5.8m、深さは1m以上を測る。

3) C地区

C地区は、A地区からさらに東方向に下降していく幅広の尾根部に当たっている。ここはA地区のある北側尾根部と対峙し、その間の谷部全体を見通せる好位置であるため、櫓跡や建物跡などの存在が想定される場所であった。

トレンチは500㎡を設定し、掘削を行った。層序は、15cmの黒色腐植土(表土)、その下に15cmの褐色砂質土が堆積し、その下層は淡黄色粘質土の地山であった。地山面上で精査したが



第9図 C地区地形図(掘削後)

遺構・遺物は検出できなかった。

4. まとめ

井脇城跡のような中世山城は、京丹波町内だけでも20基近くを数えるが、城主や全体規模・構造のはっきりしない城も多い。城主が伝承されている城としては、出野城(出野氏)、鎌谷城・鎌谷南城(細見河内守)、三ノ宮城(山内久豊)、橋爪城(山内貞通～久豊・盛豊)、井尻城(谷垣兵部)、上野城・須知城(須知氏・須知景光)などがある。

井脇城跡については、築城および居城主は明らかではない。ただ井脇城跡を中間にして同じ谷筋の入り口と最奥に山内氏ゆかりの城と伝えられる橋爪城跡と三ノ宮東城跡・三ノ宮西城跡が存在していることから、井脇城跡周辺は山内氏との強い関係が指摘されている。

今回は、中世山城である井脇城跡の東側に設けられた曲輪の調査で、B・C地区では顕著な遺構・遺物は得られなかったが、A地区において丘陵尾根部に周囲から半ば独立して造り出された曲輪の構造を明らかにすることができた。曲輪頂部は方形に造り出し、西・北・南の3辺には防御用の土塁が築かれていた。出土遺物として、平坦面および土塁内部から出土した瓦質播鉢の破片がある。形態から16世紀のものである。今後、中世井脇城の正面虎口や各方向にのびる曲輪や小口などの施設の解明など、多くの課題が残っている。

注 伊野近富「中世土器の編年」上 (『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

3.長岡京跡右京第994次(7ANGKT-4地区)

・井ノ内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、平成22年度大山崎大枝線地方道路交付金業務委託に係る埋蔵文化財発掘調査に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸に所在し、西山丘陵裾から東側に延びる標高40m前後の低位段丘上に位置する。調査範囲は長岡京の条坊推定復原によると、長岡京跡右京三条三坊十五町、同三条四坊二町、西三坊大路西側溝にあたり、縄文時代から中世までの複合遺跡である井ノ内遺跡の南西端部、一部、今里遺跡と重複する地点である。

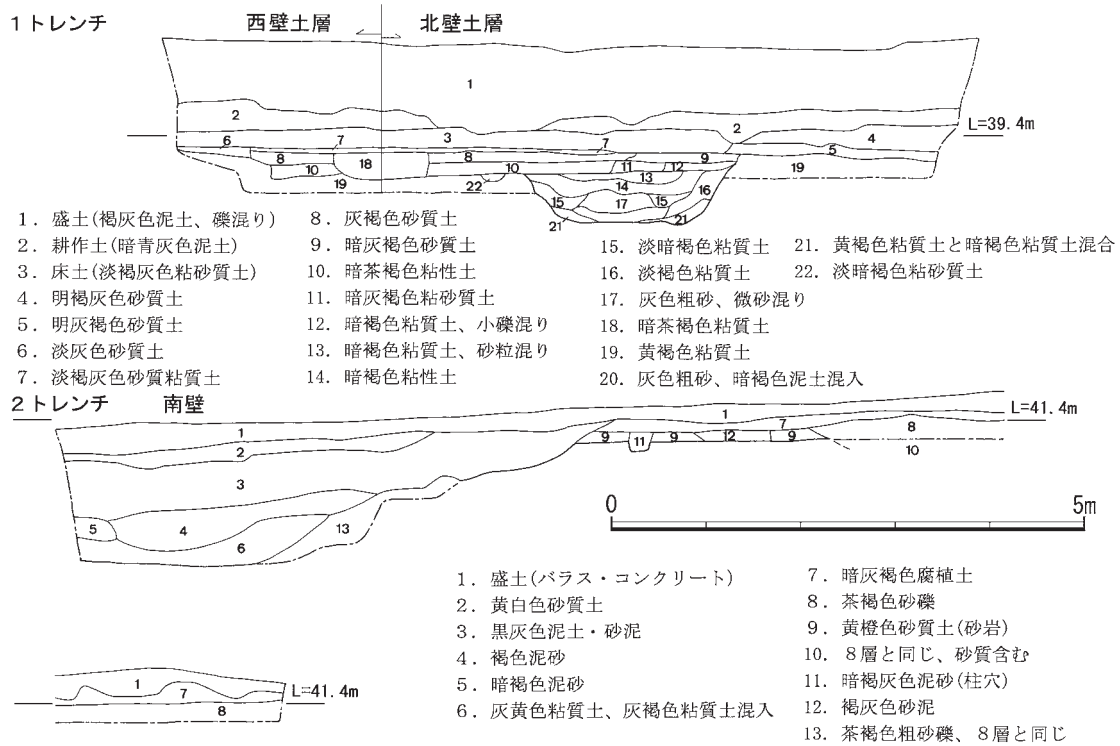
調査は、1～3トレンチの3か所を設定した。1トレンチは今里蓮ヶ糸地区、2・3トレンチは、井ノ内頭本地区にあたり、近隣住宅の生活進入路を確保するため、3回に分けて実施した。

調査の結果、西三坊大路の路面上に奈良時代あるいは平安時代の掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代の大溝等が検出された。

調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表します。なお、本報告は竹井が執筆した。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 京都西南部)



第2図 1・2トレンチ土層図

調査に係る経費は全額京都府建設交通部が負担した。報告に使用した座標系は日本測地系の第VI系である。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

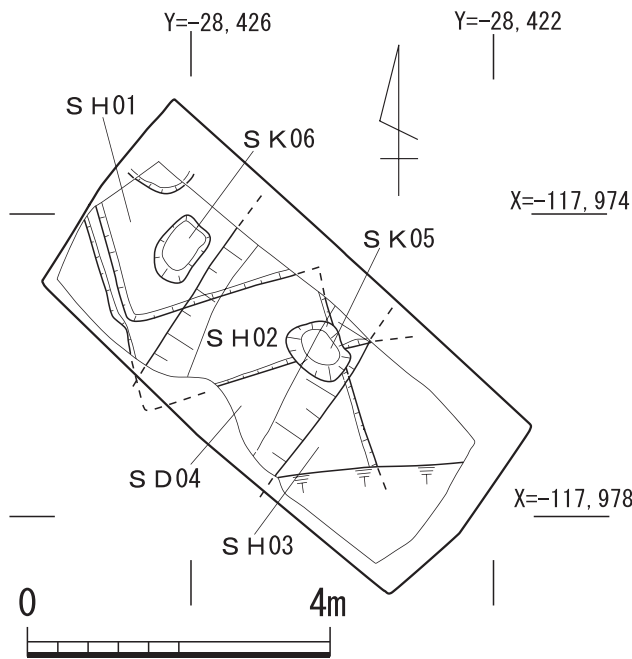
調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 専門調査員 竹井治雄

調査場所 長岡京市井ノ内頭本・今里蓮ヶ糸

現地調査期間 平成22年4月26日～8月27日

調査面積 472㎡



第3図 1トレンチ検出遺構平面図

2. 検出遺構

- 1) 1トレンチ(第2～5図、図版第1・2)
- 2) 1トレンチは、主要地方道大山崎大枝線と通称光明寺道交差点の北東角の畑地に3.5×6mのトレンチを設定した。長岡京跡右京の推定西三坊大路東側溝の東宅地内に位置する。基本層序は地表下1.2mまで盛土、耕作土、床土(1～4層)が堆積し、

明灰褐色砂質土(5層)が中世の包含層である。この下面で竪穴式住居跡、大溝 S D04 を検出した。これらの遺構の基盤層は黄褐色粘質土(19層)である。

3棟の竪穴式住居跡は、調査地外に広がるため、平面規模は不明である。方形を呈し、深さ0.2m前後を測り、住居内から古墳時代後期に属する須恵器、土師器等の遺物が多数出土した。時期は概ね6世紀代に属する。

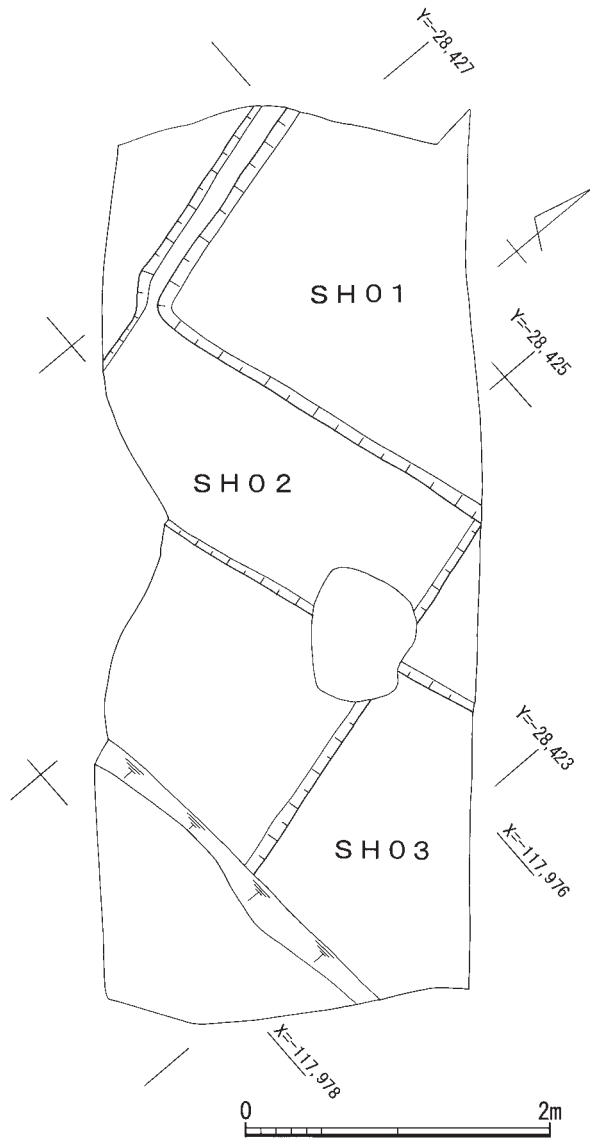
竪穴式住居跡 S H01 深さ25cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。堆積土は、灰褐色砂質土(8層)で、炭化物、腐植土が混在する。出土遺物は須恵器杯身・蓋、土師器である。

竪穴式住居跡 S H02 深さ15cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。堆積土は、暗茶褐色粘性土、暗灰褐色粘砂質土(10・11層)である。出土遺物は須恵器杯身、土師器高杯である。

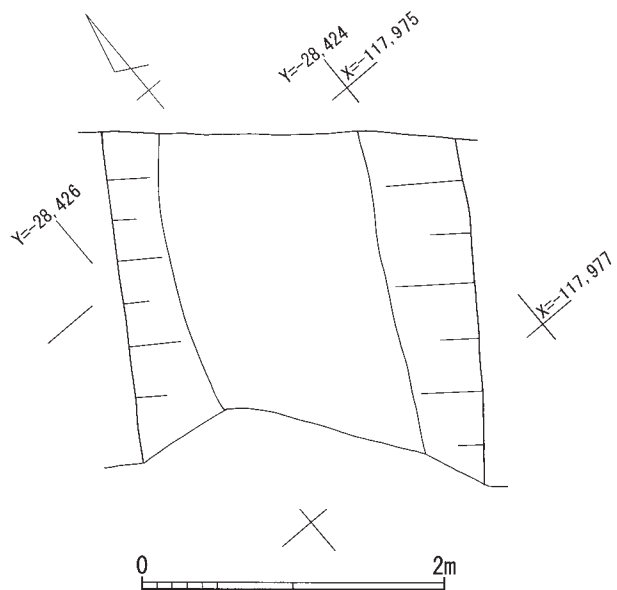
竪穴式住居跡 S H03 深さ20cm、一辺の長さは不明(方位N-25°-W)である。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器高杯である。

大溝 S D04 トレンチ中央部、竪穴式住居跡の下層で検出したもので、方位はN-30°-Eの溝である。溝の上面幅が2.2m、深さは0.7mを測り、断面は逆台形を呈する。堆積土(12～17・21層)は、大きく3層に分かれる。上層(13～15層)は腐植土などが混じり、遺物はわずかである。人為的に埋まったものと思われる。中層(17層)は砂・粗砂であり、流水の痕跡が認められる。下層(16・21層)は淡褐色粘質土・黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合層が堆積し、溝底からは弥生時代後期の高杯・甕等の破片が多数出土した。

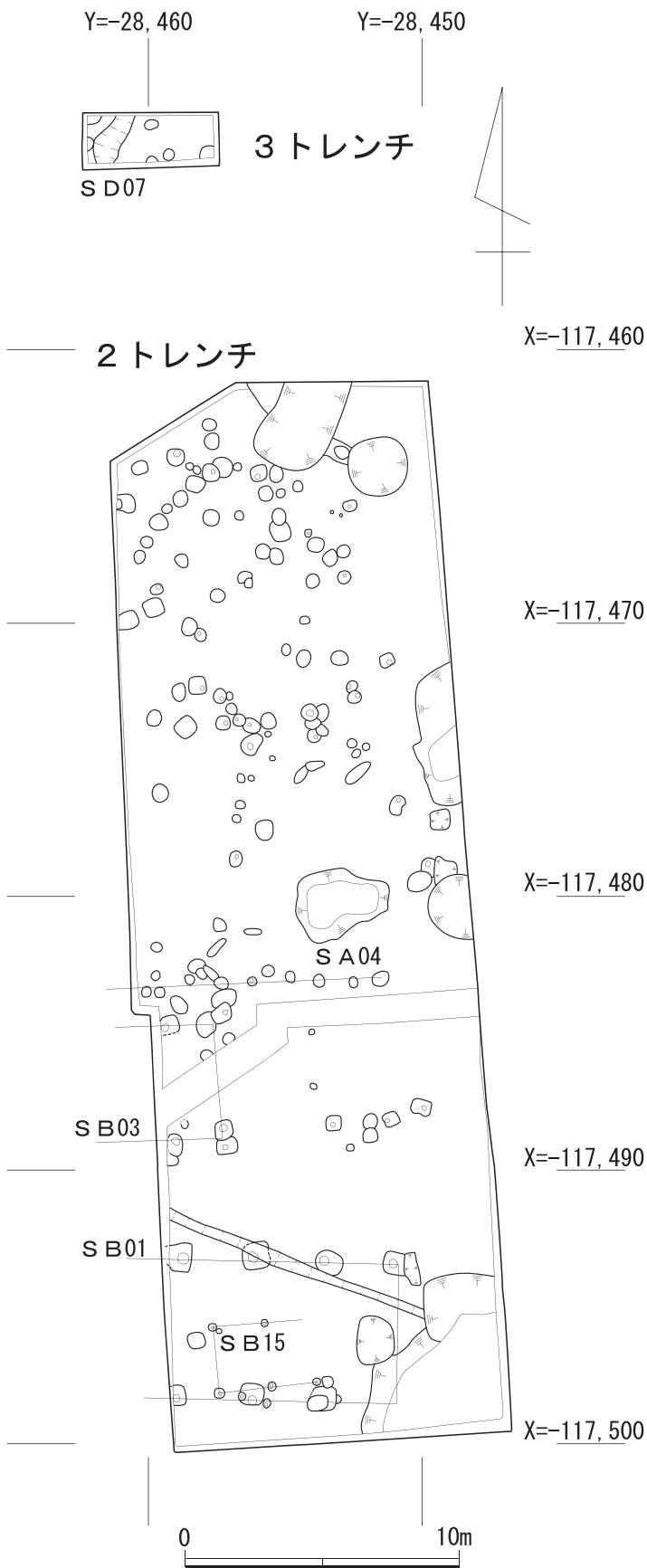
2) 2 トレンチ(第6・7図、図版第2～4)



第4図 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H01～03 平面図



第5図 1 トレンチ大溝 S D04 平面図

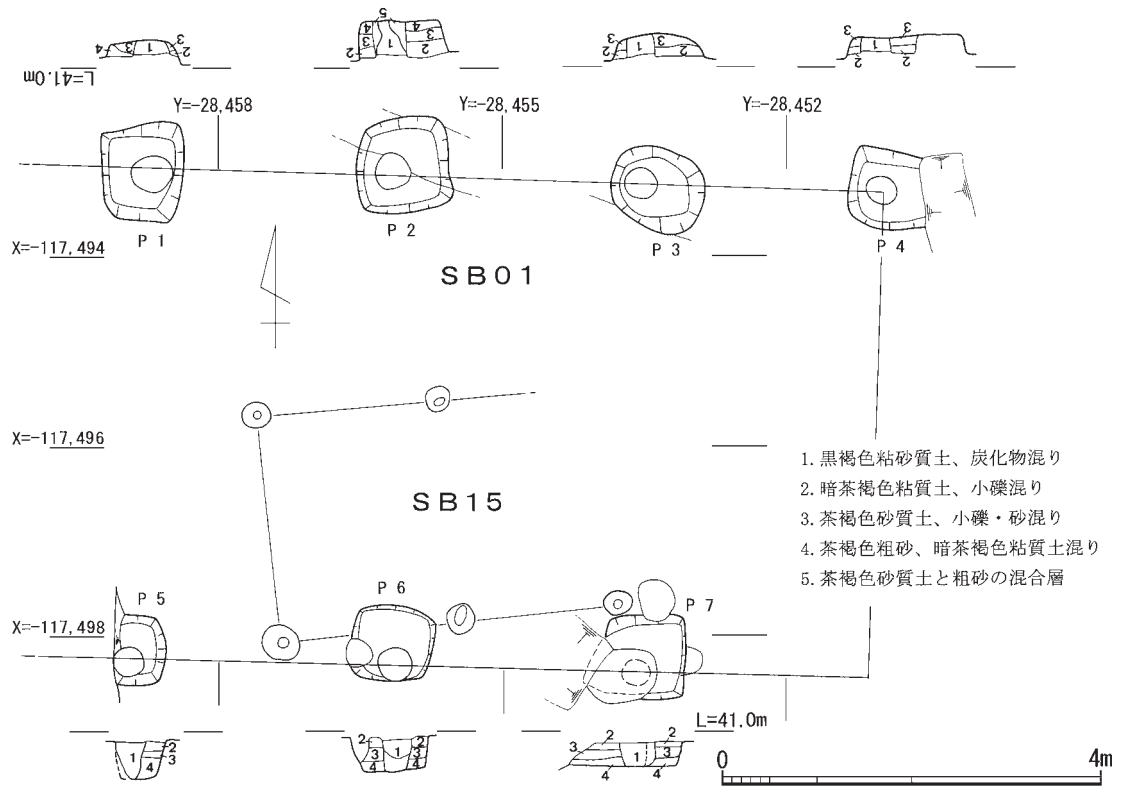


第6図 2・3トレンチ検出遺構平面図

調査トレンチの設定については、周辺住宅の生活進入路(出入り口)の確保、及び人力掘削による排土置き場等を考慮し、2回に分けて調査した。総面積は463㎡である。基本層序は地表下0.5mまで現代の造成による盛土(1～6層)が堆積する。暗灰褐色腐植土(7層)は中世の包含層で、この下層から掘立柱建物跡、溝等の遺構を検出した。これらの遺構の基盤層は8・9層であり、黄橙色砂質土(砂岩：9層)からはサヌカイト製の石器・石材が出土した。

X=-117,470 掘立柱建物跡 S B01 トレンチ南端部で検出した桁行3間以上、梁行2間あるいは1間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から東(N-2°-E)に振れる。柱間寸法は2.6m(8.5尺)等間である。柱穴は方形を呈し、一辺0.8～1m、深さ0.3～0.5mを測る。柱痕は直径20cmの円形を呈する。遺物は、各柱穴から細片ではあるが平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。

X=-117,480 掘立柱建物跡 S B03 S B01の北桁行柱列から北へ3.6mで検出した桁行1間以上、梁行2間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から東(N-2°-E)に振れる。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)等間で、梁行2.1m(7尺)等間である。柱穴は方形を呈し、一辺0.6～0.8m、深さ0.4～0.5mを測る。柱痕は直径15cmの円形を呈する。遺物は小片の土師器・須恵器がわずかに出土した。



第7図 2トレンチ掘立柱建物跡S B03・15実測図

柵列S A04 S B03の北側1.2mで検出した6間以上の東西方向の柵列である。S B01の北側10mに平行する。柱筋は真北方向から東(N-2°-E)に振れる。柱間寸法は1.2m(4尺)等間、柱掘形は方形・円形で、一辺0.3～0.4mを測る。

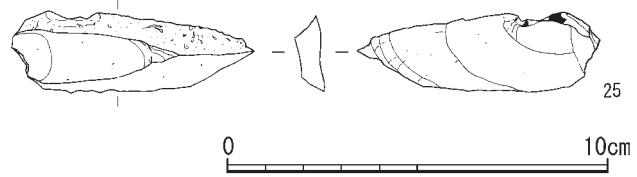
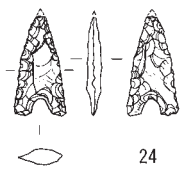
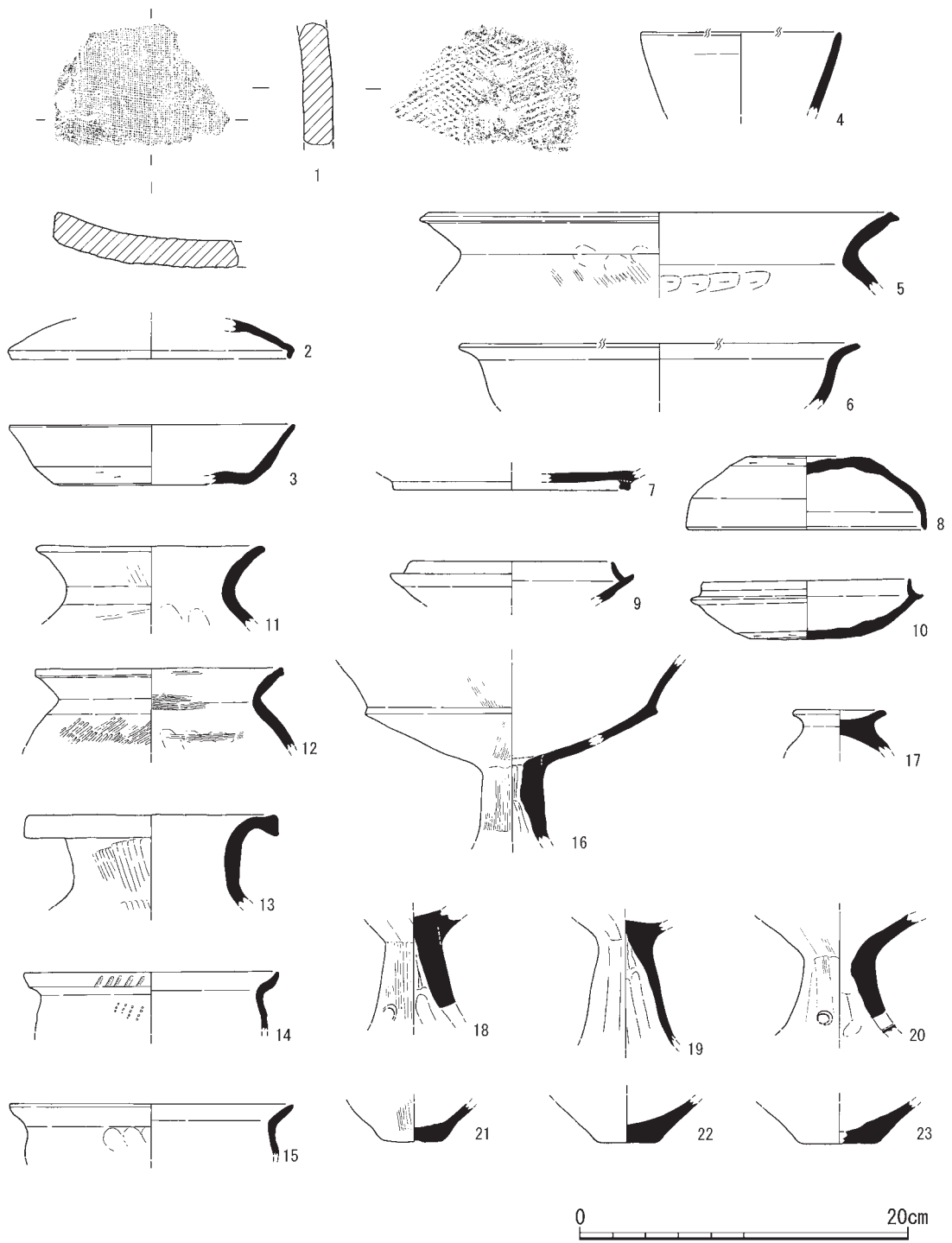
掘立柱建物跡S B15 S B01の上層で検出した桁行2間以上、梁行1間の東西棟建物である。柱筋は真北方向から西(N-5°-W)に振れる。柱間寸法は桁行1.8m(6尺)等間で、梁行2.4m(8尺)を測る。柱穴は円形を呈し、直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。柱痕は直径5cmの円形を呈する。遺物は中世に属する土師器・瓦器の小片が出土した。

なお、トレンチ全体に中世及び古代の円形・方形を呈する柱穴が多数見つかったが、建物跡として復原できない。

3) 3トレンチ(第6図、図版第5)

2トレンチ北方約10mの地点に2×5mのトレンチを設定した。2トレンチで確認できなかった西三坊大路西側溝を検出することを目的にした。基本層序は2トレンチと同じ堆積状況である。

調査の結果、中世に属する柱穴・溝等を検出した。溝跡S D07の規模は幅0.8～1m、深さ0.4m、断面「U」字形を呈する。遺物は中世の瓦器片のほか、奈良時代の土師器・須恵器の小片が出土した。また、当初の目的であった長岡京の西三坊大路西側溝等に関連する遺構・遺物は無かった。なお、遺構の基盤層である黄橙色砂質土(砂岩)からサヌカイト製の石器剥片が出土した。



第8図 出土遺物実測図

3. 出土遺物(第8図、図版第6)

今回の調査で出土した遺物は、整理箱(コンテナ)数にして11箱である。遺物の大半は土器類であるが、古瓦、石器なども出土した。

1・3・4は1トレンチ竪穴式住居跡S H02の上層から出土した奈良時代の遺物である。1は古瓦で、凸面には叩き目、凹面には布目がある。3は口径16.0cm、器高4.0cmを測る須恵器杯身である。底部は平底、体部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさまる。4は須恵器長頸壺の頸部である。

2は2トレンチS B01(P-2)から出土した口径16.0cm、須恵器蓋である。口縁端部が垂下して丸くおさまる。平安時代前期に属するものと思われる。

5～7は2・3トレンチの中世の包含層(暗灰褐色腐植土)から出土した。5は口径24.0cm、土師器甕である。6は口径20.0cm、土師器鉢である。7は高台を持つ須恵器杯身である。

8～10は1トレンチ竪穴式住居跡S H02から出土した須恵器である。8は口径16.0cm、器高3.0cmを測る杯蓋である。天上部はツマミが無く、平坦面を有する。口縁部はまっすぐ垂下し、短部は丸くおさまる。9・10は口径16.0cm、器高2.0cmを測る杯身である。口縁部は受け部から僅かに内傾しながら短く立ち上がり、端部は細く丸くおさまる。古墳時代後期に属するものである。

11～23は1トレンチ溝S D04から出土した弥生土器である。弥生時代後期に属する。11・12・14・15は甕で、口径は16.0～22cmを測る。体部外面は概ねタタキ痕が残る。口縁部は「く」の字形に外反し、口縁端部が丸くおさまるもの(11・15)、平坦面を持つもの(12)がある。14は口縁端部が垂直に立ち上がる「受け口」状口縁を呈する。13は広口壺で、口径16.0cmある。口縁部は水平に外反し、端部は平坦面を持つ。頸部外面にハケ目が残る。

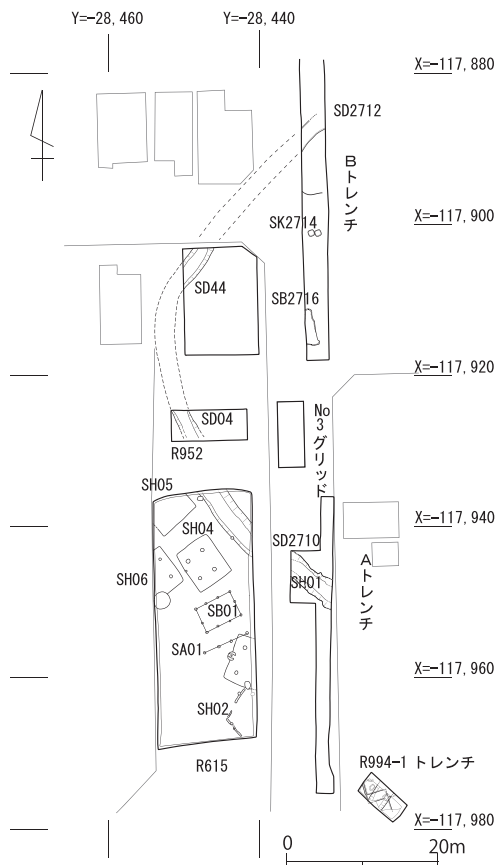
16・18～20は高杯および器台である。16は杯部で、下半は皿状を呈し、上半の口縁部は外反気味に斜め上方に立ち上がる。皿部と口縁部の外面の接線は稜線が見られる。18～20は脚部である。20は円形の孔があり、図で見る限り器台と思われるが、杯と脚部を接合する充填土が失われた高杯脚部の可能性もある。17は器台である。21～23は甕・壺の底部である。

24は2トレンチの黄橙色砂質土(砂岩)から出土したサヌカイト製の石鎌である。平面は二等辺三角形を呈し、側縁は丁寧に仕上げ、直線的であるが、先端部側はわずかに内湾する。基部は凹基式で、抉り部は半円形を呈する。先端部が少し欠損するが、長さ3.2cmを測る。25は3トレンチ黄橙色砂質土(砂岩)から出土したサヌカイト製の石器剥片である。

4. まとめ

大溝S D04は、周辺の調査(R615・R27・R615次調査)で見つかっている環濠集落の環濠と推定される溝と規模・形態・時期等において類似点が多いが、その方向がR615次調査のS D01と直交することから、一連の溝とは考えにくい。今後の調査に期待される。

竪穴式住居跡は複数回の建て替えが認められ、近隣のR615・R952次調査成果を合わせると、



第9図 1トレンチ周辺遺構配置図

古墳時代後期には大規模な集落が営まれたことが分か
ってきた。

掘立柱建物跡 S B01・03及び柵列 S A04は推定西三
坊大路の路面上で見ついている。また2トレンチの
南側15mに位置する R830次調査の井戸 S E172では瓦
の他、灰釉陶器などが出土しており、整然とした建物
配置や特色ある出土遺物の存在から、一般集落とは異
なる可能性がある。時期は長岡京廃絶後、平安時代初
期までの遺構群である。

なお、2・3トレンチでは、西三坊大路の西側溝が
推定される地点であるが、長岡京期の遺物すら皆無で
あり、その痕跡は確認できなかった。その理由として
は、今回の2・3トレンチにおいては後世の削平が大
いに影響したものと考えられるが、元もと側溝が施工
されなかった可能性も否定できない。

参考文献

竹井治雄「長岡京跡右京第615次発掘調査概要(7ANIHJ- 6地区)」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

網 伸也・百瀬正恒「長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡 右京第772・775次」(『京都市埋蔵文化財発掘調査概報』2003-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 2003

増田孝彦「長岡京跡右京第830次・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要(7ANGKT- 2・GHD- 9地区)」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

増田孝彦「長岡京跡右京第753次・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要(7ANGHI- 5地区)」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

増田孝彦「長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡発掘調査概要(7ANGKS- 6地区)」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

竹井治雄「長岡京跡右京第994次(7ANGKT- 4地区)・井ノ内遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

4.平成21・22年度八幡木津線道路整備促進

事業関連遺跡発掘調査報告

(下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群)

1. はじめに

下馬遺跡は、京都府相楽郡精華町大字下狛小字下馬・片山に所在する縄文時代から室町時代の遺跡であり、平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落と、室町時代の寺院関連遺跡である。片山遺跡は下馬遺跡の南に隣接し、同町大字下狛小字片山に所在する。片山遺跡は奈良時代から鎌倉時代を中心とする集落遺跡とみられるが、そのほかに弥生時代の石包丁の出土もみている。鞍岡山古墳群は下馬遺跡背後の丘陵上の同町大字下狛小字長芝・砂川ほかに所在する。

今回の発掘調査は、八幡木津線道路整備促進事業に係る発掘調査を京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群の現地調査は、平成20年度から実施している。今回の報告は、平成21年度と平成22年度前半期で実施した発掘調査成果である。調査期間中は、京都府教育委員会、精華町教育委員会、山城南土木事務所など多くの関係機関の方々をはじめ、作業員・調査補助員・整理員の方々のご協力を得た。本報告は竹原が執筆した。各年度の調査体制等は以下の通りである。

調 査 遺 跡 下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 竹原一彦

同 調査第3係専門調査員 竹井治雄・石尾政信

調 査 場 所 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山・砂川

現地調査期間 平成21年7月21日～平成22年2月23日

調 査 面 積 下馬遺跡 1,980㎡

片山遺跡 500㎡

鞍岡山古墳群 20㎡

[平成22年度(前半期)]

調 査 遺 跡 下馬遺跡・片山遺跡

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 竹原一彦

同 調査員 松尾史子

調 査 場 所 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山

現地調査期間 平成22年5月25日～8月12日

調査面積 下馬遺跡 245㎡

片山遺跡 455㎡

2. 位置と環境

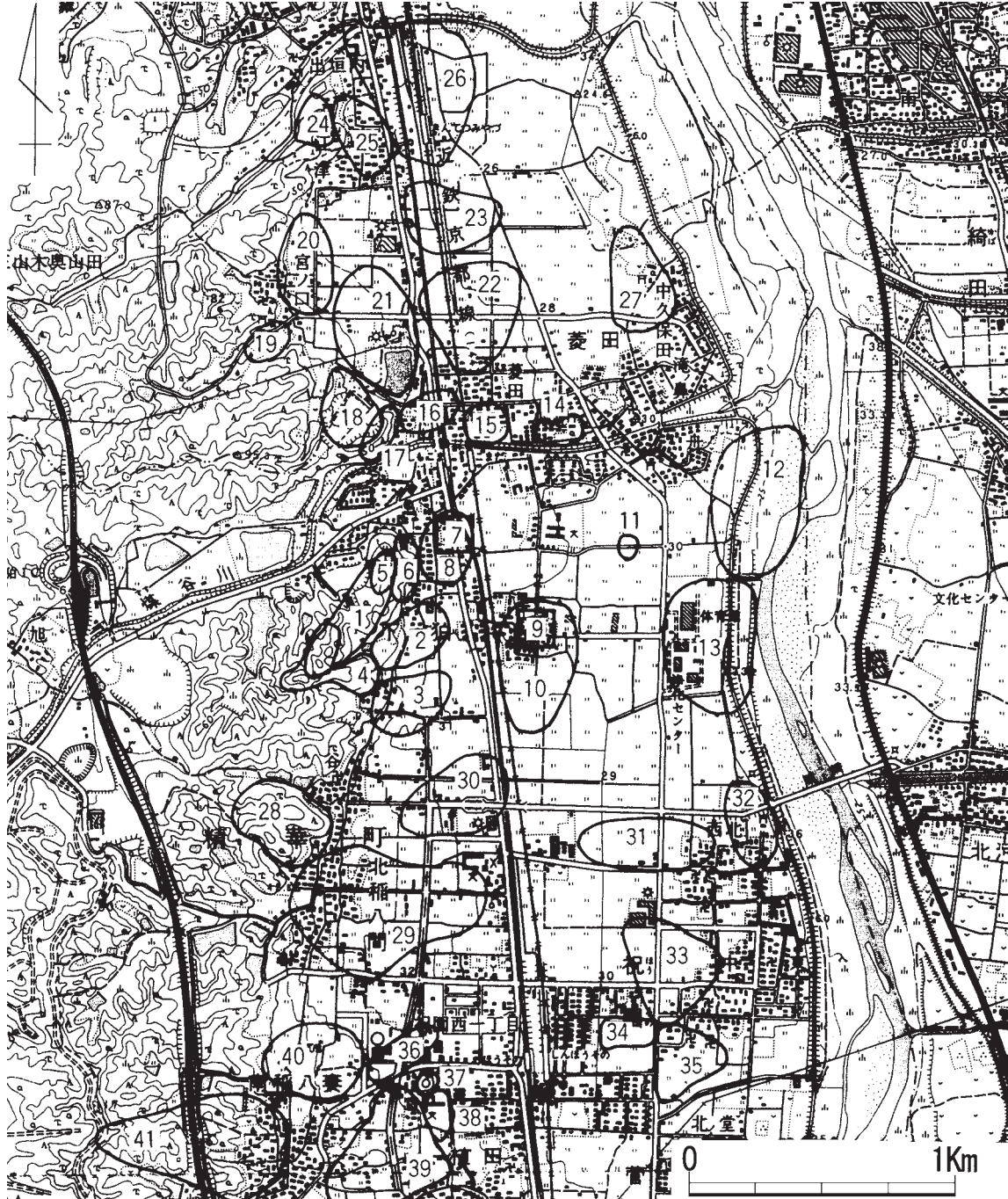
相楽郡精華町は京都府南部の南山城地域にあって、町域の東部は木津川左岸の沖積平野が広がり、中央部以西には奈良県と行政界を接する丘陵が広がる。木津川左岸の沖積平野部は、ほぼJR片町線と近鉄京都線付近を境に東の氾濫平野と西の扇状地に二分される。氾濫平野ではかつての木津川の蛇行を示す旧河道の痕跡や自然堤防が認められ、特に古い集落は自然堤防・扇状地・段丘など、それぞれに木津川の氾濫を回避し得る地形条件を求めて立地している状況が窺える。

下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群は、町域北西部の丘陵上と裾部扇状地に所在する。また、周辺部には縄文時代から中世の各時期の遺跡が数多く分布している。縄文時代では、中世の代表的な遺跡である椋ノ木遺跡で縄文土器の出土をみているほか、百久保地先遺跡が知られる。弥生時代では、散布地であるが下馬遺跡北側の扇状地に山路遺跡(前期)と西ノ口遺跡(後期)、丘陵上の薬師山遺跡(後期)が存在する。鞍岡山古墳群の南部には弥生時代後期の台状墓や土壙墓、古墳時代後期の土壙を検出した大福寺遺跡があり、縄文時代の石匙も出土している。

古墳時代では、町域北部丘陵上に平谷古墳群(前期～後期)・鞍岡山古墳群(前期～中期)が煤谷川を挟んで所在する。鞍岡山古墳群は4基の円墳からなる古墳群である。盟主墳である3号墳(中期前半)は直径約40m、高さ約6.5mを測り、墳丘には葺石と埴輪が伴う。埋葬施設には2基の粘土郭がある。調査によって2基の埋葬施設からは、短甲・剣・刀等の鉄製武器類、鉄製農耕具類、石製模造品類などの豊富な副葬品が出土している。大福寺古墳出土とされる甕籠鏡は3号墳出土の可能性がある。直径30mの1号墳(前期後半)は未調査であるが、過去に墳丘裾から埴輪棺が出土している。2号墳(直径30m、高さ3m)は前年度に当調査研究センターが発掘調査を実施し、木棺直葬の墓壙内から2基の割竹形木棺跡を検出している。規模の大きな西棺は棺外から鉄製武器(剣1・槍4)、やや小さな東棺は棺内から仿製四獣形鏡1面と玉類が出土している。また、同丘陵では大福寺採集と記された陶棺(大福寺古墳)の存在が伝えられるが、大福寺古墳の位置は不明である。近隣での集落は柿添遺跡が知られ、前期の竪穴式住居跡などが検出されている。

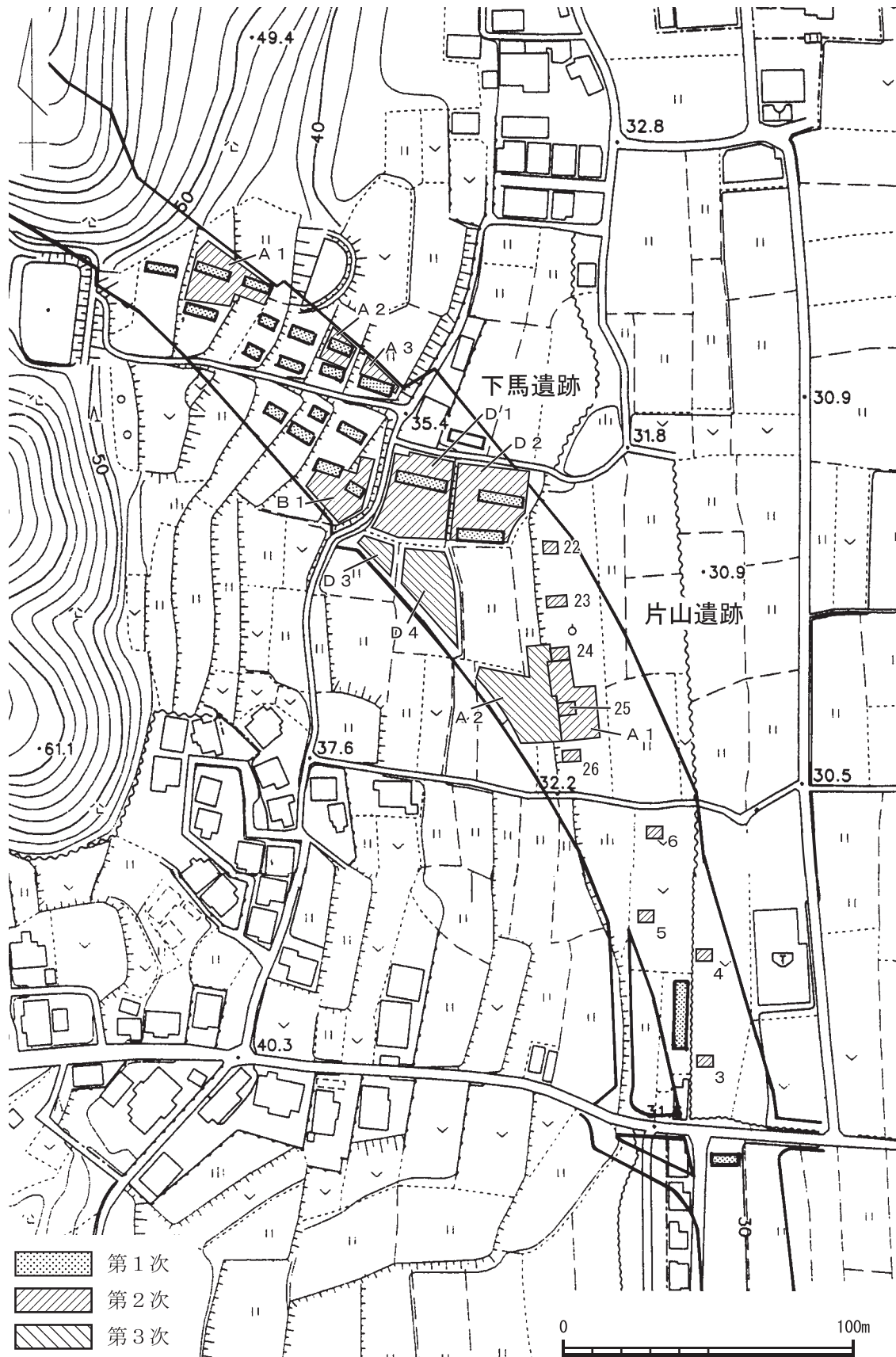
奈良時代以降では、平野部に里廃寺(飛鳥時代後期～奈良時代)、JR下狛駅の南側丘陵裾部に下狛廃寺(平安時代後期～中世)が知られている。下狛廃寺を含む一帯は拝殿遺跡(古墳時代後期～奈良時代)でもある。丘陵上の鞍岡神社遺跡(弥生～奈良時代)では磨製石鏃と瓦が採取されている。

中世には椋ノ木遺跡において、掘立柱建物跡、柵、井戸、土壙墓、溝等が検出されている。また、平野部には条里の規制を受けた畦畔・水路・道路の景観が良く残っている。



第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺)

- | | | | | | |
|-----------------|-----------|------------------|-----------------|------------|-----------|
| 1. 鞍岡山古墳群 | 2. 下馬遺跡 | 3. 片山遺跡 | 4. 大福寺遺跡 | 5. 鞍岡神社遺跡 | 6. 鞍岡山遺跡 |
| 7. 下粕廃寺 | 8. 拝殿遺跡 | 9. 里廃寺 | 10. 里遺跡 | 11. 石ヶ町遺跡 | |
| 12. 百久保地先遺跡 | 13. 棕ノ木遺跡 | 14. 春日神社遺跡 | 15. 前川原遺跡(大北城跡) | | |
| 16. 西ノ口遺跡 | 17. 薬師山遺跡 | 18. 平谷古墳群 | 19. 白山遺跡 | 20. 屋敷田遺跡 | 21. 宮ノ口遺跡 |
| 22. 山路遺跡 | 23. 桑町遺跡 | 24. 三山木廃寺 | 25. 佐牙垣内遺跡 | 26. 宮ノ下遺跡 | 27. 元屋敷遺跡 |
| 28. 城山遺跡(稲屋妻城跡) | 29. 北稲遺跡 | 30. 柿添遺跡 | 31. 西垣内遺跡 | 32. 祝園神社遺跡 | |
| 33. 中垣内遺跡 | 34. 城ノ内遺跡 | 35. 古屋敷遺跡 | 36. 北尻遺跡 | 37. 丸山古墳 | 38. 祝園遺跡 |
| 39. 森垣外遺跡 | 40. 南稲遺跡 | 41. 政ヶ谷遺跡(稲八妻城跡) | | | |



第2図 下馬遺跡・片山遺跡調査トレンチ配置図

3. 平成21年度下馬遺跡の調査(第2次調査)

1) 調査概要

平成20年度に実施した21か所のトレンチ(第1～第21トレンチ)の調査成果をもとに、良好な遺構分布や遺物の集中するトレンチ周辺を拡張して面的調査を実施した。調査対象地の現況は西から東方向に下る扇状地に設けられた階段状の耕作地であり、道路や周辺耕作地との水利の制約から調査地はA1～A3・B1・D1・D2の6地点に分かれた。北西側最高所のA1地区と低い南東部のD2地区間は水平距離約110m、遺構面の比高差は約11mを測る。

A1地区は調査対象地の北西端、丘陵裾に位置する。前年度調査の第2・9トレンチ周辺部を拡張調査した。調査地の地形は階段状を呈し、東部が約1m下がる平坦地をなしている。遺構は室町時代を中心として検出しており、東西の階段状平坦面上において検出した。遺構の状況から階段状地形は、室町時代には存在していたことが明らかになった。西側上段では、自然河川跡であるSR125と瓦溜りSX120のほか、方形や円形の掘形をもつ柱穴を検出した。一方、東側下段では土坑SK07・SX12、炉跡SX121、井戸SE129、溝SD123などを検出した。縄文時代晩期のSR125以外の遺構は、ほぼ室町時代に属するものである。

A2地区はA1地区の南東約24mに位置し、A1地区下段テラスとの遺構面の比高差は約4.1mを測る。前年度調査の第18トレンチで柱穴列を検出したことから、本調査を実施した。調査の結果、調査区の北西部から、掘立柱建物跡(SB58)1棟を検出した。遺構面は西から東にかけて傾斜し、低い東側に中世遺物を含む薄い包含層が存在した。

A3地区はA2地区の南東側下段に位置し、A2地区東端部との遺構面の比高差は約1.9mを測る。前年度の第16トレンチで奈良時代の河川跡SR16を検出したことから周辺部を拡張して本調査を実施した。検出遺構はSR16のほか、橋脚SX57、土坑SK75がある。SR16とSX57は奈良時代、SK75は平安時代後期～鎌倉時代に属する。

B1地区はA3地区の南側に位置し、約20m離れている。前年度に第13・14トレンチで柱穴を検出したことから拡張して本調査を実施した。多数の柱穴と土坑、素掘り溝を検出し、掘立柱建物跡と判断する2棟の建物跡(SB132・133)を検出した。遺構面は西から東に緩やかに傾斜し、西端部と東端部の比高差は約1.2mを測る。暗茶褐色砂質土層には奈良時代から鎌倉時代の土器を含み、調査区の東部で検出した。調査区西部は出土遺物も僅かで、後世の削平を受けていた。

D1地区はB1地区の東に位置する。前年度の第21トレンチで土坑と柱穴列を検出したことから、本調査を実施した。多数の柱穴が広範囲に存在し、掘立柱建物跡3棟(SB134～136)、柵列(SA03・24・30・44・57・85・136)を検出した。また、土坑(SK23・36)、井戸SE01、溝状遺構SX02等の遺構も検出した。遺構面は緩やかに東に傾斜し、東端部付近は後世に大きく削平を受けている。D1地区検出の遺構は平安時代後期から鎌倉時代に属している。

D2地区はD1地区の東に位置する。遺構面は緩やかに東に傾斜している。前年度の第10・11トレンチで柱穴、井戸、土坑を検出したことから、本調査を実施した。検出遺構には溝状遺構SX02、掘立柱建物跡(SB55)1棟、井戸(SE32・54)、土坑がある。D1地区検出の遺構は平安

時代後期から鎌倉時代に属している。

2) 検出遺構

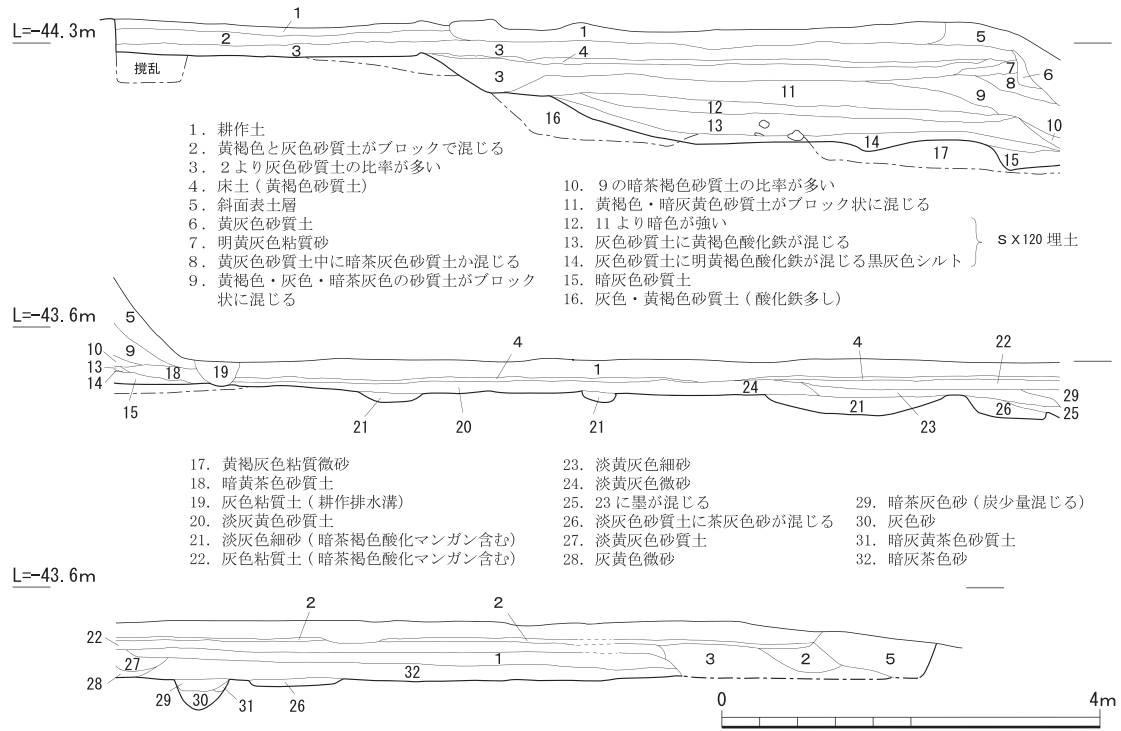
(1) A1地区

河川跡SR125(第4図) 丘陵裾部を南西から北東方向に、蛇行しながら緩やかに下る河川跡である。川幅は調査地西端部で5m、北東端で約8mを測る。深さは約1mで断面形は幅広な「U」字形を呈する。底部付近には黒色粘質土が厚く堆積(厚さ約0.6m)し、この土層中から縄文時代晩期の土器破片(第19図1~3)が出土した。土器の出土量は極めて僅かである。縄文土器以外では、SR125の南側河岸部の精査でサヌカイト製削器(第19図4)が出土した。

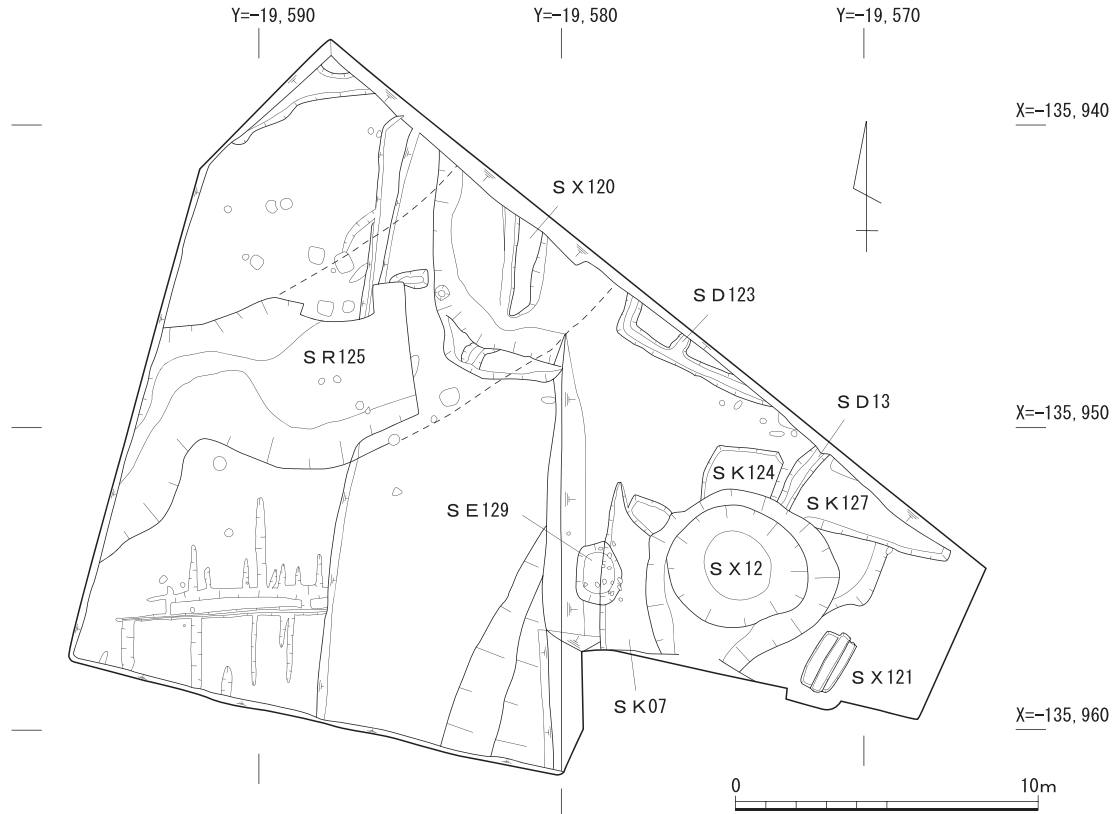
土坑SX12(第6図) 第9トレンチの調査で部分検出していた円形を呈する土坑である。北半部分の平面形は直径約7mの正円形を示すが、南部はやや西方向に溝状に延びる状況にある。円形に近い土坑底は丸みをもち、検出面からの深さは0.6mを測る。土坑南西部は調査地外に延び、土坑全体の形状が把握できないが、溝状の南西部は幅約2.7mを測り、底面は土坑中央の最深部から一段(約0.15m)上がっている。土坑底には約0.25mの厚さで暗灰色泥質土が堆積していた。常に滞水していたとみられることから、池状の施設であった可能性も考えられる。出土遺物には土師器皿(第19図9~11)、瓦器椀、火舎(第19図19)、瓦等がある。

土坑SK07(第4図) 土坑SX12と井戸SE129の埋没後に設けられた方形の土坑である。土坑南部は調査地外となることから全容は不明であるが、全長5.5m以上、幅約2.0m、深さ0.2mの規模を測る。埋土中から少量の瓦と火舎(第19図18)が出土した。

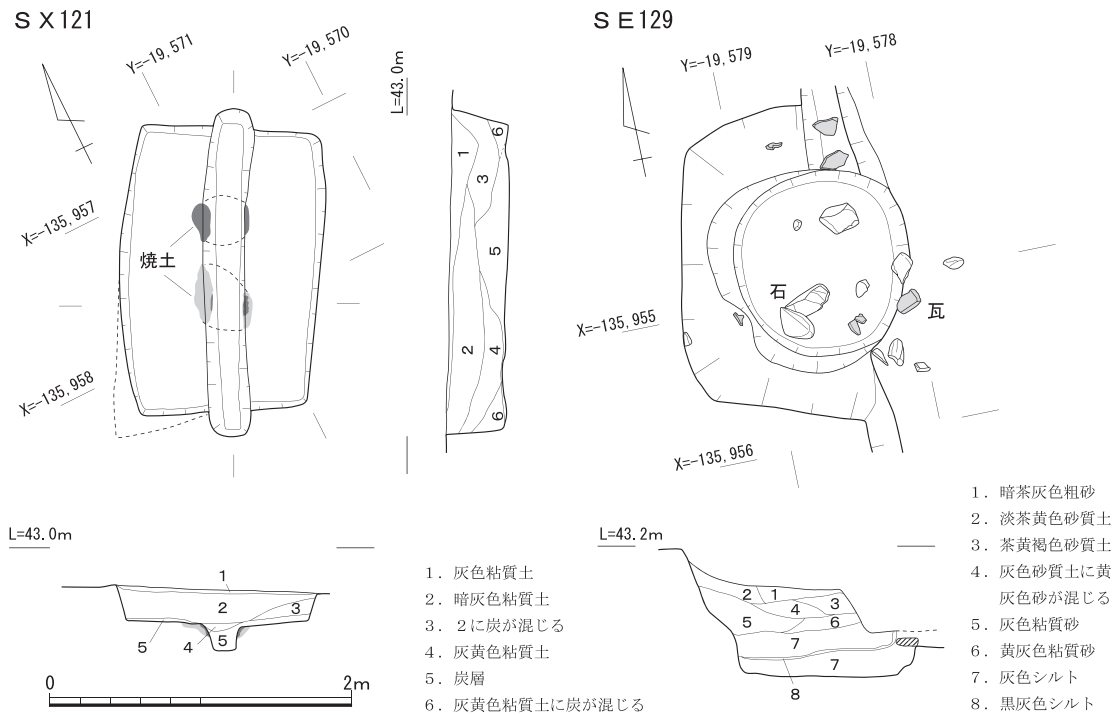
炉跡SX121(第5図) 円形土坑SX12の南東で検出した炉跡である。長方形を呈する土坑の底面中央に焼土が存在する。土坑の規模は全長約1.9m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。土坑底面の



第3図 下馬遺跡A1地区北東壁断面図

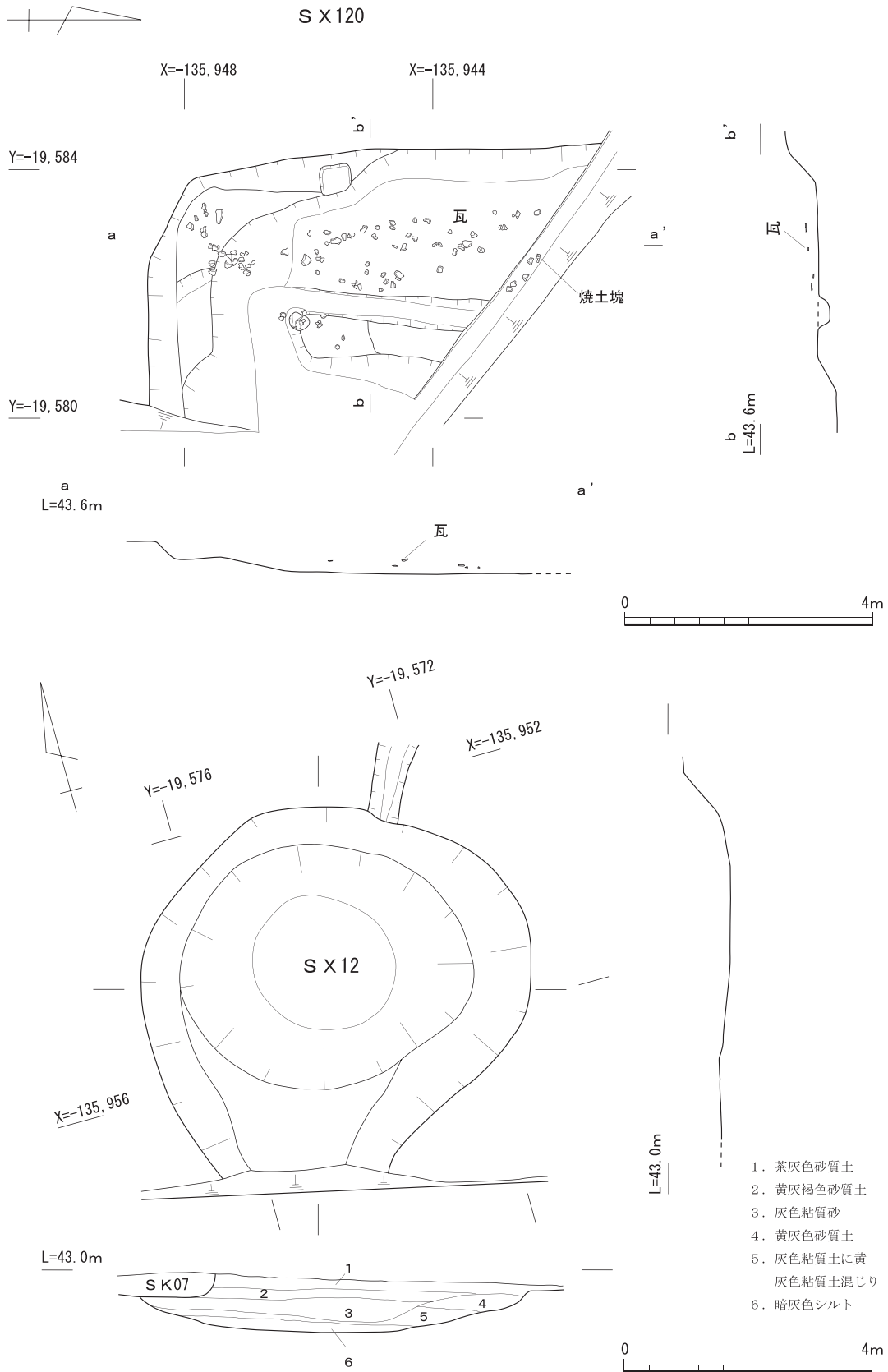


第4図 下馬遺跡A1地区遺構平面図



第5図 下馬遺跡A1地区炉跡SX121、井戸SE129実測図

中央部に2か所の炉跡が存在するが、炉跡は中央部が溝状の掘り込みで壊されていた。この溝状の掘り込みは土坑の中央を縦断し、両端部は土坑壁からそれぞれ0.2mほど突出している。溝幅0.25m、深さは土坑底から0.16mを測る。この溝の破壊から免れた炉跡の焼土の一部が溝の両肩



第6図 下馬遺跡A1地区瓦溜まりS X 120、土坑S X 12実測図

部に確認された。炉跡の焼土の広がりや円形とすると、2か所の炉跡(直径約0.3m)が推測される。この場合、2基の炉跡の心々間距離は約0.6mとなる。炉跡の中央部が壊されていることから、炉跡の中央部が連結するだるま型を呈していた可能性もあるが、詳細は不明である。土坑底には全体に黒色の炭・灰があり、炉跡を破壊した溝内にも炉跡の焼土の碎片を含んだ炭・灰が充満していた。このような状況から、ここでは炉の廃棄に伴って炉の中心部を溝で破壊し、その後土坑内で火を焚き、埋め戻したとみられる。炉跡の破壊と火を焚く行為は祭祀に関連したものと判断されるが、ここでは祭祀関連の遺物の出土はみられない。調査過程で埋土中から小さな角釘の破片が出土したことから、このS X121は鍛冶関連の炉跡の可能性が高い。また、土坑埋土から土師器皿、瓦器椀の破片が出土した。

瓦溜りS X120(第6図) A1地区西部の上段平坦面北端で検出した掘り込み状の遺構であり、多くの瓦が出土した。掘り込みは上段の東縁辺に設けられ、東側は壁がなく開放状況にある。掘り込みの北側は調査地外に延びることから、全容は不明である。検出範囲は西壁側で長さ6.5m、南壁が3.6m、西壁での深さは0.3～0.5mを測る。底面は調査地東側下段面から約0.3m高い位置にある。西側の壁面は急角度で立ち上がるが、南西部の壁面はやや緩やかな傾斜状況を示す。瓦は掘り込みの底面から0.05～0.1m遊離して出土し、南西部の壁面付近では斜面に貼り付く状況もみられた。出土遺物には、巴文軒丸瓦(第19図13・14)・唐草文軒平瓦(第19図15・16)を含む多数の平瓦と丸瓦のほか、土師器皿、羽釜等の土器(第19図5～8)がある。

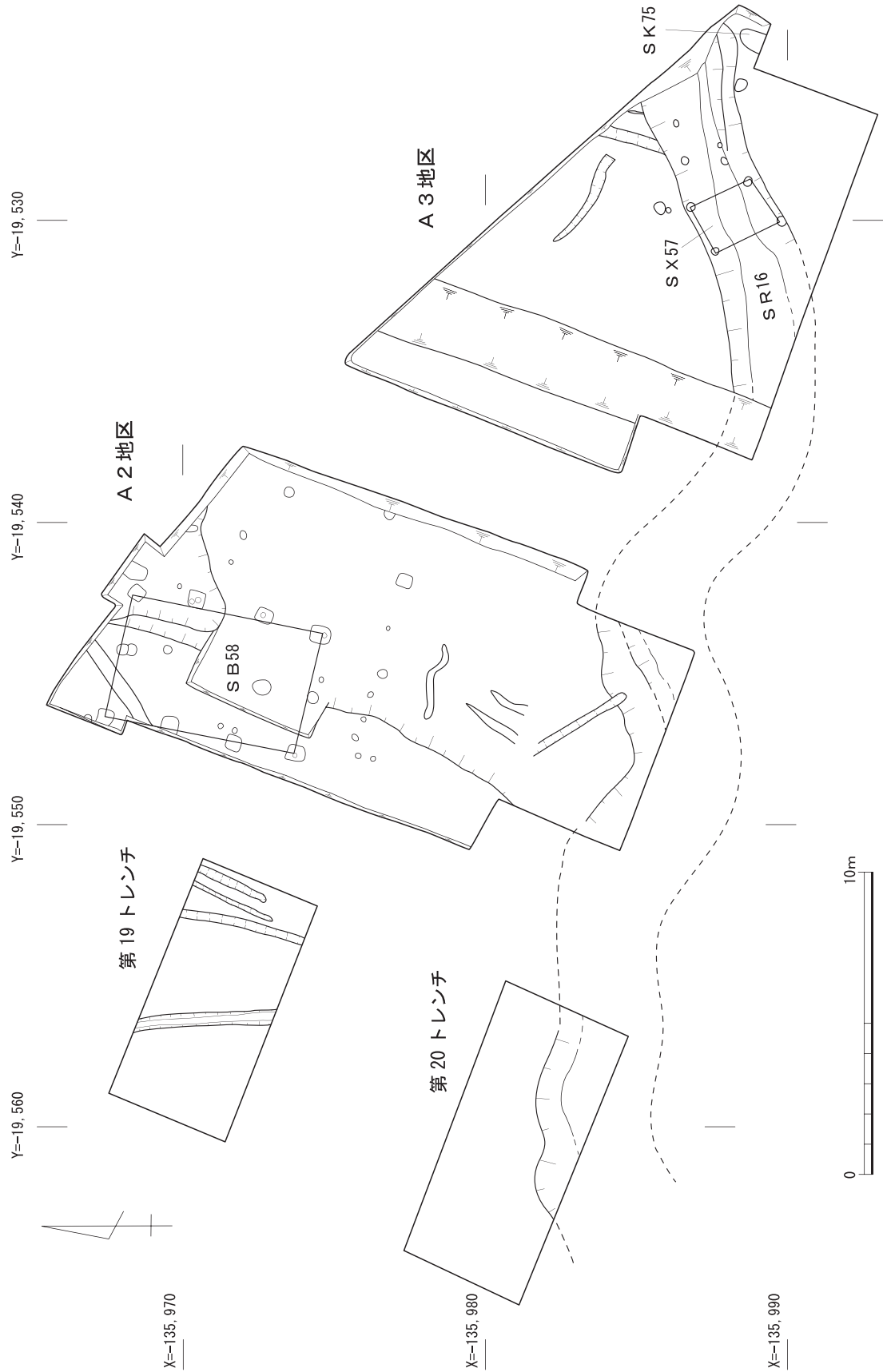
井戸S E129(第5図) A1地区中央部、下段テラスの南西端部で検出した井戸である。井戸の掘形は方形を呈し、井戸部分を円形に掘り下げている。井戸部分は直径約1.2m、深さは検出面から約0.9mを測る。掘形の一辺は約1.9mを測る。井戸底面に人頭大の石が数点みられたが、素掘り井戸と考えられる。井戸底には暗灰色泥質土が堆積し、瓦器椀が出土している。

溝S D123(第4図) 下段テラスS X12の北側で検出した素掘り溝である。溝幅約0.5m、深さは0.1mを測る。溝は西端部で「L」字に折れ、西端から東約2m付近で南北方向溝(6.5m以上)が東西溝に接続している。東西溝と2条の南北溝はそれぞれ東と北側が調査区外に延びることからその性格や全容については不明である。溝内には淡灰色砂が堆積し、瓦質播鉢(第19図12)が出土した。

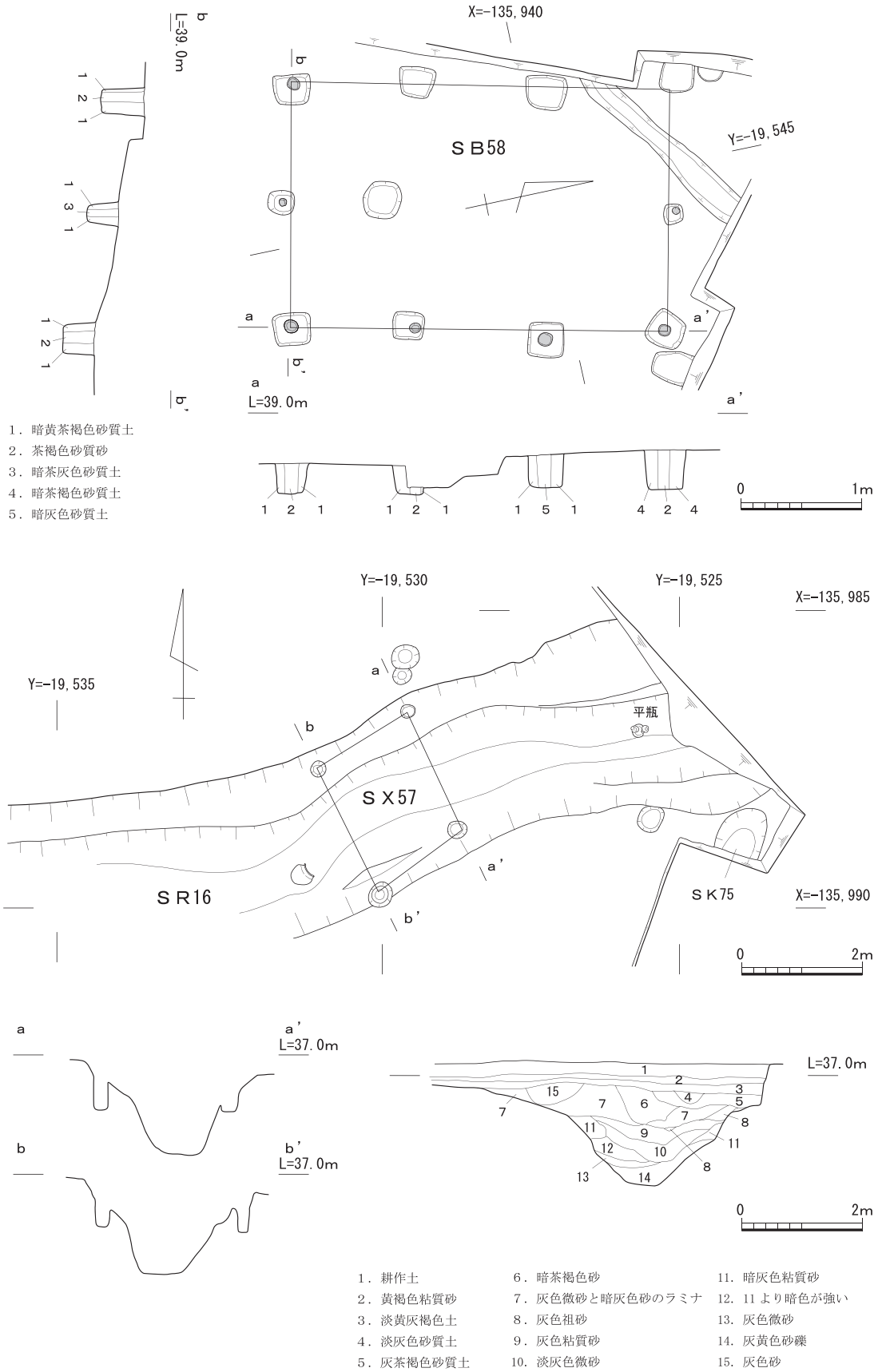
(2) A2地区

掘立柱建物跡S B58(第8図) 調査区北端で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行3間(約6.2m)×梁間2間(約4.0m)を測る。建物跡の方位は北から東に約12°振っている。柱穴は方形掘形と円形掘形が混在する。柱穴の掘形は0.3～0.4mの規模を測る。柱穴掘形の底面レベルは東側桁行柱列が西側桁行柱列に比べ低い位置にあり、遺構面の傾斜と同様の状況にある。これはS B58が傾斜地に建築された建物であり、建物内には床張りが行われていたと考えられる。調査区南側の第17トレンチで検出した河川跡S R16の北岸とS B58の位置関係は、S B58が北に約10m離れている。建物跡に伴う柱穴内から出土遺物はみられない。

(3) A3地区



第7図 下馬遺跡A2・3地区遺構平面図



第8図 下馬遺跡A 2・3地区掘立柱建物跡S B58、橋脚S X57実測図

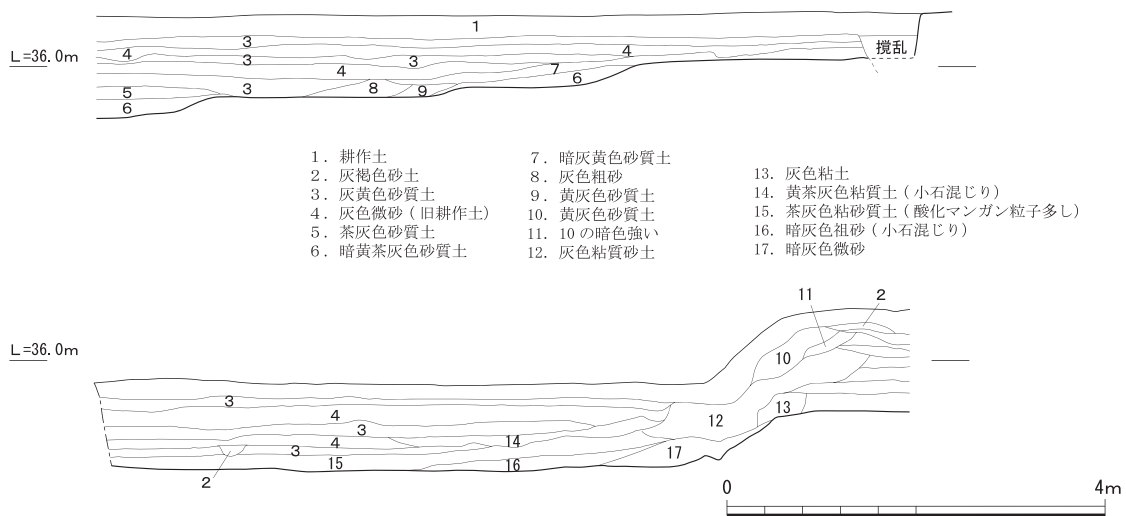
河川跡 S R 16(第8図) 調査区を南西から北東に横断する河道跡を検出した第16トレンチ検出分と合わせ、検出した長さは11mを測る。幅は約3m、深さは約1.5m、横断面は「V」字状を呈する。河道兩岸下部には暗灰色粘質土が堆積し、河道中央部底には礫混じりの粗砂が堆積していた。河道が埋没するにつれ河道中央部に粗砂の堆積が積み重なる状況は、流水量の変化が頻繁にあったことを表している。最下層の粗砂内を中心に河道堆積土中から、奈良時代後期の須恵器(第20図20～21・28～31)と土師器(第20図22～27)が出土した。このうち平瓶(30・31)は、橋脚 S X 57の下流約3.5m付近の川底から重なり合って出土した。

橋脚 S X 57(第8図) 河川跡 S R 16との関連性から橋脚と判断される遺構である。S R 16に直交する1間×1間で2列4個の柱穴を検出した。穴は底面が平坦であることから杭跡とは考えられず、柱穴と判断した。柱穴は河岸斜面に穿たれ、柱穴の間隔はa-b間が約1.8m、a-a'間が約2.1mの規模を測る。柱穴は円形で、直径は0.2～0.3mである。穴の深さは0.3～0.6mであるが、底面の位置はほぼ同一レベルに揃えている。

土坑 S K 75(第8図) 調査区の東端部、S R 16右岸部で検出した土坑である。部分検出であり、掘形は円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。幅約0.7m、深さは約0.3mを測る。土坑埋土の茶灰色粘質土から瓦器碗の破片が出土した。

(4) B 1 地区

掘立柱建物跡 S B 132(第10図) 調査区の北東端で検出した南北棟の掘立柱建物跡であり、掘立柱建物跡 S B 133と重複している。S B 132は2間×4間の規模と推測されるが、建物東部が調査区外に位置することから、建物跡の全容については不明である。建物跡西側の桁行柱列の4間は心々間で約9.7mを測る。1間の間隔は約2.4mである。東西の梁間は、南側妻部が1間約1.5mを測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、一辺ないし直径が0.4～0.5m、深さは約0.4mを測る。柱穴埋土は茶褐色砂質土であるが、時期を特定する遺物の出土がみられない。S B 132の主軸は北から東に約18°振っている。



第9図 下馬遺跡B1地区南壁土層図



第10図 下馬遺跡B1地区遺構平面図

掘立柱建物跡SB133(第10図) 2間×3間の掘立柱建物と推定されるが、建物跡の東部が調査区外に位置することから、詳細は不明である。桁行3間の全長は約6.1m、梁間は1間約1.4mの規模を測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、一辺ないし直径が0.3～0.5m、深さは約0.3mを測る。建物跡西側の桁行柱列がSB132西側柱列とほとんど重複することから、SB133とSB132は建て替え関係にあるとみられる。各柱穴に切り合いが無いことから建物の先後関係は不明である。建物跡の方位は北から東に約16°振る。

柱穴検出作業中、遺構の特定はできないが、周辺部から第21図34～36の須恵器が出土している。確証を得ることができないが、建物跡の年代を示す可能性のある遺物である。

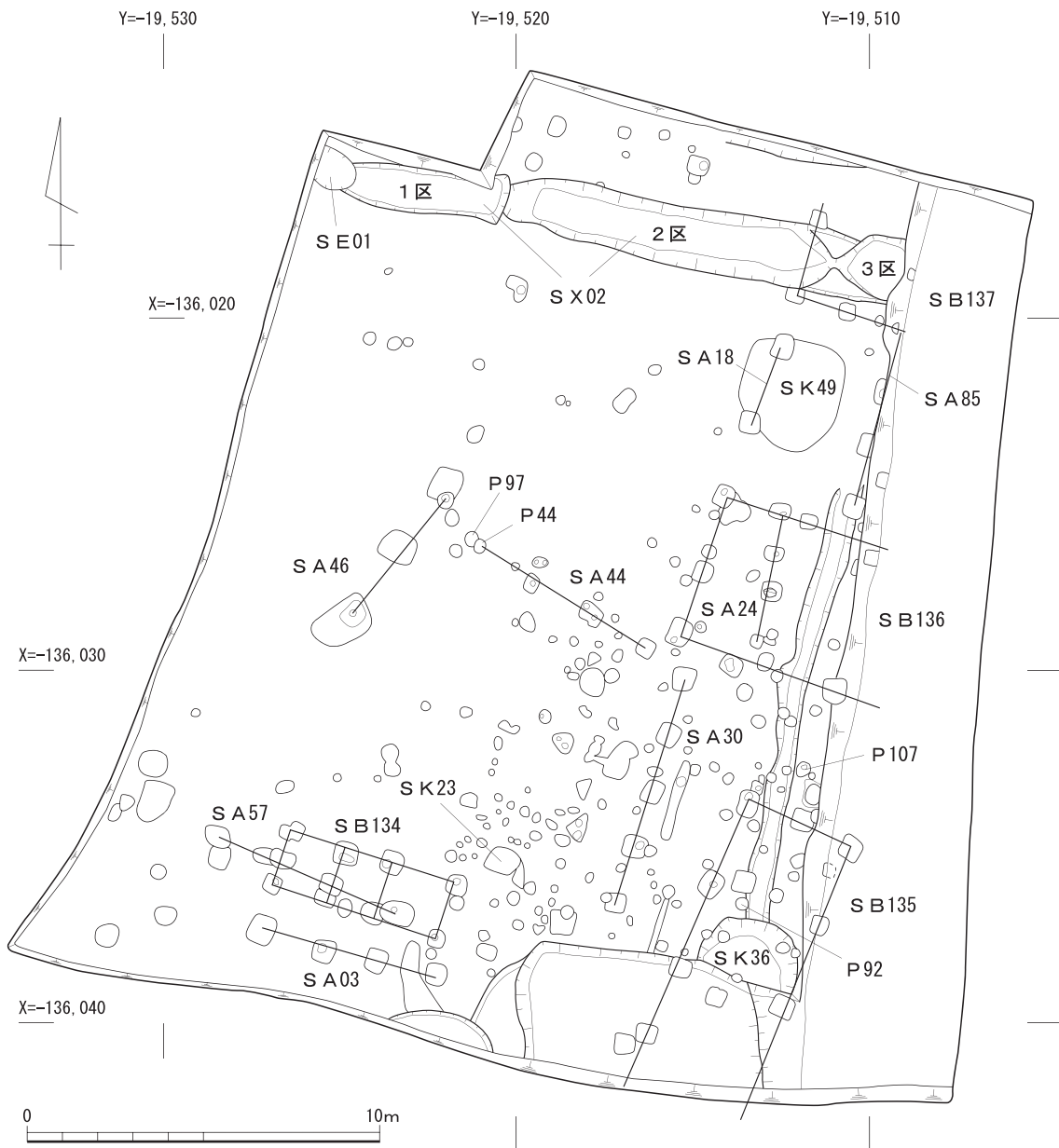
溝SD80・83(第10図) 掘立柱建物SB132・133の西側やや離れた位置で検出した溝跡であり、SD83がSD80を切っている。この2条の溝は、幅約0.25m、深さ約0.05mを測る素掘り溝である。溝の埋土は茶褐色砂質土である。SD80から杯A(第22図67)の出土をみた。また、SD83では、第21図32・33にみる奈良時代後期の土師器皿と須恵器杯Bの出土をみた。

建物跡の柱間列とは1m前後の間隔がある。建物の軒下雨落ち溝の可能性も高く、位置関係からSB132とSD80、SB133とSD83がそれぞれ対応すると考えることもできる。

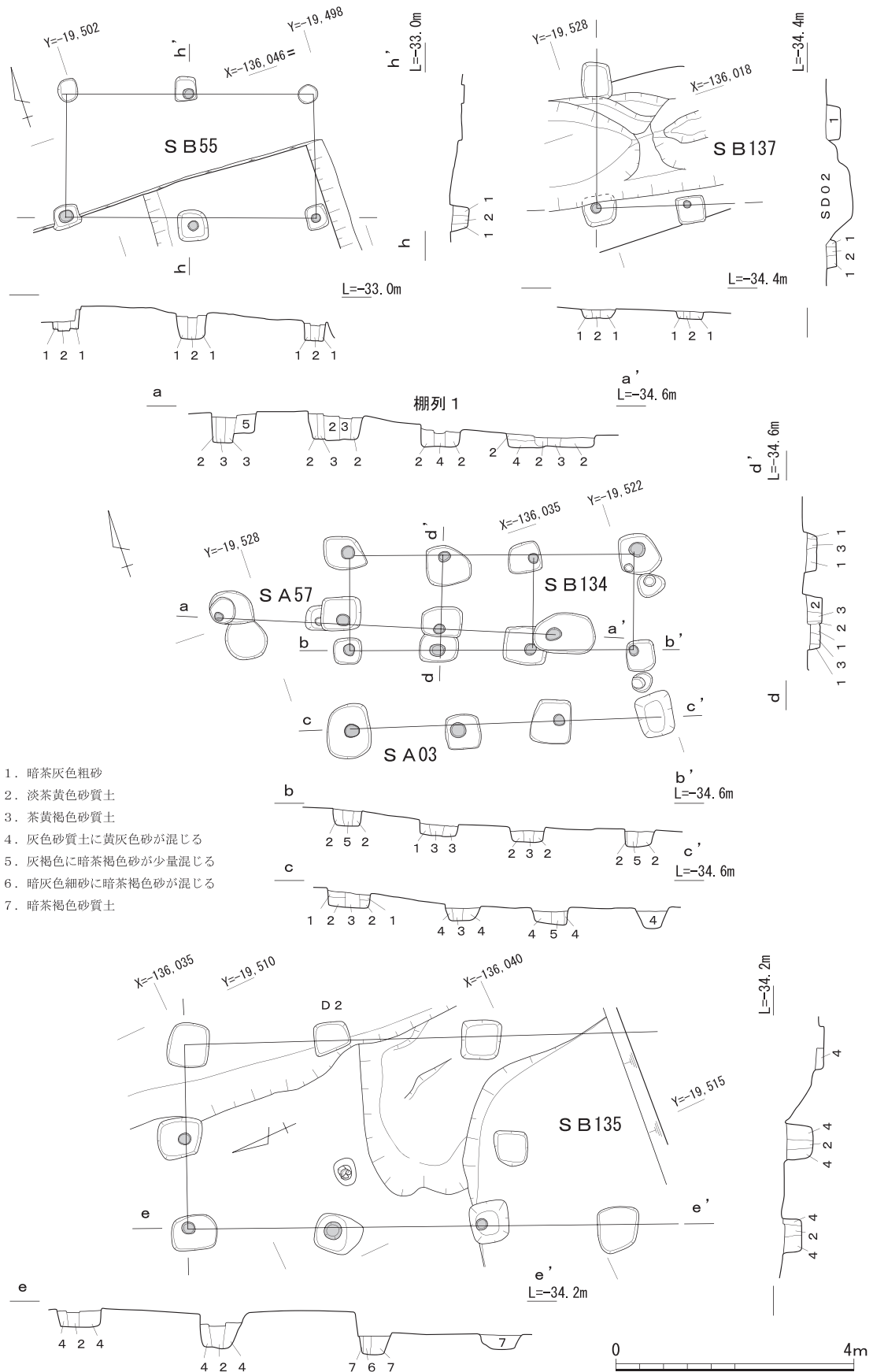
柱穴群(第10図) 調査区の中央から南部にかけて多数の柱穴の分布がみられた。多くの柱穴は直径が0.2～0.3mで、深さも0.1～0.3mとばらつきがみられる。一部の柱穴から中世段階の土器が出土している。建物に伴う柱穴も存在するとみられるが、建物の復原はできなかった。

土坑 S K 95 調査区南端で検出した土坑である。遺構の南部は調査区外に延び、全容が不明である。検出範囲にみる土坑の形状は、西壁側がやや弧を描くのに対し、北壁は直線的である。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面は水平に近く、埋土は暗灰色粘質砂である。全長約6m、調査区南壁での深さは検出面から約0.2mを測る。埋土中から瓦器椀(第21図37)のほか、須恵器、土師器の出土をみた。

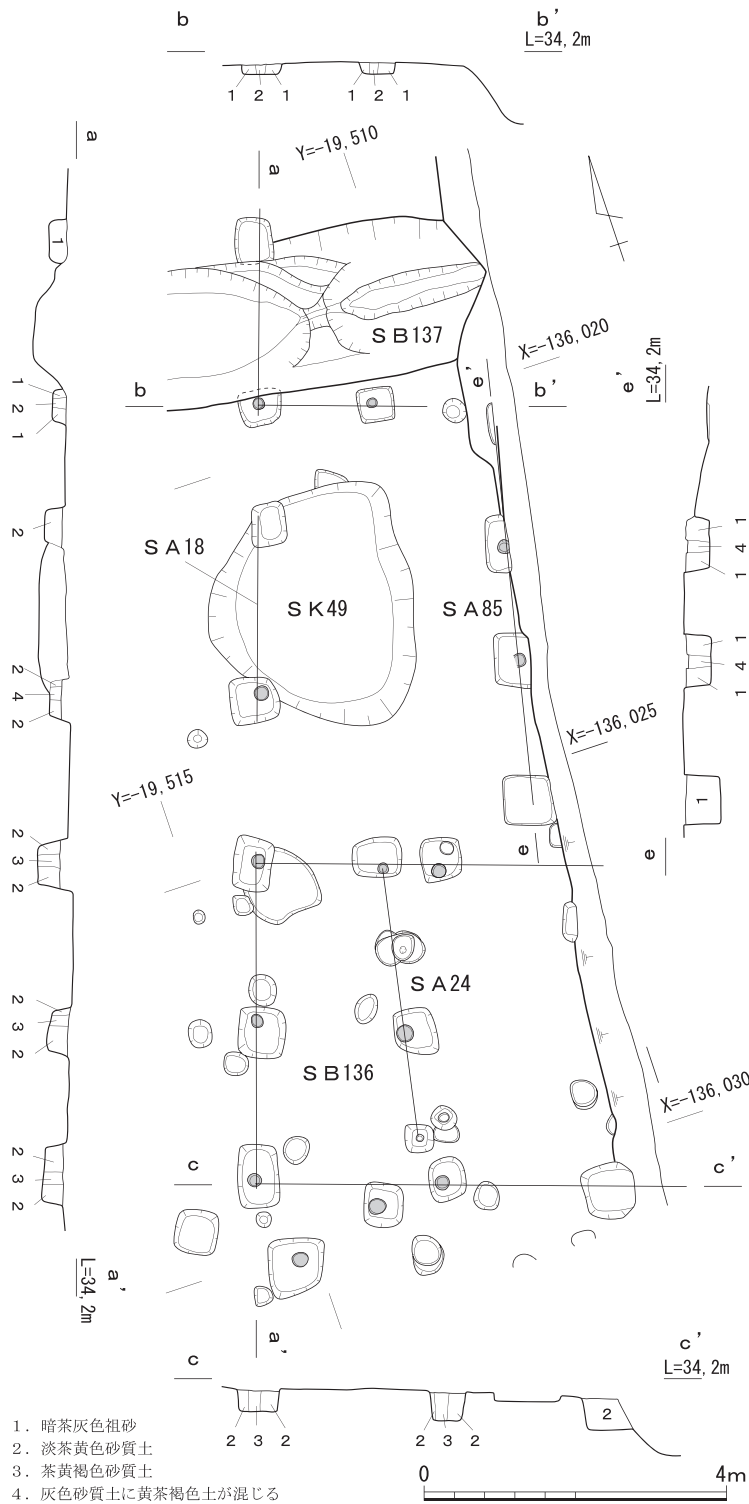
土坑 S K 82(第10図) S B 133の西側で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長さ2.1m、幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色砂質土であるが、遺物の出土はみられない。



第11図 下馬遺跡D 1地区遺構平面図



第12図 下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡SB55・134・135・137実測図



第13図 下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡S B136・137、
 柵列S A18・24・85実測図

素掘り溝群 調査区の中央部付近に小規模な溝が多数存在した。溝幅は約0.2～0.3m、深さは0.1m前後である。埋土は茶灰色砂質土で、瓦器や土師器の小破片が出土した。

(5) D1地区

多数の柱穴、掘立柱建物跡、柵列、井戸、土坑を検出した。

掘立柱建物跡S B134(第12図) 調査区の南東部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物規模は東西3間(4.8m)×南北1間(1.7m)を測る。東西の桁行柱間は1間約1.5mの等間隔を測るが、東端の1間のみ1.7mでやや長い。柱穴の掘形は方形であるが、不整形なものも存在する。柱穴の規模は一辺が0.5～0.7m、深さ0.3m前後を測る。S B134の方位は北から東に約18°振る。梁間が1間であることから、片屋根の建物とみられる。S B134は、当初、建物跡南側から検出した柵列S A03を含めて2間×3間の総柱建物跡と考えていた。しかし、調査を進める過程で方位と柱間隔の相違が明らかとなり、S B134とS A03は別の遺構と判断した。

掘立柱建物跡S B135(第12図) 調査区南東で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物規模は梁間2間(約3.0m)×桁行3間(約7.2m)以上を測る。桁行は建物跡の南部が調査区外に延びることから、全長は不明である。桁行柱穴は1間が2.4mの等間隔を測る。建物跡S B134とは東に約6m離れた位置関係にあり、S B135の主軸方位は、北から東に約23°振る。柱穴掘形は方形



第14図 下馬遺跡D 1地区柵列 S A 30・44・46実測図

で、一辺約0.7m、深さは深いもので約0.6mの規模を測る。柱穴埋土は暗茶褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 136(第13図) S B 135の北側で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の東部は、後世の大規模な削平を受け失われている。建物跡は、西端から東に桁行3間(約4.8m)以上、南北の梁間は2間(4.3m)の規模を測る。柱穴の掘形は方形と長方形プランで、一辺約0.5～0.9m、深さ約0.4m前後の柱穴が多数を占める。建物跡の方位は、南西に位置する S B 134と座標軸が同一であり、関連性が認められる。S B 134と S B 136の位置関係は、S B 134東端から S B 136西端間は約3.6m、S B 134北端から S B 136南端間が約8.8m離れている。

掘立柱建物跡 S B 137(第13図) 調査区北東部で検出した掘立柱建物跡である。検出範囲は建物跡南西角を基点に、南北1間(2.1m)×東西1間(1.5m)分である。柱穴の掘形は方形プランで、一辺約0.5m、深さ約0.15mを測る。建物跡の方位は S B 134・136と同じで、北から東に約18°振っている。S B 137と S B 136の位置関係は、建物跡の間隔が南北で約6.0mを測り、S B 136の西側梁間柱穴列と S B 137の西側桁行柱列が同一線上に乗る。

柵列 S A 03(第12図) 調査区南西の掘立柱建物跡 S B 134の南側で検出した柵列である。S A 03は東西3間で全長約5.3mを測る。S B 134とは方位がやや異なり、北から東に約16°振る。S

B134との方位差は約 2° である。S A03の西端はS B134の西端梁間と軸線を合致させるが、東端の柱穴はS B134東側梁間軸線から東に出ている。S B134との間隔も西端で約1.5m、東端では約1.0mと間隔が狭くなる。柱穴掘形は方形プランで、一辺約0.5mで深さは約0.3mを測る。

柵列S A18(第16図) 柵列S A85の西側に位置する南北1間(2.4m)の柵列である。掘立柱建物跡S B136とS B137の西側梁間柱穴列を結ぶ直線上に乗り、両建物跡とはほぼ等間隔にある。S A85とは約3.3mの間隔が開き、S B136・137の建物跡との関係から、建物間には南北約6.0m×東西2.4mの方形の空間が存在するようである。奈良時代の土坑S K49を切っている。

柵列S A24(第13図) 調査区の中央東部、掘立柱建物跡S B136に重複して検出された、南北方向の柵列である。柵列は4間(約5.2m)の規模を測り、方位は北から東に約 12° 振る。S B136の柱穴と切り合いが無く、S B136との先後関係は不明である。柱穴規模は一辺約0.5m、深さ約0.3mである。

柵列S A30(第14図) 調査区の南東部、掘立柱建物跡S B136の西端からやや南に下って検出された柵列である。南北方向に延びる柵列は4間で、全長は約6.8mを測る。柱間はほぼ1.7mの等間隔である。柱穴掘形は方形プランで、一辺約0.6m、深さ約0.5mを測る。柱穴埋土は暗茶褐色砂質土である。柵列の方位は掘立柱建物跡S B134・136とほぼ同一である。S A30の南端はS B134北東角から東に4.2m離れた位置に当たる。

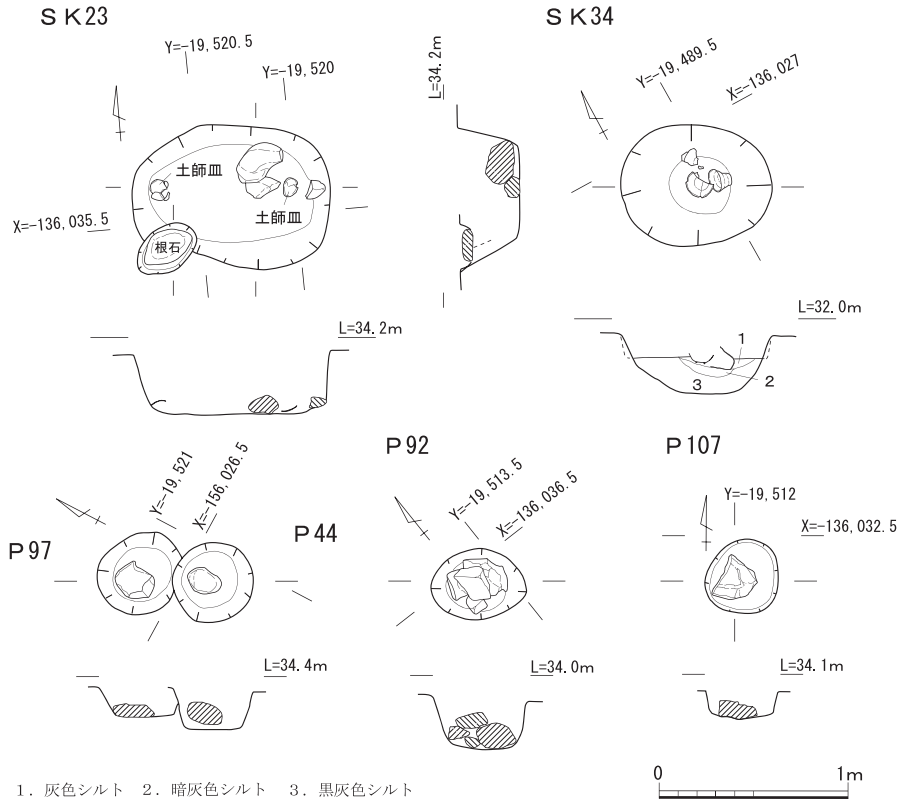
柵列S A44(第14図) 掘立柱建物跡S B136の南西部で検出した柵列である。柵列は北西から南東方向に延び、全長は3間(約5.5m)の規模を測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、規模は0.3～0.5mであり、柱穴間は約1.9mの等間隔である。柵列の方位は北から東に約 32° 振る。

柵列S A46(第14図) 調査区中央のやや西で検出した南北方向の柵列で、2間(2.4m)の規模を測る。柱穴掘形は方形で、一辺約0.9mである。深さは0.15mと浅い。柵列の方位は東側に隣接するS A44と同じく北から東に約 32° 振る。

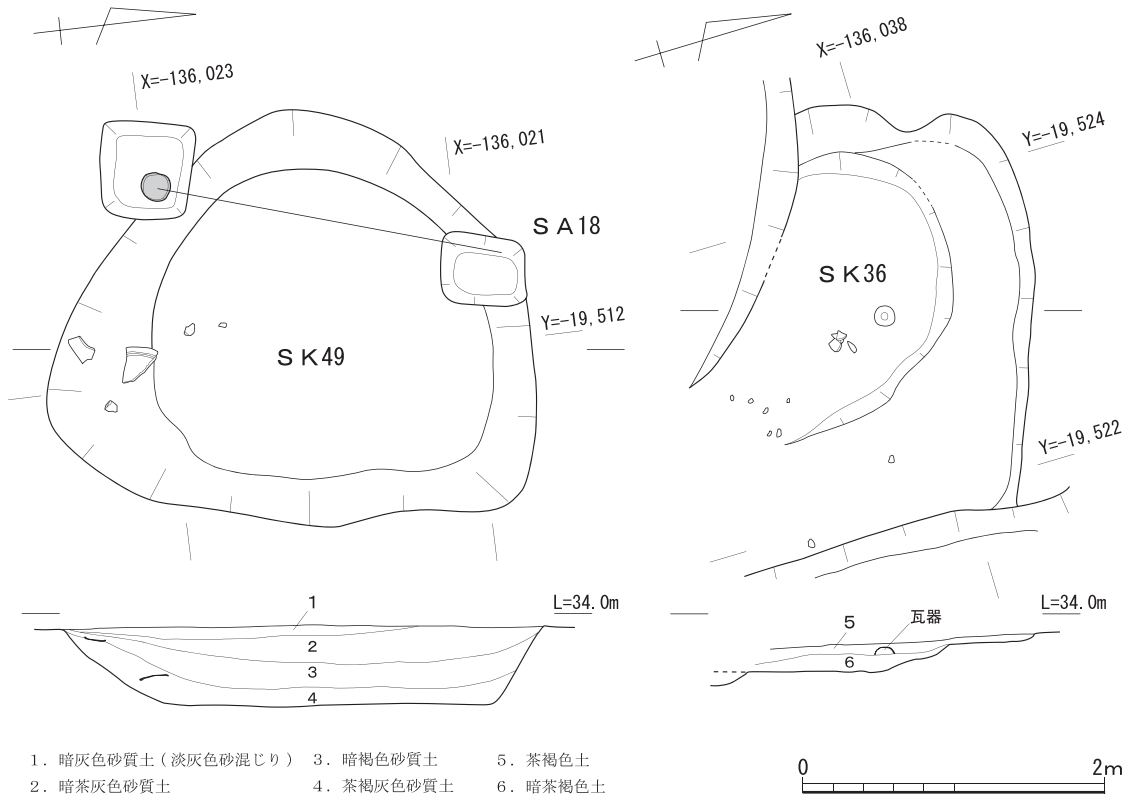
柵列S A57(第12図) 掘立柱建物跡S B134と重複する東西方向の柵列であり、S B134の柱穴に切り勝つ。柵列は4間(約7.6m)の規模を測り、柱穴間隔は1.8～2.0mを測る。柱穴は方形プランで、0.6～0.8mを測る。深さは0.6m前後である。柵列の方位は北から東に約 22° 振る。

柵列S A85(第13図) 掘立柱建物跡S B136とS B137の間から検出した柵列である。S A85は3間(約5.0m)の規模を測る。柵列の北部は後世の攪乱で延長部を確認できないが、S B137と同時期の柵列ならば、S A85はS B136とS B137の間にそのままおさまる状態にある。

溝状遺構S X02(第11図) 調査区の北端で検出した東西方向に直線的に延びる遺構である。遺構の東端部は東側に隣接するD2区まで及んでいる。この遺構は検出時点では形状や埋土の状況から溝とみていたが、溝を横断する土手を各所に設けている状況から、水を溜めることを目的とした遺構であることが判明した。S X02はD1区とD2区間が確認できないが、全長約30.2m、幅1.5～1.8mの規模を測る。S X02はおよそ5区画(1～5区)に仕切られ、区画の土手部分にはそれぞれに水口が存在する。S X02の各区画の長さは、西から順に第1区が約4.5m、第2区が約9.5m、第3区が約9.5m、第4区が約3.0m、第5区が約3.4mである。第3区と第4区間には土



第15図 下馬遺跡D1地区土坑S K 23・34、柱穴P 44・92・97・107実測図



第16図 下馬遺跡D1地区土坑S K 36・49実測図

手が確認できないが、第4区は底面が大きく掘り下げられている。各区画の底面は平坦であるが、東に向かって緩やかに傾斜している。この傾斜は周囲の遺構面の自然傾斜と同じくしている。SX02の西端部には井戸SE01が存在する。SE01から汲み上げられた水は、第1区から第5区までかけ流しで水を溜めていたとみられる。東端の第5区の東壁はほぼ垂直に立ち上がって終わる。第1区から第3区までの深さは概ね0.3～0.4mであるが、第4区と第5区は約0.6mと深い。また、第4区と第5区では下層に暗灰色シルトが堆積し、常に滞水していた状況が窺える。主軸の方位は東から南に約10°振る。出土遺物では、第2区から瓦器椀(第21図57)と杯B(第21図58)の出土をみたほか、第5区から土師器皿・甕、瓦器、青磁(第22図86～90・94)の出土がある。

井戸SE01(第11図) SX02に関連する素掘りの井戸であり、SX02の西端部高所側に位置する。直径約1.0m、深さ約0.6mの規模を測る。井戸内には暗灰色粘質土が堆積し、現在も底面からの湧水が認められた。井戸内からは瓦器の出土がみられた。

土坑SK23(第15図) 掘立柱建物跡SB134の北東で検出した楕円形プランの土坑である。長さ約1.0m、幅約0.7m、深さ約0.3mである。土坑底は平坦で、10～20cm大の石3個のほか、土師器皿4点(第21図38～41)が出土した。土師器皿はそれぞれ2点がセットとなり、土坑底の東西に分かれて出土した。埋葬施設の可能性も考えられる。

土坑SK36(第16図) 調査区南東部、建物跡SB135と重複して検出した方形とみられる土坑である。土坑の東部と南部が後世の攪乱で失われ、全容は不明である。東西約2.6m以上×南北1.5m以上とみられる。底面は2段に下がり、2段目の上場は弧を描く。検出面からの深さは0.2mであり、埋土中から土師器皿と瓦器(第21図42～53)の出土をみた。

土坑SK49(第16図) 前年度の第21トレンチ調査で検出していた土坑である。埋土中から飛鳥時代とみられる移動式竈が出土している。

柱穴P44・92・97・107(第15図) これらは底面に根石が存在した柱穴である。いずれも柱穴プランは円形で、直径約0.4m前後の規模である。20cm程の平らな石を1個使用するが、P92は大小4個の石を底に充填している。P44は柵列SA44を構成する柱穴の1基である。

(6)D2地区

D1地区から東に続く溝状遺構SX02の、第4区と第5区が調査区の北西に存在する。そのほか、主要な検出遺構として、掘立柱建物跡1棟、井戸2基、溝、土坑2基等がある。

掘立柱建物跡SB55(第12図) 調査区南西で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物規模は東西2間(約4.2m)×南北1間(約2.1m)を測る。柱穴プランは方形と円形が混在し、規模も0.3～0.5mである。SB55の方位はD1地区のSB134と同じで、両建物跡の間隔は約20mである。

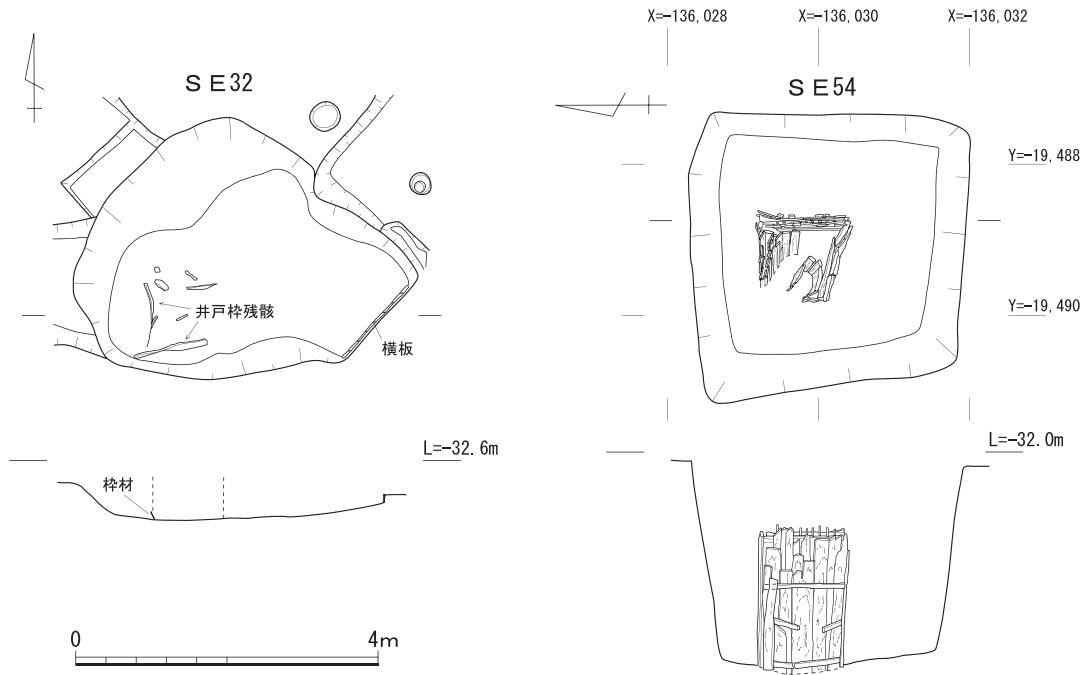
井戸SE32(第18図) 調査区中央北部、第11トレンチ調査で一部を検出していた井戸跡である。不定形な井戸掘形は、一辺約3.5m、深さ約0.5mの規模を測る。方形の井戸枠の残骸が、掘形の南西に存在し、最下段の横板が部分的に残っていた。掘形は元は円形とみられるが、掘形の北東部は方形的に突出する。東端部では掘形壁面に薄い板材が土留め状に設置されていた。この板材は長さ約1.3m、幅0.1mを測る。土留めの板材はSE32の造り替えがあったか、別の遺構に



第17図 下馬遺跡D2地区遺構平面図

伴うものか判別ができない。埋土は灰色の砂質土と粘質土が混在し、切り合い関係を示す痕跡は確認できなかった。埋土中から瓦器、土師器皿(第22図80～85)が出土した。

井戸SE54(第18図) 調査区の中央付近で検出した4本柱縦板横棧止めの井戸である。井戸掘形は方形プランで、一辺約3.6m、深さ約2.7mを測る。井戸枠は掘形中央からやや北西側に偏った位置にあり、一辺約1.1mの規模を測る。井戸枠の縦板には大小様々な板材が使用されており、底から約2.0mまでが残っている。土圧により北側と南側の枠材が井戸中央まで押し寄せられていた。四隅の柱は一辺約10cmの角材が使われている。また、上下約0.5m間隔で渡された横棧には、約6cm角の角材が使われていた。隅柱と横棧は柄と柄穴で固定されている。井戸枠の西側と南側の縦板には厚さ約3cmの板が多数使用されていたが、東側と北側の縦板には厚さ約5mmの薄い板材数十枚を幾重にも重ねていた。この薄い板材は幅12cm前後の板が多数を占め、長さも1.2～2.0mを越えるものもある。板材の上端は斜めに切られるものも多く、元の板材は更に長いものもあったとみられる。また、格子形の組物も縦板内に存在したことから、井戸枠には建築部



第18図 下馬遺跡D 2地区井戸S E 32・54実測図

材を再利用したと考えられる。井戸底は平坦で特に変化は認められない。掘形埋土は灰色系の粘土と砂質土であり、瓦器、土師器皿、白磁、蚊遣り(第22図91～93・95・96)が出土した。

土坑S K 09(第17図) 調査区中央で検出した楕円形を呈する土坑である。長さ約2.1m、幅約1.2m、深さ約0.2mの規模を測る。底面は平坦で、埋土は暗灰黄色の砂質土である。埋土中から土師器皿(第22図78・79)が出土した。

土坑S K 30(第17図) 調査区北西部で検出した円形の土坑である。前年度の第11トレンチで一部を確認しており、直径約1.5m、深さ約0.25mを測る。瓦器と土師器の破片が少量出土した。

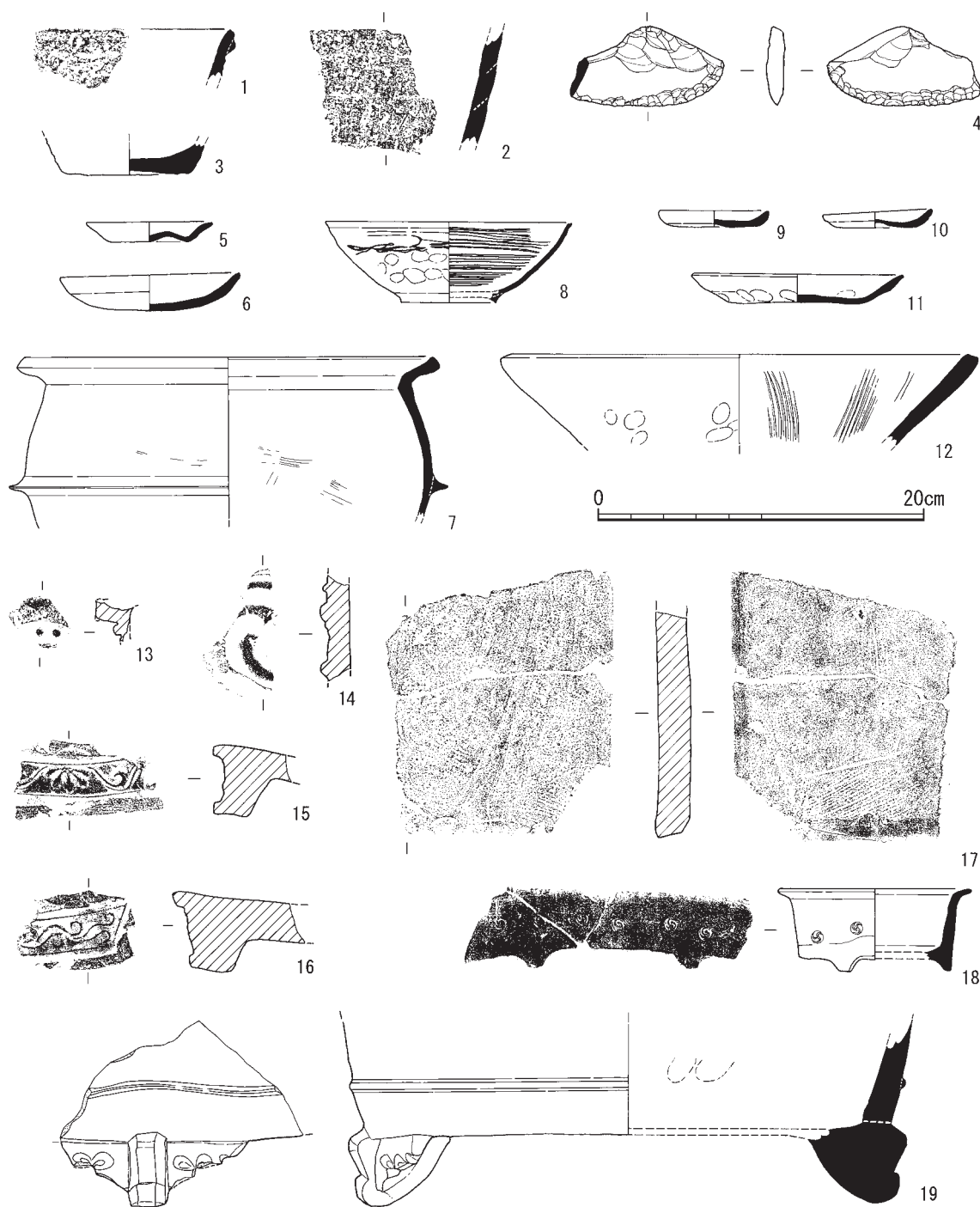
土坑S K 34(第15図) 第11トレンチ調査で検出していた土坑であり、井戸S E 54の北側に位置する。掘形は楕円形を呈し、長さ約0.8m、幅約0.6m、深さ約0.3mの規模を測る。土坑底は丸底である。土坑内埋土は下層に黒色シルト、上層には暗灰色砂が堆積する。この上層の下面付近から瓦器椀、土師器鉢が出土した。

土坑S K 69(第17図) 調査区の中央付近で検出した。落ち込みS X 01によって土坑の北部が切られる。残存長は約0.8m、幅0.7m、深さ0.15mの規模を測る。坑内から瓦器(第22図78・79)が出土した。

溝状落ち込みS X 01(第17図) 調査区の中央から東部にかけて、幅約3.5～5.0m、深さ約0.4mの溝状遺構を検出した。遺構は不定形に曲がりくねり、周壁の立ち上がりは急である。溝としては上流となる西側に遺構が続かず壁面の立ち上がりも不自然である。今回の調査では、このS X 01は大規模で不定形な落ち込み遺構として認識される。埋土は暗灰色・灰色の砂質土が堆積し、瓦器、土師器皿(第22図64・65・68・70～77)などが出土した。

3) 出土遺物(第19～22図)

今回の調査では、整理コンテナ38箱の遺物が出土した。平成21年度調査分が28箱で、平成22年

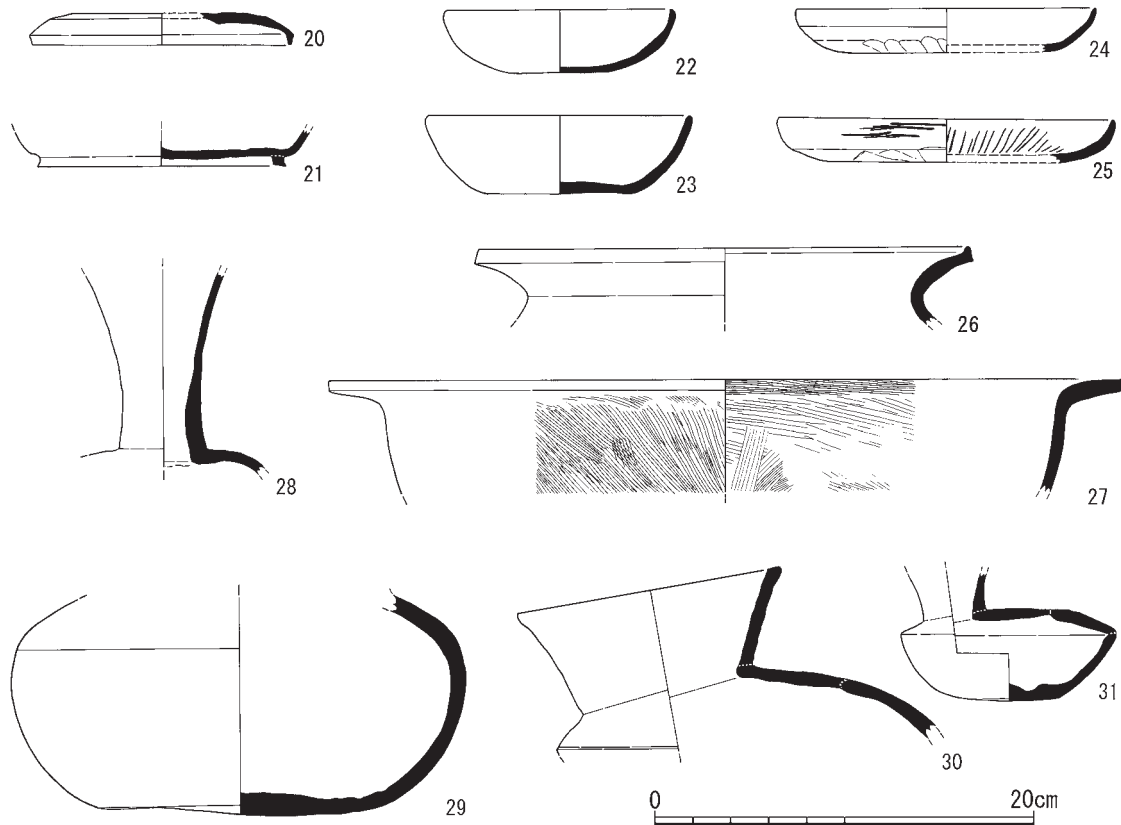


第19図 下馬遺跡A1地区出土遺物実測図

度前半期調査分が10箱である。出土遺物には縄文土器、石器のほか、大多数は奈良時代から室町時代にかけての土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦である。

(1) A1地区出土遺物(第19図)

1～3は、A1地区SR125から出土した縄文晩期の土器である。1は外面口縁部直下に刻み目を入れた突帯を巡らせる。4は、SR125の南岸の遺構面精査で出土したサヌカイト製の石匙である。下端の刃部は両面調整である。



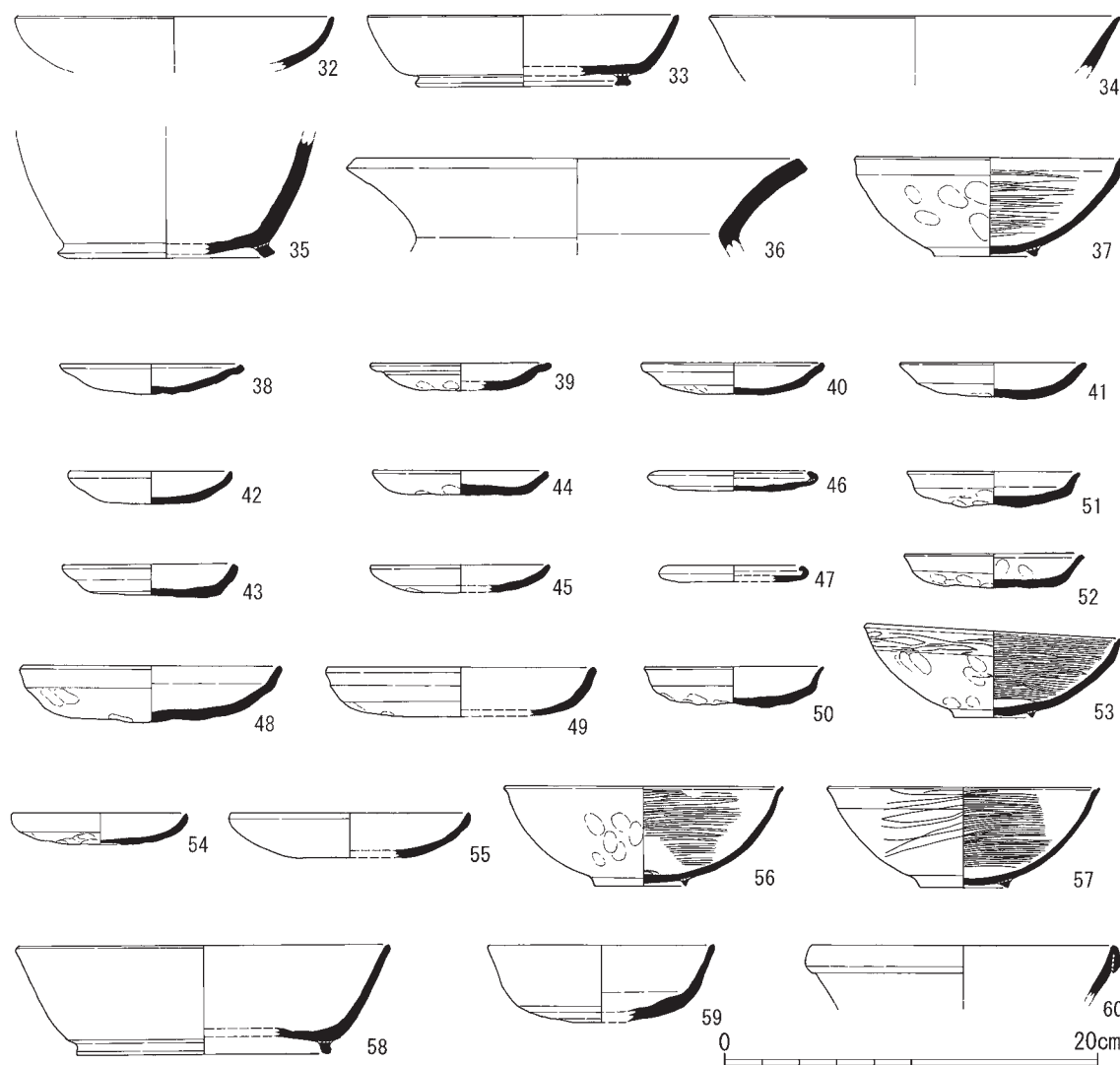
第20図 下馬遺跡A3・B1地区出土遺物実測図

5～19は、A1地区の各遺構から出土した14～15世紀の年代観の土器と瓦である。5～7は、瓦溜りS X120から出土した土師器皿(5・6)と土師質羽釜(7)である。8～12・19は、土坑S X12から出土した瓦器椀(8)と土師器皿(9～11)、瓦質播鉢(12)・火舎(19)である。火舎は縁飾りを施す短脚が付く。13～17は、瓦溜りS X120から出土した軒丸瓦(13・14)・軒平瓦(15・16)・平瓦(17)である。出土した軒丸瓦はすべて巴文である。2点の軒平瓦は均整唐草文軒平瓦である。18は、土坑S K07から出土した土師質の火舎である。口縁は短く外反させ、底部3か所に短い短脚が付く。口径11.9cm、器高5.0cm、脚高は0.8cmである。体部外面には不規則ながらも三つ巴文を巡らしている。この巴文は印刻で、直径は0.8cmを測る。

(2) A3・B1地区出土遺物(第20図・第22図67)

20～31はA3地区の河川跡S R16から出土した遺物である。須恵器蓋(20)・杯B(21)、土師器椀(22・23)・皿(24・25)・甕(26)・鍋(27)、須恵器壺(28・29)・平瓶(30・31)などがあり、いずれも8世紀後半の年代観をもつ土器である。

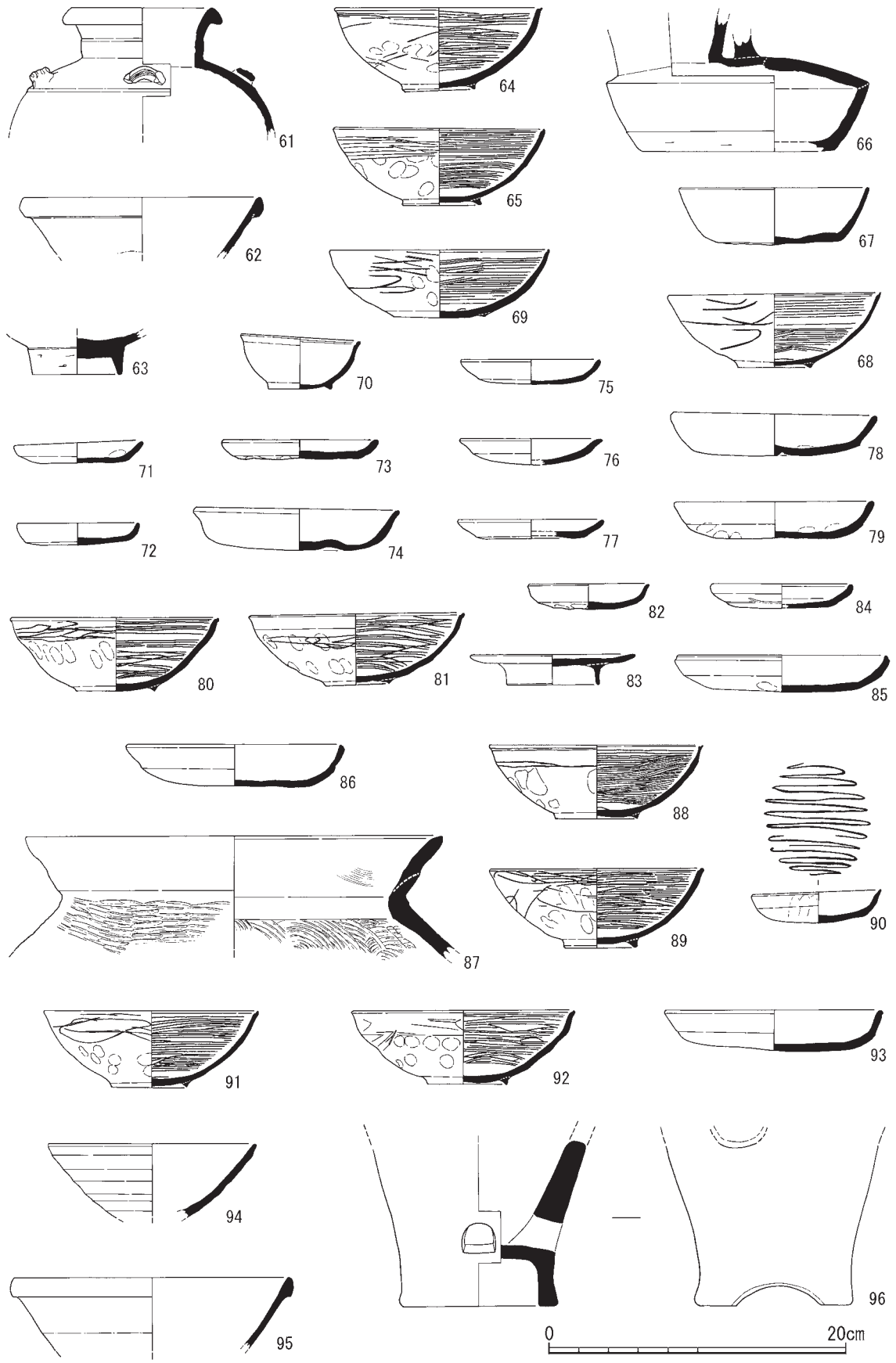
32～37・67は、B1地区の各遺構や包含層から出土した遺物である。土師器皿(32)と須恵器杯B(33)は、溝S D83から出土した。年代観は8世紀後半を示す。37は、12世紀後半の大和型瓦器椀と考えられ、S K95から出土した。67は、溝S D80から出土した8世紀後半の須恵器杯Aである。34～36は、調査区北東部に位置する拡張区の遺構面精査で出土した土器である。須恵器杯(34)・壺(35)・甕口縁(36)がある。



第21図 下馬遺跡D1地区出土遺物実測図

(3) D1地区出土遺物(第21図)

38～60は、各遺構から出土した遺物である。38～41は、土坑S K23から出土した11世紀後半の土師器皿である。形骸化した「て」の字状口縁端部の内上方への突起は弱い。口径は10cm弱である。42～49の土師器皿と50～53の瓦器は、土坑S K36から出土した12世紀後半の土器である。46はコースター型の皿である。50～52は瓦器皿で、53は大和型の瓦器碗である。53の内面暗文は密に施す。54は、掘立柱建物跡S B135の北側で検出した柱穴P124から出土した土師器皿である。完形品であることから、祭祀に伴い埋納した可能性がある。55・56は、掘立柱建物跡S B135の内側で検出した柱穴出土の土師器皿(55)と瓦器碗(56)である。12世紀後半である。57・58は、溝状遺構S X02の第3区出土の瓦器碗(57)と須恵器杯B(58)である。57は大和型で、12世紀後半の年代観をもつ。58は8世紀後半頃のものである。59は、柵列S A57の柱穴P4から出土した須恵器杯Aである。年代観は8世紀初頭頃か。60は輸入陶磁器の白磁碗で、調査区南西部の柱穴P57から出土した。



第22図 下馬遺跡B1・D2地区出土遺物実測図

(4) D 2 地区出土遺物(第22図61～66・68～96)

61～64は、調査区南東部の包含層出土遺物である。61は、13世紀前半の輸入陶磁器の白磁四耳壺である。口径は9.7cm。丸みの強い肩部4か所に耳を付す。62・63は、輸入陶磁器で、白磁椀と底部である。64は、瓦器椀である。65は、S K 69から出土した12世紀後半の瓦器椀である。66は、調査区北端で検出した柱穴P 5から出土した、9世紀中頃の平瓶である。68～77は、S X 01から出土した瓦器椀(68～70)と土師器皿(71～77)である。70の小型の瓦器椀は、口径8.1cm、器高3.5cmを測る。S X 01出土のこれらの土器は、概ね12世紀後半から13世紀に属するものである。80～85は井戸S E 32から出土した遺物である。80・81は瓦器椀で、82は瓦器皿、83は台付皿である。口縁の立ち上がりは殆ど無く、直線的に外上方に短く延びて、端部は丸くおさめる。口径11.1cm、器高2.0cmである。84・85は土師器皿である。これらS E 32の遺物は、12世紀末～13世紀初頭のものである。86～90・94は、溝状遺構S X 02第5区出土の遺物である。土師器皿(86)、須恵器甕(87)、瓦器椀(88・89)・皿(90)、輸入陶磁器青磁椀(94)は、いずれも12世紀後半のものである。91～93・95・96は、井戸S E 54出土の遺物である。瓦器椀(91・92)、土師器皿(93)、輸入陶磁器白磁椀(95)、土師質蚊遣り(96)がある。96の蚊遣りは、井戸掘形の上層から出土した。底部は上げ底(4.1cm)で、脚部は対面の2か所に半月状の繰り込みをもつ。体部下端に2cm×2cmのドーム状の窓(空気穴)を1か所設ける。体部上半を失うが、肩部付近に存在する4か所の穴の一部が残っていた。この穴は、燻す草葉を支える金串等を渡したものとみられる。内部は炭火による煤の付着が認められた。残存範囲での高さは約11cm、体部幅は14.2cmを測る。

4) 小結

平成21年度の調査では、西から東に向かって下がる扇状地の各所で、多数の遺構・遺物を確認した。特に、丘陵裾に位置したA 1地区では、縄文時代晩期の河川跡を検出した。丘陵上の大福寺遺跡では過去にサヌカイト製石匙が出土していることから、丘陵上を含む周辺部に、縄文時代集落が存在する可能性が高まった。また、A 1地区では、井戸、土坑、炉跡、瓦溜り等の遺構のほか火舎や中世瓦の出土から、何らかの宗教施設が付近に存在すると考えられる。丘陵上には大福寺の小字名が知られるが、検出遺構との因果関係は明らかではない。

奈良時代では、A 3地区から8世紀後半の遺物を含む河川跡(S R 16)と橋脚(S X 57)を検出した。さらにB 1地区では溝S D 83のほか、同時期の建物跡の可能性もあるS B 132・133がある。

平安時代ではD 1～D 2地区にかけて、11世紀後半から13世紀に属する多数の遺構を検出した。なかでも中心となるのは12世紀後半である。B 1・D 1・D 2地区から検出した建物跡と柵列は、その軸線の方向性から概ねA群～D群の4群に大別できる。真北からの振れにより、A群は北から東に約12°振るもので、柵列SA24が該当する。また同一方位として、やや離れたA 2地区のS B 58がある。B群は北から東に約16～18°振るもので、S B 55・132～134・136・137の6棟と柵列S A 03・30・85の3基である。C群は北から東に約22～23°振り、建物跡S B 135と柵列S A 57がある。D群は北から東に約32～40°振るもので、柵列S A 44・46の2基が該当する。軸線

の傾きは時期差を示すと考えられる。ちなみにB群の柵列S A57の柱穴がC群の掘立柱建物跡S B134の柱穴に切り勝ち、B群がC群に先行する遺構群と判明した。D群はB群とC群との間で切り合い関係がなく、先後関係は不明である。特にB群は遺構数が他群より抜きん出ており、平安時代後期を中心とする遺構群の中で中心を占めるものであろう。丘陵裾部のA1地区では14～15世紀頃の瓦や香炉などが出土する遺構が集中した。室町時代頃には調査地周辺に寺院的な建物が存在したと考えられる。

掘立柱建物跡には、S B134・55など小規模な片屋根建物跡が存在する。また、柵列も多数存在するほか、区分けされた大規模な水溜め施設S X02の存在は、下馬遺跡が普通の集落では無く、何らかの特殊な性格をもった集落であったとみられる。今回の検出遺構と遺跡の性格を考えるに当たって、下馬の小字名と直結させて、寺院もしくは公的施設としての判断を行うには確証が得られない現時点ではできない。ただ、S B134・55を厩舎、S X02を水場としてみることも一考に値しよう。

4. 平成21年度片山遺跡の調査(第2次調査)

1) 調査概要(第2図)

今年度の調査は、前年度に続き調査対象地内に9か所のトレンチ(第3～6・22～26)を設定し調査を行った。第3～6トレンチの規模は、一辺約4m×5mである。第22～26トレンチの規模は、一辺約4m×6mを基本とした。

このトレンチ調査で遺構や遺物の出土が良好な第25トレンチについては、拡張して本調査を実施した(A1地区)。A1地区とした拡張範囲の面積は320㎡である。

トレンチ調査では、溝、柱穴を検出したトレンチも存在したが、多くは出土遺物も僅かな状況であった。ただし、前述の下馬遺跡に近い第25トレンチでは、方形掘形をもつ柱穴列や溝を検出したほか、奈良時代から中世の土器が出土している。

A1地区では調査区北部から重複する2棟の掘立柱建物跡(S B01・02)や溝、土坑、柱穴を検出した。第25トレンチで検出した柱穴列はそれ以上の繋がりが確認できなかった。この柱穴列は、平成22年度調査で、掘立柱建物跡S B03に伴う柱穴であることが判明している。

A1地区検出の掘立柱建物跡はいずれも部分的な検出であり、平成22年度のA2地区調査で建物跡の全容が確認できた。ここではトレンチ調査分について報告し、A1地区の調査成果については、平成22年度A2地区調査と合わせて報告する。

2) 検出遺構(第23図)

第3トレンチ 地表下1.8mまで灰色・青灰色の砂質土が堆積し、無遺物・無遺構であった。

第4トレンチ 地表下0.8mで灰色砂質土を検出。暗灰色粘質土を埋土とする数基の柱穴を検出した。柱穴は円形プランで、直径は約0.3m規模であった。出土遺物はみられなかった。

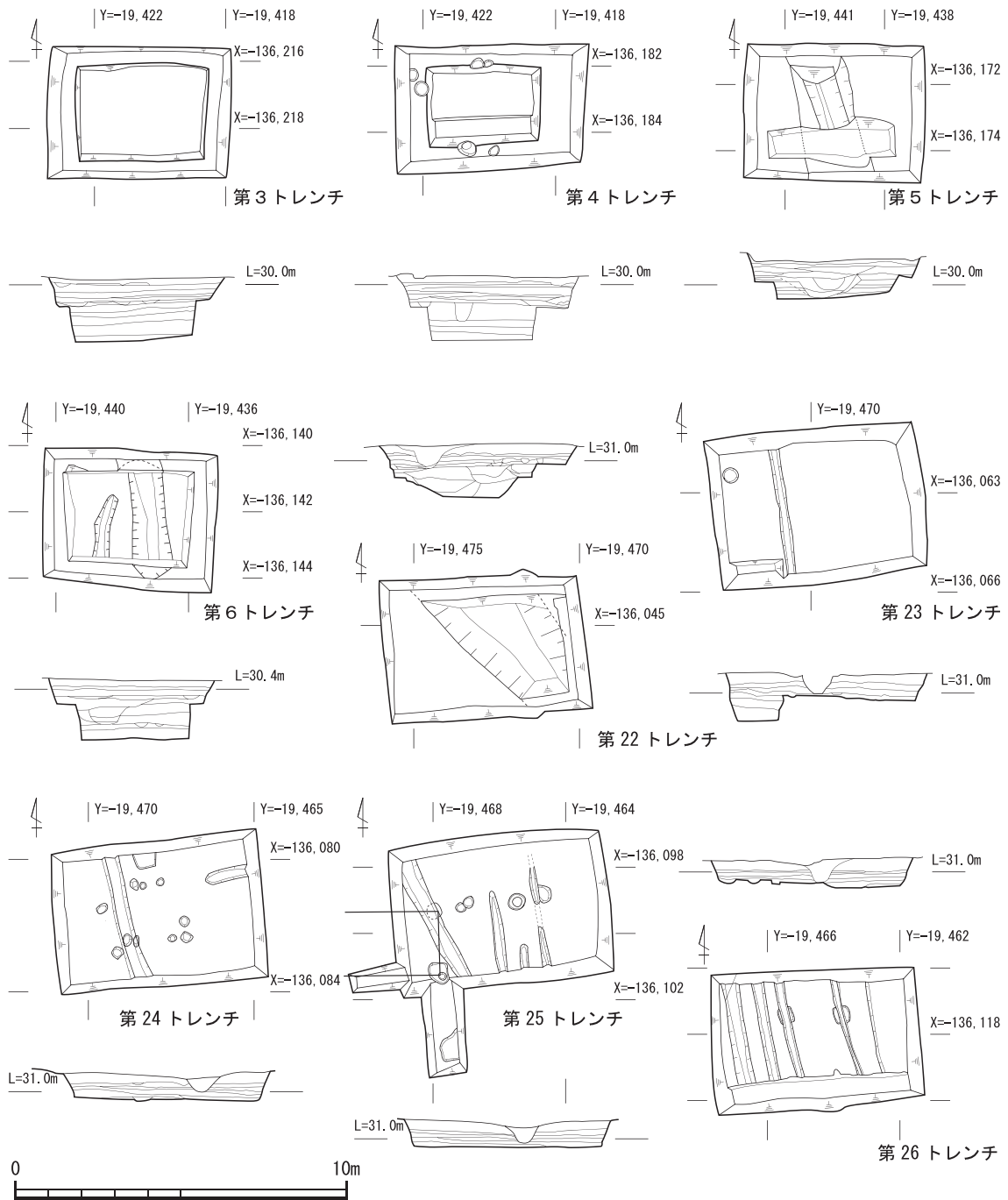
第5トレンチ 北西から南東に流れる溝跡を検出した。溝は幅約1.6m、深さ0.6mで、灰色砂が堆積していた。遺物は出土していない。

第6トレンチ 北西から南東に流れる溝跡を検出した。溝は幅約1.0m、深さ0.5mで、灰色砂が堆積していた。溝内から石包丁が出土した。

第22トレンチ 下馬遺跡D2地区の南東部に設定した。北西から南東に流れる、幅約2.6m、深さ約0.6mの流路跡を検出した。灰色系の砂・砂質土が堆積しており、遺物は出土していない。

第23トレンチ 第22トレンチの南に設けたトレンチである。地表下0.9mで遺構面とおぼしき安定地盤を検出したが遺構は検出できなかった。わずかに中世～近世土器が出土した。

第24トレンチ 第23トレンチの南に設けたトレンチである。中世の素掘り溝々のほか時期不



第23図 片山遺跡トレンチ実測図

明の小規模な柱穴が存在した。出土遺物は僅かである。

第25トレンチ 第24トレンチの南に設けたトレンチで、中世の素掘り溝々群のほか、時期不明の方形掘形の柱穴2基と、小規模な円形掘形の柱穴を検出した。奈良時代から中世の土器が出土した。

第26トレンチ 第25トレンチの南に設けたトレンチである。中世の素掘り溝群のほか、時期不明の柱穴を検出した。柱穴掘形は方形と円形プランがみられた。出土遺物は少ない。

3) 出土遺物

第6トレンチの溝埋土から粘板岩製の石包丁が出土したが、それ以外に中世～近世の土器の小破片が多数出土した。出土遺物の量は整理コンテナ1箱分である。

4) 小結

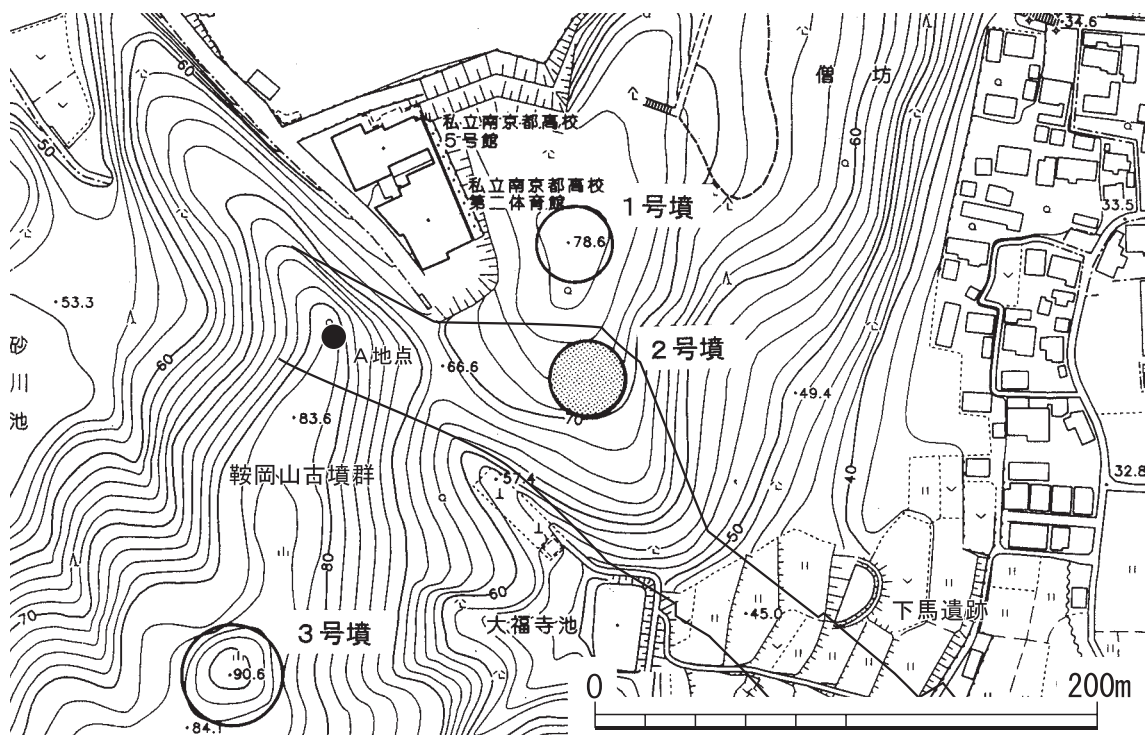
トレンチ調査の結果、片山遺跡の北部域である第25トレンチ付近に数棟の建物跡の存在を確認したことから、さらに周辺部に遺構が存在する可能性が高まった。他のトレンチでは溝、柱穴等の遺構がまばらである状況から、遺跡の主要遺構が周辺に存在する可能性は低いと考えられる。

5. 平成21年度鞍岡山古墳群の調査

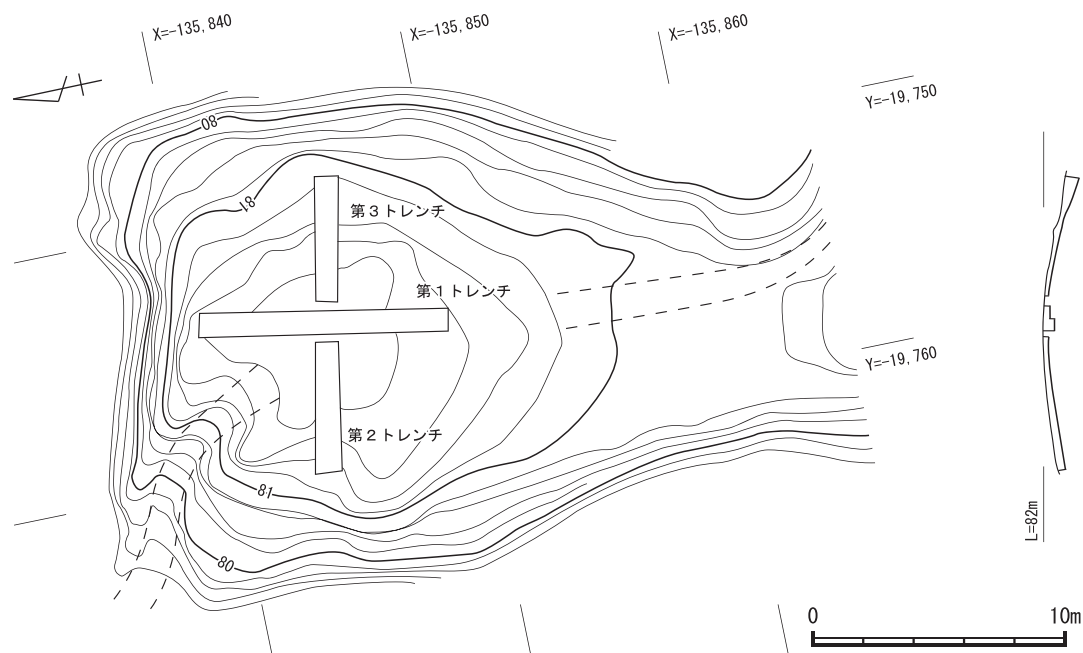
1) 調査概要

下馬遺跡背後の丘陵上に4基からなる鞍岡山古墳群が存在する。今回は2号墳の南西尾根筋先端をA地点とし、遺構・遺物の確認を目的としてトレンチ調査を実施した。A地点は支尾根の分岐点にあたり、直径約12m、高さ約1mの高まりから、古墳の可能性があった。

主尾根稜線に沿って長さ10m×幅1mの第1トレンチを設定した。また、尾根最高所において



第24図 鞍岡山古墳群A地点位置図



第25図 鞍岡山古墳群A地点トレンチ配置図

第1トレンチに直交する長さ5m×幅1mの第2・3トレンチを設定した。

調査の結果、表土層直下には地山が広がり、精査および断ち割りを実施して遺構の有無の確認を行なったが、全てのトレンチで遺構は検出できなかった。第2・3トレンチの斜面部には柔らかい黄茶色土の堆積がみられたが、遺物は出土していない。

2) 小結

鞍岡山古墳群A地点は自然地形であることが判明した。鞍岡山古墳群の4基は、いずれも墳丘高が2mを越える腰高の古墳である。1m前後の高まりや古墳として整っていない丘陵の高まりについては、古墳の可能性は低いと考えられる。

6. 平成22年度下馬遺跡の調査(第3次調査)

1) 調査概要

今回の発掘調査は、前年度に実施したD1地区から、農道を挟んだ南側に位置する。調査区は隣接耕作地への通路の関係から、D3地区とD4地区の東西2か所に分かれた。

西側のD3地区では、調査区の東部が後世の削平で大きく削り下げられていた。また、これは周辺の耕作地の段差と合致している。調査区西側は地表下約0.5m付近で黄褐色砂質土(石混じり)を検出し、10基ほどの柱穴を検出した。柱穴は0.2～0.4mの規模で円形プランである。また、調査区南東隅で井戸SE312を検出した。

D4地区は、遺構検出面は西から東に緩やかに下がる傾斜地であり、調査区西端と東端部の8m間での比高差は約0.3mを測る。調査区中央付近から南東にかけて、河川由来の灰色砂の堆積が認められた。この灰色砂の上面と除去後の下面の2面で柱穴、溝等の遺構が確認できた。この灰色砂中の土器には12世紀後半の瓦器椀、土師器、輸入陶磁器が含まれていた。砂層上面では、

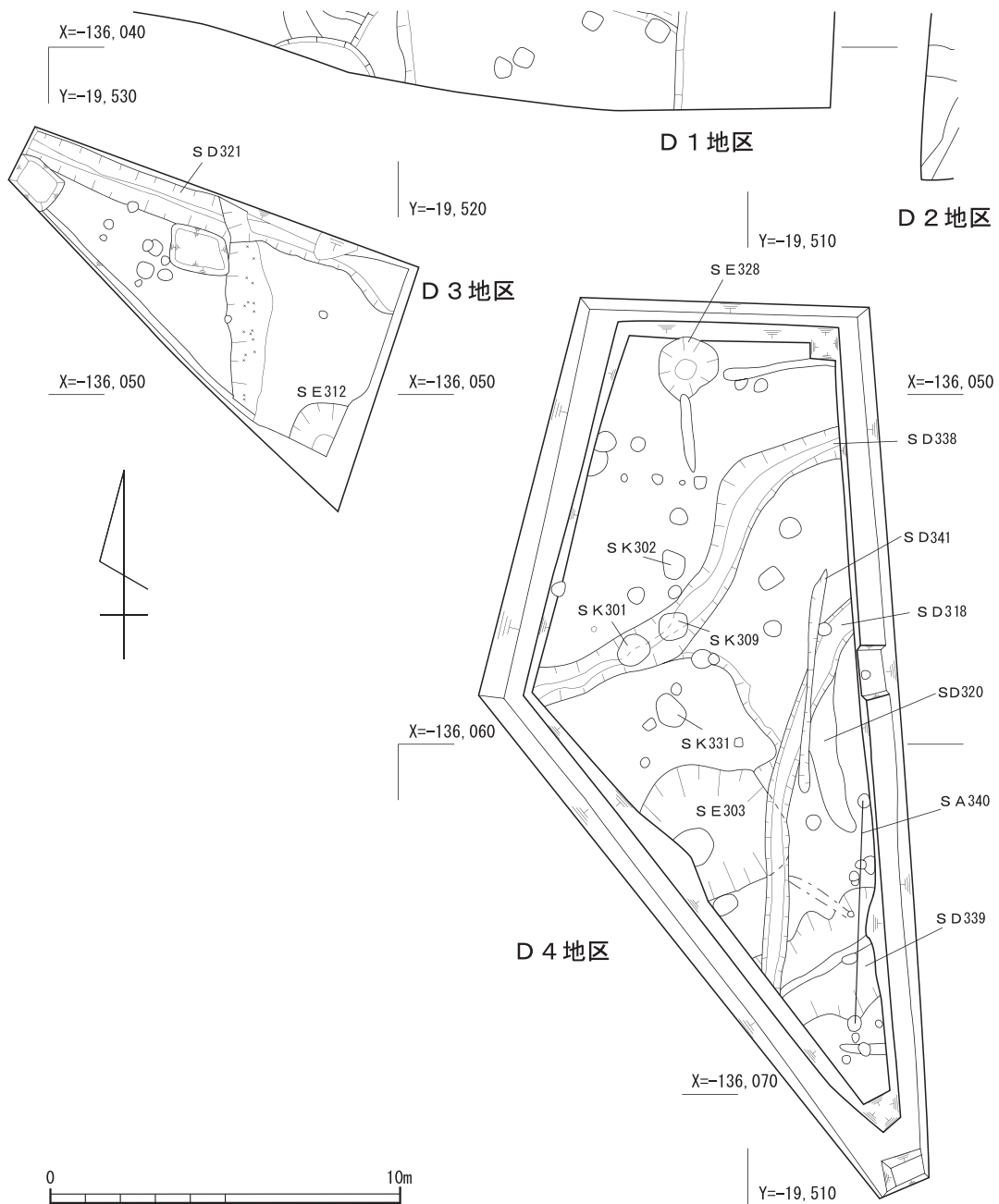
柵列(S A340)、溝(S D318・320・341)を検出した。また、下層面では、飛鳥時代の土坑(S K301)と井戸(S E303)、溝(S D338)、平安時代の溝(S D339)のほか、柱穴を多数検出した。

2) 検出遺構

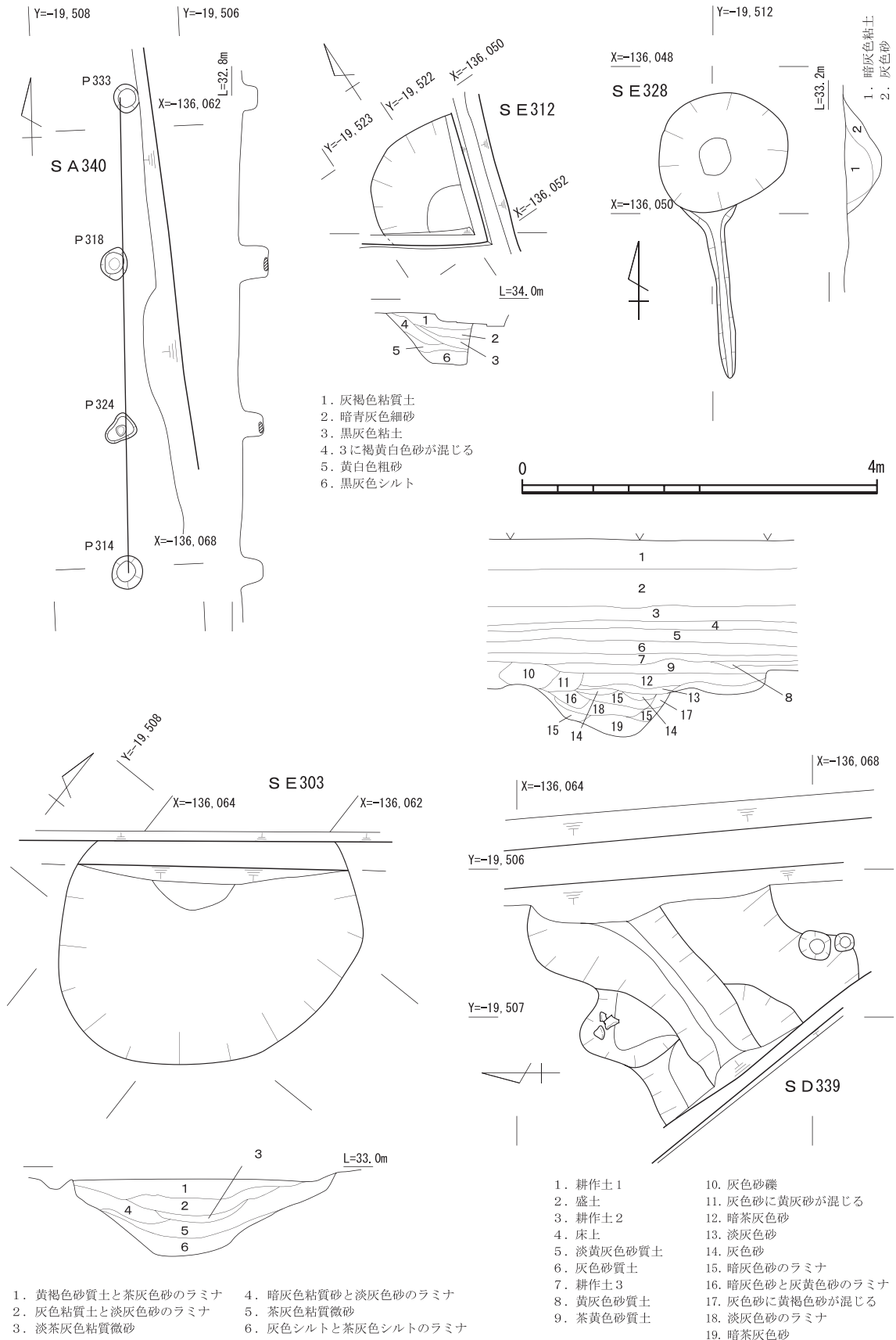
(1) D3地区(第26図)

近代溝 S D321 調査区北縁で検出した素掘り溝である。北側に存在した農道の側溝と判断した。

井戸 S E312(第27図) 調査区の南東隅で検出した素掘り井戸である。井戸の調査範囲は北西部4分の1である。井戸掘形は円形と考えられ、直径は3m程度と推測される。井戸の深さは検出面から約0.5mを測る。井戸内には暗灰色の砂・微砂が堆積し、瓦器碗の破片が出土した。時



第26図 下馬遺跡D3・4地区遺構平面図



第27図 下馬遺跡D 3・4地区柵列S A 340、井戸S E 303・312・328、溝S D 339実測図

代は12世紀末から13世紀とみられる。

柱穴 後世の掘削を免れた調査区西部から、9基の柱穴を検出した。柱穴掘形は円形で、直径は0.2～0.4mである。建物等の復原には至っていない。

(2) D4地区(第26図)

主要検出遺構として、調査区東部を覆う灰色砂の上面で検出した遺構には、溝3条(S D318・320・341)と柵列S A340がある。また、灰色砂の下面で検出した遺構には、井戸S E303、溝2条(S D338・339)、土坑2基(S K301・302)がある。

溝S D318 調査区南東部を南から北方向に流れる素掘り溝である。溝の南部はほぼ北に流れるが、中間部から北側は緩やかにその方向を東に振っている。溝幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、検出した長さは約11mである。溝の埋土は黄色混じりの灰色粘質砂であり、少量の土師器皿、瓦器破片が出土した。土器は13世紀代とみられる。

溝S D320 S D318の北部東側で検出した素掘り溝である。溝幅0.7m、深さ0.1mを測る。切り合い関係、検出状況から、S D318に先行した旧溝の可能性が高い。

溝S D341 S D318の北部を切って南北に延びる溝である。溝幅0.2m前後で深さも浅い。無遺物でもあり、耕作関連溝とみられる。

柵列S A340(第27図) 調査区の南東端で検出した南北方向に延びる柱穴列である。掘立柱建物もしくは柵列とみられるが、調査区の東壁に沿って検出したことから周囲の状況が未確認のため、詳細は不明である。全長は3間(6.4m)を測る。柱穴掘形は円形で直径は約0.3～0.4mである。柱穴P318とP324では、底面に平らな根石が存在した。また、南端の柱穴P314では13世紀前半の瓦器椀(第28図114)が出土した。

井戸S E303(第27図) 調査区中央の南側で検出した素掘り井戸である。井戸の南西部が調査地外に位置する。井戸掘形は不定形ながらも円形とみられる。掘形の直径は約4.0m、深さ約0.8mを測る。掘形は播鉢状に中央部に向かって緩やかに下がる。埋土中から7世紀後半の土器(第27図107～110)が出土した。

井戸S E328(第27図) 調査区北部で検出した素掘り井戸である。井戸掘形は円形で、直径約1.7m、深さ約0.4mの規模を測る。井戸の埋土は灰色系の砂・粘質砂であり、瓦器片や土師器皿(第28図102～106)が出土した。土師器皿(102～106)は全て完形品であり、井戸祭祀に関連した遺物と考えられ、12世紀末～13世紀前半の年代観を示す。

溝S D338 調査区西角から蛇行しながら北東方向に流れる素掘り溝である。溝幅0.8～1.5m×深さ約0.3mの規模を測る。底面と壁面には、水流の影響とみる凹凸が多数存在する。溝中央付近から東部にかけての南岸は北岸より低まり、オーバーフローした灰色粘質砂の堆積が認められた。切り合い関係により、土坑S K301より先行する溝である。

溝S D339(第27図) 調査区南端付近で検出した、南西から北東方向に流れる素掘り溝である。溝幅約3.0m、深さ約0.8mの規模を測る。溝の下層から7世紀後半頃の土器(第27図97～99・101)が出土したほか、検出面直下から8世紀末頃の土師器皿(第28図100)が出土している。

土坑 S K 301 調査区中央付近、溝 S D 338の埋土を切って掘られた土坑である。方形に近い掘形は、一辺約0.6mで、深さは0.15mを測る。暗灰色粘質土の埋土中から、須恵器(第28図111・112)が出土した。

土坑 S K 302 土坑 S K 301の北東約2m付近で検出した土坑である。直径約0.8mの円形に近い土坑である。深さは0.2m前後である。暗灰色粘質土の埋土中から7世紀後半の須恵器杯(第27図113)が出土した。

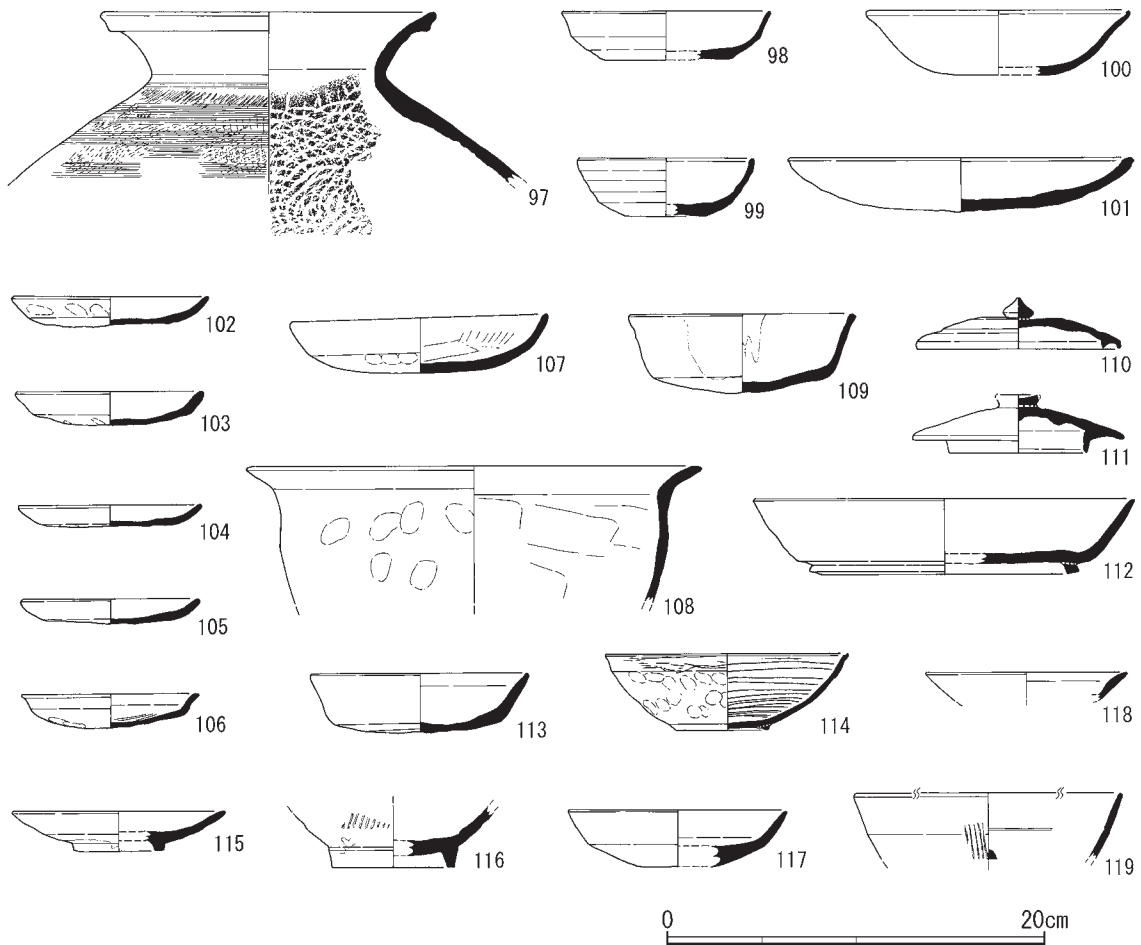
土坑 S K 309 土坑 S K 301の北東で検出した隅丸方形の土坑である。一辺約0.8m、深さ約0.2mを測る。土坑の掘形は溝 S D 338の埋土を切っている。少量の土師器が出土した。

土坑 S K 331 土坑 S K 301の南東で検出した楕円形の土坑である。長さ約1.0m、幅約0.7m、深さは約0.1mを測る。暗茶褐色粘質土の埋土中から土師器片が少量出土した。

3) 出土遺物(第28図97～119)

D 3 地区と D 4 地区の調査で出土した遺物は、整理コンテナ約10箱であった。なかでも D 4 地区からの出土遺物が大部分を占めている。

D 3 地区では井戸 S E 312の埋土から瓦器碗の破片が出土したが、図化に至らなかった。そのほか、溝 S D 321の下層から土師器や染付けが出土しているが、染付けは近代のものであった。



第28図 下馬遺跡D 3・4地区出土遺物実測図

97～101は、溝S D339から出土した。97～99は須恵器の甕と杯である。100・101は土師器皿である。102～106は、井戸S E328から出土した土師器皿である。107～110は、井戸S E303から出土した7世紀後半の土師器と須恵器である。107は土師器皿、108は土師器甕である。109の杯G内面には灯芯の油煙跡が残り、外面も一部に煤が付着する。灯明皿として使用された状況が窺える。110は須恵器杯蓋である。111・112は、土坑S K301から出土した8世紀末頃の土器である。111は須恵質の蓋で、口径11.3cm、器高は3.1cmを測る。天井部は直線的に下方に開き、口縁端部から内側2cmに返りをもつ。この返りは長さ約1.1cmで、真直ぐ垂下する。天井部には円柱状のつまみを付ける。合子か壺の蓋とみられる。112は須恵器杯Bである。113は、土坑S K302出土の須恵器杯Gである。114は、柵列S A340の柱穴P314から出土した、12世紀末～13世紀前半の瓦器椀である。115～119は、調査区東部の灰色砂層中から出土した輸入陶磁器である。115と116は白磁で、117～119は青磁である。12世紀末～13世紀前半の年代観を示している。

4)小結

下馬遺跡第3次調査では、D3地区とD4地区の調査を実施した。第2次調査では北側のD1地区からD2地区にかけて、12世紀後半を中心とする掘立柱建物跡や柵列、井戸など、多数の遺構が集中していた。今回のD3地区とD4地区でも同様な状況にあり、井戸S E312・328、柵列S A340など関連遺構の検出をみた。さらに新たな状況として、飛鳥～奈良時代の溝S D338・339、井戸S E303、土坑S K301・302を検出したことは、遺構の乏しかった同時期の下馬遺跡を考える上で新たな成果を得た。

7. 平成22年度片山遺跡の調査(第3次調査)

1)調査概要(第29図)

今回の調査地点であるA2地区は、前年度調査A1地区の西側に位置する。両地区に跨る遺構もあり、A1・2地区の検出遺構について報告を行う。

調査区のほぼ中央部では、南北方向の溝3条(S D64・203・204)を検出した。検出遺構の中では新しい時期の溝で、中世の時期と考えられる。同じ中央付近から4棟の掘立柱建物跡(S B01～04)を検出した。この建物跡群は、切り合い関係から先のS D64より時期が古くなる。また、調査区内には西から東方向に流れる東西溝(S D213・217・233)が存在し、このうちS D213とS D217は、切り合い関係からS B01とS B02より古い溝であった。そのほか多くの柱穴の検出をみたが、更なる建物跡の復原には至らなかった。また、調査区内には大小の土坑も存在した。

2)検出遺構

掘立柱建物跡S B01(第30図) 調査区中央付近で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、桁行3間(5.1m)×梁間2間(3.6m)を測る。柱穴は方形の掘形であるが、歪な形の掘形、角の丸い掘形、長方形の掘形なども認められる。整った方形を呈した掘形では、一辺が0.5mを測る。掘形埋土の観察から柱痕跡を確認した。柱は円形で、直径は0.18m前後である。建物跡の南東角の柱穴は溝S D217を切るが、溝S D64には切られる関係にある。建物跡の方位は

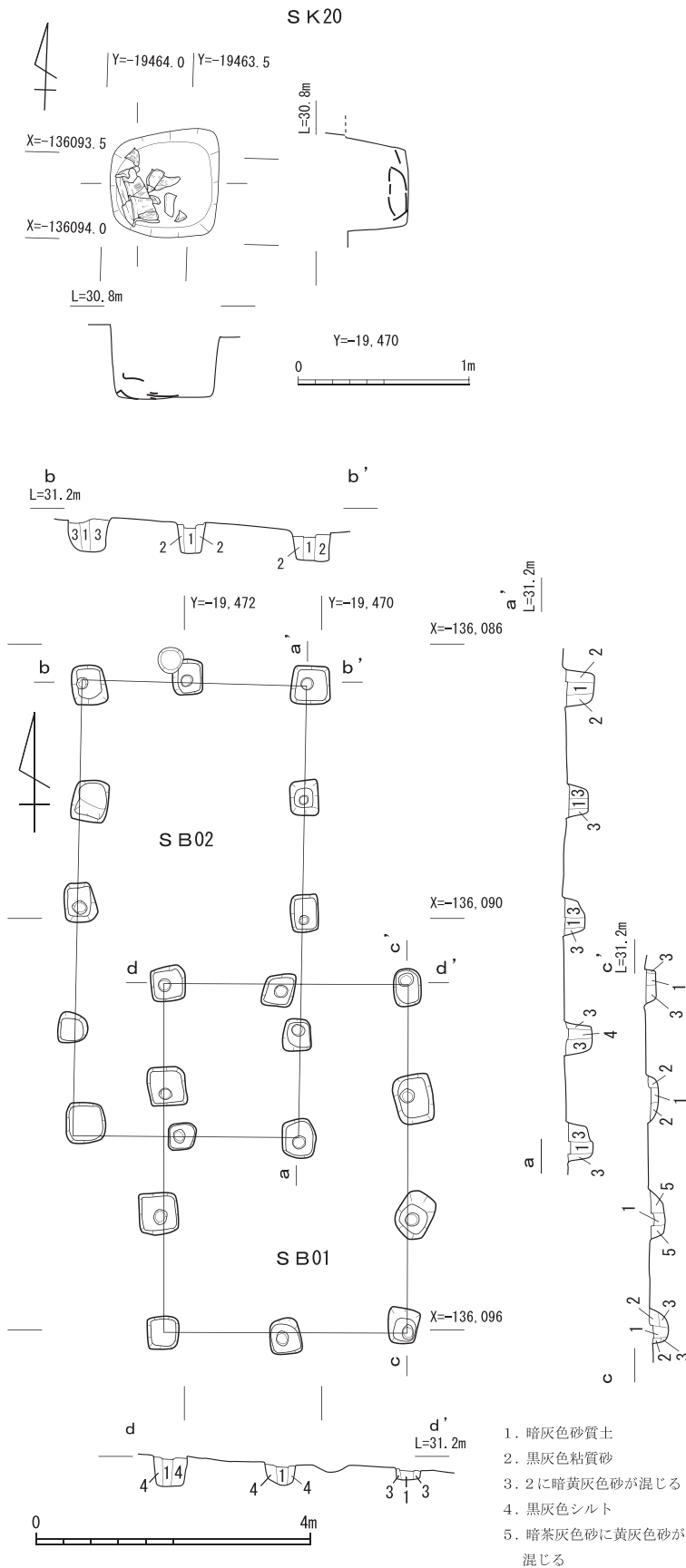


第29図 片山遺跡A1・2地区遺構平面図

ほぼ真北である。

掘立柱建物跡 S B02(第30図) S B02は南北棟の掘立柱建物跡で、建物跡の南東部が S B01と重複するが、柱穴間での切り合いはみられない。建物跡の規模は、桁行4間(6.6m)×梁間2間(3.3m)を測る。柱穴の掘形は方形で、一辺は0.4～0.6mの規模を測る。S B01と同様に、形の整わない柱穴が認められる。掘形内の柱当たりの規模は直径約0.18mである。柱穴の切り合い関係から、S B02は溝 S D63より古くなる。建物跡の方位はほぼ真北である。

掘立柱建物跡 S B03(第31図) 東西1間(約3.3m)×南北1間(約1.9m)の掘立柱建物跡である。S B01の南に位置し、その間隔は約3.3mを測る。S B03の西側柱穴列は、S B01もしくはS B02の柱穴列に対して同一軸線上に乗せる規格性は認められない。S B01とは、約1m東側にずれる状況にある。また、S B02とは東に約2mずれる。柱穴掘形は方形プランで、一辺は約0.5m前後を測る。柱穴埋土は黒灰色砂質土であり、柱痕跡は暗灰茶色粘質砂である。柱痕跡の直径は0.2mを測った。方位は北から西に約2°振るが、ほぼ真北である。北東側の柱穴は溝 S D



第30図 片山遺跡A1・2地区掘立柱建物跡S B01・02、土坑S K20実測図

64に切られている。柱穴内からの遺物の出土はみられない。

掘立柱建物跡 S B04 (第31図) A2地区南部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B04は S B03の南西に位置し、南へ約4.0m、西に0.5m離れる。建物規模は桁行3間(5.1m)×梁間2間(3.2m)を測る。柱穴掘形プランには方形と円形が混在し、柱穴規模も1辺0.3~0.6mとばらつき、規則性はみられない。柱穴埋土は暗灰茶色粘質土である。建物方位はほぼ真北である。

土坑 S K20 (第30図) S B01の東、A1地区で検出した方形の土坑である。1辺約0.6m、深さ約0.4mを測る。平坦な土坑底の西側から、土師器甕の上半部と別甕の口縁破片(第33図31・32)が出土した。土器の年代観は9世紀前半頃である。

土坑 S K59 A1地区南東で検出した土坑である。方形の掘形を有し、1辺は1.8~2.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰色粘質土であるが、土坑中央部で直径約1.2mの範囲は淡灰色粘質土が堆積していた。出土遺物がないが、中世以降の耕作関連の野井戸の可能性が高い遺構である。

土坑 S X202 (第32図) A2地区の北西部で検出した土坑で

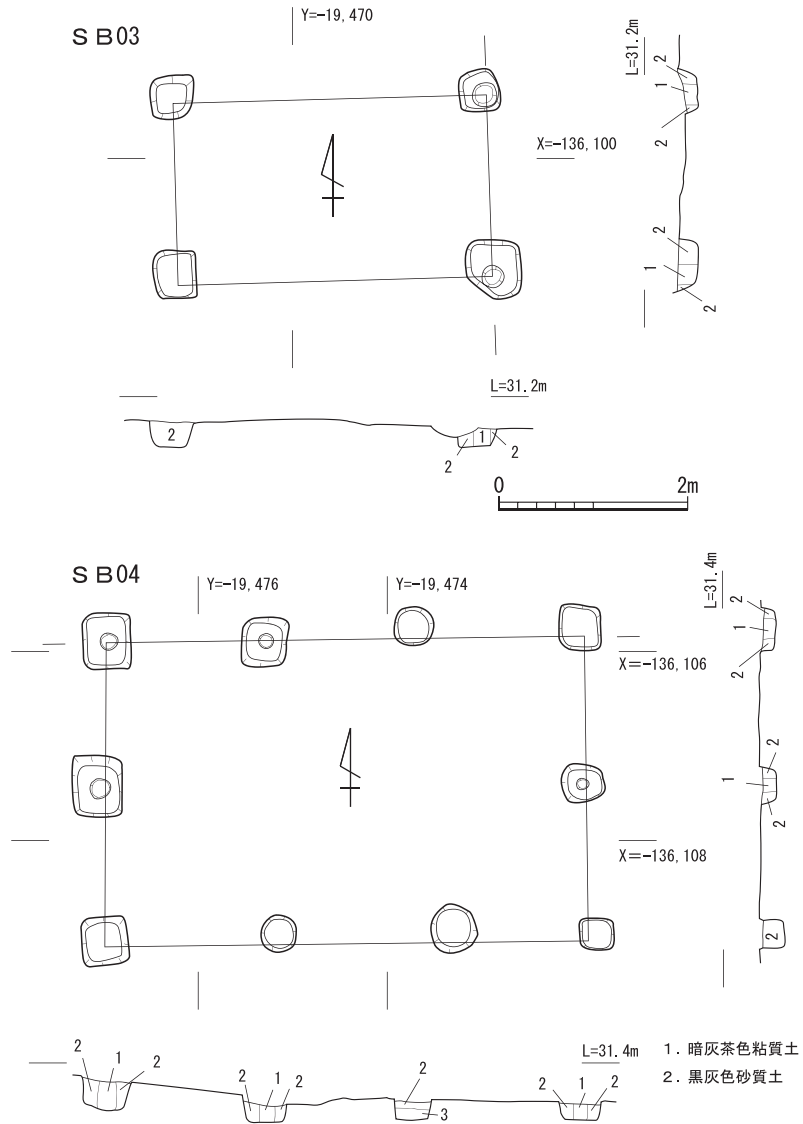
ある。長楕円形の土坑は長軸を南北に向け、北端は調査地外に延びる。検出長は約8.7m、幅約5.1m、深さ約0.5mの規模を測る。底面はほぼ水平であるが、所々に微妙な凹凸が存在する。埋土の下層には砂やシルトの堆積が確認されることから、長期間土坑は埋められることなく存在したとみられる。

土坑内から多数の土器(第33図1～22・25～28)の出土をみた。特に土坑の南西部斜面付近で、およそ1mの範囲内から大小の土師器皿7点が出土した。これらの皿は完形品(接合含む)であり、上下に重なる状況も存在した。これら7点の土師器皿は、祭祀に関連した遺物と判断されるものである。そのほかの出土遺物には瓦器碗・皿、土師器皿、須恵

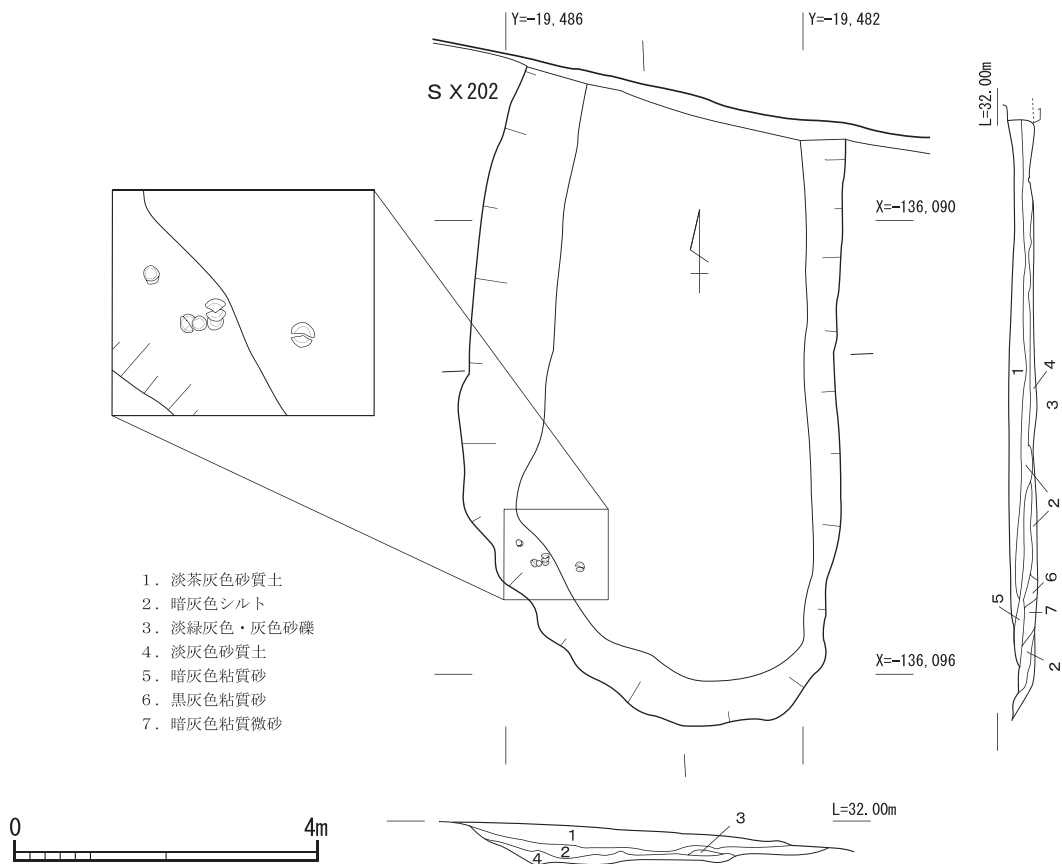
質鉢、土師質羽釜等がある。時期については、出土遺物の年代観から、およそ13世紀前半代と考えられる。

その他の土坑 土坑S K216は、S X202の東で検出した円形土坑である。規模は直径約1.1m、深さ約0.2mを測り、溝底はやや丸底で中央が周囲より若干下がる。遺物の出土はない。S K205はA 2地区の北部で検出した円形の土坑である。規模は、直径約1.2m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色粘質土と砂であることから、井戸の可能性もある。出土遺物は土師器の破片が少量出土している。土坑S K206は、S K205の北側で検出した。平面形は不定形で、方形ともみてとれる。長径1.8m×深さ0.1mを測り、埋土は灰色粘質砂である。また、埋土中には拳大の石が含まれていたが、遺構の性格については不明である。

溝S D64 A 1地区を北西から南東に流れる素掘り溝であり、溝の南部は蛇行しながら東方向に振る状況にある。溝幅約0.5m、深さ約0.2mの規模を測る。埋土は淡灰色粗砂である。掘立



第31図 片山遺跡A 1・2地区掘立柱建物跡S B03・04実測図



第32図 片山遺跡A 2地区土坑S X 202実測図

柱建物跡のS D01～03の柱穴をS D64が切っていた。このS D64では、時期を確定する良好な遺物は出土していない。

溝S D204 A 2地区東部を南北に貫く素掘り溝であり、東側を流れる溝S D64に並列するよう同じ動きをとる溝である。S D64とS D204の間隔は、調査区北部で約5.1m、南部では約9.2mとやや開く。溝幅は約0.4m、深さは深いところで約0.2mを測る。埋土は北部域で淡灰色粗砂、南部では灰色砂であった。調査区中央付近から南部では溝に切り合いが確認された。切り合いは同一溝とみられ、東側の溝が新しく、西側が旧溝と判断された。

溝S D203 S D204の西側で南北に延びる溝である。溝幅約0.3m、深さ約0.1mである。軸線は北から西に約4°振る。S B03・04付近の短い溝も同様な方位を採ることから、これらの溝は中世以降の耕作関連溝とみられる。

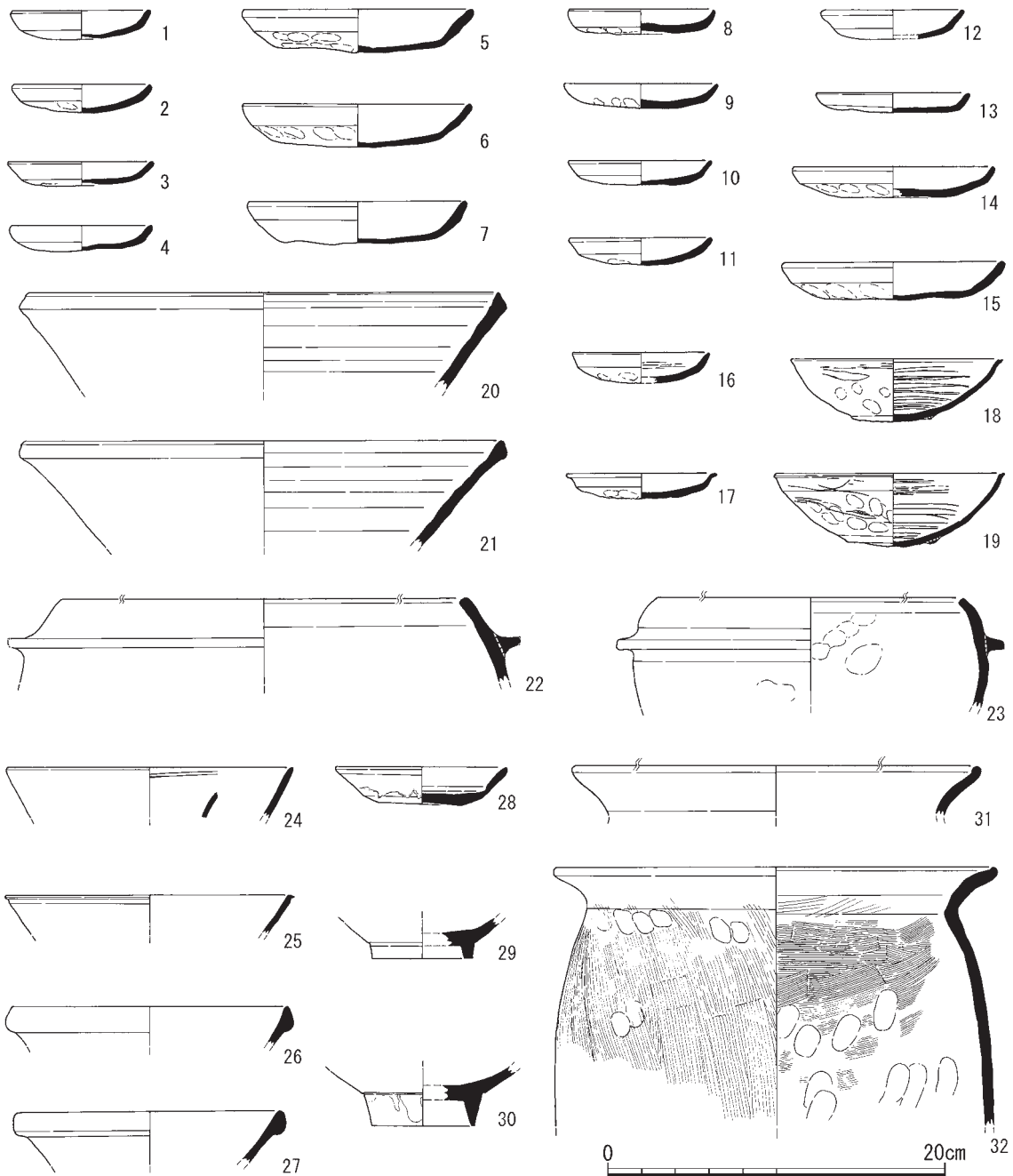
溝S D213 掘立柱建物跡S B02の中央部を東西に貫く素掘り溝である。溝幅約0.6m、深さは最深部で約0.35mを測る。溝底は一定でなく水流の影響と考えられる凹凸がみられた。埋土は灰色系の粗砂と粒の細かい砂礫である。時期の確定に至らないが、S B02の柱穴が溝の埋土を切っている。S D213の上流側の西端は土坑S X202の東約1m付近にある。遺構面もS X202付近から西側は傾斜も緩いことから、S D213の西部は平安時代中頃には削平を受けたものとみられる。

溝SD217 掘立柱建物跡SB01の南側を、南西から北東に流れる素掘り溝である。溝幅0.5～1.1m、深さは0.2～0.4mを測る。遺構面の傾斜の弱い溝東部が幅・深さとも小規模となる。溝埋土は淡灰色・白灰色砂である。溝はSB01の柱穴に切り負けている。

溝SD233 掘立柱建物跡SB04の南側で検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅1.0～1.3m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は暗灰色の粘質土である。

3) 出土遺物(第33図)

1～15は土坑SX202から出土した土師器皿である。このうち1～7は祭祀関連のものと判断され、一括性の高い遺物である。小型の皿は口径が8.5～9.5cm、器高は1.5～1.7cmを測る。大



第33図 片山遺跡A1・2地区出土遺物実測図

型の皿は口径12.0～13.5cm、器高は1.8～2.5cmを測る。16・17は瓦器皿である。18・19は瓦器碗である。瓦器碗の暗文は退化が進み、口径12.1～13.5cm、器高は3.8～4.3cmと小型化傾向にある。20・21は、東播系の鉢である。今回出土した破片の中には片口は含まれていない。22・23は、土師器の羽釜である。23はA2地区北西部の精査で出土した。24～30は、輸入陶磁器である。24はA2地区南部の包含層出土の青磁碗である。25～28は土坑S X202から出土した白磁の碗(25～27)と皿(28)である。29・30の白磁碗高台は包含層から出土した。31・32は、土坑S K20から出土した土師器甕である。

4) 小結

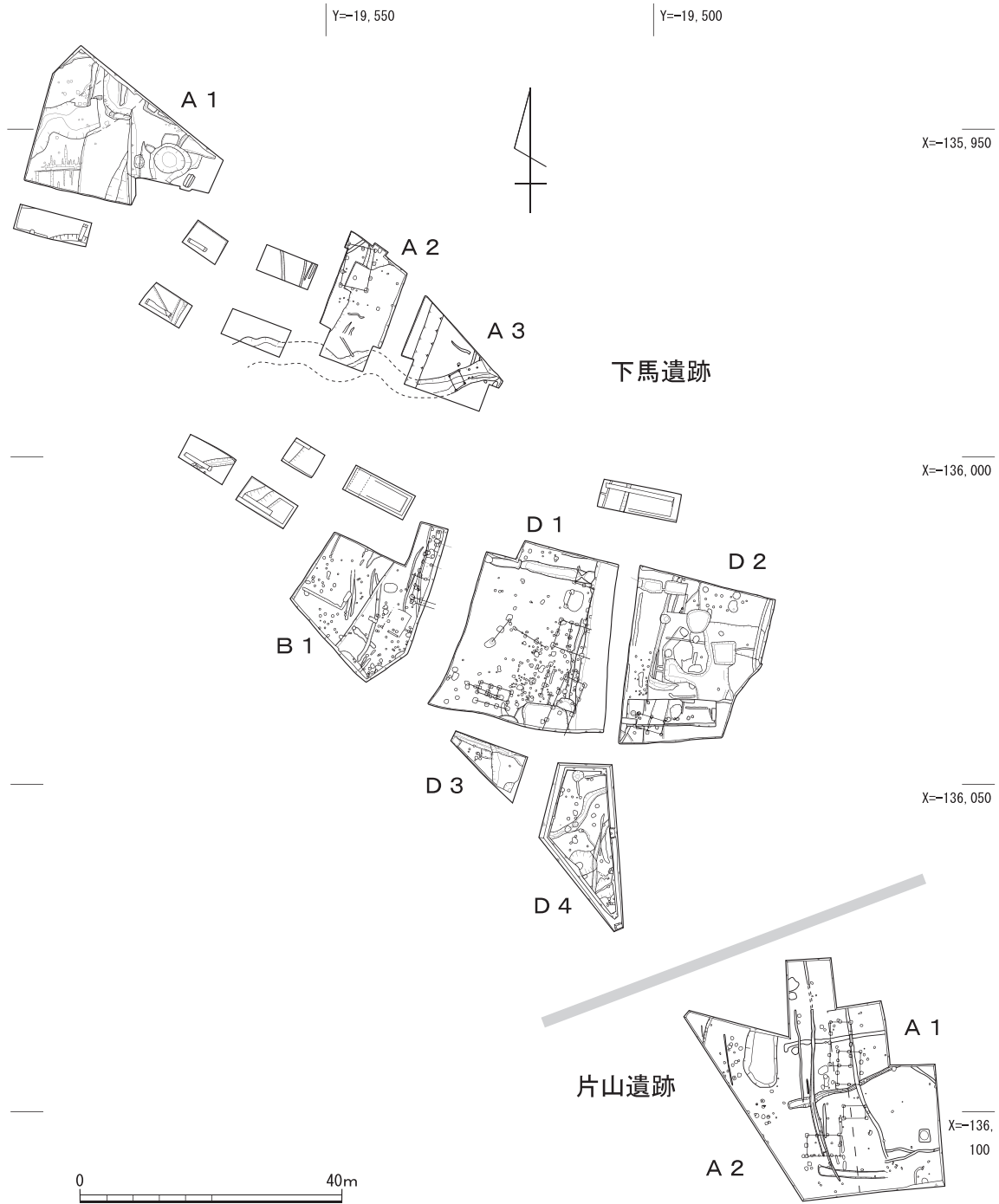
片山遺跡のA1・2地区の調査では、主要遺構として掘立柱建物跡4棟(S B01～04)、土坑、溝を検出することができた。建て替えを含む4棟の建物跡は方位が真北となる共通性はあるが、整然とした配置状況はない。柱穴内からの出土遺物が乏しく年代を確定するには至らないが、周辺出土遺物などから、平安時代中期～後期の建物跡と考えられる。大形の土坑S X202は、埋土の状況や祭祀関連遺物の出土などから、貯水関連の施設である可能性が高い。溝は、掘立柱建物以前の東西溝(S D213・217・229)と、建物廃絶後の南北溝(S D64・204等)がある。南北溝に関しては中世以降の耕作関連溝とみられ、当地に残る条里に伴う遺構と判断される。

8. まとめ

今回報告の平成21年度と22年度(前半期)調査は、下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群の3遺跡の調査を行った。このうち鞍岡山古墳群A地点については古墳ではないことが判明した。それに対して、下馬遺跡・片山遺跡において初めて面的な発掘調査となり、多くの遺構を検出し多量の遺物が出土したことで、遺跡の時代や性格が次第に明らかになってきた。

下馬遺跡は、今回の調査で縄文時代晩期から室町時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。なかでも下馬遺跡の主体となるものは、D地区の平安時代後期を中心とする遺構群と、A1地区の室町時代の寺院関連遺構である。飛鳥～奈良時代においても人々の活動が窺えるが、調査地内の遺構分布状況は旧河川跡、橋脚跡、土坑、井戸など僅かである。相楽郡には上粕・下粕の地名が示すように、古代には高句麗系の渡来人である粕氏が定住していたようである。下馬遺跡の東約250mには、粕氏の氏寺とみられる里廃寺(7世紀後半～8世紀)が存在する。下馬遺跡・片山遺跡は下粕に含まれ、これら飛鳥～奈良時代の遺構は当地に勢力を誇った粕氏一族に関連する可能性も考えられる。また、下馬遺跡・片山遺跡の東側には平城京から西国に向かう古山陽・山陰併用道が推定されている。下馬遺跡・片山遺跡はこの古街道沿いに開けた集落の一つと考えられ、調査地周辺部には、更に多くの関連遺構が存在する可能性が高い。

平安時代後期には、扇状地先端付近のB1地区からD地区にかけて遺構の分布が集中する。ほぼ平安時代後期(12世紀後半)を中心とした遺構と考えられるが、グループ化(A群～D群)によっておおよそ4期に分かれる。主要遺構間での切り合い関係が乏しく、これまでのところB群がC群に先行することが明らかである。A群とD群に関しては先後関係が不明である。平安時代後期



第34図 下馬遺跡・片山遺跡遺構分布図

から中世にかけて当地には、東大寺・興福寺・石清水八幡宮、その他多数の荘園が混在し、なかでも下粕荘は東大寺領に含まれる。今回検出した掘立柱建物跡や柵列、水場、井戸等の遺構は、庶民階級の施設とは考えにくい。遺跡の全体像が把握できない現時点では、これらの遺構は荘園管理に関連した施設の一つである可能性が高いとみられる。

室町時代では、丘陵裾に寺院関連施設が存在したようである。遺跡北側の僧坊地区には中世の下粕廃寺が存在し、今回検出の遺構と何らかの関連性が窺える。

片山遺跡では4棟の掘立柱建物跡を検出したが、北に隣接する下馬遺跡とはやや趣が異なっている。片山遺跡では平安時代中～後期の掘立柱建物跡4棟を検出したが、いずれも建物の方向性が真北となる。下馬遺跡の同時期の遺構群は、真北に対して東に傾く方向性を示している。片山遺跡の建物の柱穴掘形は小規模ながらも整った方形でもあり、建物跡の方位性からも、下馬遺跡の建物、柵列群に先行する遺構群とみられる。片山遺跡A地区と下馬遺跡D地区はほぼ遺跡範囲が接触状況にある。地形的には現存する耕作地の形状から、西側の丘陵から流れ出た小河川が下馬遺跡D3・4地区付近を流れていたようである。調査地区や遺跡毎で異なる遺構群の状況は、それぞれ時期毎の土地利用に際し、河川による制限(区域割など)を受けていたとみられる。

今後、下馬遺跡D4地区の東側と片山遺跡A2地区北側間での調査計画もあることから、遺跡の性格・内容等を考える上で、今後の調査成果に期待が寄せられるところである。

5. 椋ノ木遺跡第8次発掘調査報告

1. はじめに

椋ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に位置する縄文時代～中世にかけての複合集落遺跡である。現在の行政区画の上では、相楽郡精華町下狛小字椋ノ木ほかに所在している(第1図)。この一帯は、近世の絵図や古地図などによれば、南北に狭長な微高地が畑などに利用されていたことが見てとれる。現在、木津川上流浄化センターなどの敷地内および水田となっている遺跡の北側には、中世以来の集落が点在する景観を今にとどめている。

平成7年度以来、7次にわたる調査によって縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡、後期の古墳、平安時代末～鎌倉時代の建物跡のほか、条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝群などが確認されている。なかでも平安時代末～鎌倉時代の遺構や遺物は広い範囲で確認されており、大規模な集落を形成していたことがうかがえ、当時の木津川の舟運に関連する集落であったと考えられている。今回の調査地は、遺跡範囲内の南東部に位置し、今回で8度目の調査となる(第2図)。

今回の調査は、京都府流域下水道事務所の依頼を受け、平成21年度木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター建設工事に係る発掘調査として、汚泥浄化タンク建設予定地であるAトレンチと汚泥濃縮棟建設予定地であるBトレンチの2か所にトレンチを設定し実施した。

現地調査および整理報告にあたっては、京都府教育委員会ならびに精華町教育委員会をはじめ、関係諸機関には多大なご協力を得た。また、調査には多くの方々に参加いただいた。記して謝意を表したい。本報告は村田が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 専門調査員 竹井治雄

同 調査員 村田和弘

調査場所 相楽郡精華町下狛小字椋ノ木ほか

現地調査期間 平成21年11月26日～平成22年3月4日

調査面積 500㎡

2. 位置と環境

椋ノ木遺跡が所在する精華町は、京都府南部の木津川左岸に位置し、北は京田辺市、東・南は木津川市に隣接する。精華町は、現在水田として土地利用されている木津川氾濫原と近年、関西文化学術研究都市として開発されている精華台・光台などの丘陵部、小河川が形成した扇状地部



- | | | | | |
|------------|--------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 江津遺跡 | 2. 宮津古墳 | 3. 屋敷田遺跡 | 4. 宮の口古墳群 | 5. 白山遺跡 |
| 6. 桑町遺跡 | 7. 宮の口遺跡 | 8. 山路遺跡 | 9. 元屋敷遺跡 | 10. 平谷古墳群 |
| 11. 薬師山遺跡 | 12. 西ノ口遺跡 | 13. 前川原遺跡 | 14. 百久保地先遺跡 | 15. 長芝遺跡 |
| 16. 鞍岡神社遺跡 | 17. 鞍岡山遺跡 | 18. 下粕麿寺 | 19. 拝殿遺跡 | 20. 石ヶ町遺跡 |
| 21. 鞍岡山古墳群 | 22. 下馬遺跡 | 23. 片山遺跡 | 24. 里麿寺 | 25. 里遺跡 |
| 26. 棕ノ木遺跡 | 27. 石塚古墳 | 28. 城山古墳 | 29. 城山遺跡 | 30. 柿添遺跡 |
| 31. 北稻遺跡 | 32. 西垣戸遺跡 | 33. 中垣外遺跡 | 34. 北尻遺跡 | 35. 南稻遺跡 |
| 36. 丸山古墳 | 37. 祝園古墳 | 38. 渋川東遺跡 | 39. 渋川西遺跡 | 40. 蟹満寺 |
| 41. 山際古墳 | 42. 西ノ口遺跡 | 43. 山ノ上古墳 | 44. 湧出宮遺跡 | 45. 丹夕遺跡 |
| 46. 三所塚古墳 | 47. 恭仁京右京推定地 | 48. 平尾城山古墳 | 49. 稻荷山古墳 | 50. 北谷横穴群 |
| 51. 今城跡 | 52. 西ヶ峰古墳 | 53. 坂ノ下遺跡 | 54. 椿井大塚山古墳 | |

第1図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院 S=1/25,000 田辺)

によって形成される。地形は西方から東方に向かって緩やかに傾斜している。椋ノ木遺跡は、木津川氾濫原の自然堤防上に営まれた集落である。

周辺の遺跡として、縄文時代では、木津川市の恭仁宮下層(例幣遺跡)で前期の竪穴式住居跡が検出されているほか、木津川右岸に位置する木津川市椿井大塚山古墳下層や湧出宮遺跡などの丘陵部で後・晩期の縄文土器の出土が知られている。こうした丘陵部の遺跡に対して、椋ノ木遺跡は低地部にあり、中期～晩期の遺物が出土している。木津川の氾濫原に縄文遺跡が立地している例として注目される。

弥生時代の遺跡では、精華町畑ノ前遺跡で中期中葉の集落跡が検出されている。後期では、椋ノ木遺跡で大溝が検出されているほか、木津川右岸の木津川市上粕西遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。丘陵部に立地する椿井遺跡は後期の高地性集落であることが確認されている。

古墳時代には、木津川右岸の丘陵上に、全長175mの椿井大塚山古墳のほか、全長110mの平尾城山古墳がある。中期～末にかけては、椋ノ木遺跡においても古墳の存在が確認されているが、同時期の大規模集落として、森垣外遺跡があげられる。森垣外遺跡では大壁住居や陶質土器など朝鮮半島系の遺構や遺物が出土しており、注目される遺跡である。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、西方約500mに里廃寺があり、版築瓦積基壇が検出され、高麗寺式軒丸瓦が出土しており、渡来系の狛氏によって建立された可能性が高いとされている。

中世になると、低地部の椋ノ木遺跡への居住が始まるが、過去の調査によって、12世紀中葉以降に大型の掘立柱建物が構築されるようになり、大規模集落に発展していくことが明らかになっている。本遺跡の北側には、石仏や五輪塔、宝篋印塔が出土した百久保地先遺跡があり、椋ノ木遺跡の集落の墓域と考えられている。中世のはじめごろには、この地域でも荘園開発が次々と行われるようになり、荘園などをめぐって石清水八幡宮・興福寺・東大寺など寺社権門が抗争を始めるようになる。それらを背景として、後半になると、椋ノ木遺跡では集落の中核地区が南に移動し、集落内に大きな変化を与えたと考えられている。

3. 調査の経過

今回の調査地は2か所に分かれ、東側の汚泥浄化タンク建設予定地をAトレンチ、西側の汚泥濃縮棟建設予定地をBトレンチとした調査区を設定した。各遺構面ごとに重機による掘削を行い、遺構面直上からは人力で作業を行い、遺構の検出に努めた。

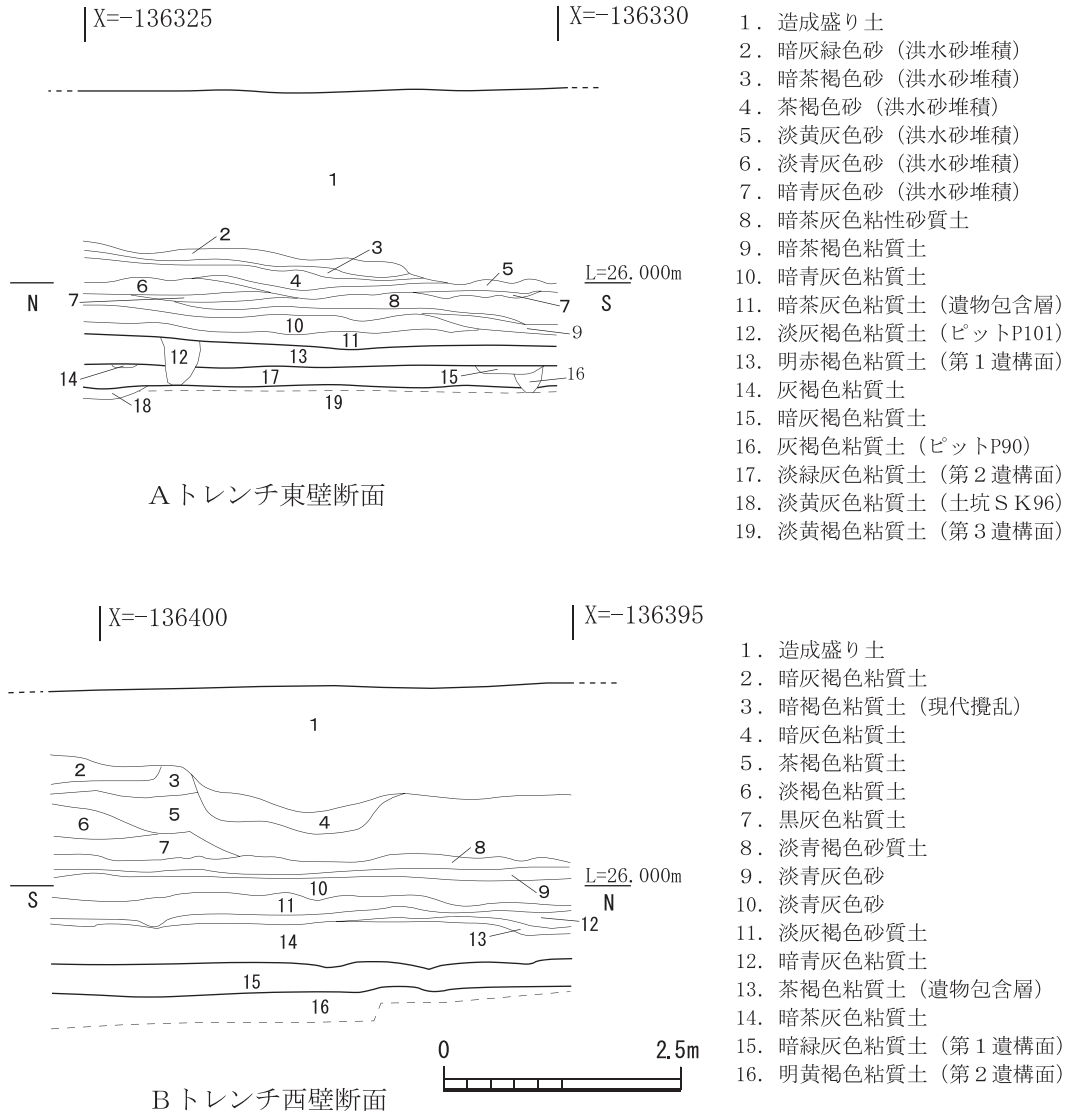
Aトレンチは、平成13年度の第5次調査地の北東側に位置する。今回の調査区内においても、3面の遺構面の調査を実施した。トレンチの西側と南側は、後世の人為的な掘削に伴い遺構が消滅していた。西側の攪乱は、南側に比べると浅く、第1遺構面より約10cm攪乱土を除去すると土坑やピットなどの遺構の底部が一部残っていた。南側は、1.5mまで断ち割りの掘削を行ったが、さらに下層まで攪乱がおよんでいることを確認した。

Bトレンチは、平成16年度の第7次調査地の西隣に位置する。平成16年度の調査(第7次)の成果から、2面の遺構面が存在することが確認されている。第1面は中世(平安時代末～鎌倉時代)



*座標は日本測地系を使用

第2図 椋ノ木遺跡調査区配置図



第3図 A・Bトレンチ土層断面図

の遺構面、第2面は縄文時代の遺構面となる。今回の調査でも2面の遺構面を想定して調査を進めた。

4. 検出遺構

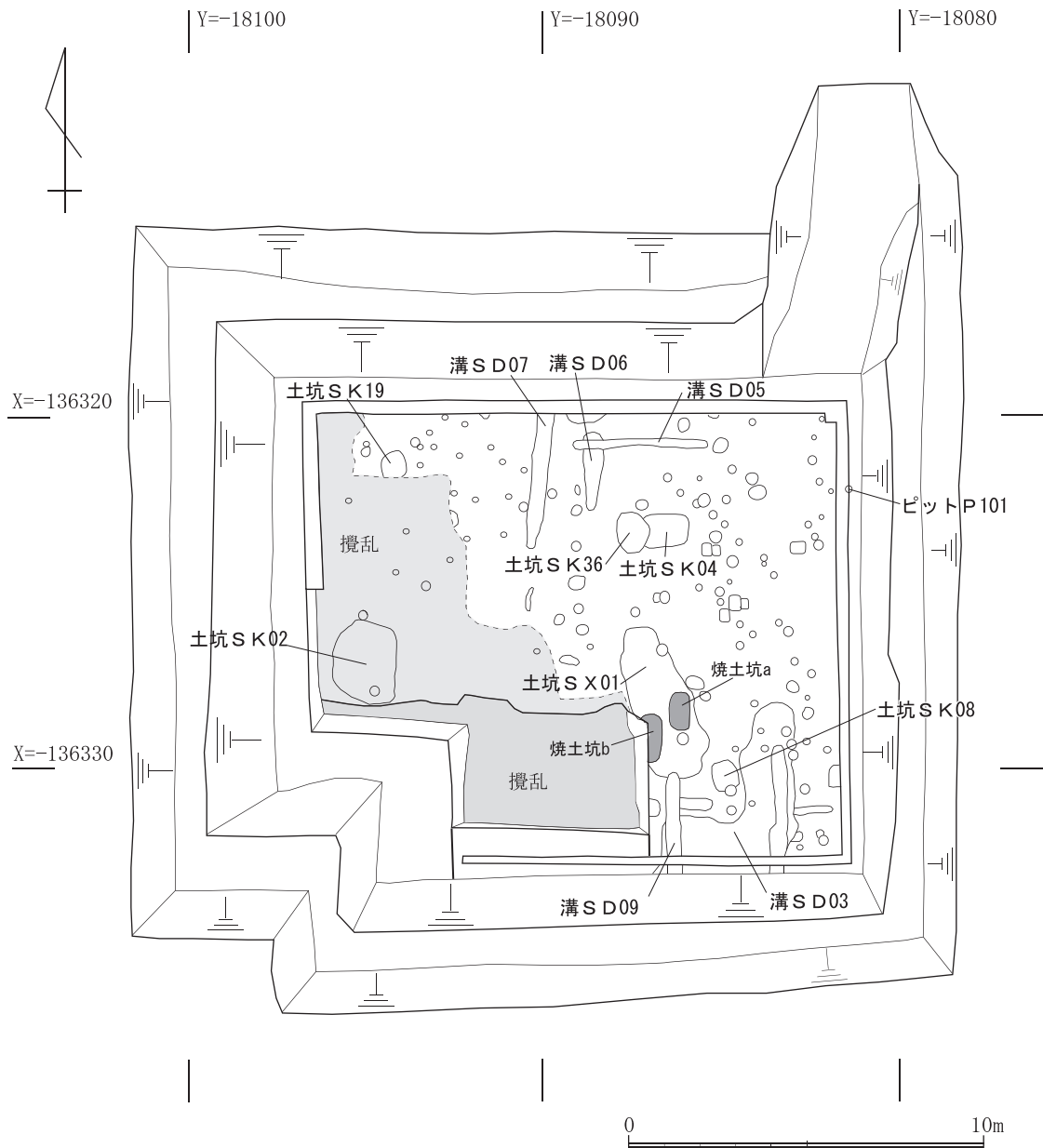
1) Aトレンチ

近接調査地である平成13年度の第5次調査の成果から、3面の遺構面が存在することが確認されている。

①第1遺構面

標高約25.5mで第1面となる中世(鎌倉時代以降)の遺構面を確認した。遺構は、耕作溝と考えられる溝や土坑、ピットなどを検出した。検出した遺構の時期としては13世紀～14世紀初めに該当すると判断される。

土坑S X01 東西幅約1.8m、南北の長さ約4.5m、深さ約0.15mを測る土坑である。また、土

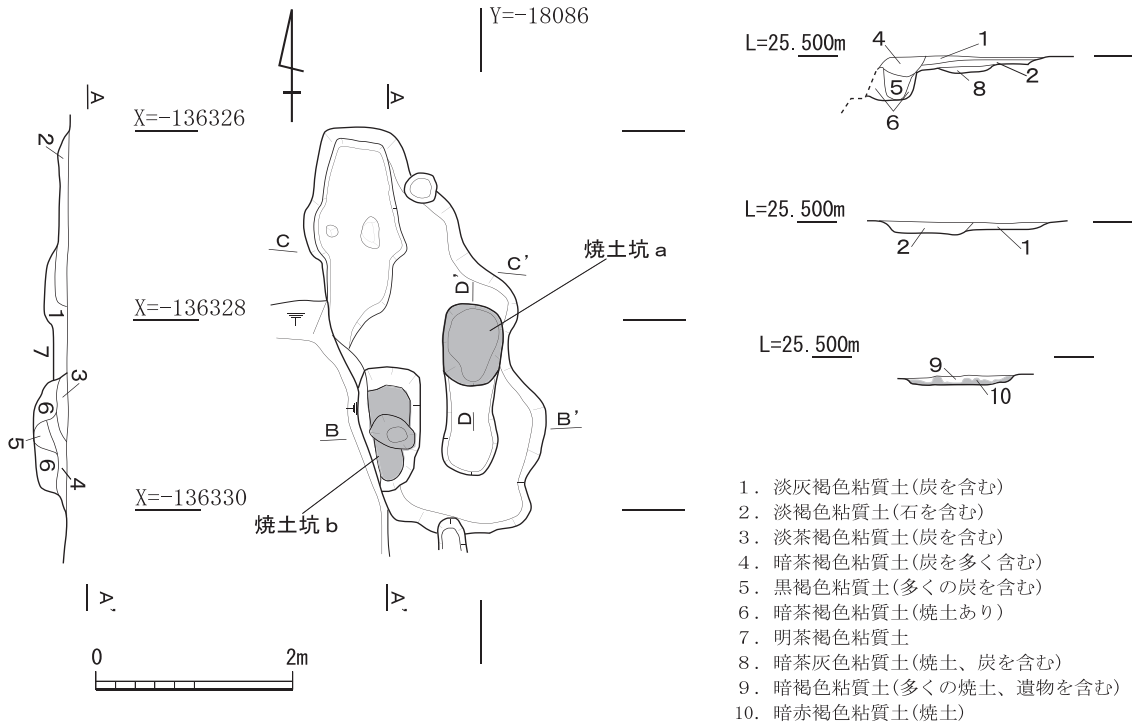


第4図 Aトレンチ第1遺構面平面図

坑内に楕円形を呈する焼土坑(a・b)を2基検出した。土坑S X01の埋土内から瓦器碗や土師器皿、羽釜などの土器類が出土した。同じ埋土から、焼け土や炭化物、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋が出土したことから、鍛冶に関連する遺構と考えられる。焼土坑aは東西幅約0.6m、南北の長さ約1.3m、深さ約0.15mを測る。埋土内からは土師器や瓦器の破片や焼け土、炭化物などが出土した。焼土坑bの東西幅は攪乱により破壊されているため現存する幅は約0.5m、南北の長さ約1.3m、深さ約0.2mを測る。埋土内からは土師器や瓦器の破片や焼け土、炭化物などが出土した。時期は13世紀中葉のものだと判断される遺物が出土している。

土坑S K02 東西約1.8m、南北約2.3m、深さ約0.3mを測る長方形を呈する土坑である。底部には10～20cm程の石が集積していた。埋土内から土師器や瓦器、青磁などの破片が出土した。

溝S D03 トレンチ南東部で検出した屈曲する溝で、幅約1.4m、南北の長さ約4.2m、深さ約0.3



第5図 Aトレンチ第1遺構面土坑S X01平・断面図

mを測る。埋土から瓦器片や土師器片、東播系の鉢の破片などが出土した。このほかに、フイゴの羽口の破片が出土していることから、この溝は土坑S X01と同時期のものかそれ以降の遺構の可能性が高い。

土坑S K04 東西約1.4m、南北約1m、深さ約0.1mを測る。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土したが、時期の判別はできなかった。

溝S D05 幅約0.1m、東西の長さ約3.8m、深さ約0.05mを測る耕作溝と考えられる。埋土からは瓦器の破片が少量出土した。

溝S D06 東西方向の溝S D05に切り込まれた南北方向の溝である。幅約0.5m、南北の長さ約2.2m、深さ約0.1mを測る。埋土からは瓦器の破片が少量出土した。

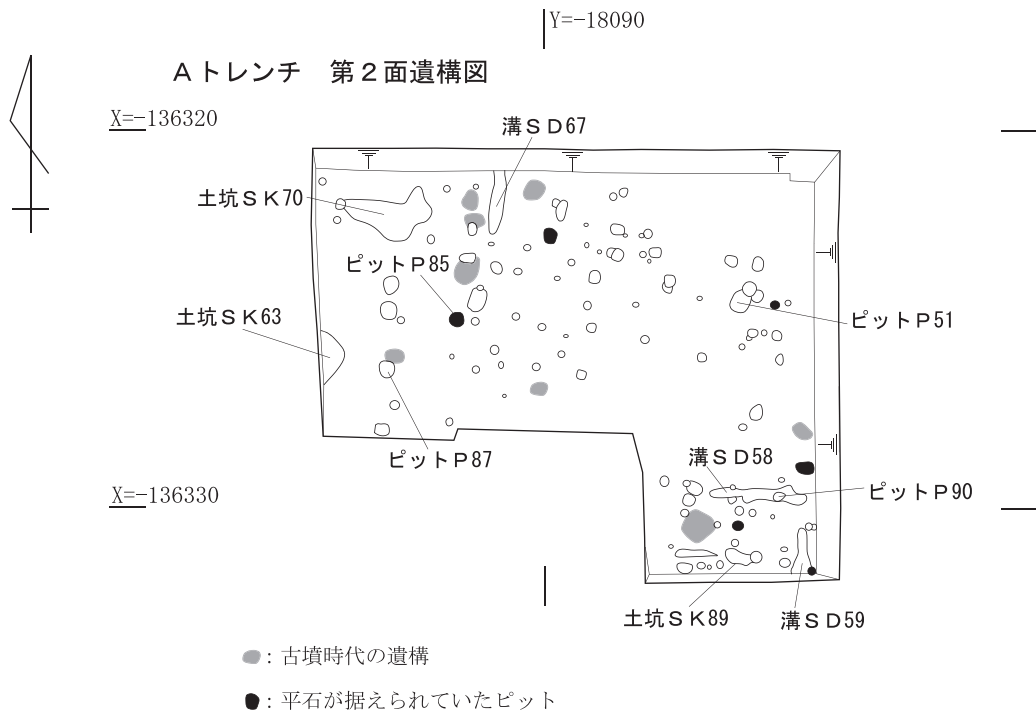
溝S D07 幅約0.5m、南北の長さ約3.8m、深さ約0.2mを測る。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

土坑S K08 東西約0.7m、南北約0.8mを測る隅丸方形を呈する土坑である。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

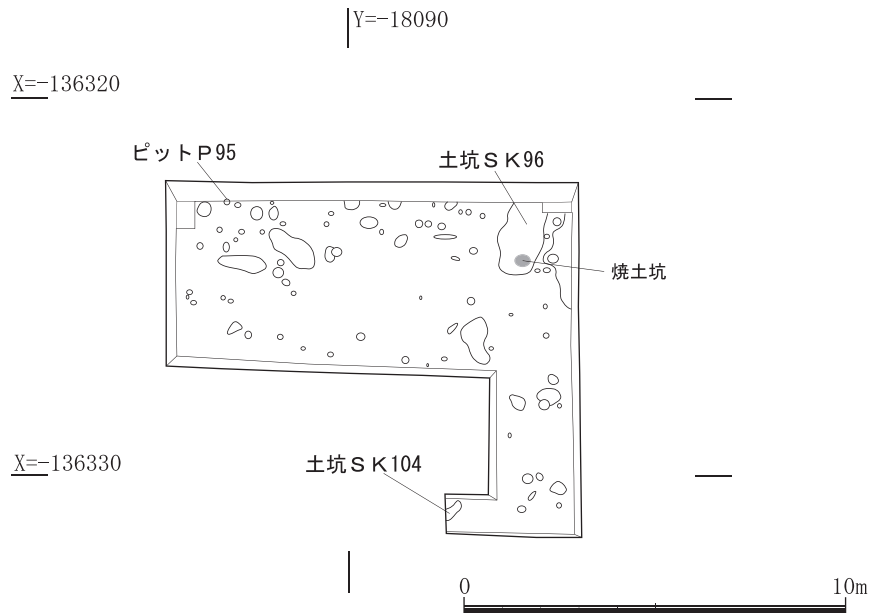
溝S D09 幅約0.4m、南北の長さ約2.4m、深さ約0.2mを測る溝で、土坑S X01を切りこんでいることから、土坑S X01より新しい時期の遺構と判断できる。埋土からは土師器や瓦器の小片が少量出土した。

土坑S K19 東西約0.5m、南北約0.8m、深さ約0.1mを測る土坑であるが、南側が攪乱によって破壊されているため、詳細な規模は不明である。また、遺物も出土していない。

土坑S K36 東西0.9m、南北1.1m、深さ約0.2mを測る楕円形を呈する土坑である。埋土からは、土師器の羽釜の破片や瓦器の破片が出土している。



A トレンチ 第3面遺構図



第6図 Aトレンチ第2・3遺構面平面図

ピットP101 直径0.4m、深さ約0.6mを測る小穴で、底部からは土師器小皿3点と瓦器椀3点が出土している。

②第2遺構面

第1遺構面から約30cm下げた標高約25.2mで、遺構を確認した。これまでの調査では、第2遺構面は古墳時代の遺構が存在する面であると確認されていたが、今回の調査地の第2遺構面では古墳時代と思われる土坑などの遺構と12世紀末～13世紀中葉までのピット群や溝を検出した。

今回の調査では、第2遺構面では2時期の遺構を検出することとなった。

検出したピット群は、素掘りのものと柱穴の底部に平たい礎板状の石を据えたものがみられる。しかし、石がある柱穴は揃わずに建物を復原するには至らなかった。

古墳時代の遺構と判断される遺構は少なく、中世の溝やピットなどの埋土である淡灰色粘質土とは異なる淡緑灰色粘質土の埋土である土坑を8基検出した。遺物は出土していないが、おそらくは古墳時代の遺構の可能性が考えられる。そのほかの遺構は、おおむね12世紀末～13世紀中葉までの時期に属するものと思われる。

ピットP51 一辺が約0.5m、深さ約0.15mを測る隅丸方形を呈する小穴である。

溝SD58 幅約0.3m、東西の長さ約2.6m、深さ約0.1mを測る東西溝である。埋土からは瓦器碗の破片が出土した。

溝SD59 幅約0.3m、南北の長さ約2m、深さ約0.2mを測る南北溝である。埋土からは土師器の破片が出土した。

土坑SK63 トレンチの西端部で検出した一辺が約1mを測る土坑であるが、調査区外に延びているものと思われる。深さは約0.15mで、埋土からは土師器や瓦器の破片が出土した。

溝SD67 幅約0.3m、南北の長さ約1.5m、深さ約0.1mを測る南北方向の溝である。埋土からは土師器や瓦器の破片が出土した。

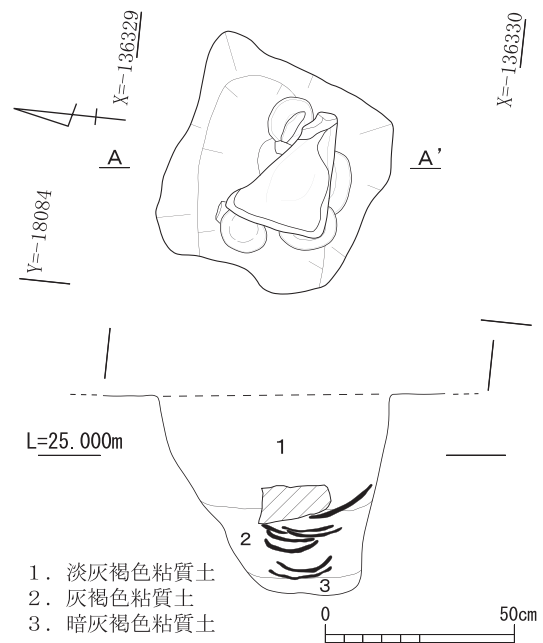
土坑SK70 東西最大約2.2m、南北最大約1m、深さ約0.05mを測る不定形な土坑である。埋土からは瓦器碗と思われる破片が出土した。

ピットP85 東西約0.4m、南北約0.35m、深さ約0.2mを測る穴である。底部には平石が据えられていた。埋土からは瓦器の小片が出土した。

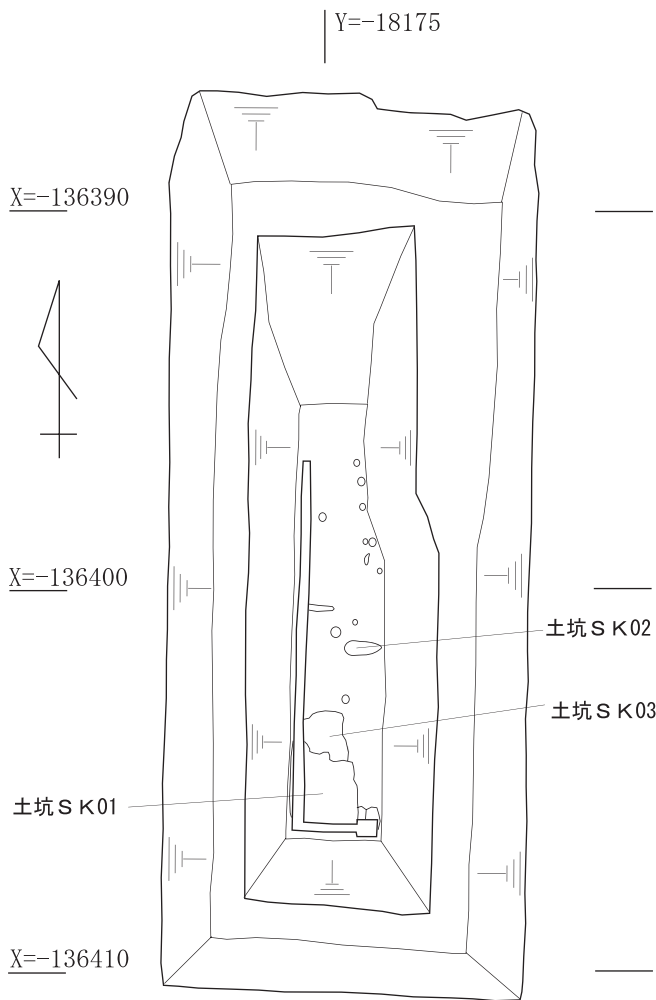
ピットP87 東西約0.9m、南北約0.7m、深さ約0.15mを測る小穴である。底部には平たい石が据えられていた。埋土からは瓦器碗の破片が出土した。

土坑SK89 トレンチ南東部で検出した直径約0.3m、深さ約0.1mを測る円形の土坑で、底部はすり鉢状を呈する。埋土から土師器の破片が出土した。

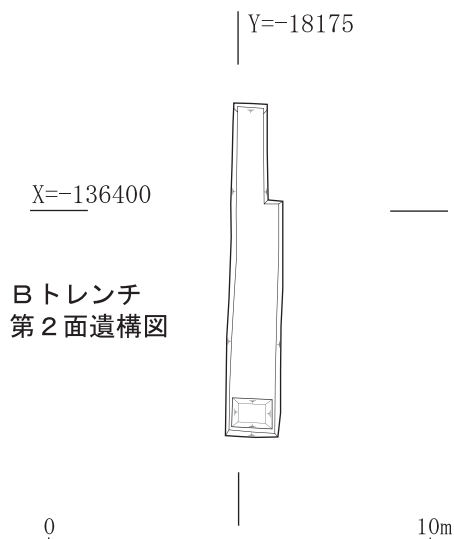
ピットP90 東西約0.3m、南北約0.2m、深さ約0.5mを測る楕円形を呈する小穴である。検出面より0.1m下げたところで平石が据えられ、その平石の下から15枚の完形の土師器小皿が重なった状況で出土した。何らかの儀礼がおこなわれたと考えられるが、詳細は不明である。時期は12世紀後半と推定される。埋土からはそのほかに土師器の破片が出土した。



第7図 Aトレンチ第2遺構面
ピットP90平・断面図



Bトレンチ 第1面遺構図



第8図 Bトレンチ第1・2遺構面平面図

③第3遺構面

第2遺構面から約50cm下げた標高約24.7mで、縄文時代の遺構面を確認し調査を実施した。

検出した遺構は、落ち込み状の浅い土坑や杭跡と思われる小穴群を検出した。遺物は、器壁が厚く胎土が粗い縄文土器と思われる小片がごく微量であるが出土した。

ピットP95 直径約0.1m、深さ約0.12mを測る小穴である。埋土からの出土遺物はなかった。

土坑S K96 長径約0.6m、幅約0.2m、深さ0.05mを測る落ち込み状の土坑である。

土坑S K104 南北約1.9m、幅約1.1m、深さ約0.1mを測る土坑で、土坑底面で直径約0.3m、深さ約0.05mの土坑を検出した。埋土からは炭や焼土とともに、縄文土器と判断される土器小片が出土した。

2) Bトレンチ

過去の近接調査地である平成16年度の調査(第7次)の成果から、2面の遺構面が存在することが確認されている。第1面は中世(平安時代末～鎌倉時代)の遺構面、第2面は縄文時代の遺構面となる。第7次の調査の中世の遺構面では、条里制地割に由来するとみられる南北方向の坪境溝が確認されている。今回の調査地内にも坪境溝やそれに伴う遺構が検出できる可能性があった。

①第1遺構面

標高約25.4mで遺構を確認した。遺構は土坑や溝、ピットなどを確認したが遺

構の密度は希薄で、出土した遺物も少量であった。また、想定されていた条里制地割に関連する遺構は、今回のトレンチ内では確認できなかった。

土坑 S K 01 トレンチの南端部で検出した土坑である。確認できた規模は、東西約1.5m、南北約1.8m、深さ約0.15mを測る。遺物は、須恵器甕体部片、土師器皿、瓦器椀などが出土した。時期は12世紀後半に属するものと考えられる。

土坑 S K 02 トレンチ中央で検出した東西約0.9m、南北幅約0.4m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する土坑である。埋土から土師器の破片が出土した。

土坑 S K 03 トレンチの南端部で土坑 S K 01に切られる形で検出した土坑である。確認できた規模は、東西約1m、南北約1.3m、深さ約0.08mを測る。遺物の出土はなかった。

ピット群 直径約0.1～0.3mを測るピットを13基検出したが、ピット内からの遺物の出土はなかった。直径が小さい0.2m以下のものは、埋土が青灰色粘土であり、杭痕跡の可能性が考えられる。

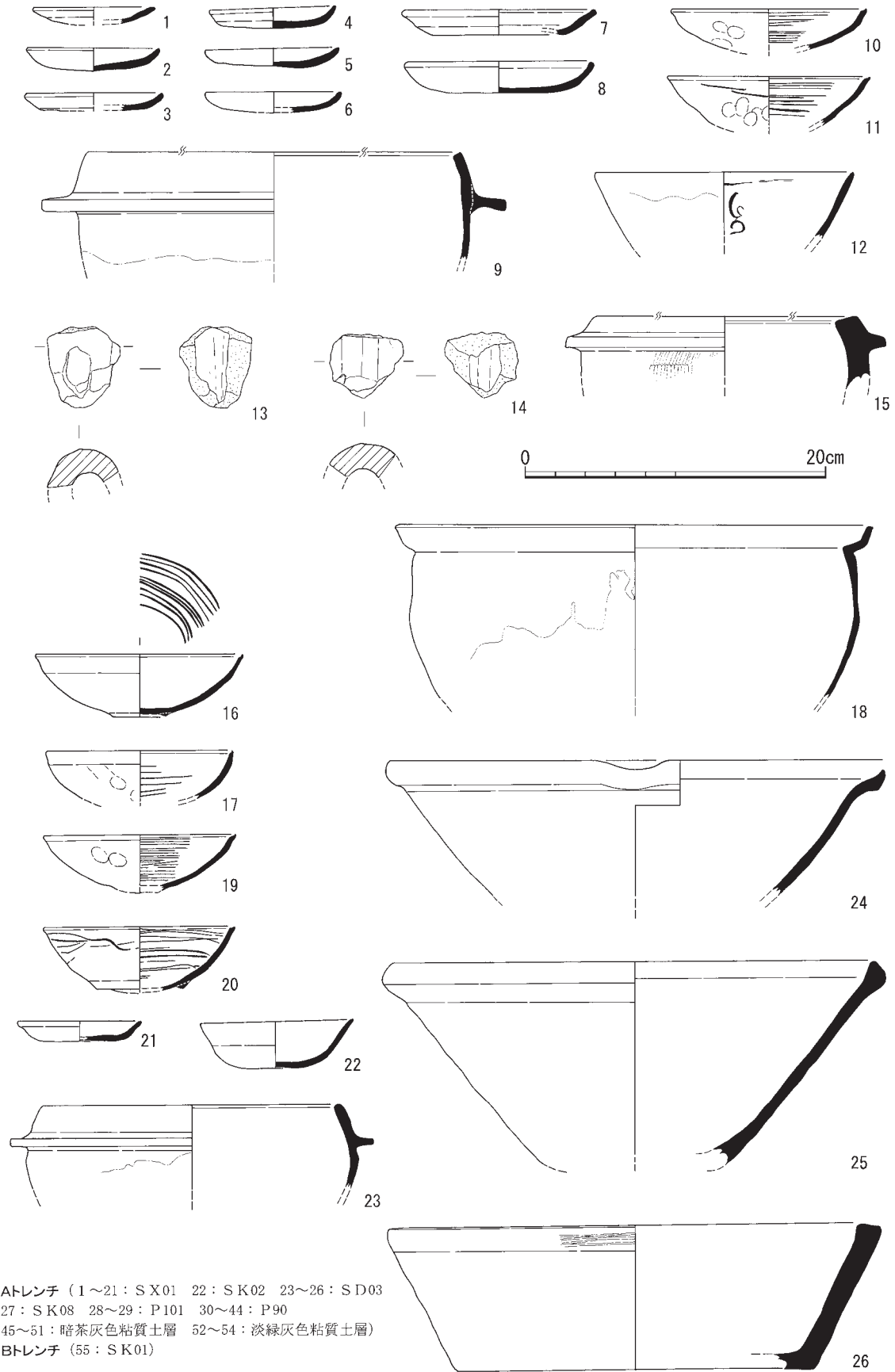
②第2遺構面

第1遺構面よりさらに30～40cm掘り下げ、平成7年度調査時の縄文時代の遺構検出面まで掘削し、遺構の精査をおこなったが、遺構は確認できず、縄文土器の出土も確認できなかった。さらに、南端部で約0.5m下層確認のため掘削をおこなったが、遺構・遺物は確認できなかった。

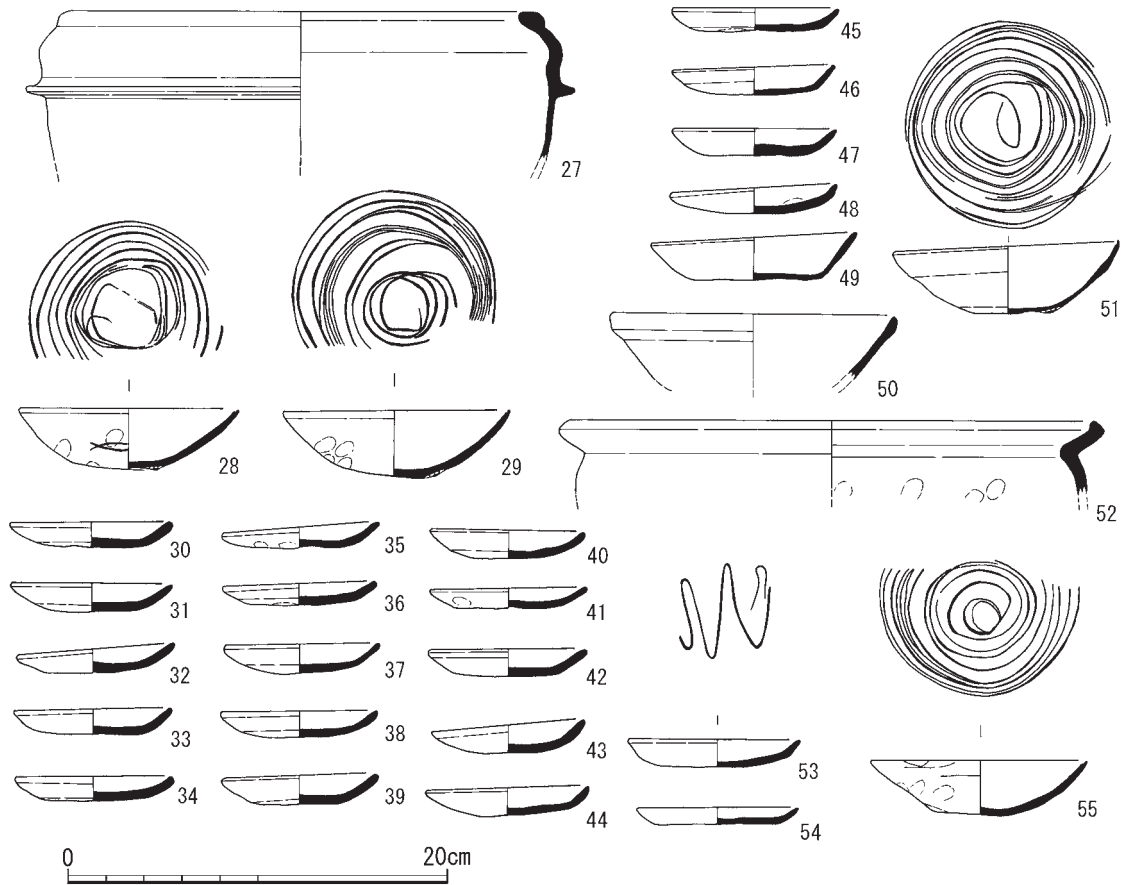
5. 出土遺物(第9・10図)

遺物は、中世の遺物が多く出土したが、実測可能な個体は少なかった。出土遺物の総量は整理用コンテナバットで6箱である。ここでは、各トレンチ、各遺構面ごとに報告する。

1～29は、Aトレンチの第1遺構面で検出した遺構から出土した遺物である。1～21は土坑 S X 01から出土した。1～3・5・6は土師器の小皿で内外面ともにナデを施し、外面底部には指押えの痕跡がみられる。4は瓦器の小皿で、内外面ともにナデを施し、外面底部には指押え痕跡がある。器壁は摩耗していないが、暗文は認められない。7・8は土師器の皿で内外面ともにナデが施されている。9は土師質の羽釜で、大和産と思われる。外面上部には煤が付着している。10・11は瓦器の椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。12は青磁の椀の口縁部で、内面に模様がみられる。13・14はフイゴの羽口の破片である。2点とも火を受けており、上部は赤色化、下部は黒色化または鉄分が付着している。15は滑石製の石鍋の破片である。外面には整形時の工具痕が残る。16～18は焼土坑 a から出土した遺物である。16・17は瓦器椀で、16の底部には貼り付け高台の痕跡が残っている。18は土師器の甕であり、外面口縁より下部に煤が付着している。19～21は、焼土坑 b から出土した遺物である。19・20は瓦器の椀で、内面には渦巻状の暗文が施されている。外面底部には、貼り付け高台の痕跡がみられる。21は土師器の小皿である。22は、土坑 S K 02から出土した土師器の杯である。口縁部のナデが粗く、口縁が歪んでいる。23～26は溝 S D 03から出土した遺物である。23は土師質の羽釜である。外面には煤が付着している。24・25は東播系の須恵器の鉢で、24には注ぎ口がある。26は瓦質土器の火鉢の



第9図 出土遺物実測図(1)



第10図 出土遺物実測図(2)

破片と思われる。27は、土坑S K08から出土した土師質の羽釜の破片である。大和産のものと思われる。28・29はピットP101から出土した瓦器の椀である。内面には緻密なヘラミガキと渦巻状の暗文が施されている。外面底部には指押え痕跡と貼り付け高台の痕跡がみられる。

30～44は、第2遺構面のピットP90から出土した遺物である。30～44は土師器の小皿であり、残存率の高い破片について図化した。口径は8.5cm前後の小皿で内外面ともにナデが施され、外面底部には指押え痕跡が残る。

45～51は、第1遺構面上層にある遺物包含層(第3図第11層の暗茶灰色粘質土)より出土した遺物である。45～48は土師器の小皿の破片である。49は土師器の杯である。50は白磁の椀の口縁部片である。51は瓦器の椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。

52～54は、第2遺構面直上の第3図第17層の淡緑灰色粘質土層から出土した遺物である。52は土師器の甕の口縁部である。口縁は28.6cmを測る。53は瓦器の小皿である。内面底部に波状の暗文が施されている。54は土師器の小皿である。

55は、Bトレンチの土坑S K01から出土した瓦器椀である。内面にはヘラミガキ、渦巻状の暗文が施されている。外面底部に貼り付け高台の痕跡が残る。

6. まとめ

Aトレンチでは、第1遺構面で検出した土坑S X01から、火を受けた土器や焼け土、炭、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋などが出土した。どのような構造をもった施設であったか詳細は不明であるが、鍛冶関連の遺構の可能性が考えられる。このことから、集落内で小規模ながら鍛冶作業をおこなっていたことが想定される。第2面では中世と古墳時代の遺構が混在していたが、古墳時代の遺構は、遺物の出土がなく埋土の状況からをこの時期のものと判断した8基の土坑があるだけである。第2面の中世の遺構では、ピット90内に20枚の土師器皿が重なった状態で出土し、何らかの儀礼がおこなわれたと考えられる。第3面で検出した縄文時代の遺構は、落ち込みのような浅い土坑や杭跡と考えられる小穴群で、遺物は土器片がごく少量出土した。

Bトレンチでは、第1面で中世の遺構を検出した。しかしながら、今回の調査トレンチ内では条里区画に関連する遺構は検出できなかった。縄文時代となる第2面では遺構・遺物ともに確認できなかった。

参考文献

- 河野一隆ほか「棕ノ木遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 森島康雄「棕ノ木遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第110冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 高野陽子「棕ノ木遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第115冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

圖 版



(1) 第5次調査地上空から水間を望む(南西から)



(2) 調査地全景(西から)



(1) 第1-1トレンチ全景(東から)



(2) 第1-1トレンチから建部山を望む(北西から)



(3) 第1-1トレンチ土層断面
(南西から)



(1)第1-2トレンチ全景(北から)



(2)第1-1・1-2トレンチ全景
(北西から)



(3)第1-1トレンチと切岸2
(西から)



(1) 第2トレンチ上部全景
(南西から)



(2) 第2トレンチ下部土層断面
(南西から)



(3) 第3トレンチ全景(東から)



(1) 第3トレンチ土層断面
(北東から)



(2) 第4・8トレンチ調査前
(北から)



(3) 第5トレンチ上部土層断面
(南西から)



(1) 第6-1 トレンチ全景(西から)



(2) 第7 トレンチ土師器皿出土状況
(東から)



(3) 第8 トレンチ全景(北から)



(1) 第6次調査地上空から由良川上流を望む(北西から)



(2) 調査地全景上空(上が東)



(1) 郭1-1 調査前全景(南から)



(2) 郭1-1 調査地全景(北から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡1 全景
(北から)



(2) 郭1-1 掘立柱建物跡2 全景
(北から)



(3) 郭1-1 掘立柱建物跡3 全景
(北西から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡4 全景
(南西から)



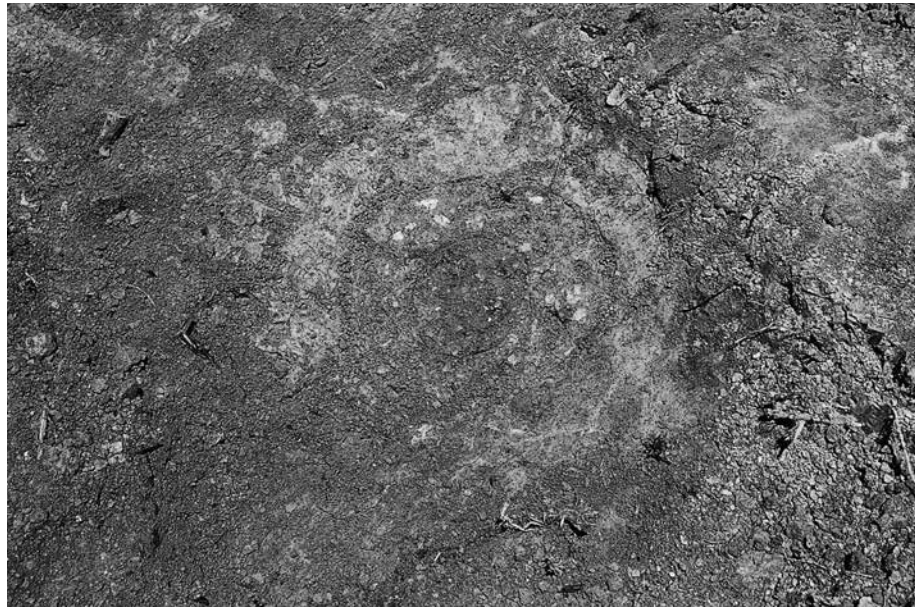
(2) 郭1-1 調査状況(北から)



(3) 郭1-1 柵1 (東から)



(1) 郭1-1 掘立柱建物跡1 柱穴
(北東から)



(2) 郭1-1 掘立柱建物跡2 柱穴
(西から)



(3) 郭1-1・郭1-2 土層断面
(西から)



(1) 郭1-2南部柱穴全景(南から)



(2) 郭1-2南部柱穴全景(北から)



(1)切岸1、郭1-2全景(北から)



(2)切岸1、郭1-2北部全景
(北から)



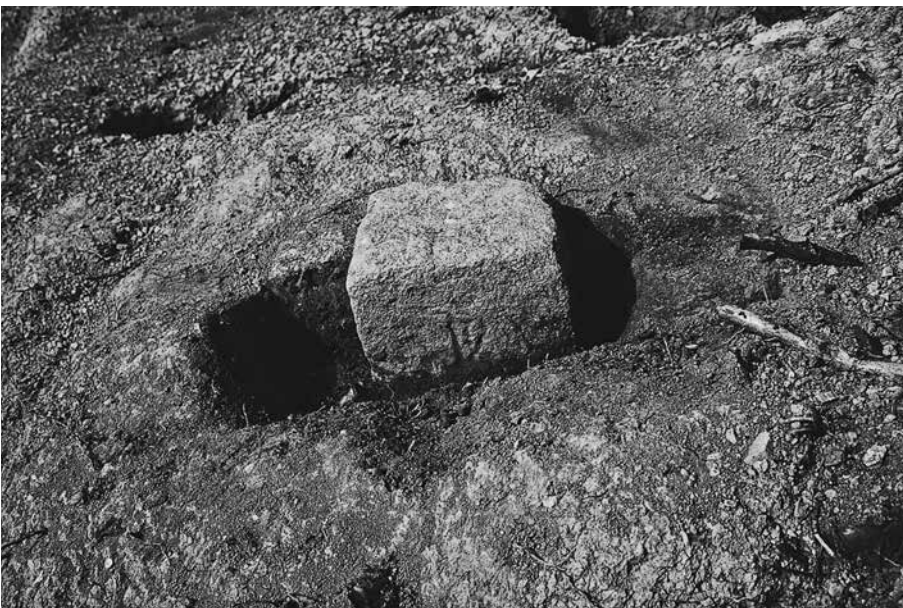
(3)切岸1と郭1-1との断ち割り
(南から)



(1) 切岸1と郭1-2との断ち割り
(南から)



(2) 郭1-2 檣敷状建物跡の礎石
(南から)



(3) 郭1-2 檣敷状建物跡の礎石
(南から)



(1) 郭1-1南の東部(北から)



(2) 郭1-1南の西部(西から)



(1) 郭1-1南柵2(西から)



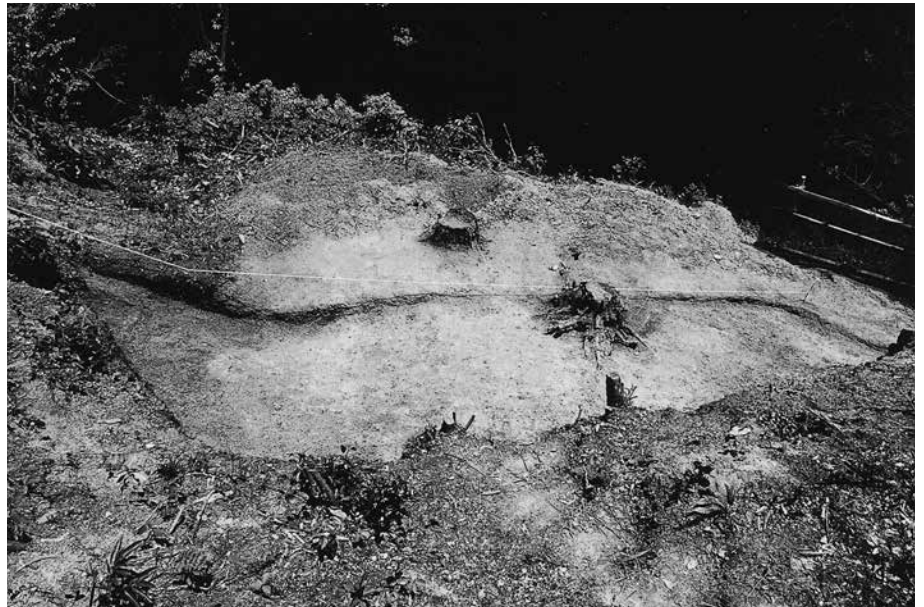
(2) 郭1-1南下層(北から)



(3) 郭1-1南下層柱穴(北から)



(1) 郭1-1 南靴(こはぜ)出土状況
(北西から)



(2) 郭1-5 全景(西から)



(3) 堀切下部、神社階段部分
(南東から)



(1)堀切、郭1-1北斜面(北から)



(2)堀切、郭1-1北斜面(東から)



(1) 郭1-1北斜面の戦国時代の道
(北西から)



(2) 戦国時代の道(北西から)



(3) 郭1-1北斜面の土層断面
(西から)



(1) 郭1 - 3 全景(北から)



(2) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5 (東から)



(1) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
北部柱穴(南西から)



(2) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
南部柱穴(東から)



(3) 郭1 - 3 掘立柱建物跡5
南部柱穴(東から)



(1)切岸2掘削状況(南から)



(2)切岸2南部(南西から)



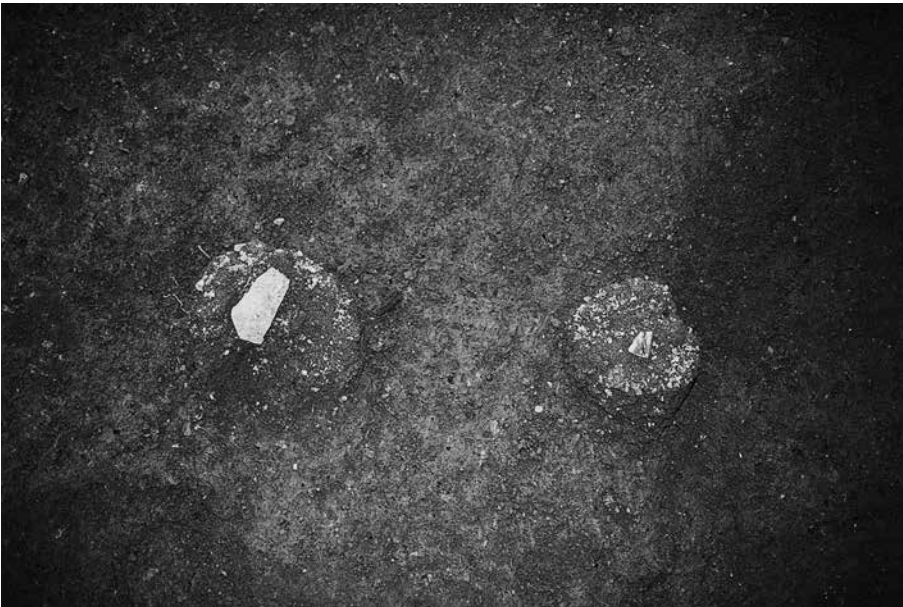
(1) 郭1 - 4 北部(東から)



(2) 郭1 - 4 北部(南から)



(1) 郭1 - 4 南部(南から)



(2) 郭1 - 4 下層遺物出土状況
(北から)



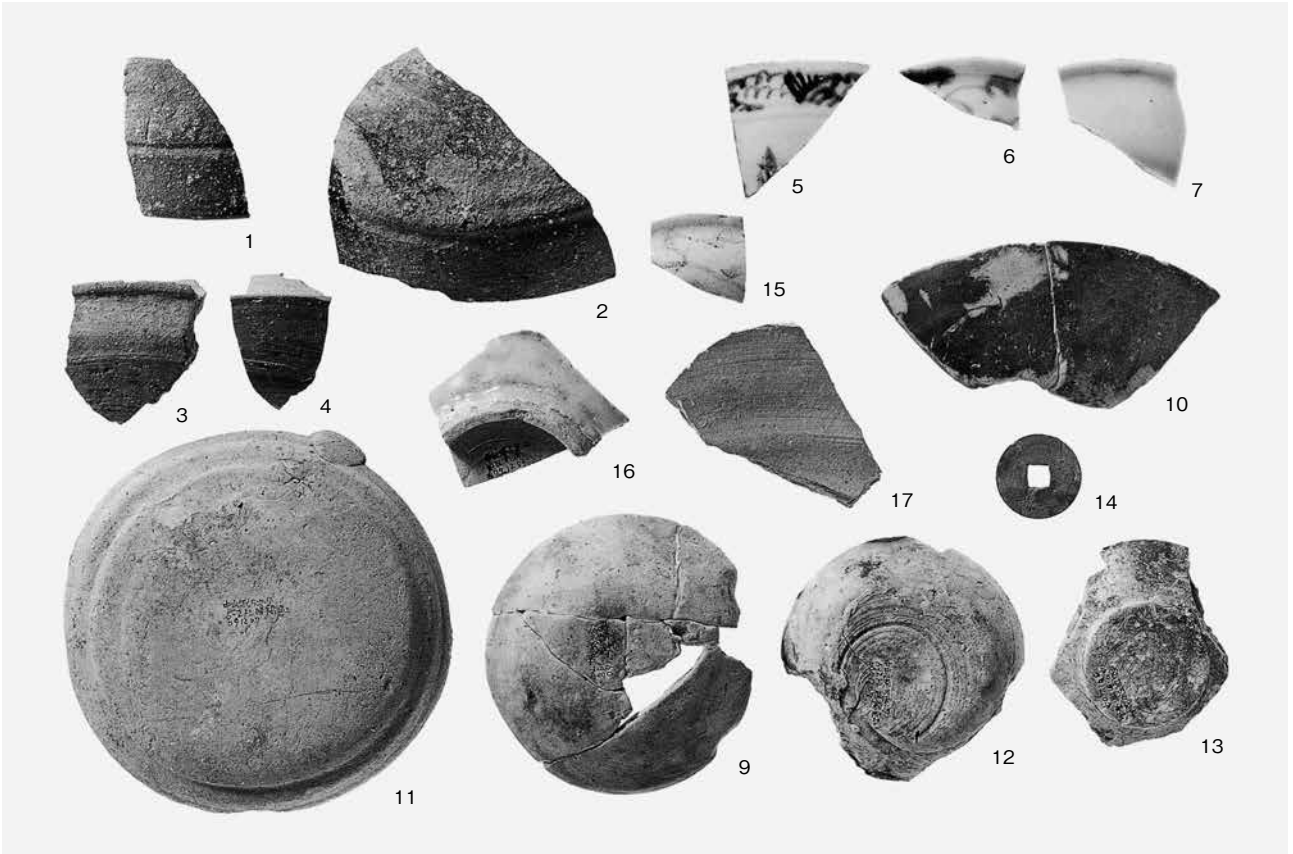
(3) 郭1 - 4 下層柄頭出土状況
(西から)



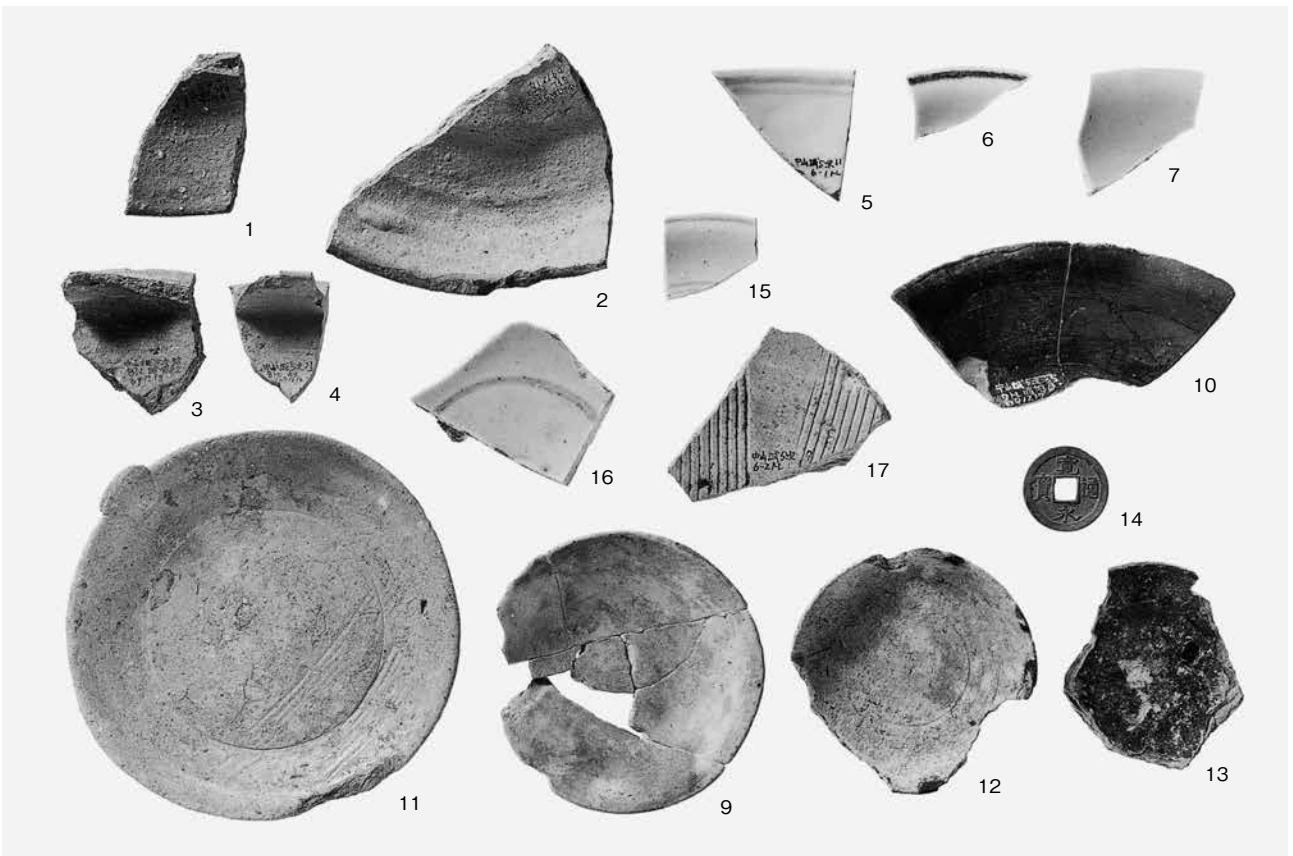
(1) 郭1 - 4 中央部全景 (西から)



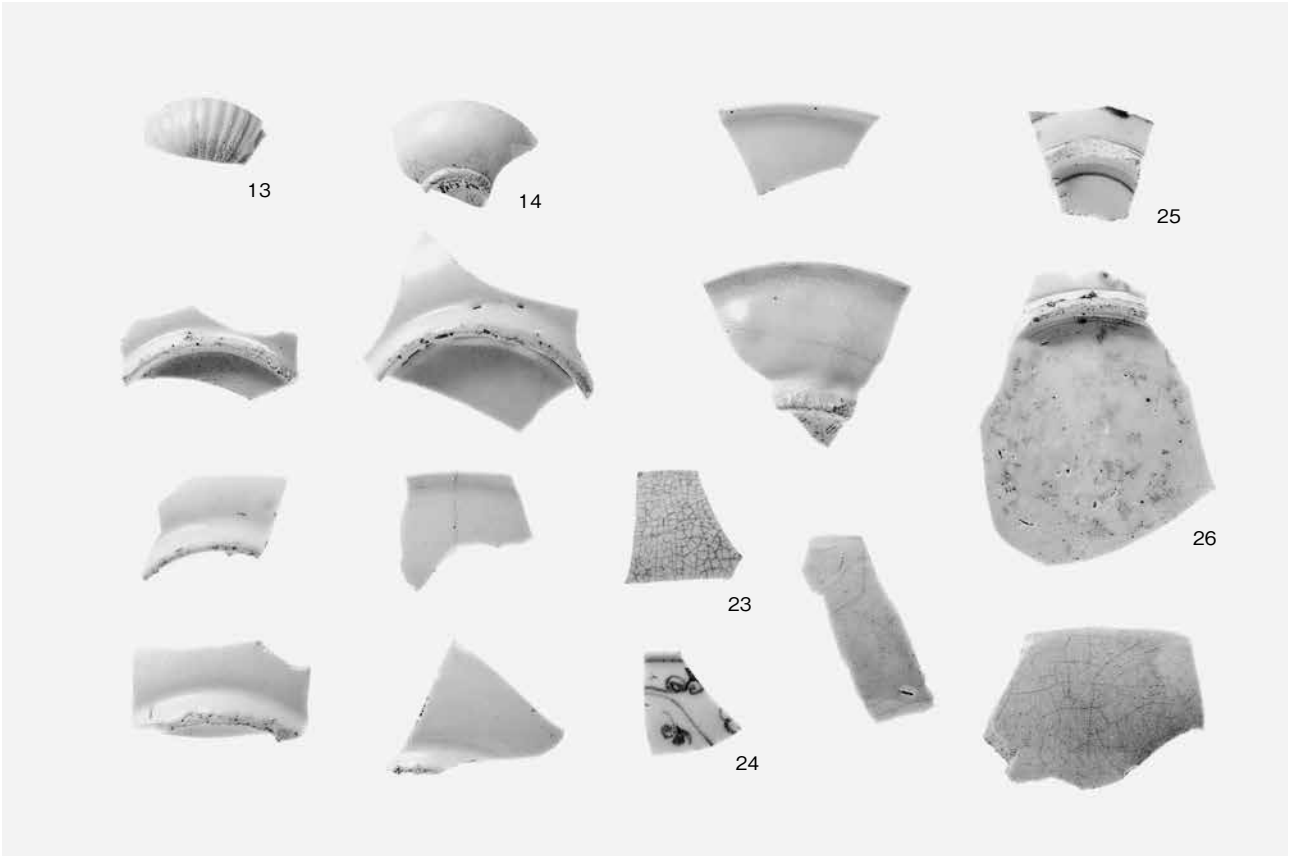
(2) 郭1 - 4 掘立柱建物跡6 (北から)



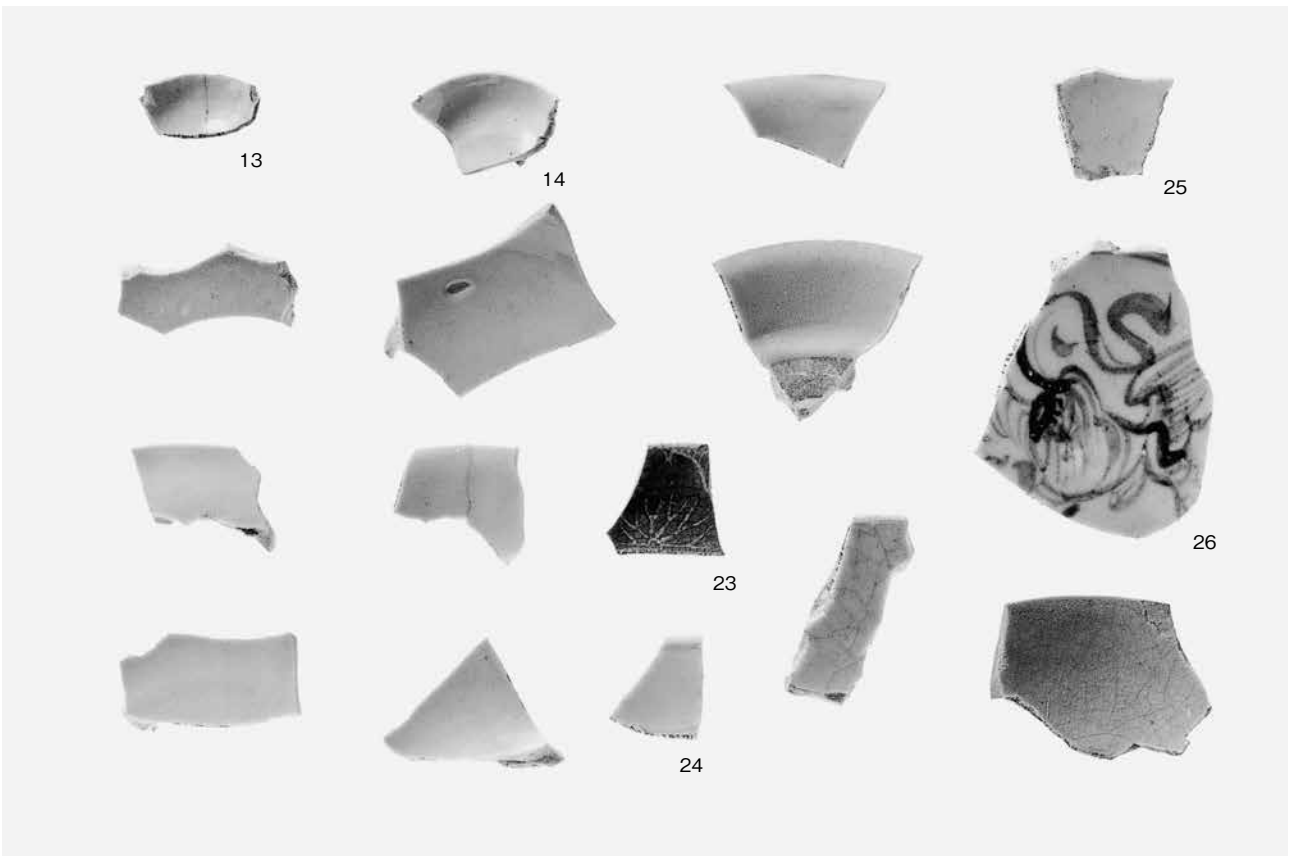
(1) 第5次出土遺物



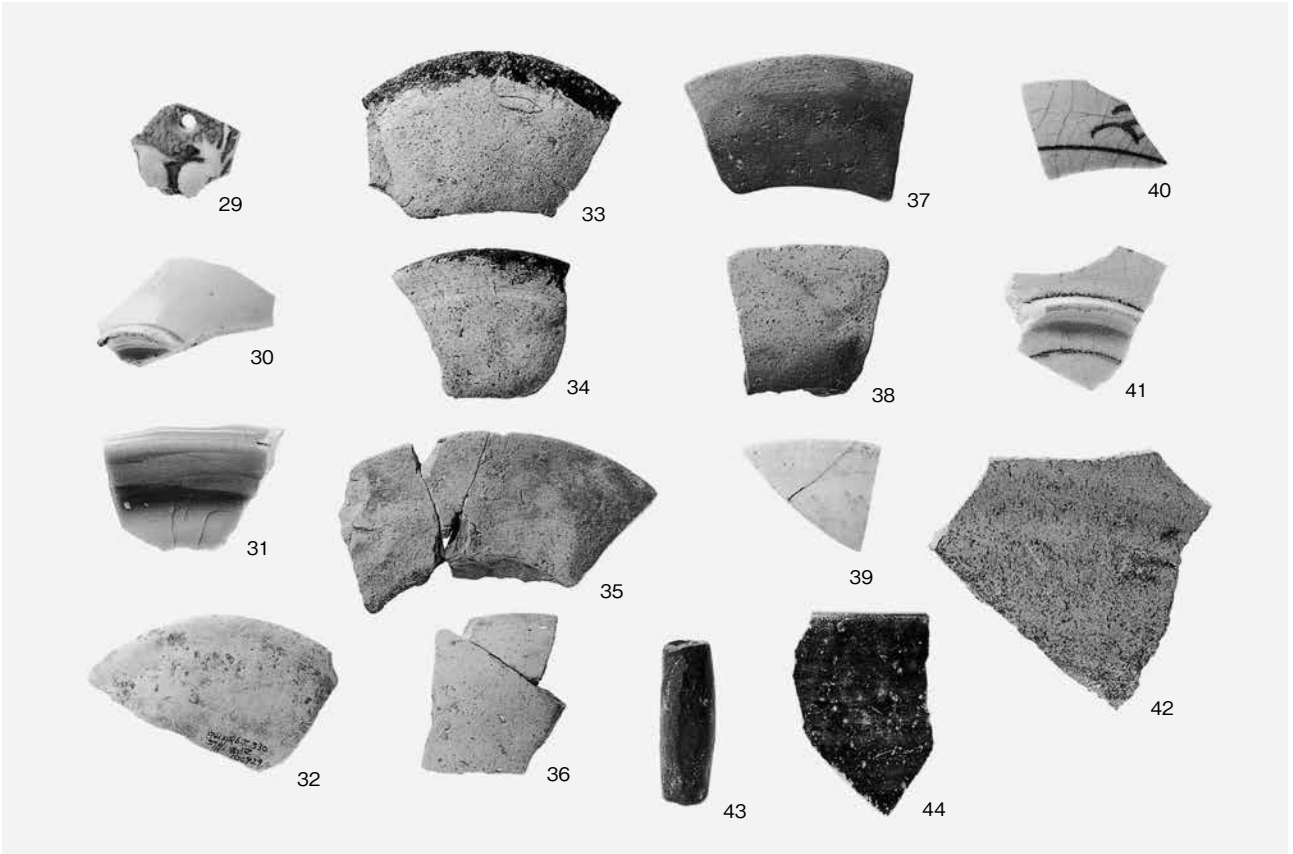
(2) 第5次出土遺物(裏面)



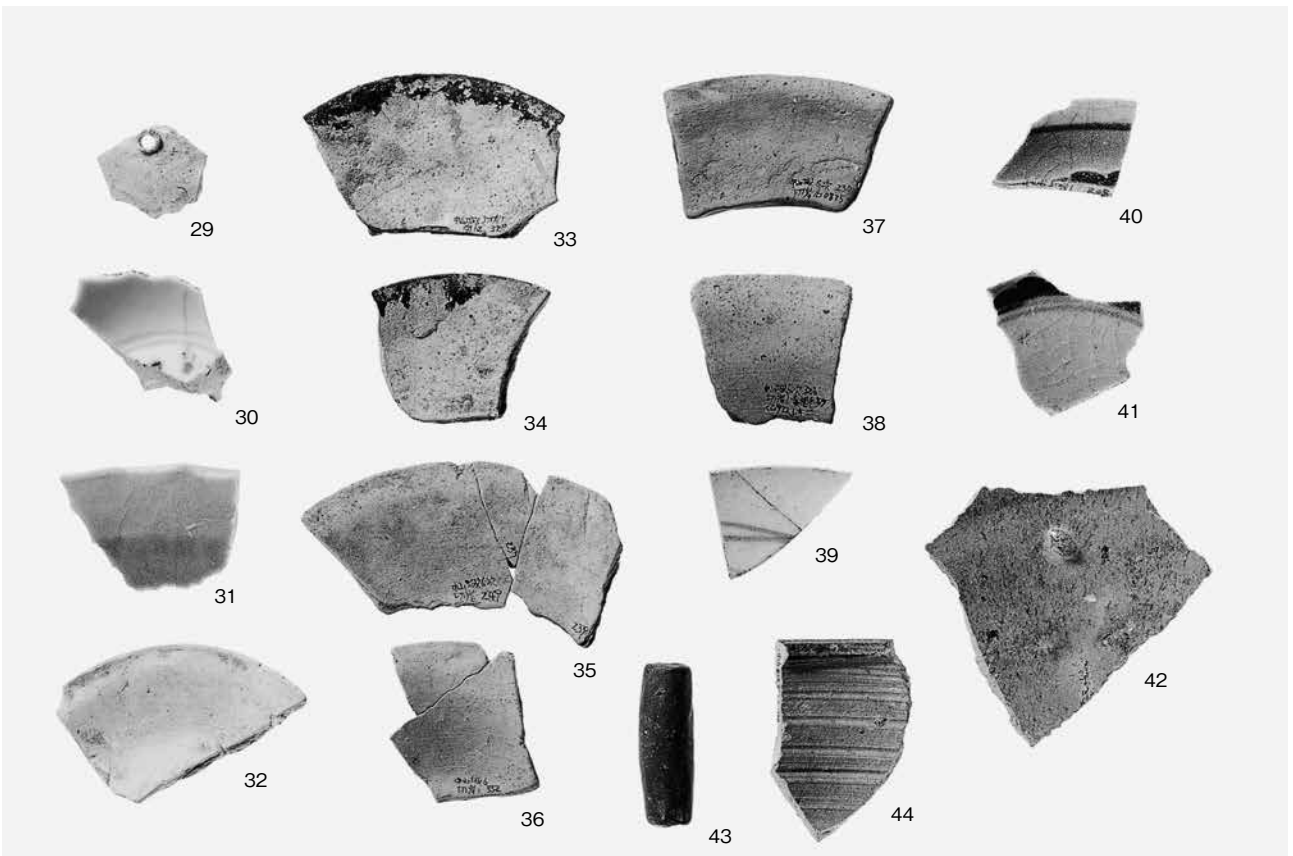
(1) 第6次出土遺物 1



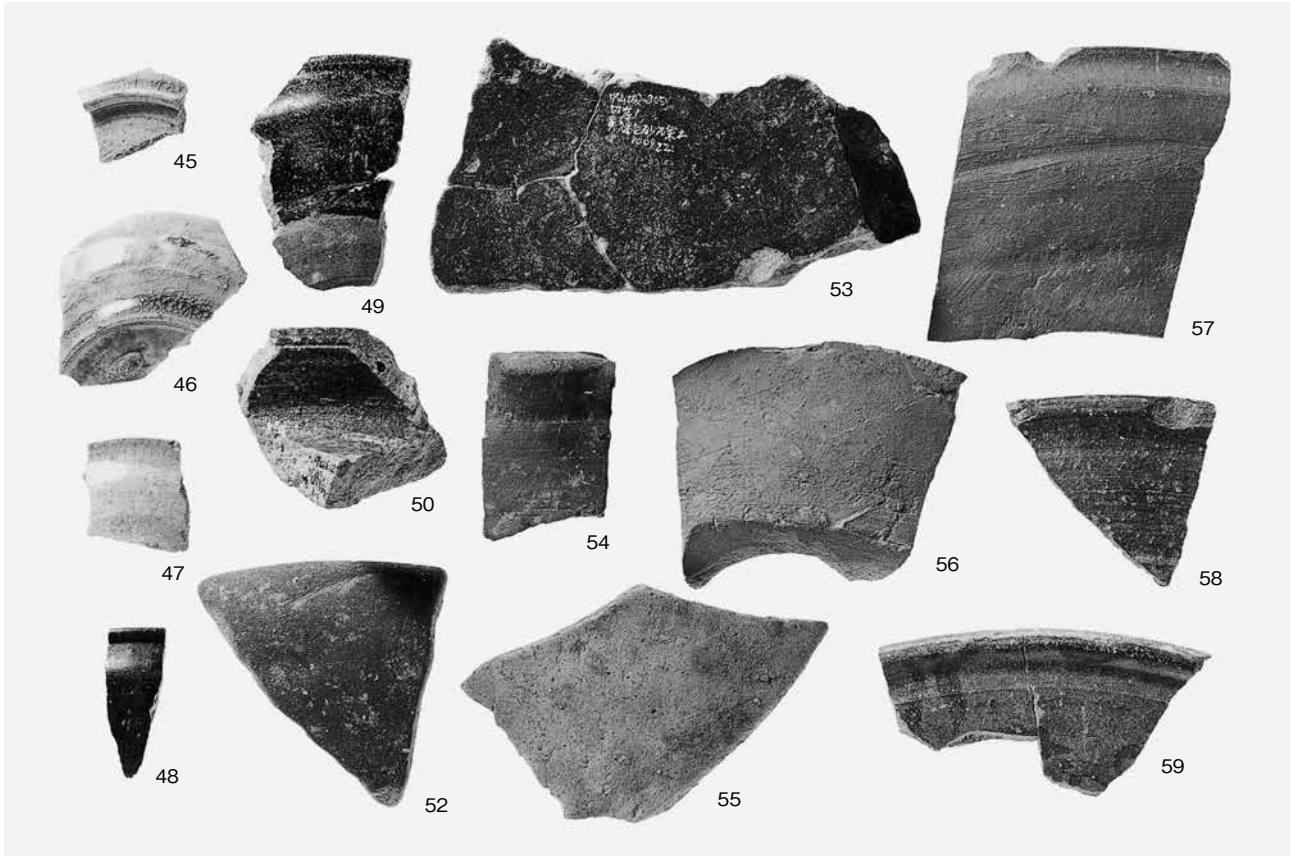
(2) 第6次出土遺物 1 (裏面)



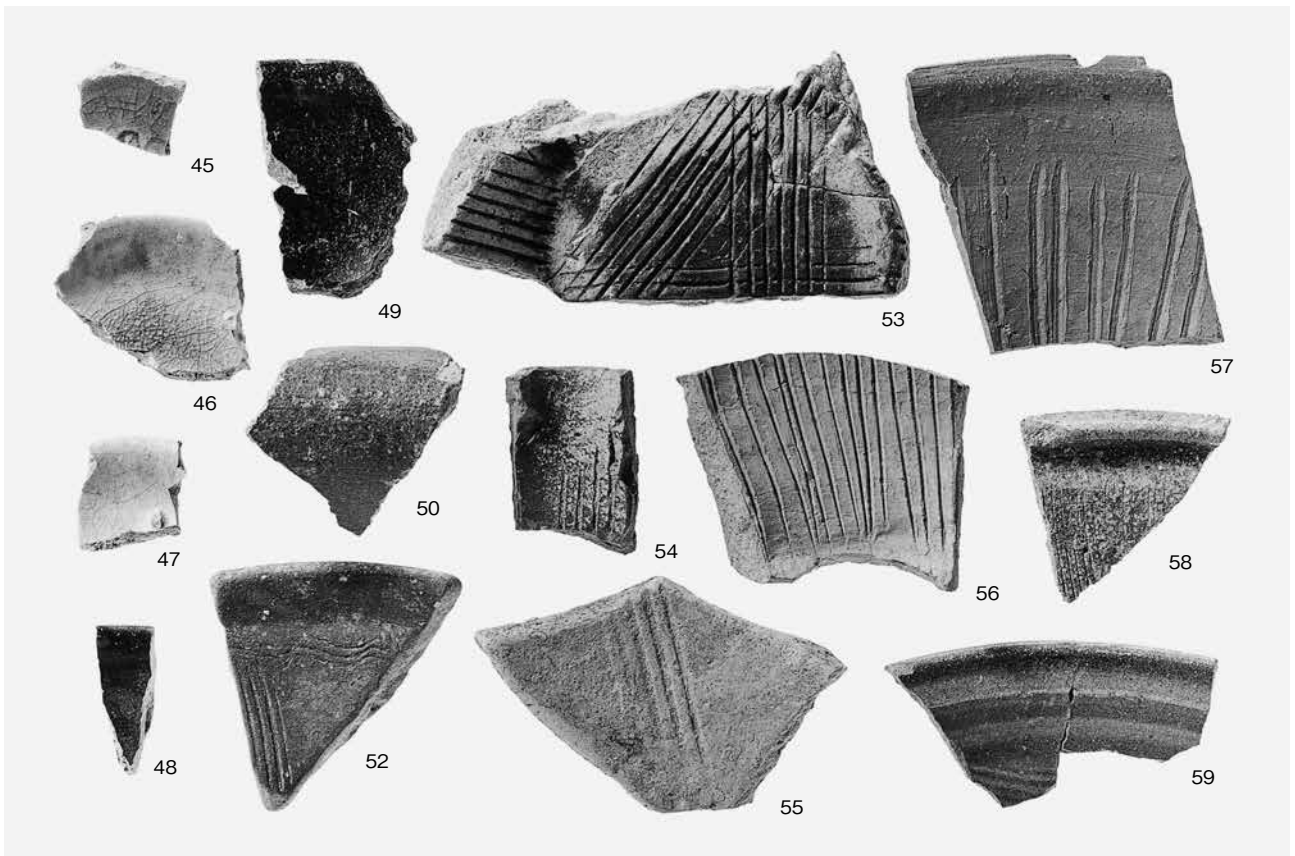
(1) 第6次出土遺物 2



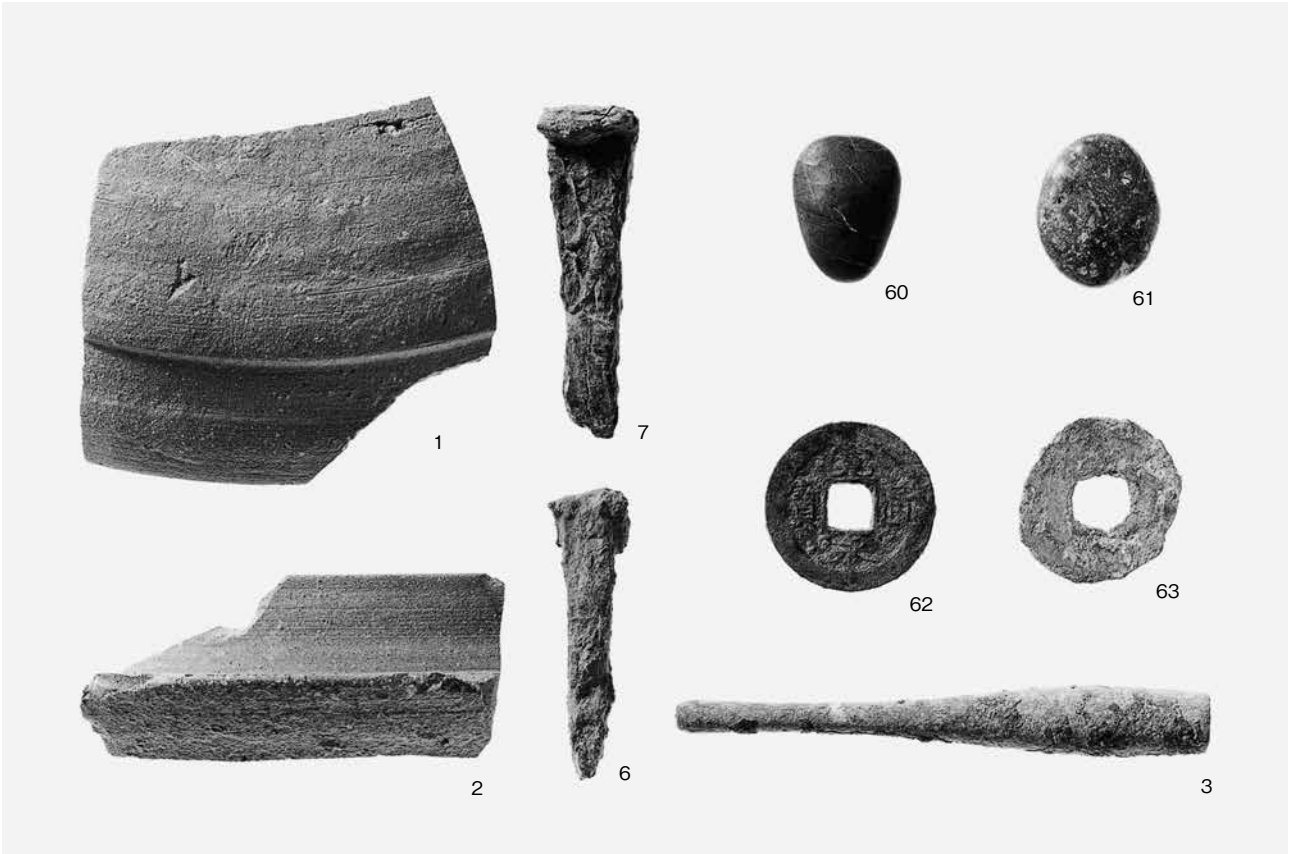
(2) 第6次出土遺物 2 (裏面)



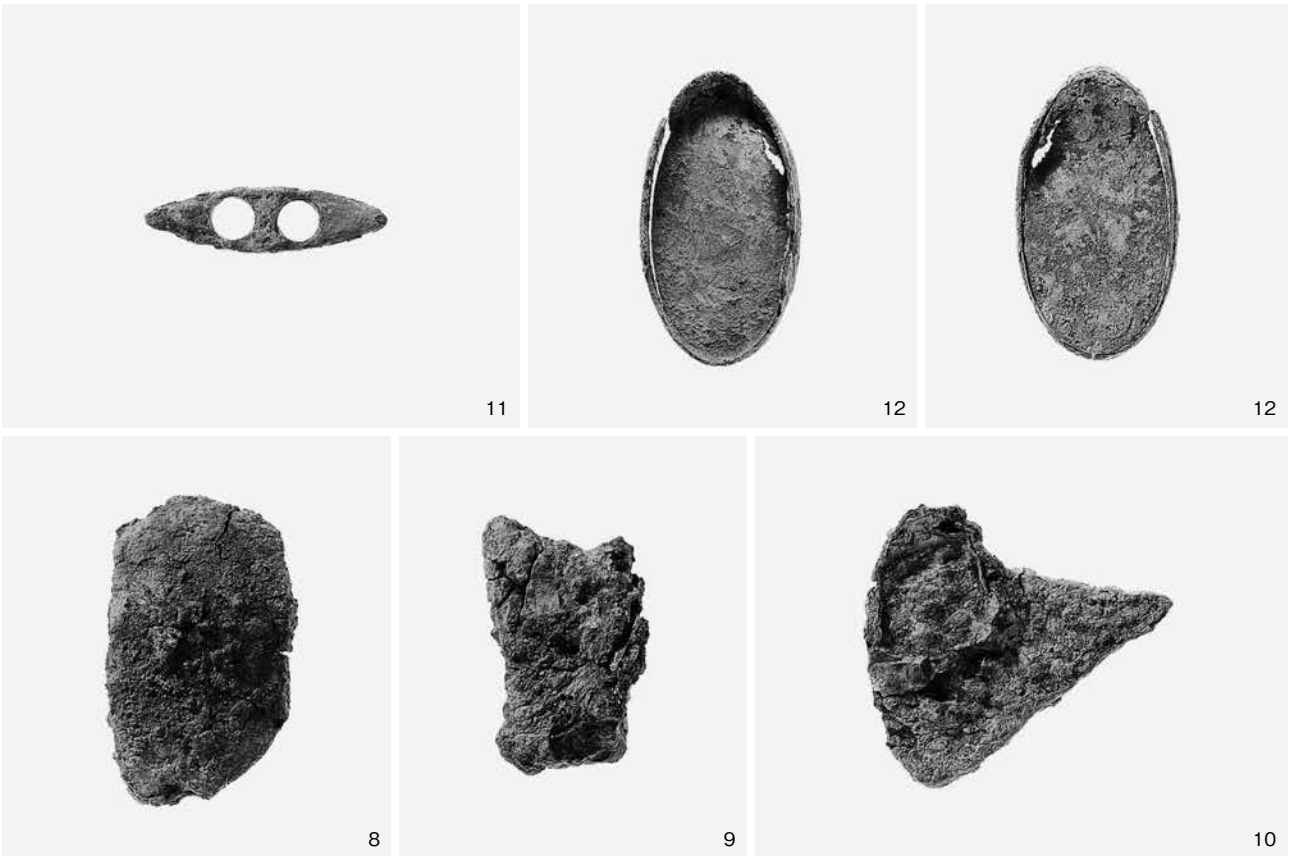
(1) 第6次出土遺物 3



(2) 第6次出土遺物 3 (裏面)



(1) 第6次出土遺物 4



(2) 第6次出土遺物 5

井脇城跡



(1)井脇城跡全景(南東から)



(2)井脇城跡全景(北から)

井脇城跡



(1) 井脇城跡全景(北東から)



(2) A地区全景掘削前(北東から)

井脇城跡



(1) B 地区掘削状況(南西から)



(2) B 地区南西半掘削状況
(北東から)



(3) B 地区北東半岩盤(南から)

井脇城跡



(1) C地区掘削前状況(南西から)



(2) C地区掘削状況(南西から)



(3) C地区掘削面(南西から)

井脇城跡



(1) A地区曲輪掘削前(北から)



(2) A地区曲輪掘削状況(北から)

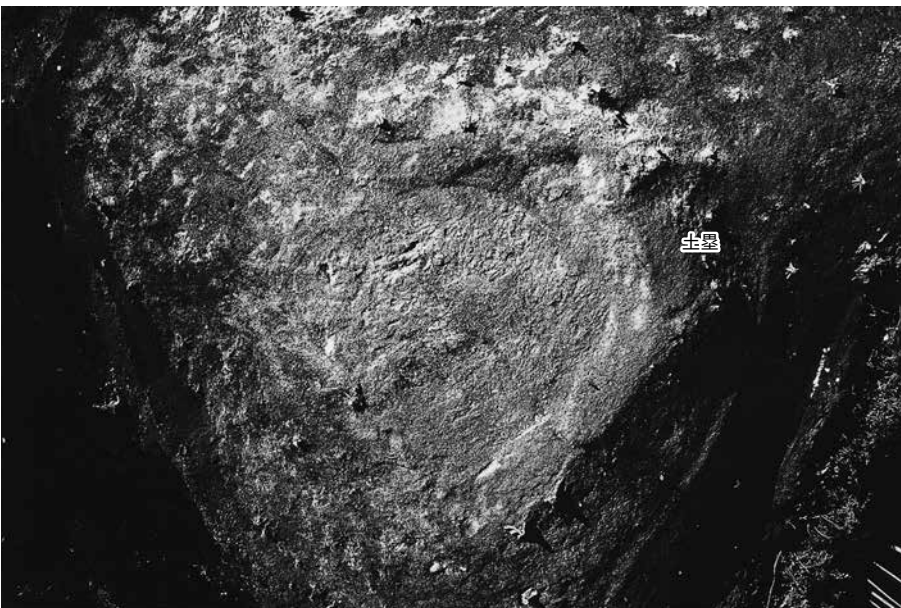


(3) A地区曲輪掘削完了状況
(北から)

井脇城跡

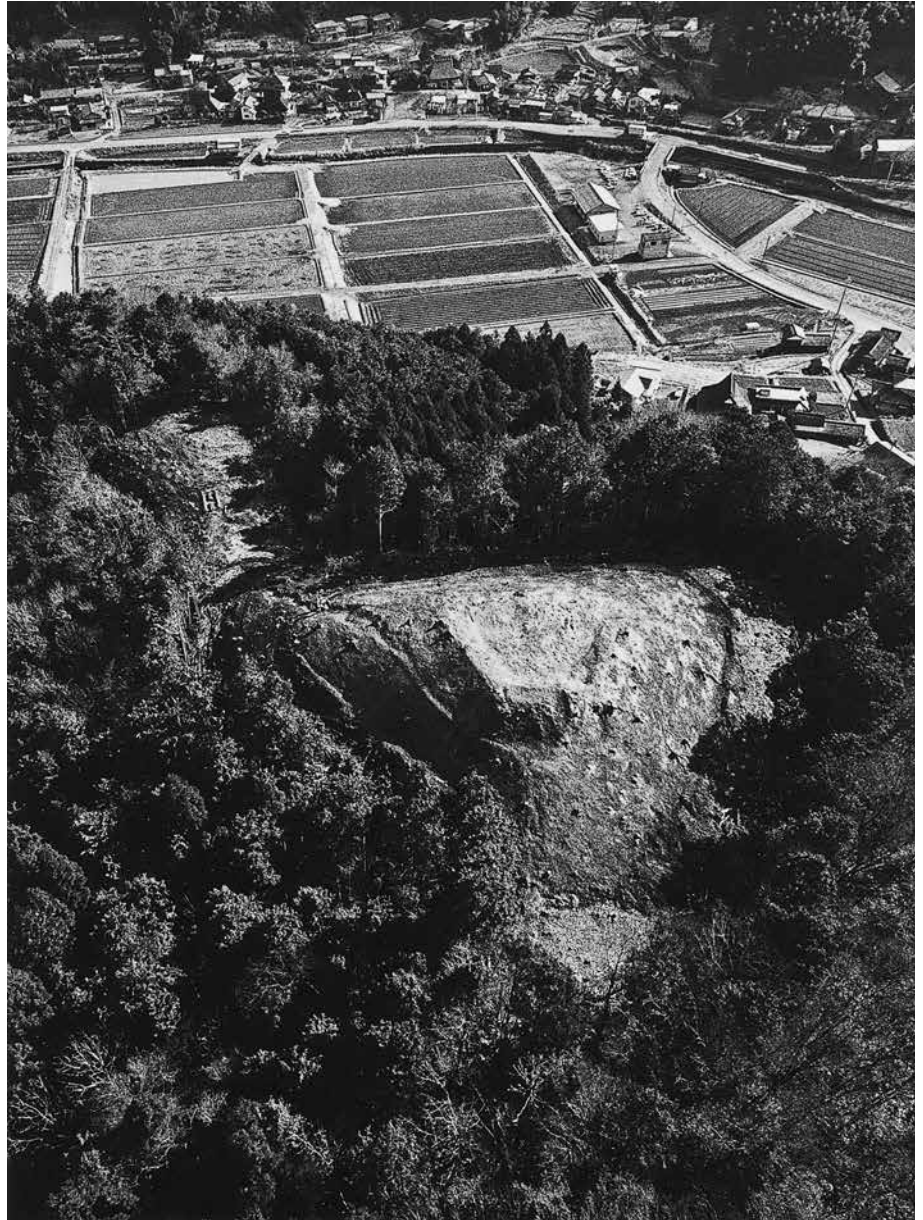


(1) A・C地区全景(北東から)



(2) A地区曲輪頂部(北東から)

井脇城跡



(1) A・C地区全景(西から)



(2) A・C地区全景A地区
掘削完了後(北から)

井脇城跡



A 地区曲輪全景掘削完了後(北から)

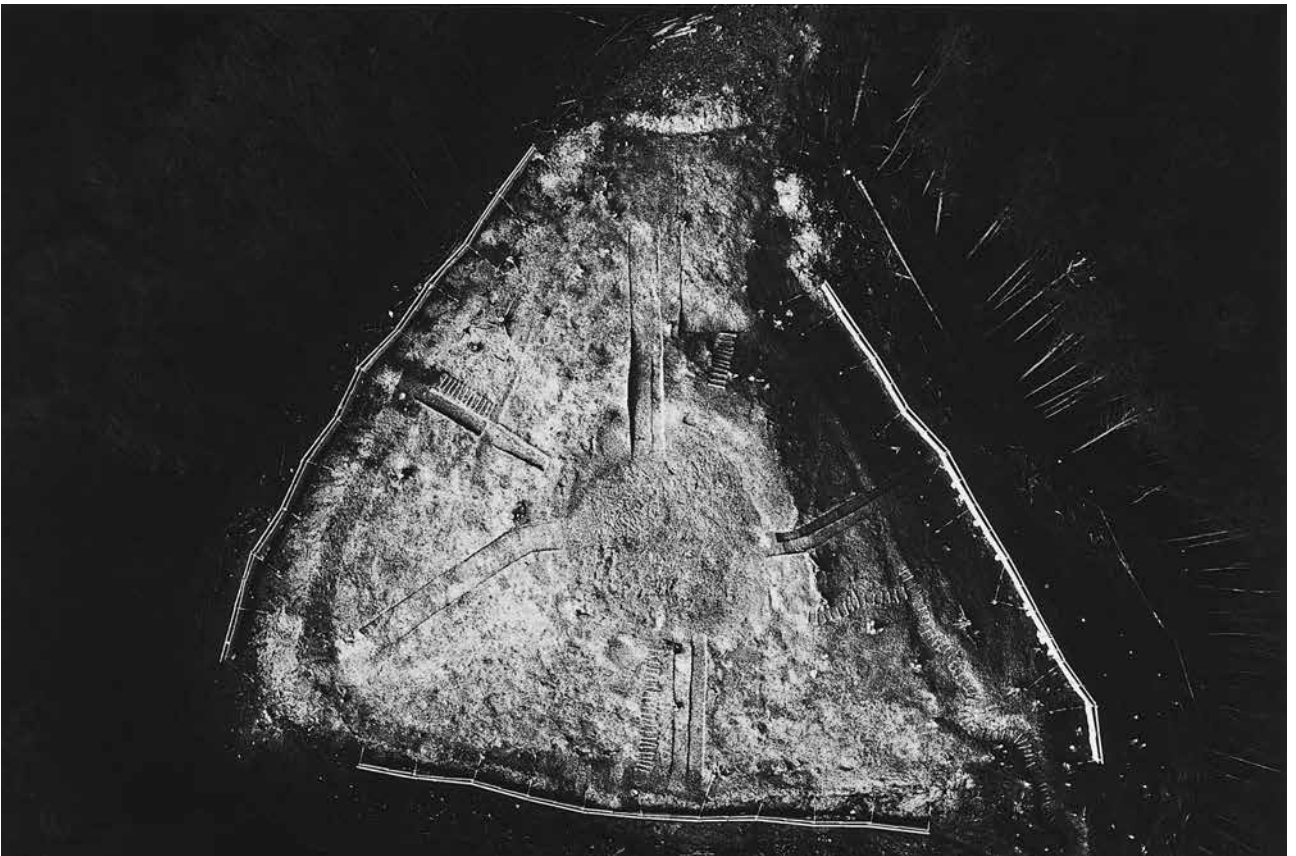
井脇城跡



A地区曲輪全景掘削完了後(西から)



(1) A地区曲輪全景掘削完了後(東から)



(2) A地区曲輪全景掘削完了後(上が西)

井脇城跡



(1) A地区曲輪西側(西から)



(2) A地区土塁内瓦質土器出土状況
(東から)



(3) A地区西側斜面及び土塁断面
(南から)



(1) A地区土塁中央部断ち割り断面(南から)

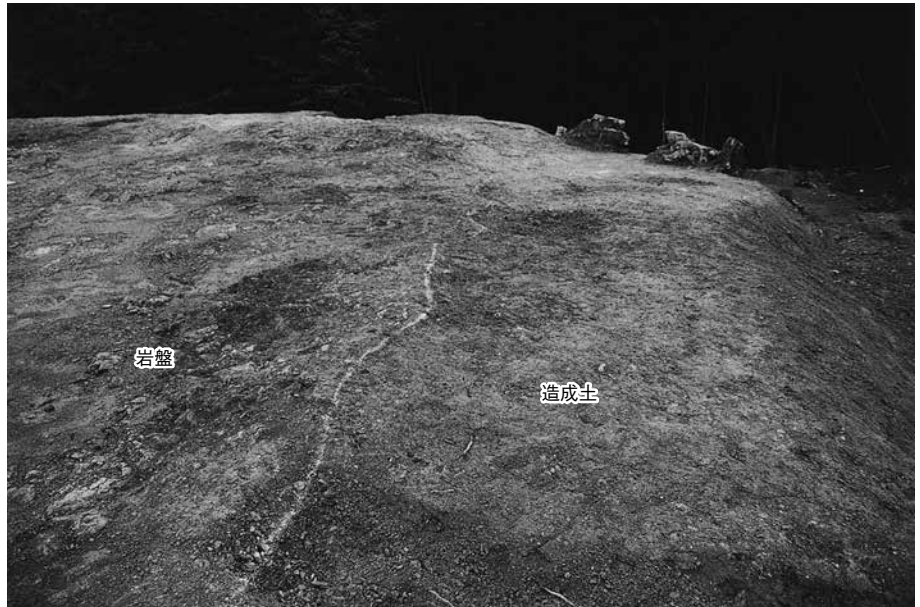


(2) A地区土塁中央部断ち割り断面(南東から)

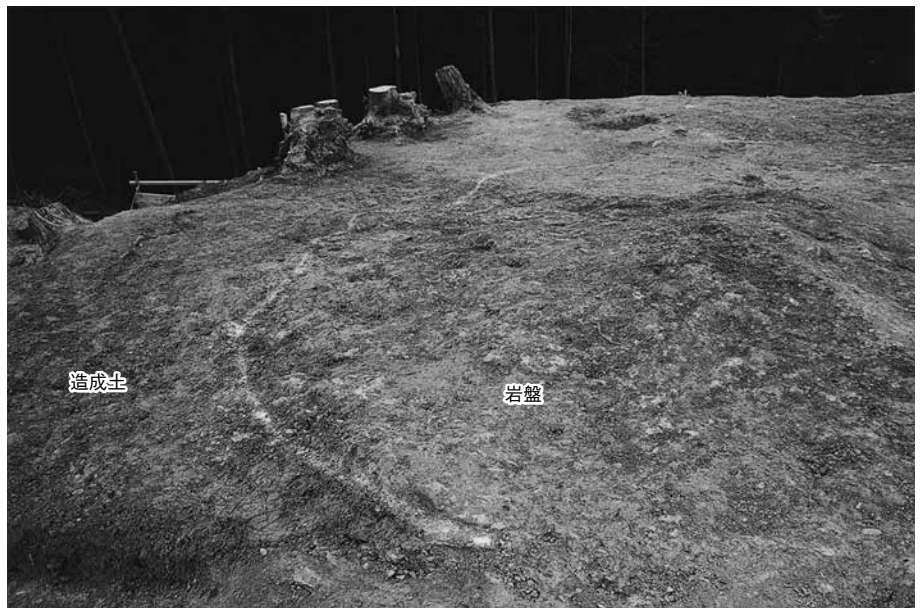
井脇城跡



(1) A地区土塁北側断面
礫石混入状況(東から)



(2) A地区土塁掘削除去後(東から)



(3) A地区土塁掘削除去後(南から)

井脇城跡



(1) A地区曲輪北側断面(東から)



(2) A地区曲輪南側断面(東から)



(3) A地区曲輪南側斜面断ち割り
(南から)

井脇城跡



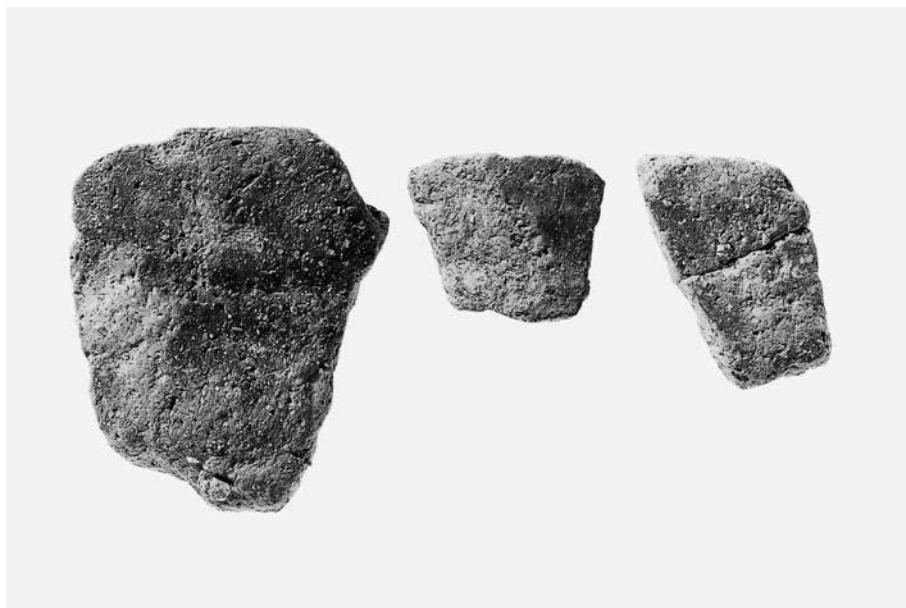
(1) A 地区曲輪北東斜面掘削状況
(北東から)



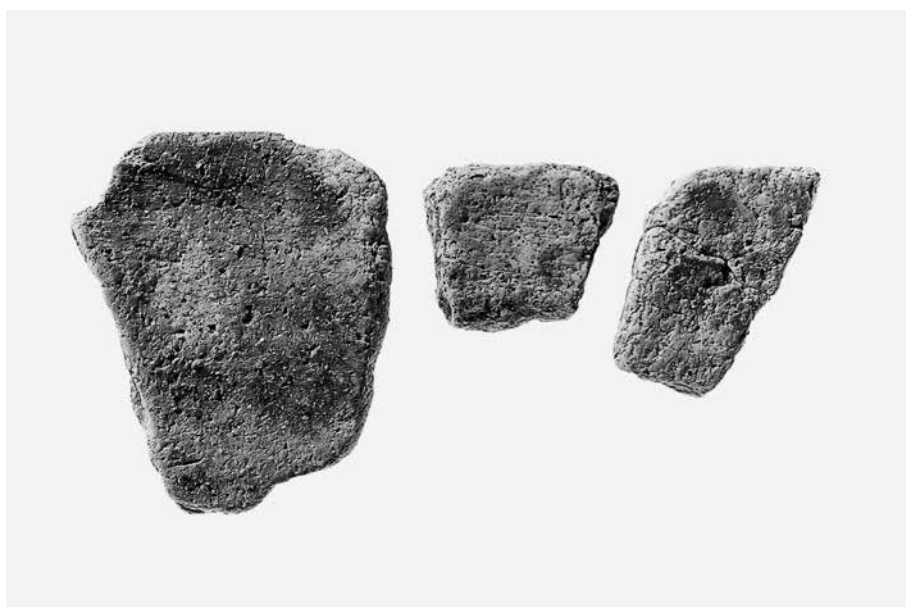
(2) A 地区曲輪北東斜面掘削状況
(北東から)



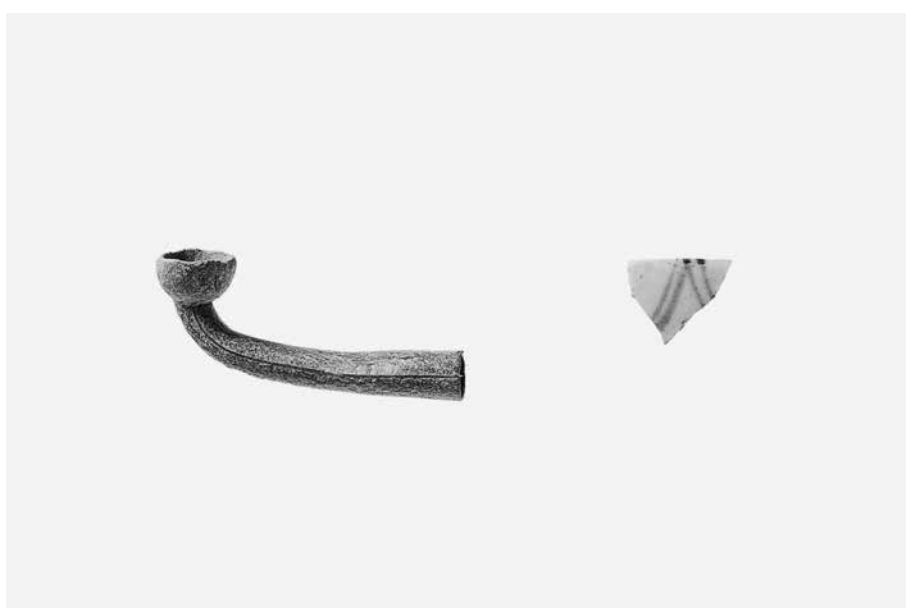
(3) A 地区曲輪北東隅置石検出状況
(北から)



(1) 瓦質土器片 (右端は土塁内出土)



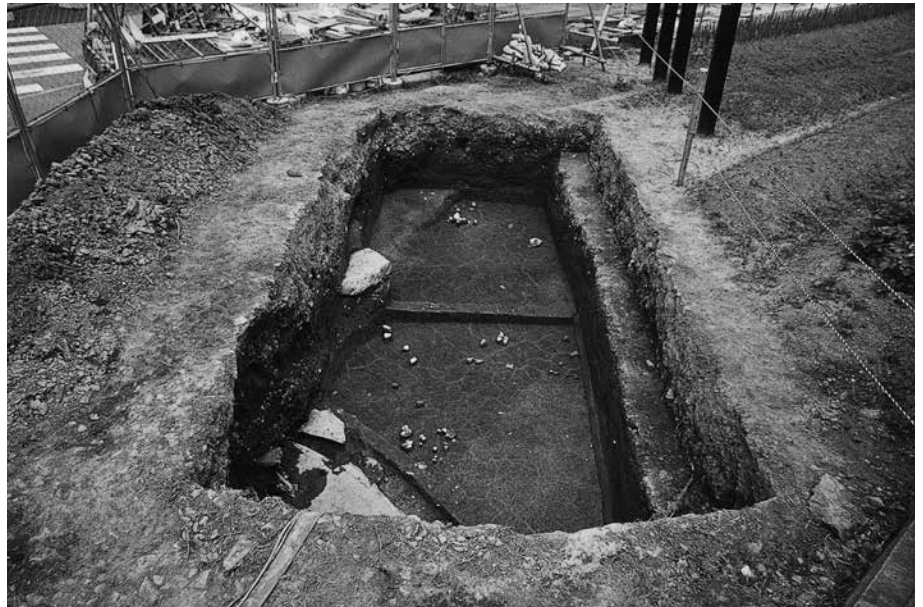
(2) 瓦質土器片裏面



(3) 煙管、肥前系磁器碗片



(1) 2・3トレンチ調査前全景
(南から)



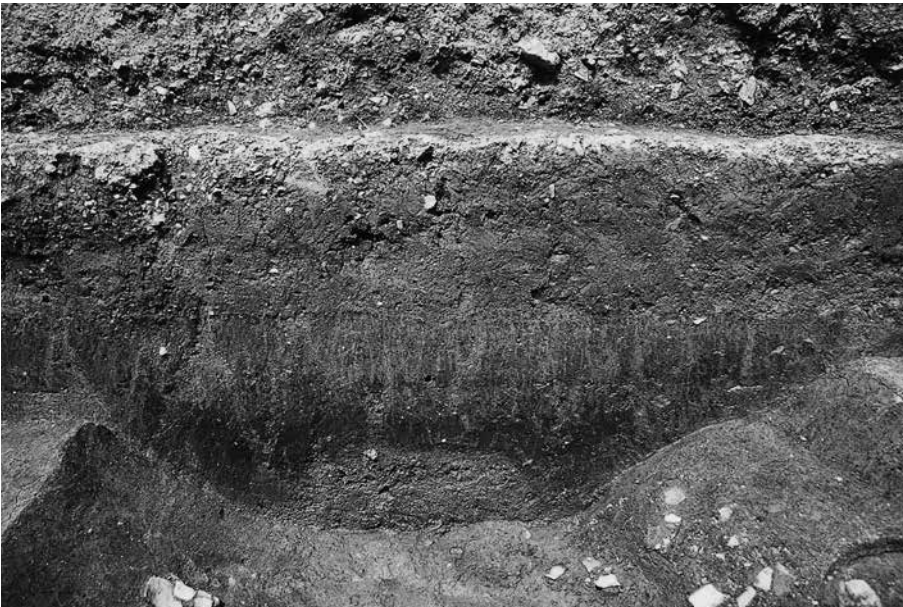
(2) 1トレンチ竪穴式住居跡
S H01・02検出状況(南東から)



(3) 1トレンチ竪穴式住居跡
S H02遺物出土状況(上が東)



(1) 1 トレンチ溝 S D04 全景
(南東から)



(2) 1 トレンチ北壁内溝 S D04
土層堆積状況(南西から)



(3) 2 トレンチ南半部全景(北から)



(1) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01 全景(北から)



(2) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01-P 6 検出状況(東から)



(3) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B01-P 2 内土層堆積状況
(南東から)



(1) 2トレンチ北半部全景(南から)



(2) 2トレンチ掘立柱建物跡
S B03全景(南から)



(3) 2トレンチ北半部柱穴群
検出状況(南から)



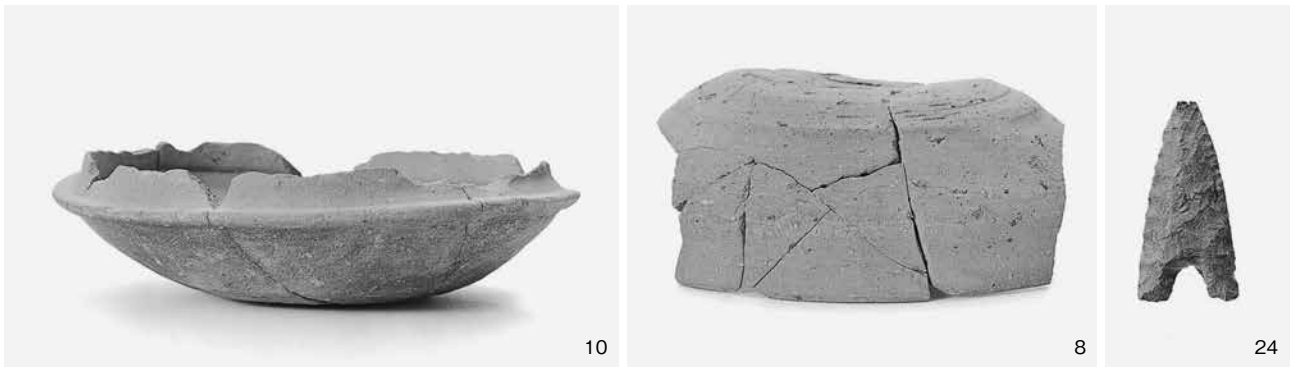
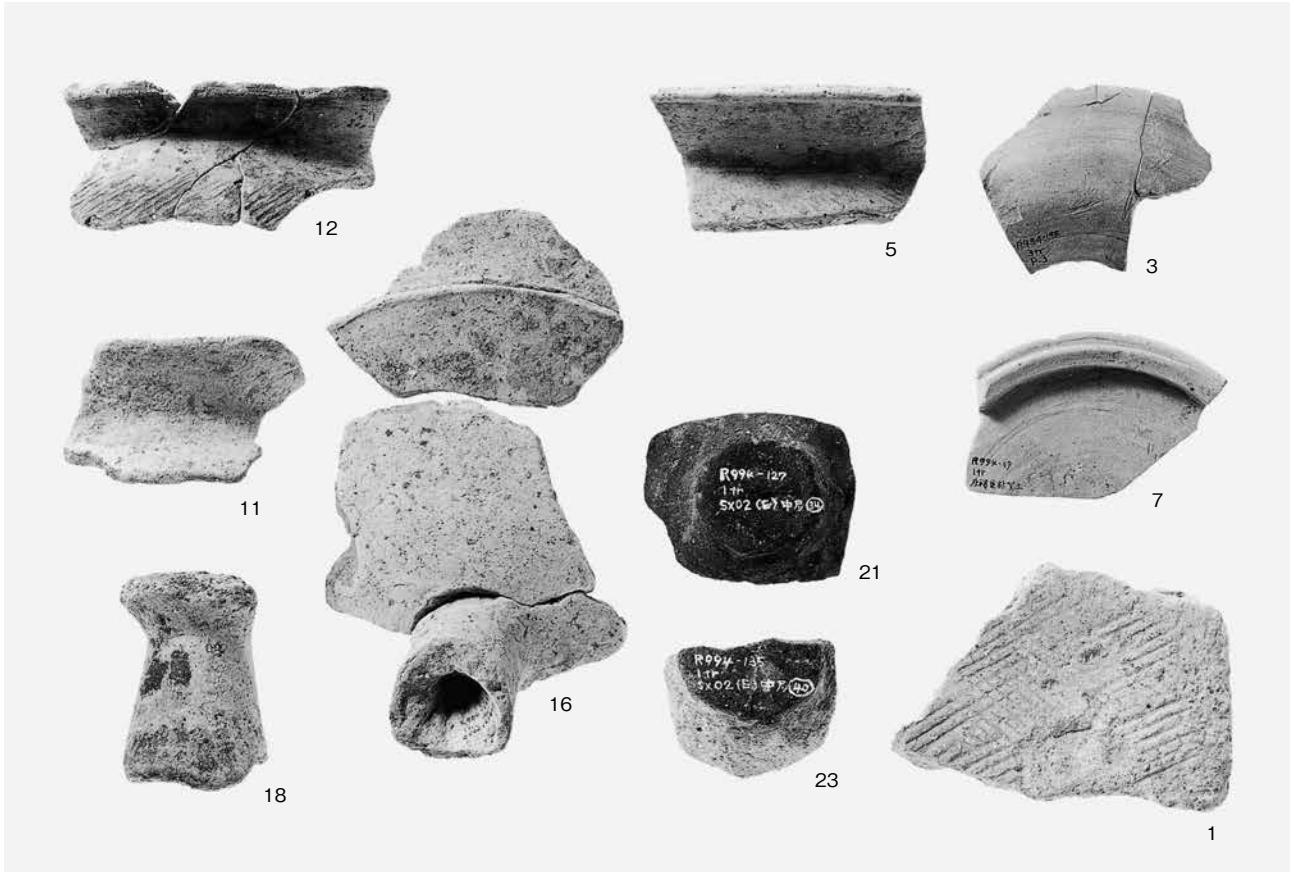
(1) 3トレンチ全景(西から)



(2) 3トレンチ溝 S D07 検出状況
(南西から)



(3) 3トレンチ柱穴検出状況
(南から)



出土遺物

八幡木津線関連遺跡 図版第 1

下馬遺跡第 2 次



(1) 下馬遺跡調査地遠景(南から)



(2) 下馬遺跡調査地遠景(東から)



(1)下馬遺跡調査地遠景(西から)



(2)下馬遺跡調査地全景(上が北)



(1) 下馬遺跡・片山遺跡遠景
(南東から)



(2) A1地区全景(西から)



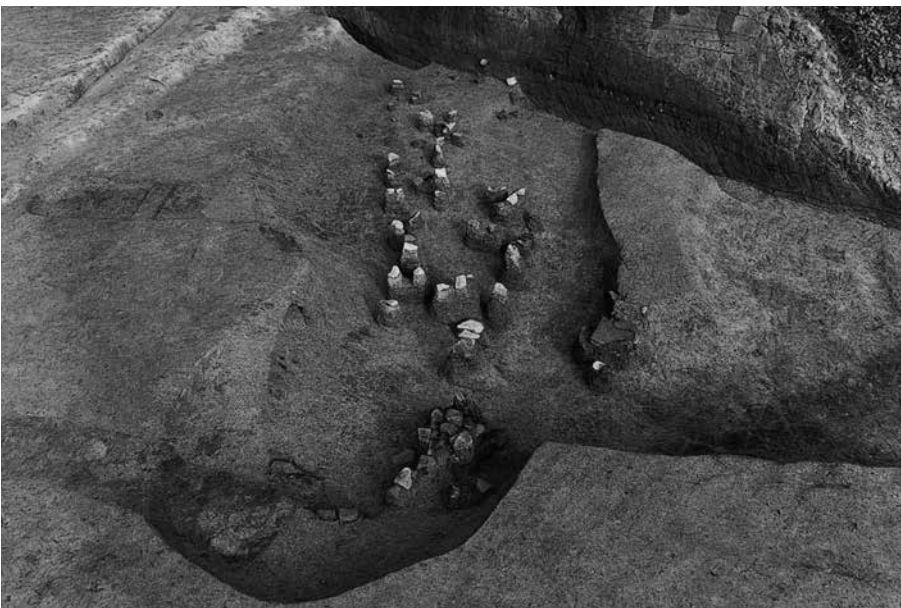
(3) A1地区西部全景(南から)



(1) A 1 地区河川跡 S R 125
縄文土器出土状況(東から)



(2) A 1 地区東部全景(西から)



(3) A 1 地区瓦溜り S X 120 全景
(南から)

下馬遺跡第 2 次



(1) A 1 地区炉跡 S X121 炭層
検出状況(東から)



(2) A 1 地区炉跡 S X121 全景
(東から)



(3) A 1 地区井戸 S E129 全景
(南から)



(1) A 1 地区全景(右が北)



(2) A 2・3 地区全景(上が北)



(1) A 2 地区全景(南西から)



(2) A 2 地区掘立柱建物跡 S B58
全景(西から)



(3) A 3 地区全景(北東から)



(1) A 3 地区河川跡 S R 16 全景
(西から)



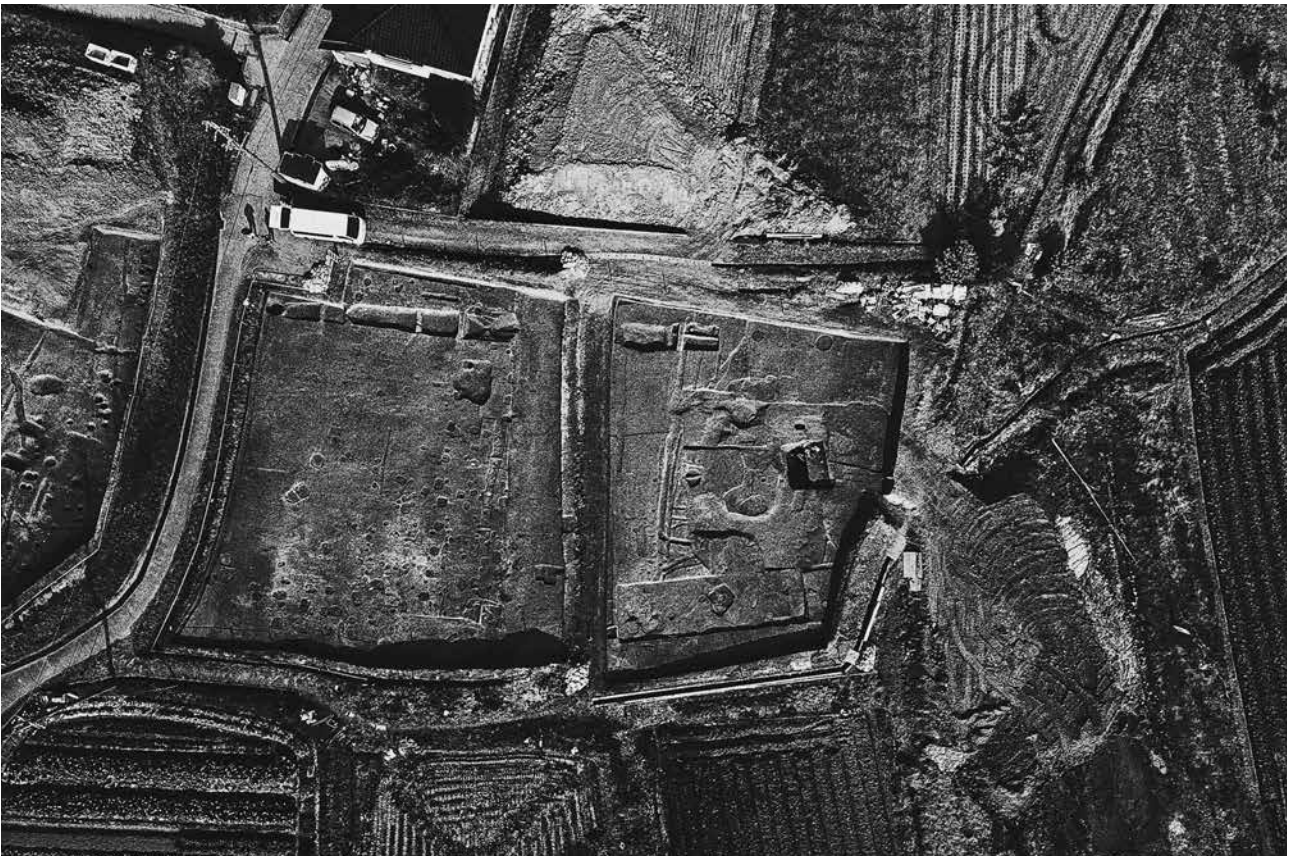
(2) A 3 地区北壁内河川跡 S R 16
堆積土層(南西から)



(3) A 3 地区河川跡 S R 16 底面
平瓶出土状況(南から)



(1) B 1 地区全景(右が北)



(2) D 1・2 地区全景(上が北)



(1) D 1 ・ 2 地区全景(南から)



(2) D 1 ・ 2 地区全景(北から)

下馬遺跡第 2 次



(1) B 1 地区全景(北西から)



(2) B 1 地区掘立柱建物跡
S B 132・133全景(北から)



(3) D 1 地区遺構検出状況(東から)



(1) D 1 地区掘立柱建物跡 S B134、
柵列 S A03・57、土坑 S K23
全景(東から)



(2) D 1 地区掘立柱建物跡 S B135、
柵列 S A30、土坑 S K36全景
(東から)



(3) D 1 地区溝状遺構 S X02全景
(東から)

下馬遺跡第 2 次

(1) D 1 地区溝状遺構 S X02
(東から)



(2) D 1 地区溝状遺構 S X02 第 1 区
と第 2 区間の水口(東から)



(3) D 1 地区溝状遺構 S X02
第 2 区中央畔土層断面(東から)



下馬遺跡第 2 次



(1) D 1 地区土坑 S K23 全景
(南から)



(2) D 1 地区柱穴 P44・97 根石
検出状況 (南西から)



(3) D 1 地区柱穴 P107 根石
検出状況 (南東から)



(1) D 2 地区全景(西から)



(2) D 2 地区溝状遺構 S X02
第 4・5 区全景(北から)



(3) D 2 地区掘立柱建物跡 S B55
全景(南から)

下馬遺跡第 2 次



(1) D 2 地区井戸 S E 54 井戸枠材
検出状況(西から)



(2) D 2 地区井戸 S E 54 井戸枠
(北西から)



(3) D 2 地区井戸 S E 32 全景
(南東から)

片山遺跡第 2 次



(1) 第 3 トレンチ全景(西から)



(2) 第 4 トレンチ全景(東から)



(3) 第 5 トレンチ全景(東から)



(1) 第 6 トレンチ全景(南から)



(2) 第 22 トレンチ全景(南から)



(3) 第 23 トレンチ全景(東から)



(1) 第24トレンチ全景(東から)



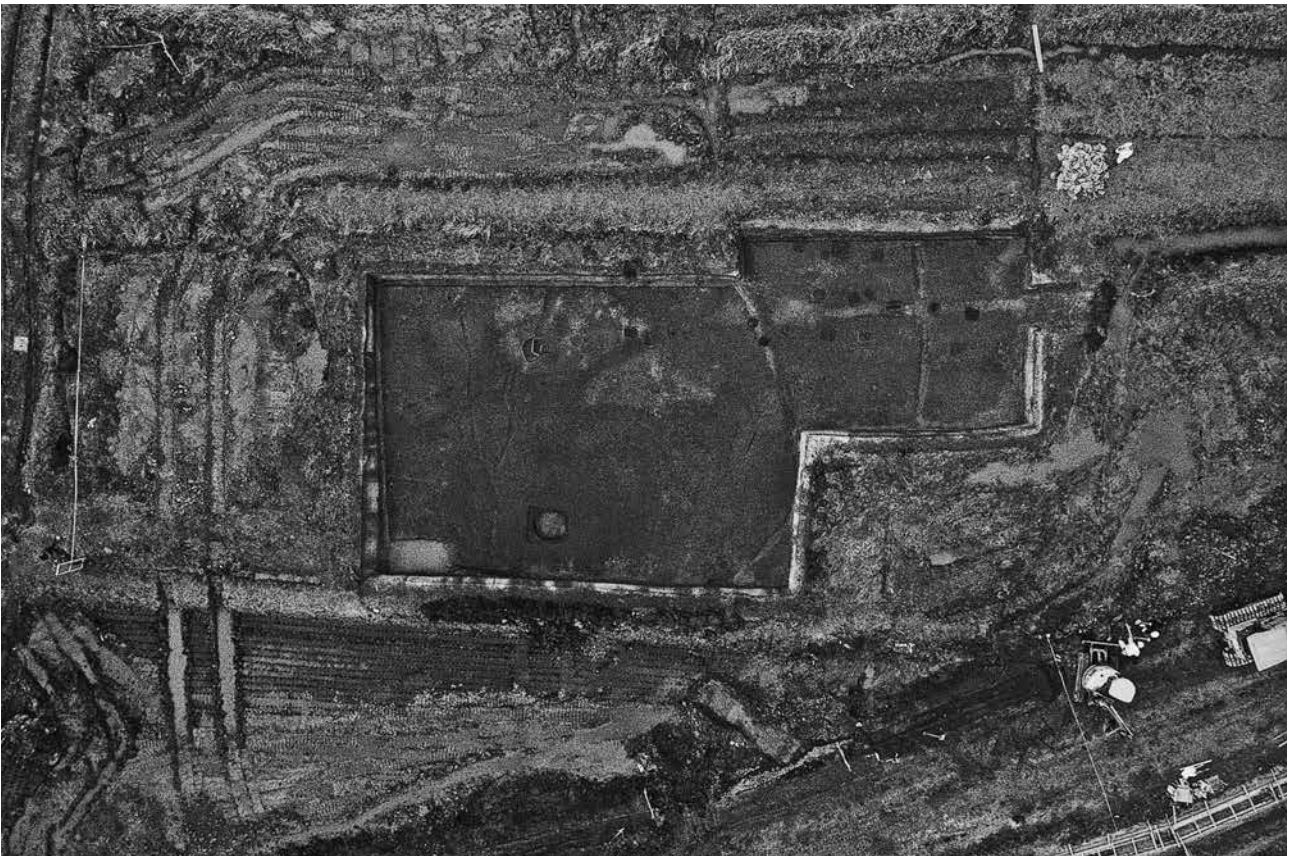
(2) 第25トレンチ全景(東から)



(3) 第26トレンチ全景(東から)



(1) 片山遺跡 A 1 地区全景(東から)



(2) A 1 地区全景(右が北)



(1) A 1 地区全景(北から)



(2) A 1 地区掘立柱建物跡 S B01・02 検出状況(東から)



(3) A 1 地区土坑 S K20 全景(南から)

鞍岡山古墳群



(1) A 地点調査前(南から)



(2) A 地点トレンチ調査状況
(南西から)



(3) A 地点最高所トレンチ地山
検出状況(南東から)



(1) D 3 地区全景(南東から)



(2) D 3 地区井戸 S E 312 検出状況
(北から)



(3) D 4 地区上層遺構面全景
(北から)



(1) D 4 地区柵列 S A340 全景
(南から)



(2) D 4 地区柵列 S A340 全景
(西から)



(3) D 4 地区下層遺構面全景
(北から)

下馬遺跡第 3 次



(1) D 4 地区下層遺構面全景
(西から)



(2) D 4 地区井戸 S E 328 全景
(南西から)



(3) D 4 地区溝 S D 339 全景
(北東から)



(1) A 2 地区全景(南から)



(2) A 2 地区全景(北から)



(3) A 2 地区掘立柱建物跡群
検出状況(北から)



(1) A 2 地区掘立柱建物跡 S B04
全景(南から)



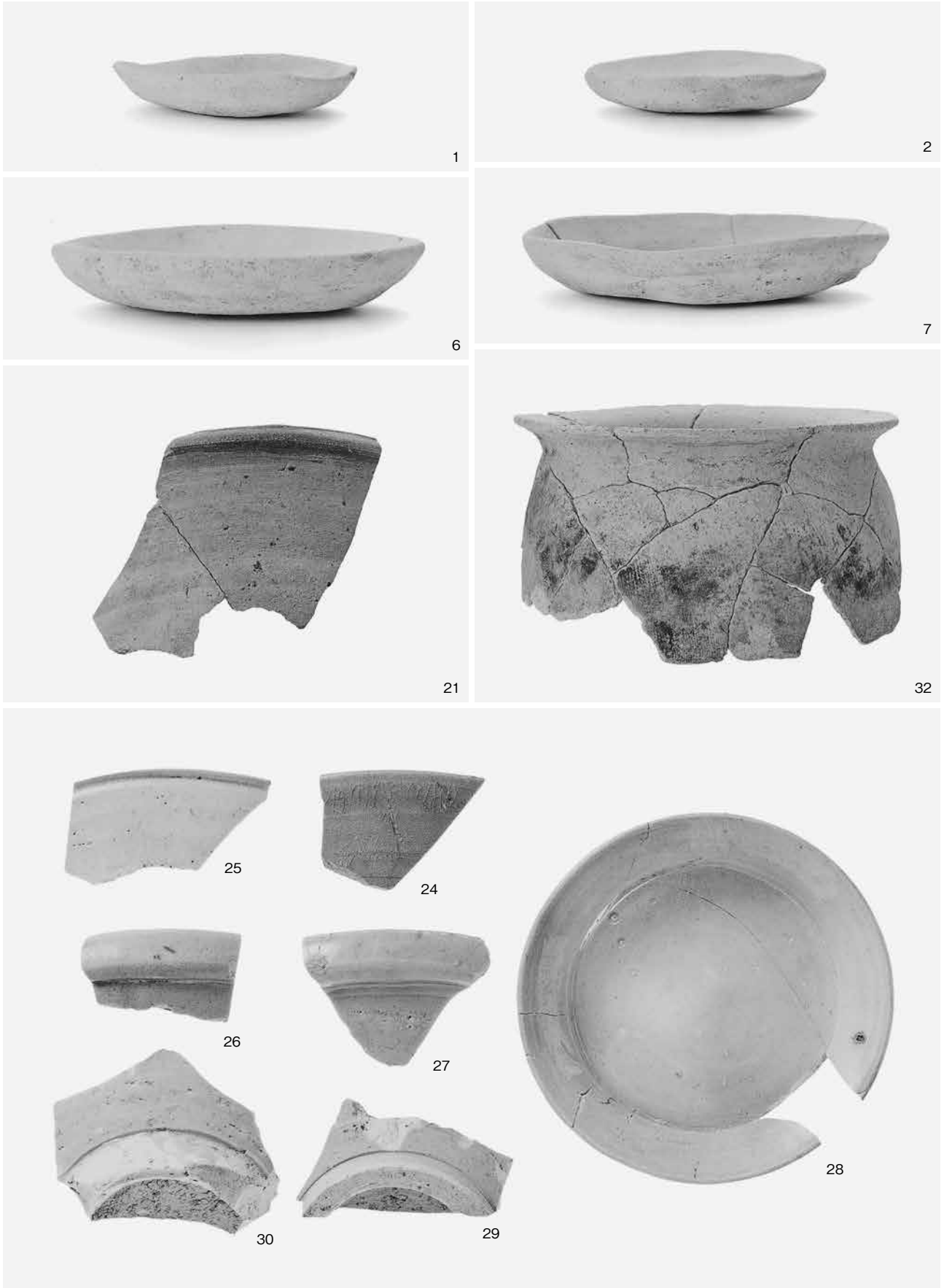
(2) A 2 地区土坑 S X202 全景
(南から)



(3) A 2 地区土坑 S X202
土師器皿群出土状況(東から)







出土遺物 3



(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査地遠景(西から)



(1) Aトレンチ遠景(北から)



(2) Bトレンチ全景(左が北)



(1) Aトレンチ調査前(北西から)



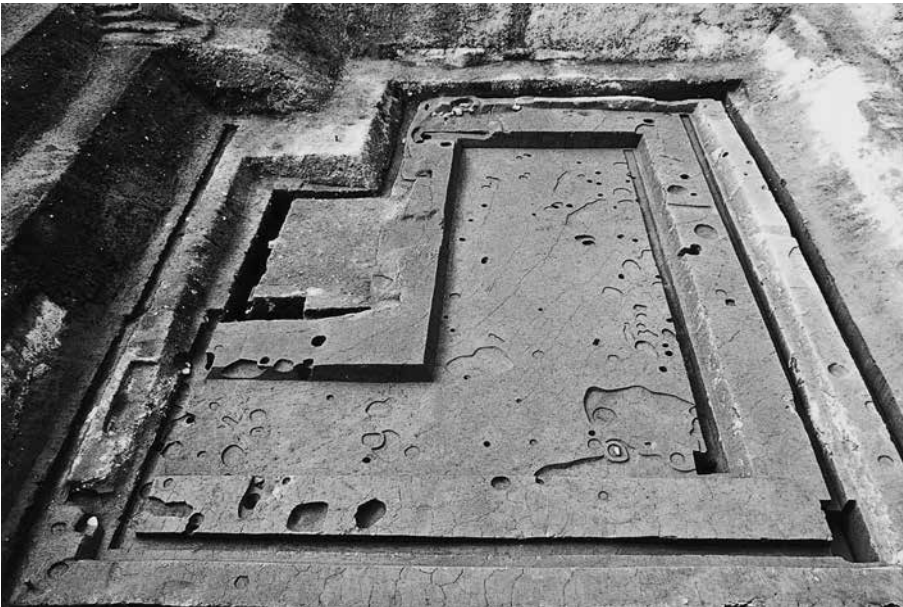
(2) Aトレンチ重機掘削



(3) Aトレンチ作業風景(南東から)



(1) Aトレンチ第1遺構面(北から)



(2) Aトレンチ第1遺構面(東から)



(3) Aトレンチ第1遺構面
土坑S X01周辺(北から)

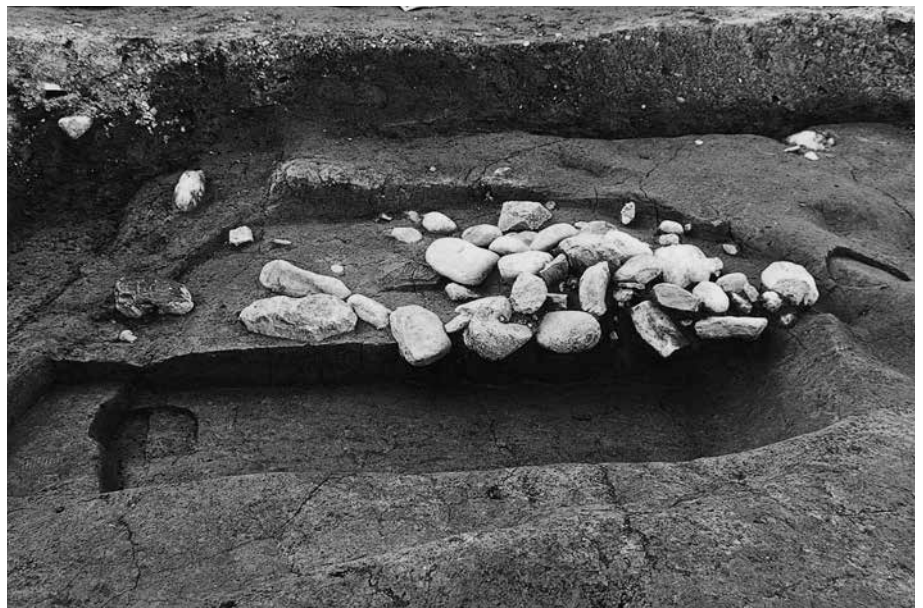
(1) Aトレンチ第1遺構面
土坑S X01内焼土坑 a・b
検出状況(西から)



(2) Aトレンチ第1遺構面
土坑S X01内焼土坑 a・b
完掘状況(西から)



(3) Aトレンチ第1遺構面
土坑S K02(東から)





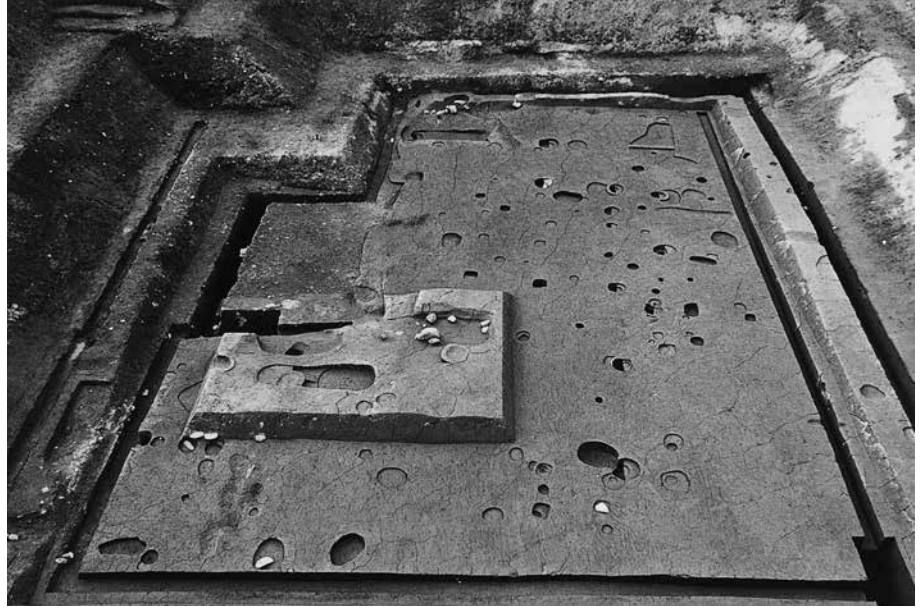
(1) Aトレンチ第1遺構面
土坑S K04(東から)



(2) Aトレンチ第1遺構面
ピットP101遺物出土状況
(西から)



(3) Aトレンチ第2遺構面(北から)



(1) Aトレンチ第2遺構面(東から)



(2) Aトレンチ第2遺構面
ピットP90検出状況(西から)



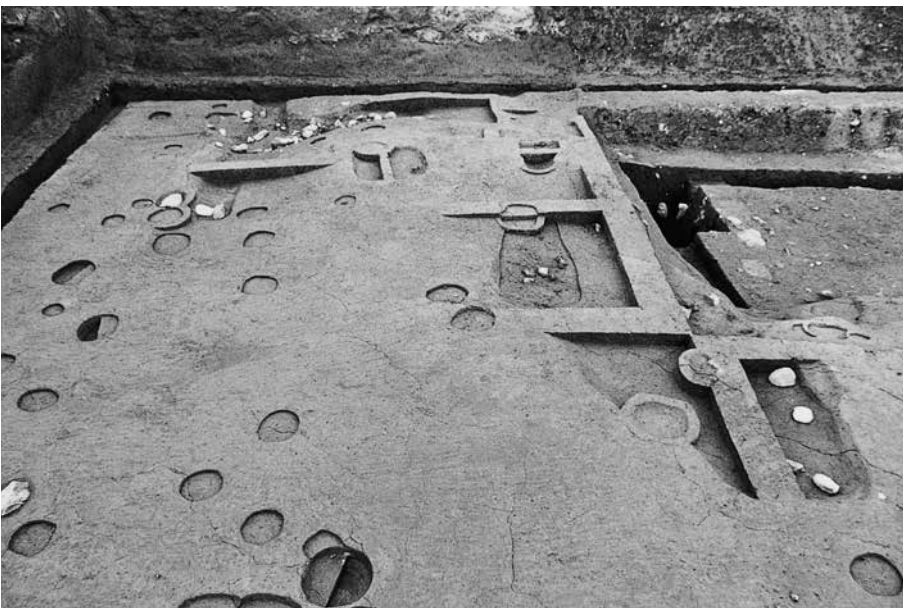
(3) Aトレンチ第2遺構面
ピットP90遺物出土状況
(西から)



(1) Aトレンチ第3遺構面(北から)



(2) Aトレンチ第3遺構面(東から)



(3) Aトレンチ東壁土層断面
(西から)



(1) Bトレンチ調査前(北西から)



(2) Bトレンチ重機掘削(南東から)



(3) Bトレンチ第1遺構面(北から)



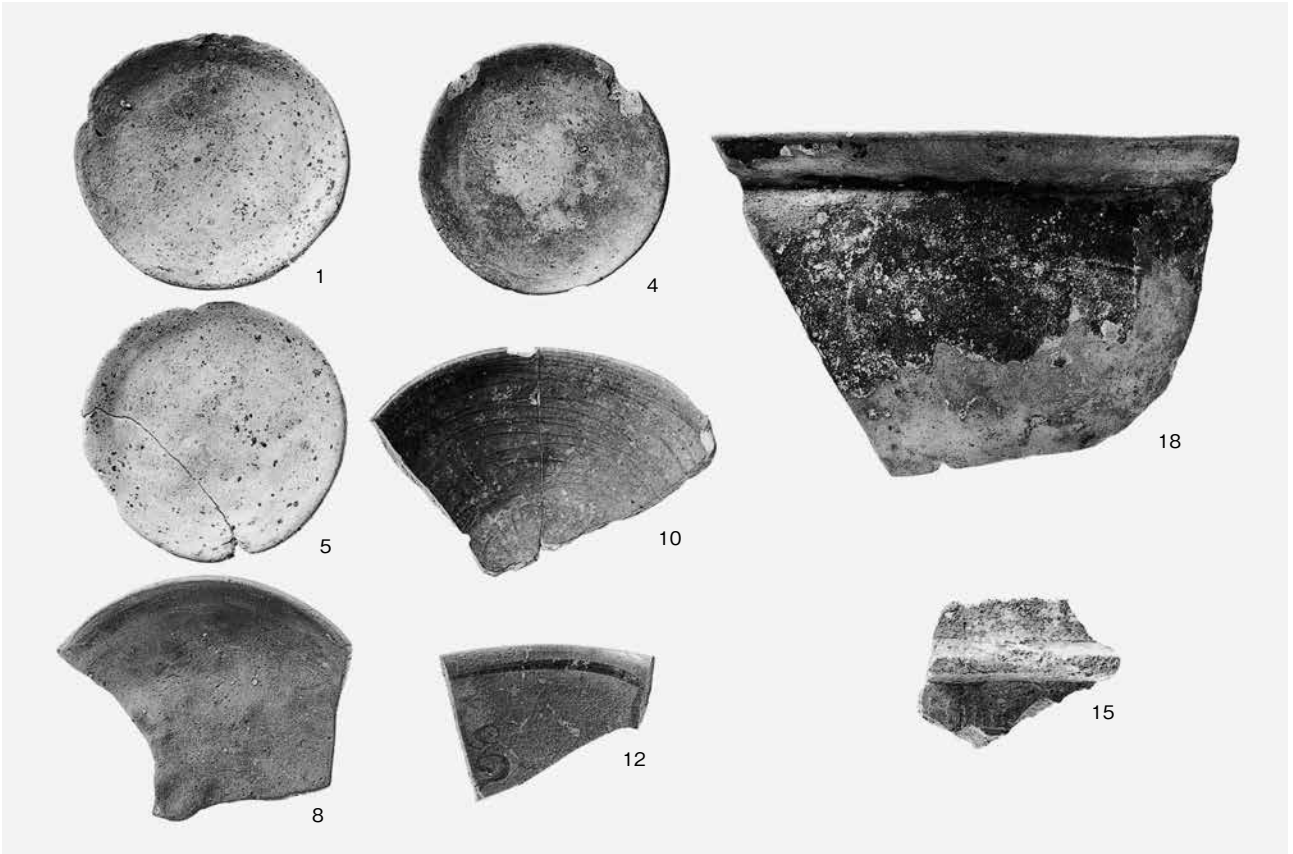
(1) Bトレンチ西壁土層断面
(北東から)



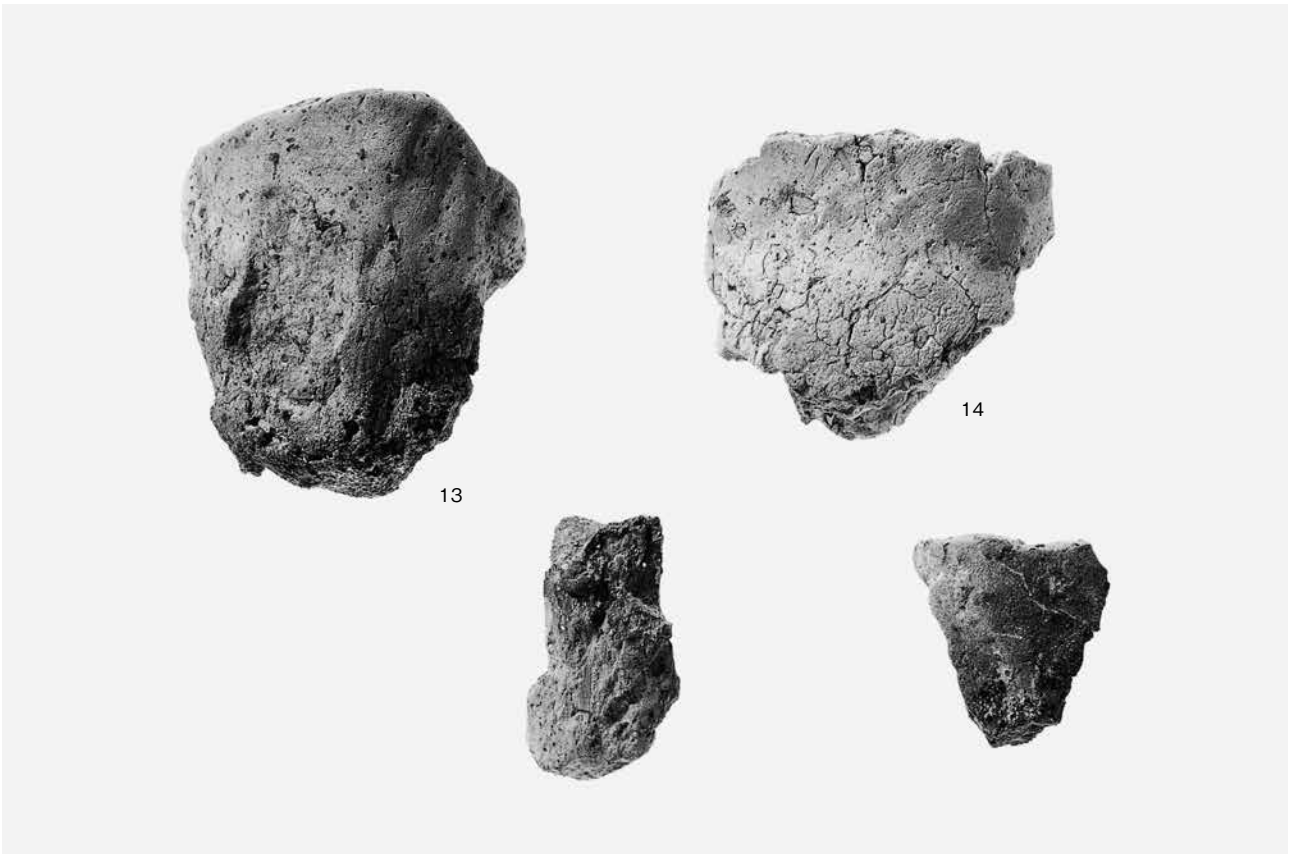
(2) Bトレンチ第2遺構面(北から)



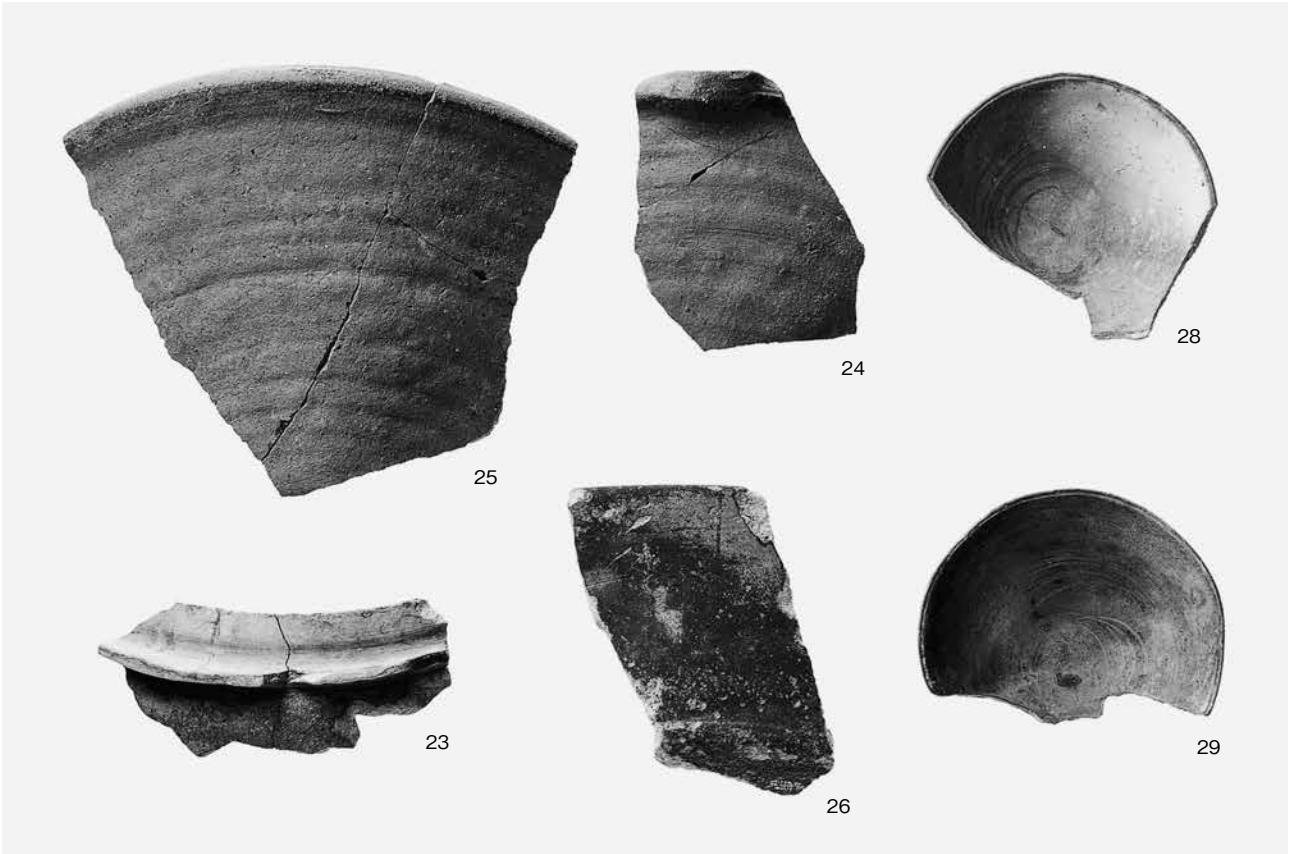
(3) Bトレンチ埋め戻し終了
(北から)



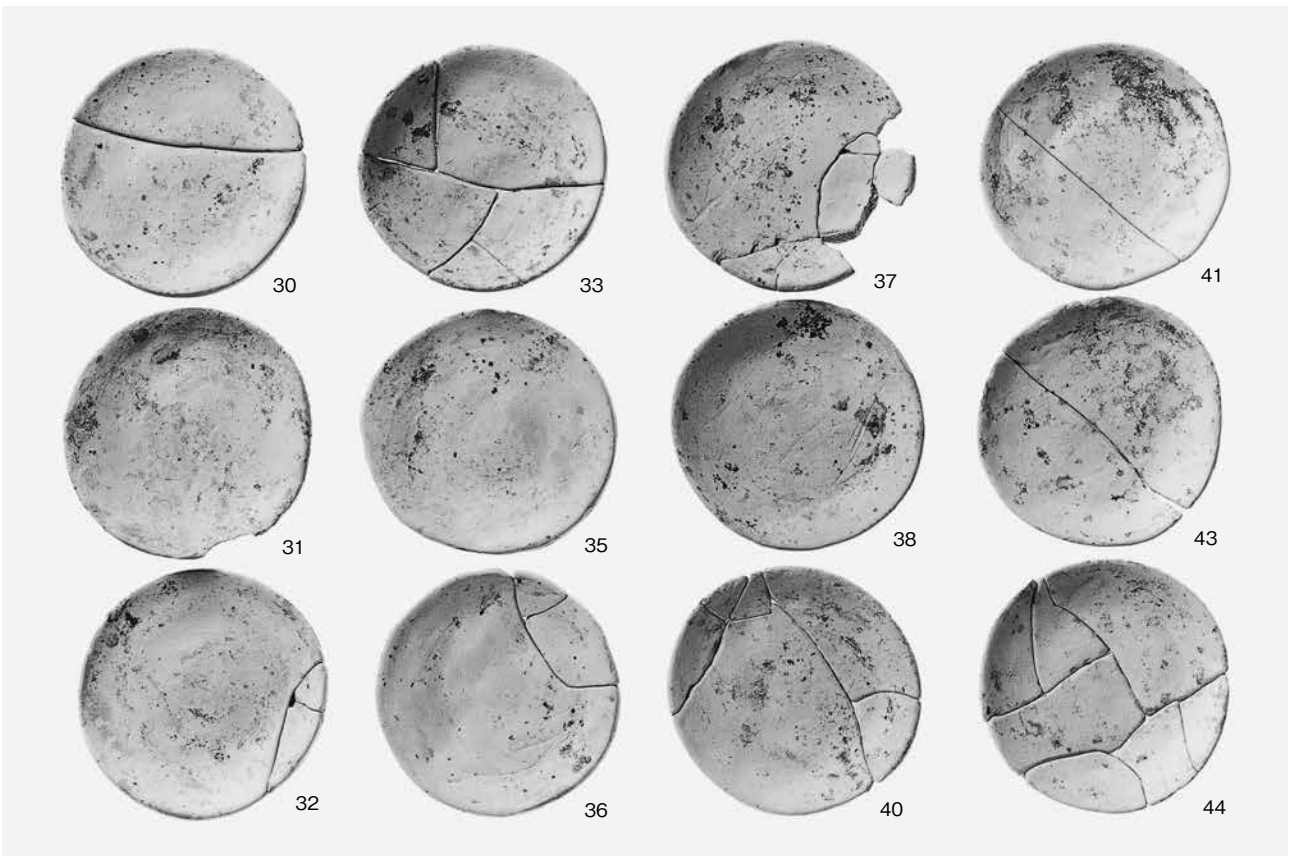
(1) Aトレンチ土坑S X01出土遺物



(2) Aトレンチ鍛冶関連遺物



(1) Aトレンチ溝S D03出土遺物



(2) AトレンチピットP 90出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第143冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel. 075 (933) 3877
発行年月日	西暦2011年3月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
なかやまじょうあと だいご・ろくじ 中山城跡第5・6次	まいづるしなか やまちない 舞鶴市中山地内	26202	63	35° 28' 02"	135° 17' 02"	20091117 ～ 20091222 20100406 ～ 20101008	320 1,800	道路建設
たんばあやべどうろ かんけいせいせき い わきじょうあと 丹波綾部道路関係遺 跡 井脇城跡	ふないぐんきよ うたんばちょう いわきたきだに 船井郡京丹波町 井脇瀧谷	26407	19	35° 11' 39"	135° 21' 29"	20091022 ～ 20100225 20100506 ～ 20100706	1,400 500	道路建設
ながおかきょうあと うきょうだいきゅう ひやくきゅうじゅう よじ・いのうちいせ き 長岡京跡右京第994 次・井ノ内遺跡	ながおかきょう しいのうちかし らもと・いまざ とはすがいと 長岡京市井ノ内 頭本・今里蓮ヶ 糸	26209	15・107	34° 56' 48"	135° 41' 07"	20100426 ～ 20100827	472	道路建設
やわたきづせんだう ろせいびそくしんじ ぎょうかんれんいせ き げばいせき 八幡木津線道路整備 促進事業関連遺跡 下馬遺跡	そうらくぐんせ いかちょうしも こまこあざげば 相楽郡精華町下 粕小字下馬	26366	30	34° 46' 25"	135° 47' 12"	20090909 ～ 20100219 20100525 ～ 20100802	2,225	道路建設
やわたきづせんだう ろせいびそくしんじ ぎょうかんれんいせ き かたやまいせき 八幡木津線道路整備 促進事業関連遺跡 片山遺跡	そうらくぐんせ いかちょうしも こまこあざかた やま 相楽郡精華町下 粕小字片山	26366	29	34° 46' 25"	135° 47' 13"	20090721 ～ 20100223 20100527 ～ 20100812	955	道路建設

やわたきづせんどう ろせいびそくしんじ ぎょうかんれんいせ き くらおかやまこ ふんぐん	そうらくぐんせ いかちょうしも こまこあざすな がわ								
八幡木津線道路整備 促進事業関連遺跡 鞍岡山古墳群	相楽郡精華町下 粕小字砂川	26366	4	34° 46' 31"	135° 47' 03"	20091207 ～ 20101213	20	道路建設	
むくのきいせきだい はちじ	そうらくぐんせ いかちょうしも こまこあざむく のきほか								
椋ノ木遺跡第8次	相楽郡精華町下 粕小字椋ノ木ほ か	26366	46	34° 46' 26"	135° 47' 54"	20091126 ～ 20100304	500	下水処理 施設建設	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山城跡第5・ 6次	古墳 山城跡	古墳 中世	掘立柱建物跡・柵列・棧敷 跡・切岸・堀切・郭	須恵器片 土師器・須恵器・陶器・瓦器・中 国製磁器・鉄製品(釘)・銅製品 (銚)・碁石	
丹波綾部道路関 係遺跡 井脇城 跡	山城跡	中世 近世	土塁	瓦質土器 煙管雁首	
長岡京跡右京第 994次・井ノ内 遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡 集落跡	弥生 古墳 奈良 平安 中世	溝 竪穴式住居跡 柱穴 掘立柱建物跡・柵列 掘立柱建物跡・柱穴・溝	弥生土器・石鏃・サヌカイト剥片 土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦 土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦器	
八幡木津線道路 整備促進事業関 連遺跡 下馬遺 跡	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡	縄文 飛鳥～奈 良 平安～鎌 倉 中世 近代	流路 河川・橋脚・溝・土坑・井 戸 掘立柱建物跡・柵列・土坑・ 柱穴・井戸 掘立柱建物跡・柵列・土坑・ 溝・炉跡・柱穴・井戸 溝	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・中国製陶磁器 土師器・瓦器・瓦質土器・中国製 陶磁器・瓦 陶磁器	
八幡木津線道路 整備促進事業関 連遺跡 片山遺 跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡・溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・ 中国製陶磁器	
八幡木津線道路 整備促進事業関 連遺跡 鞍岡山 古墳群	古墳		なし	なし	調査の結果、自然 地形
椋ノ木遺跡第8 次	集落跡 集落跡 集落跡	縄文 古墳 中世	土坑・小穴群 土坑 溝・土坑・焼土坑・ピット	縄文土器 土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・ 石鍋・焼土・鉄滓・フイゴ羽口	土器埋納ピット・ 鍛冶関連遺構

所収遺跡名	要 約
中山城跡第5・6次	中山城は南北に長い城で、平坦な郭が連なった連郭式の山城である。発掘調査により、自然の地形を改変して郭が造られたこと、郭の周囲に堀切や切岸(急な斜面)が造られたこと、平坦な郭には簡単な建物や柵が作られていたこと、城が一度造り替えられ郭が広げられたことがわかった。現段階では、16世紀前半に築造され、16世紀後半に改造されたものと判断される
丹波綾部道路関係遺跡 井脇城跡	井脇城跡中心部の南東側に設けられた曲輪の内容を明らかにした。この曲輪は丘陵尾根部にあり、周囲から半ば独立して造り出されている。曲輪頂部は方形に造り出され、西・北・南の3辺には防御用の土塁が築かれていた。出土遺物から16世紀のものである
長岡京跡右京第994次・井ノ内遺跡	周辺の調査では、弥生時代後期の集落を巡る環濠が確認されているが、今回検出した大溝の方向はその環濠に直交する位置関係にある。長岡京期から平安時代にかけての掘立柱建物跡・柵列が、推定西三坊大路の路面上で見つかった。この遺構群が長岡京期のものである確証はないが、大路を挟んだ両町を占有した大規模宅地である可能性も否定できない
八幡木津線道路整備促進 事業関連遺跡 下馬遺跡	縄文時代晩期から室町時代にかけての複合遺跡であることが明らかになったが、なかでも平安時代後期を中心とする遺構群と、室町時代の寺院関連遺構が中心となることがわかった。また、飛鳥～奈良時代の遺構は、相楽郡に定住していた高句麗系の渡来人伯氏がとの関連も窺える。遺跡の東側には古山陽・山陰併用道が推定されており、街道沿いに開けた集落の一つと考えられる。平安時代後期から中世にかけては、東大寺・興福寺・石清水八幡宮などの荘園が混在し、今回検出した遺構は庶民階級の施設とは考えにくいため、荘園管理に関連した施設ある可能性が高い。室町時代では、丘陵裾に寺院関連施設が存在したようである
八幡木津線道路整備促進 事業関連遺跡 片山遺跡	平安時代中～後期の掘立柱建物跡4棟を検出したが、いずれも建物の方向性が真北となり、柱穴掘形も整った方形となり、隣接した下馬遺跡とはやや違った様相を示すものである
八幡木津線道路整備促進 事業関連遺跡 鞍岡山古墳群	鞍岡山古墳群は4基の古墳からなり、2号墳の南西尾根筋先端部に、直径約12m、高さ約1mの高まりが見られ、古墳の可能性が認められた。調査の結果、自然地形であることが判明した
椋ノ木遺跡第8次	中世の遺構面では、火を受けた土器や焼け土、炭、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋などが出土し、集落内で小規模ながら鍛冶作業を行われていたことが想定される。また、柱穴内に土師器皿20枚が埋納されており、何らかの儀礼が行われたと考えられる。その縄文時代の遺構として、落ち込みのような浅い土坑や杭跡と考えられる小穴群を検出した

京都府遺跡調査報告集 第 143 冊

平成23年 3 月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141